

現代人の風俗雑誌

奇譚クラス



女体相撲艶色史

姦淫私刑考
夢性の美少年

HEROUARO

1952 8月号

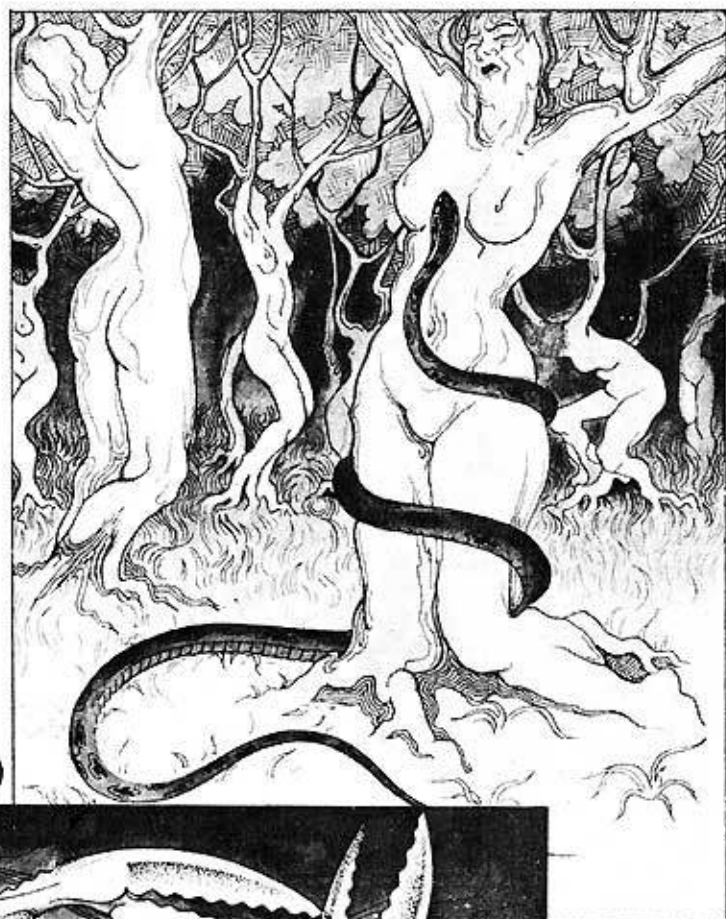
オ
ク
ラ
ス



定價 九拾円

地方売価 九拾円





(6)



(7)

浴場のエロティズム



書版象のスンサツネルなしと題主を場浴とスナーキグ



(書版木の紀世六十) 呂風族家



(書版木の紀世九十) 場浴のドンランイン



(スンサツネル) 者義不るれさ撃製で殿湯



(スンサツネル) 繪屏の路書るす關に場浴



(スンサツネル) 筆シタユシルコ・スウリルネコ 場 浴



(スツツネル) 繪屏の籍書るす關に場浴



古代版畫

浴室のエロティズム



—— (書版木のスツツネル) 浴人の嫁花



書版木のスツツネル) 泉温のンハツツエウ西端



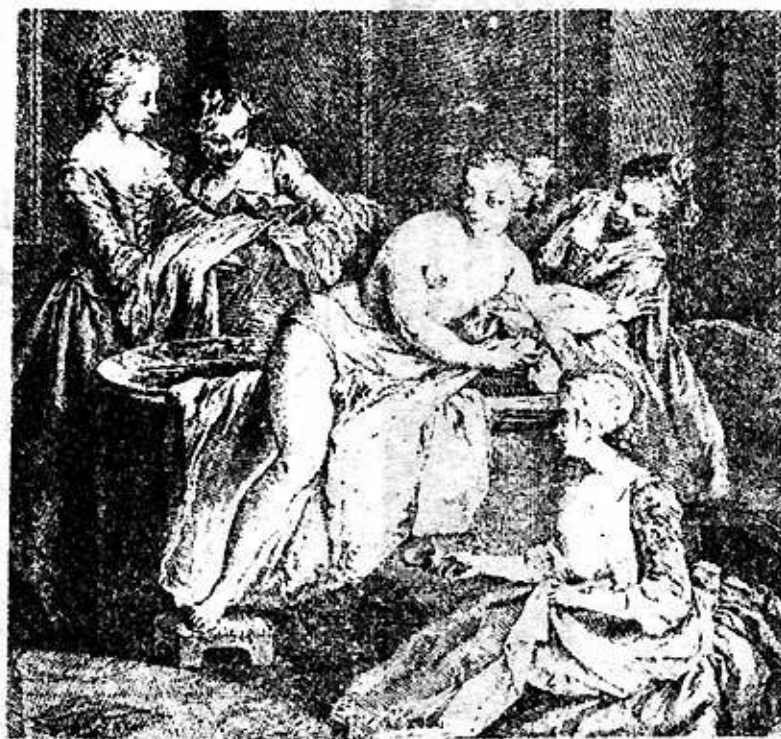
呂風の紀世中



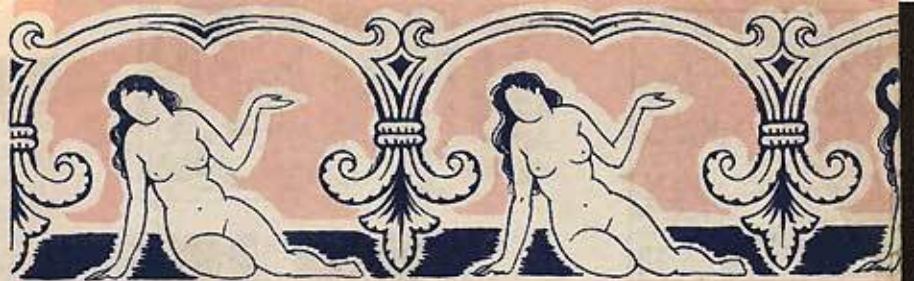
女湯の那支



版木たれ表に一タツレカの紀世五十



(紀世八十) 繪のルターバ・B・J たしと覇主を場浴



☆口繪☆

浴場のエロチシズムと浴室のエロチシズム
慘虐の藝術（合巻に現れた殺しの挿絵）
男色天国繁昌記画集

女体相撲艶色史

増田志郎（二）

源氏物語に於ける 光源氏の性的生活

變態コレクトマニヤ

拇指反つた素足の美

王朝好色本音なし草紙

淫神「ヴィナス」

ソドミーとレスボスの愛

夢性の美少年（一色慾異常）

青年の告白・三村幾夫

心理小説 自虐淫樂

川柳瓦版 男の天国・女工情史

私版滑稽譚 幽霊屋敷の睦言

畑村連治（六二）

庄司浩平（六六）

的場通（七二）

宮内早次郎（七四）

安部雨紅（八〇）

染田玄（八四）

三富浩生（二六）

早崎稻穂（三〇）

葦田郁也（三六）

見世物としての女角力

日本性見世物變遷史

責めの小説 乳房を失つた女

日本淫婦傳 土器お傳 本莊幽蘭

探偵小説 男色殺人事件

井口正憲（二六）

日本男色史略

男性的女子の記

女性の側より見たる裸体狂崇に就いて

●●●喜多玲子習作集「縛られたる女の十五態」●●●

●●●折込口絵写真「緊縛美の断片」●●●

●●●僕達は今永遠の中にいる

●●●陸軍中尉時代の回想

●●●植物好色自慢

●●●お尻の美学

●●●バチンコ犯罪論

●●●好き者放談

朝倉支朗（九八）

藤安節子（一〇〇）

二俣志津子（一〇九）

笹田豊（九三）

森井晃（二八）

植田清志（三三）

波多野新（一〇七）

小辻紫朗（二五）

鷺見東一（八五）

緑猛比古（八八）

竹内節夫（九七）

選切小説 變化中條流

●●●責めの小説 M と S

●●●ルボル 混血の悲歌

●●●タージュ 温泉ホテルの母娘

●●●現代風俗詩 温泉ホテルの母娘

●●●国際 神戸暗黒街探訪記

●●●人妻告白記 不貞の倫理

●●●中国の男娼 相公（シャンコウ）

●●●体臭の性的考察

岡田咲子（二四）

下出章一（二三）

矢代文世（二六）

久木田堅（二五）

貴崎郷子（二四）

永野白楊（二九）

谷純一（二六）

姦淫私刑考

丹波太郎（二〇）

告白記 悦虐の記録

喜多玲子（二八）

大道棋問題解法 最終回

大橋康士



8月号 目次

奇譚クラブ

合巻の惨虐挿繪

○艶競戀の花染 ○ これは新平が善右エ門を殺す場面である。胸元を刺し貫かれてゐる殺され手の仰向いた顔、相手の膝に足をかけて力をこめてゐる殺し手の恰好は真に迫つてゐる。背景は路傍、松の枝と草叢、草に三日月、英泉一派の巧い殺し場の一ツ。

○篠塚太郎英勇話 ○ 山寨で賊どもが良民を捕えてきて裸で逆さに吊し血を下瓶に滴してゐる。一人の男は裸に縛つた女を組板にのせて料理をしようという所。賊は男女の血を絞つて厨土に売ろうというのである。厨土では血を薬物に使うというのだが、随分凄惨なものだ。背後には、これまでの犠牲の白骨が堆高く積み上げられてゐる。

○敵討兩輛車 ○ 組板に妻の首と腕一本を載せ新八郎は棒にて刀を抜き、片方の腕を突き刺してゐる。組板の上



艶競戀の花染 (二代目春町作 泉 景 画)

からは血が点々と流れてゐる。五人の連中は、狼藉の果片肌脱いだり雨肌脱いだのもあるが、皆驚いて逃腰である。これは新八郎の妻が食災症であると、此の五人が言いふらした為、一昨夜自害し果てたので、新八郎は五人を招いて、その席で死者の無念をはらそうとする場面である。が描画は陰惨なものである。

○雷幸藏轟咄 ○ 懐胎の妻は、悪婆のために松葉で焼し殺され、夫の信太郎は悲坊主頭鉄の為に殺される。右側は病気の信太郎、鉢巻をしたまゝで願鉄に腹を挟ぐられてゐる。左は孕んで腹巻をした妻の楓が、腹巻と湯巻のまゝで柱に縛られ、婆は囲炉裏に松葉をくべて波打園で煽つてゐる。煙の線が大きく渦を巻いて、苦痛に堪えきれず楓は顔を傾けてゐる、髪はとけて柱とすれ、婆は無論肌ぬぎ元氣なものである



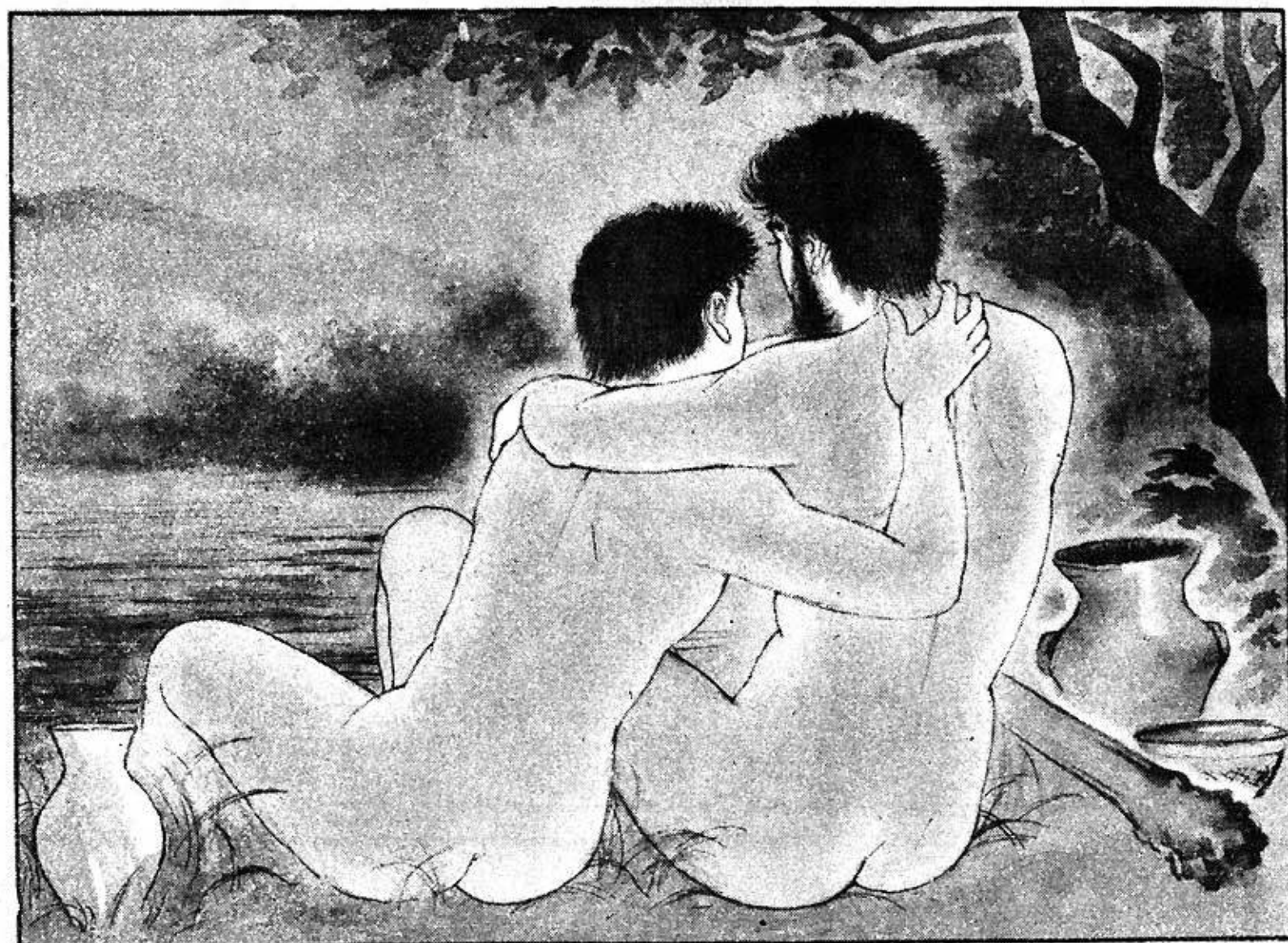
篠塚太郎英勇話 (為永春水画)



敵討兩輛車 (初代重政画)

雷幸藏轟咄 (竹塚東子画)

男色天国繁昌記 画集

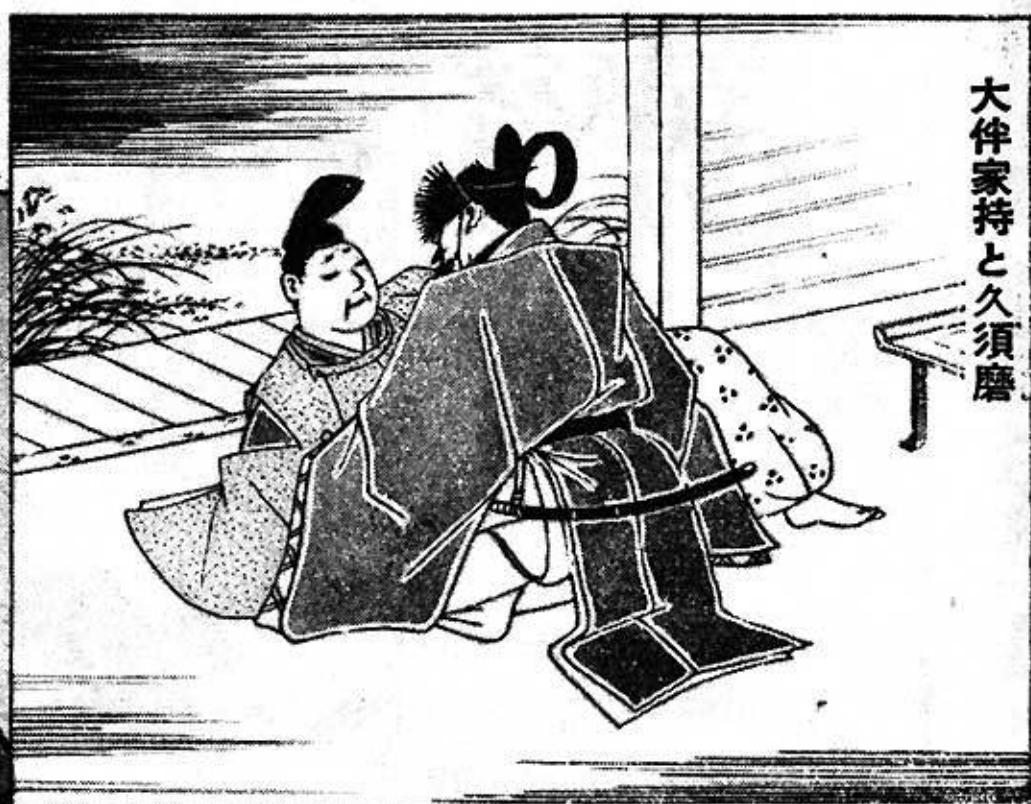


我が国に於ける男色は何時の時代に発生したものか、勿論明確にその事実を知ることが出来ない。文献に残つたものを漁るとすれば、自ら上古の時代の事を知るによれないが、只現在より推量して想像するとすれば、絶無とは言ひ切れないものがあるだろう。下つて日本書紀にアツナイの罪と記されているのは、神の忌を受けた男色の罪としている。それは小竹祝（しぬのはふり）と天野祝（あまのはふり）の二人の親友があつたが小竹が病死したので、天野は大いに悲しみ、友の側で自殺したので二人を合葬したところが天地晦冥となつた。このような天変地異が起つたのはアツナイの罪の結果としている。とにかく天野祝と小竹祝の二人は男色の最初とされている。

小竹祝と天野祝の親友愛



大伴家持と久須磨



奈良朝時代になつてから男色が朝臣の間に行われた事は、大伴家持が藤原久須磨という美少年を愛して、和歌を贈答したことが萬葉集の中に見えている。僧空海が侍童を愛したことから空海の渡唐以来、男色が我が国に流行したとさえ云われる。

空海侍童を愛す



義清の美少年好み



信長と森蘭丸



足利三代將軍義満は大いに美少年を好み、その近習には容色の美しい者を選んで日夜男色に耽つた。織田信長が美童森蘭丸を寵愛したのは有名な事実で、戦国時代の武将は多かれ少かれ、美しい扈從を身辺に侍らして、男色の風が大いに流行した。

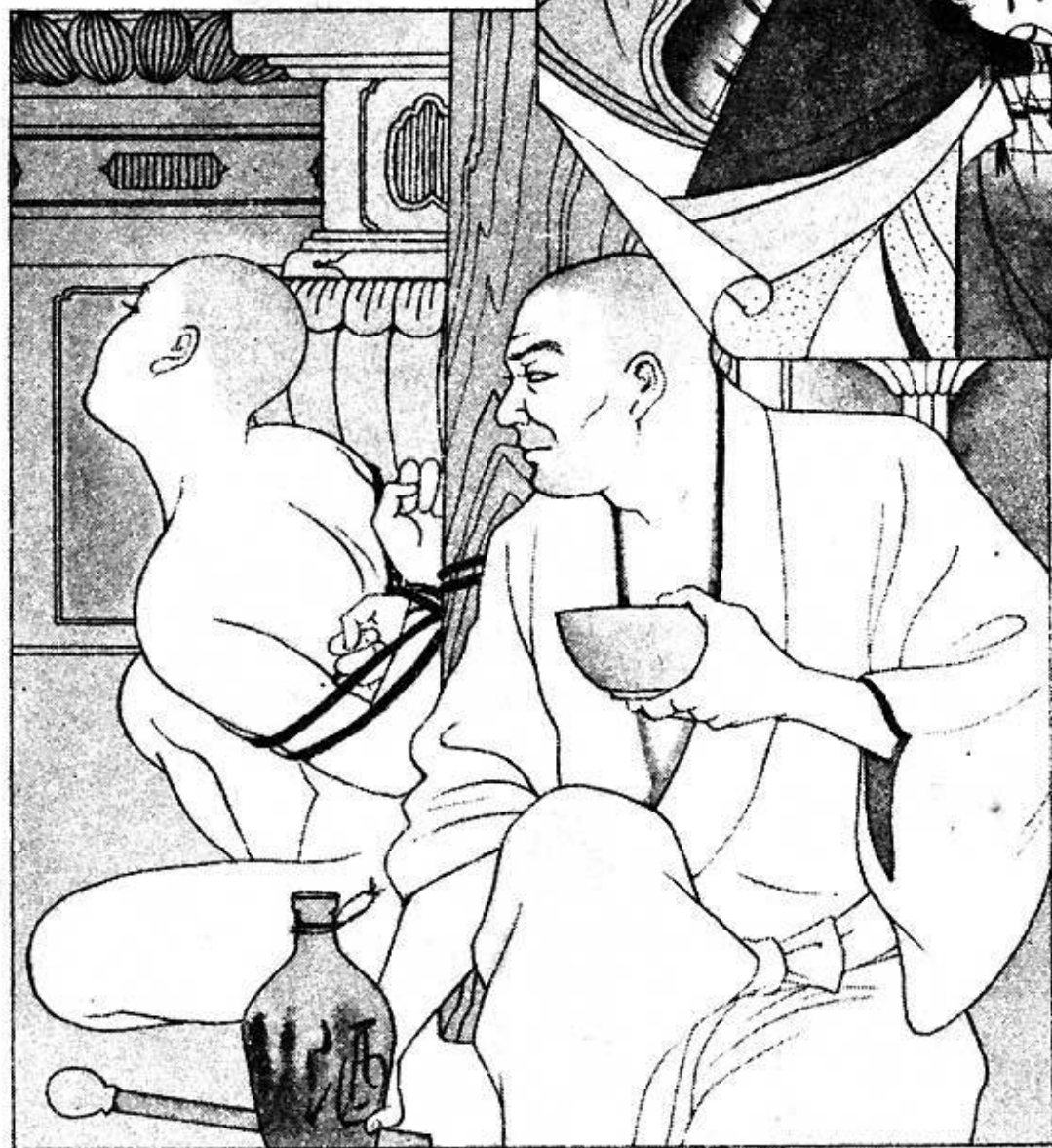
徳川時代の初期は戦国時代の余波を受けて、將軍を始め諸大名は何れも美少年を小姓として持つていた。特に三代將軍家光は男色將軍と云われるだけあつて、阪部五左エ門、酒井山城守堀田加賀守、梶定良、朝倉豊明等と男色関係のあつたのは顕著な事例である。

徳川家光と小姓



雛僧を弄ぶ破戒僧

男色流行が一転して男娼を多く現出させたのは実に江戸時代であつた。遊女と同じく蔭間茶屋に出入して、公然と男客に媚をひさぐ男娼が酒席枕席に待つて、その艶を競つた。元禄時代より次第に盛んとなり、宝暦、明和、安永、天明の時代には最も隆盛を極めた。



江戸時代の蔭間茶屋

男色流行の根元とも云うべきは、僧院である。雛僧とか侍童に対しては婦女のように装い、額に黛を画き、歯は鉄漿で黒く染め、額面に紅粉を施し艶美な容姿を作つた。形式的に禁欲生活を強いられる僧侶間には、又止むを得ない動向であつた。各時代を通じて僧侶の寵童の事例は枚挙に暇がない。



天保十三年の風俗改革によつて色子や蔭間は其の跡を絶つたが、其の後若い俳優や女形がその後をつぎ、男客や女客を誘導し墮落させた。芝居茶屋の殆んどは客と俳優の密会場所であつた。

田之助紅の一場面



薩摩健兒の誓い

明治時代に至り薩摩や土佐の一部に稚子を愛する風習が残つた。そして薩長土肥の一派が天下の権を握り男色の風は一時的に跋扈した。今時大戦でも軍隊の中で男色の習が一時的に瀾漫した。

海軍に於ける戦友愛



現代に於ける男娼の跳梁

新時代の

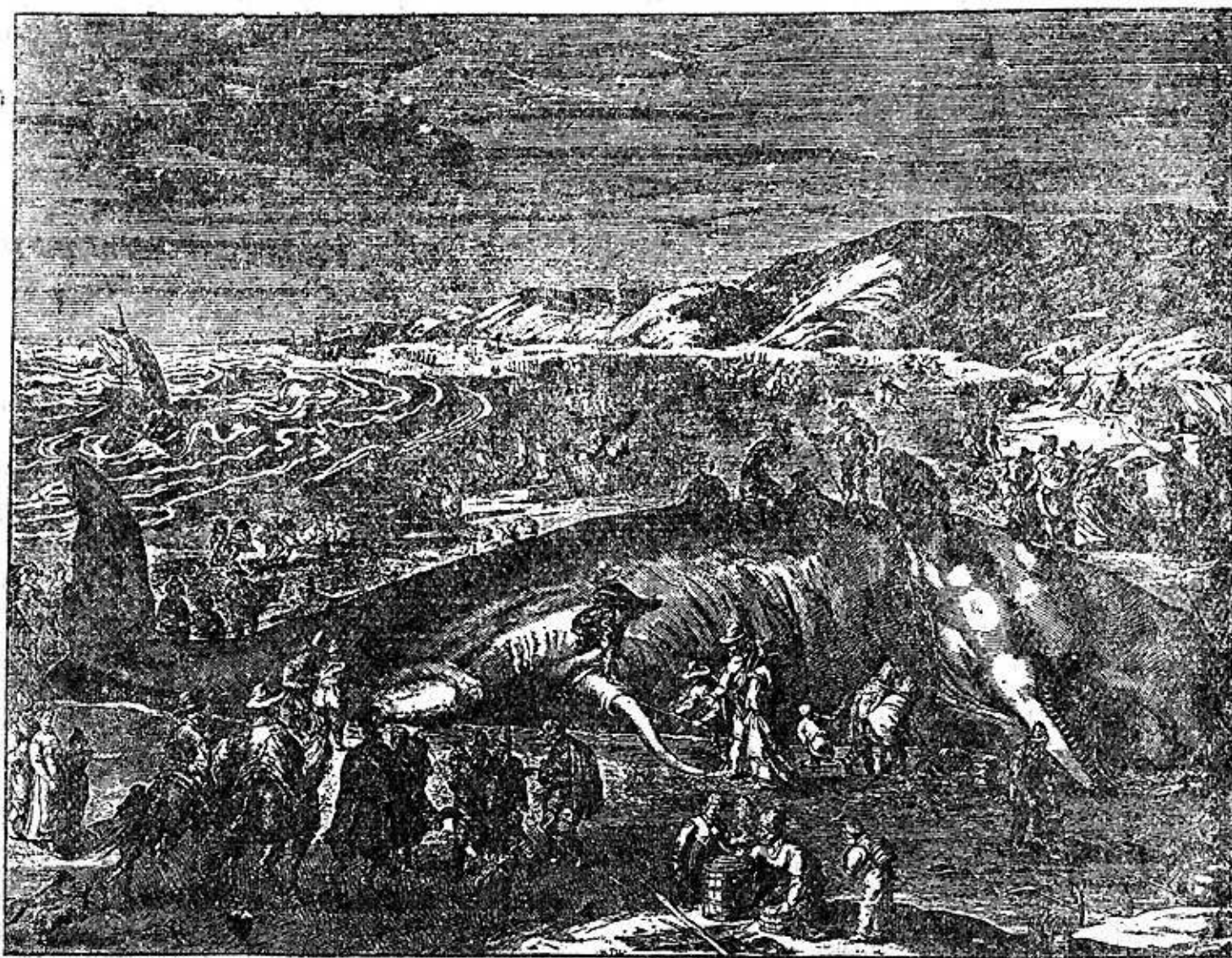
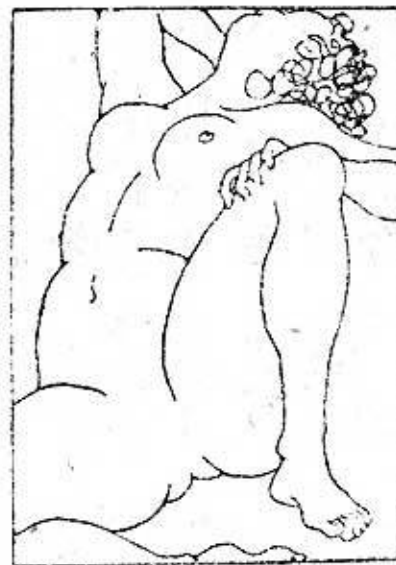
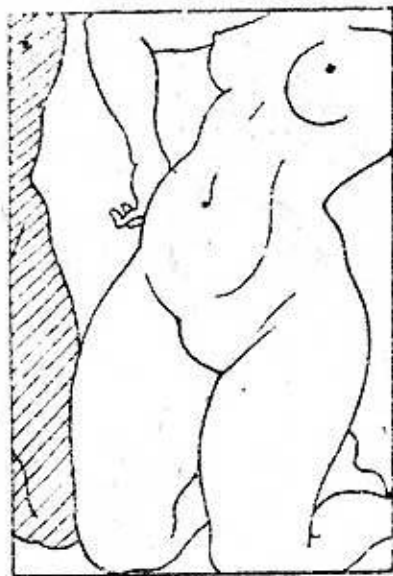
第六卷 第八号

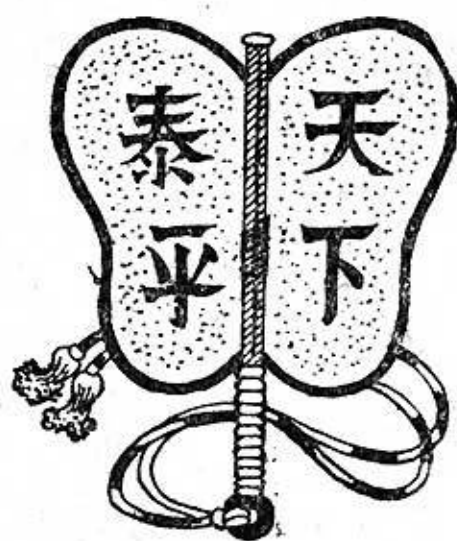
奇譚クラブ

八月号

風俗雑誌

通刊第四十六号





女体相撲艶色史

増田 志郎

全裸の女体を眼の辺り眺めて、生々しい裸像への美を探索し様とするのは昔も今も変り無い人間本来の本能的な欲求である。今ここに、女体の柔肌に躍る数々の表現を女の相撲に求めようとしたのもそうした思いに他ならないものである。

然し乍ら、筆者自身歴史家でも無いので更に「女体相撲艶色史」等と云う看板を掲げて、其の沿革や内容を年代順に整然と並べ立て、検討すると云うのでは無い。それより、我が国に古くから伝えられて居る男の相撲と共に、女も其の時代と場所とに依つて相撲を取つたという史実を突とめ乍ら、初めて其処に艶麗極り無い女体相撲の有様を追想して筆を運んで行き度いと思う、

世の中は揚げてストリップに、女剣劇に、所謂「あぶな絵」好みの女体露出時代で、女性の持つエロチズムの解放は桃色の脚光を浴びて、絢爛と咲きはこる妖花の様に男の魂の真髓に迫り、その感能を揺り血潮を沸かさずには置かぬ事であろう。

さて此の様な時に想い起すものは江戸時代に庶民的な要求から生れた見世物女相撲興行の有つた事で、猶其れよりも古い時代には、当時の美女を一堂に集わせて不要な衣類等かなぐり捨て、力技の程を競つた昔にまで溯つて、肉体の相剋に相撲の持つ闘技を発見して躍動する裸女の煽律に耳をかたむけて桃源境に夢をむさばらねばならない。

一体この「相撲」と云う言葉は古くから

「素舞^{スマヒ}」とか「須末比^{スマヒ}」等と云う文字に依つて文献に残されて居る、神話の一節には之に關した面白い物語りが書かれてある。

或る時天孫民族と出雲民族とが出合つて一ヶ所に相對峙して互いに譲ろうとしなかつたそれで遂に双方より代表を選んで「住い取り」の力競べ、即ち相撲が行われる事に成つた。

天孫民族の方より建御雷^{タケミカヅチ}、出雲民族よりは建御名方神^{タケミナカタ}が其れぞれ選ばれて互いに相撲に死力を尽して競つた結果遂に勝ち天孫民族の方に歸して、「国譲り」の交渉が成立して初めて此処に建国の基が定められたと云うのである。此の様に遠い昔から「神占^{カミウラ}」としての相撲行事が、神事、神祭に關係を持ち後の

世に至れば宮中に於ても相撲^{セチエ}節会の儀式の行事が行われる様にさえなつた程であつた。

元来我が国の神様は力の強い者を賞賛されるのである、と云つた様な事が自然的に信仰に結び付けられて、現在にも、猶、神社の祭礼などには奉納相撲が付き物の様に境内で行われるのは衆知の通りである。

東北や越後、又は九州地方では狩人達が山入りの前に、山の神の社前で奉納の為に相撲を取る習慣が有るが、之も山の神を喜ばして獲物が沢山得られる様にとの祈り心から何時からとも無く初められたものらしい。

又同様に東北及び佐渡の日本海沿岸の漁村でも、其処の龍神や恵比須神社に漁運を祈る為に、「マンなほし」と称して此処の娘や主婦達が夫や親兄弟を海に送つてからの留守に裸相撲を取ると云う事で、秋田県の扇田と云う地方ではやはり龍神に雨乞いをするのであるが、此の日酒盛りの後で女達に依る奉納相撲が初められる、そして其の後雨が降らなければ何度と同じ様に雨乞いの為の女の相撲が行われるのだと、何時か東北への旅のつれづれに同地方の古老の口から語られた事を憶えて居る。——一度実際にその様子を見たいと思つたがなか／＼そんな機会はめぐつて来

なかつた。

こう考えて来ると東北地方は女相撲の発祥地の様な感があるが、誠にむべなるかな後世に至つて近代女角力興行の創始者とも云う可き初代石山兵四郎と云う人が山形から身を起して高玉一座という名によつて全国を廻つて歩いたのは我々とてもよく知つて居る処である。



ともあれ、こうした農漁村の荒仕事に鍛えられた女達が小麦色の豊満な肉体に四肢躍らせての相撲美は、神ならぬ我々としても賞讃の光栄に浴したいものである。

唯神祭りの女相撲とは別に人に見せる為に女を集めて相撲を取らせた記事が、日本書記卷十四「大泊瀬幼武天皇記」の一節に求める事が出来る、この物語りを以つて女相撲の濫

觴と見ても差支え無いとさえ思われる。

時は雄略天皇十三年九月の或る日宮中の中庭の片隅で猪名部真根石と云う木匠^{キコリ}が一心に斧を揮つて終日木を切つて居る、一分一厘の誤りも無い見事な腕前に見入つて居た一人の高貴な宮人が、感心の余り問い掛けた、「実に見事なもの、如何なる事が在つても腕に誤りは無いものか」「はい、何の之しきの事、日常の習し、絶対に誤る様な事等御座居ません。」彼は得意満面に答えた。

之を聞いた宮人は、彼の得意の鼻をあかしやり度い気が起つて来た、そして早速一計を案じたのである。やがて後宮の御膳部の仕事に従事して居る女達を集めて来た、この女達は、当時郡の少領の娘達で美人揃いであつた。

之を裸にして相撲を取らせようと考へた。
「乃ち采女^{サナハチウネメ}を集喚^{ツドエ}て衣裾^{コモ}を脱がしめ著^{ツブサキ}裸^{ヌダ}にして露^{アラワ}なる所に相撲取らしむ」という事になつた。之を見たさすがの真根石も、そのたとえ様も無い美女群姿に思わず恍惚と見取れて木を切る手先が狂つて石に斧を当てて遂に双をこぼしてしまつた。彼の得意の鼻はトタンにへし折れてしまつたのである。

この物語りは千五百年も昔の事であるが、

後に西鶴が男色大鑑や好色二代男等の中に、「衣裳好みに人を詭らかす事ぞかし……」「前挟み自然と解けて風もいたずらなる所へ吹き込み、うは返しとなるもの隠しの縮緬も裾一尺余りまくれて、久米仙も死ぬる程の足首見えて、然かも、拇指反つて色めき、少し髪カミの縮みたると思ひ合はせて、此の無疵千枚道具なり。」

と甘味な文体に忍ばせて女の肌衣からチラリのぞいた肢態を眺め様として、作者の思いは「好色一代男」巻三に於て女相撲に迄至つて皓身の女体の動的美を見極めずには置かない意慾があり／＼と写し出されて居る。

「世に住めば袴肩衣も難かし人の風情とて、朝毎に髪ゆはするも心に掛れば、十徳に様かへて昔は男子今こそ集阿彌と、八幡の柴の座と謂ふ処に楽しみを極め、東に三十万両の小判の内蔵を造らせ、西に銀の間枕絵の襖障子都より美しきをあまた取よせ、誰恐るゝもなく或る時は裸相撲……」と西鶴も女の相撲にその全裸美を求めてやまなかつた。

然し一方時代の自然な要求は次第々々に見世物としての女相撲へと発展して行かなければならない傾向に在つた事実を、江戸時代の色々な文学的作品に、女相撲の記事をその文

献に求めてみよう。

大体女相撲興行は元祿時代前後から創始的に行われた事がうかがわれる。

宝永二年当時流行した御陰参りをあて込んで京の誕生寺開帳の際には色々な見世物に當時の民衆の猟奇心を満足させる様なきわどい出し物の有つた様子が「芸界聞任記」に出て居るが、その中に女と盲の相撲興行が有り、それから当分の間度々此の様な珍取組の興行が受けたりしく各種の記事に現われて居るのをみてわかる。

浪速見世物年鑑に「坂町にて盲人と女角力……云々」とあり、同じく明和六年版撰陽奇鑑に面白く書かれて居る。

「当 坂町裏にて晴天十五日の間諸国より盲人並に女を集め相撲取合並に土俵入りの体をなす……」とあり、西方には大阪出身の出水山お喜代、大獄おくみ他五名、東方には京都出身の洞ヶ谷おくり、大難おなみ、其他太り獅子おはな、床の海小いと、玉葛おつる、等々可なり四股名も人を喰つた不山氣ツザケたものでやがて之の一行は京都でも興行したらしい事が「孝行娘袖日記」に見られる。

「連てもかやうな儀は上方でなければ宜しう御座りませぬ。聞き及びの通り近年女の相撲

等さへ出来ましたる花の都……」と書かれてあり、同明和八年「世間化物氣質」では、「力業を習ひし女郎も同じ大阪難波新地に女子の角力興行の関に抱へられ、板額イタガクといふ関取三十日、百十両にて先銀取れば……」

と板額を関取に仕立てた一行も出来る有様で、遂に堂々と女相撲の興行は花々しく本格的に世間の人々の前に全裸の姿を現わして来る様にさえなつて来た。

先にも書いた、盲と女の相撲の様子を二、三、の文献にのぞいてみることにしよう。

唯女だけの相撲を見るのにあき足らず、男女の相闘に変態的な好色味をねらつての興行だけに、亦色々な事件も起る原因となつた。

「赤沢山の角力取りも人に勝れた大力有る者故きつとした役にも立つ可き者、角力取りにして置くは惜い事だと云つて是も預りとして其の代りに不用なる無能無官の座頭を西方と定め、橋々等切見世のかさかき女、是は他に用ひ方の無き者故是を東方と定め、庭頭と女の角力を興行する。又今迄は晴天十日なれ共是も晴天の如きはそれ／＼見物衆も家業を勤むる故、其のさまたげにならぬ様、是より雨天十日と定むる。中入後の取組は、目無川には、かさの海、杖が竹には鮫が橋、向見ずに

骨がらみ、ここいらは見所有る角力なり、行司は浚団扇を持つて立合はする其のかたち馬鹿太鼓のひよつとこの如し。「手のなる方へ」「とらまへて突のめそ」「あの子は余程手のある娘だ、それだから度々よくとまりを取つた。座頭ひいきの見物齒ざしりを咬み」「それく杖の方へぐつと組めく」按摩の三十二文に

切見世の五十文を加へて札銭は一日八十八文なり。」と、もうこうなつては相撲美どころか醜態という可きであらう。之が寛政二年版「玉磨青砥銭」の一文として載つて居る満都の人氣を博した盲と女の相撲は遂に珍事件を巻き起す事になつて、時の取締り奉行から大目玉を喰つてこの興行に終止符を打つ



破目になつたのである。次に之を明和年間に浅草奥山境内に行われたものゝ様子を、「芸界聞任記」の一節を引用してみると面白い。「女は何れもお多福の代物なれ共、其の中に唯一人おくらと謂ふは人の目を惹く程の尤物也し、或る時十数名の鼻下長連、このおくらのお宝庫を窺ひ見んものとい

やしき考へより、興行主に金二両、世話人二人に三分づつ擲ませしが、世話人は兼ておくらに心を寄せしも応ぜざるをふくみたる折柄なれば、一人娘に聲八人と称して、唯一人に座頭八人を取組ましめ手取足取に言ふ可からざる醜態を表はしめたり、此の事当局者の耳に入りければ急に営業禁止を命ぜられ、其れ

と厳重の咎め申付けられると也」

いやはや昔も今も助平男達の嗜好は文字通り全ストの痴態に迄至らなければ満足出来ぬらしく、「娘一人に聲八人」の芸当も俗に謂う天の岩戸というきわどいもので、お上からお艾をすえられるのも当り前であらう。

とにかく明和年間は江戸時代の最も盛んに女角力興行の行われた時期で、「明和の間、婦人相撲大に行はる、趙宋の世、上元或は此の戯を設けしと同一奇にして……」とあるのをみてもわかる通りである。

それより越えて文政九年江戸両国広小路に興行された盲と女の相撲の番付を、「見世物年代記」にひろつて見ると之亦巫座氣たものである、先づそのピラには、「盲滅法大無雙の曲取り、雙方相手を探り当てゝの大勝負、殊更女子太夫の儀はあの表にて御評判を受けましたる手取りにて、風に柳の手弱かに種々手を尽して御覧に入れ奉り候」

と言つた様な文句で客を呼び、東西二十二人の名力士の名乗りが振つて居る、それに行司は土村正兵衛、目倉島、美山等面の連名に成り、盲力士の方は、武者振、向見ず、杖ヶ嶽、笛の梅、佐栗手、夏嬉し、杖の音、うば玉、辻の音、足駄山、もみ下し、等之に対するに

女力士は、玉の越、乳ヶ張、花の山、智慧の海、姥ヶ里、腹櫓、貝ヶ里、色氣島、美人草、年の甲、姉ヶ淵、と言つた様に以上の番付を見ただけでも、よくも付けも付けたたり、其の四股名で取組の様も想像されるというものである。

土俵上の女力士は文字通り手探りで相手を求めて挑み掛る盲力士を左右にはずし乍ら、空を泳がせては、グル／＼土俵上をかけ廻りそれでも時折腰の辺りをつかまれて、手を取り足を払い乍ら、髪の流れを気にしては、二双の隆起に波打たせて、丸尻をブル／＼振るつて漸くにして腰をはずせば、あほりを喰つてどつと倒れる盲力士の様子もお可笑しく満場やんやのかつさいを博した事であろう。之等の様子を諷刺して次の様な言葉が云われて居る。

「曲淵越前守を見て女角力じやと云ふ。其の心は両国ではほめれど一向に力が無い。」と「落首柳営役人評判謎の条」にあり、又俳諧時津風には女角力と題して、「男より勝色ありや女郎花」と、或は座頭角力の題名では、「のばす手はなでる様な柳かな」と出て居り、よく当時の相撲の様子が現わされた面白い句である。何れも延享二年と三年版の「流

言記」に書かれたものである。

さてこの盲と女の相撲を思い付いた動機と云うのが又、面白い、それは、或る下町の裏長屋に按摩夫婦が住んで居た。冬のこと、毎夜の様に近所の人々が寝静まる頃になると其の按摩の家から、ドタンバタンという大変な物音がしてあたかも地震でも起つた様に、両隣を初め震動の余波を受ける長屋一同迷惑な事甚だしい、それにしても夫婦喧嘩でも初めるのであろうかとソツと家の内の様子をのぞいて見ると、何の驚いた事には双方互に組んずほぐれつゝの相撲の真最中なので、早速訳を聞くと、何分にも貧乏の事故煎餅蒲団ではすぐにも床に入つて寝入る事も出来ないので、金の掛らぬ夫婦相撲に暖を取ろうと云う、一石二鳥の寒さ凌ぎの珍手段だと云う事がわかつた。さて／＼よく／＼考え付いたものである。此の話が井戸端雀の口先にのぼれば自然に話題の種となり、ふと或る興行師の耳に入つたので之にヒントを得て初めて盲と女角力の興行が出来上つたとの事である。然しこの話はあまり真偽の程は責任はもてない様な気がする。

以上の様に見て来ると、大分時代を過ぎるにしたがつて女相撲も唯単に、裸体美の観点

から他にそれて外道的な変態に進まざるを得ない有様である。

次に人形浄瑠璃の方に目を向けると、近松晩年の書き下し物と思われる「関八州繫馬」四段目に目先の變つた女相撲の様子が出て居る。享保九年正月十五日を初日として蓋をあけた竹本座の興行であつた。

多田御所の御台所伊予の内侍の病氣を慰める為に四天王の妻女達が色々趣向をこらす処で次の様に面白くえがかれてある。

「仰せの如く此の度の御景色何ん共心得難きとて、頼光様御夫婦、頼信様の御氣遣ひ鬼取りひし／＼我々が夫の武勇にも叶なはぬ病論、寄合ふは額に皺、女房仲間の評議には何うでも是はお格氣の癪り、男の手枷足枷も私等が様なガリ／＼は嚙り付きもし兼ねず、又下々の夫婦かけ向ひ格氣の諍ひは、先づたたき合ふ、喰ひし合ふ、道具三つ四つ打割ればさりと胸が晴れるげな、上々方は上ずんべりお心でと計りくよく／＼思ひ積り、それに御氣晴しとはあゝ聞えたお療治、先づ私が存じより申して見ましよ、見す／＼心を引立つるは、相撲々々先づお座敷に四本柱、東り枕を並べ土俵を築き、四人の我々真裸で二人づつ東西へ立ちわかれて、大関、腰元衆の内関脇、

小結をえらみ、残りの女中皆前相撲、股の物は男の通り緞子繻珍の二重廻り、アアさり乍ら、さがりを取つて引く時中に応への張合なく脇へずつと外れては気の毒か、いつそそれも一景であらうか、未武貞光のお内儀何んと覺すと言ひければ、らん菊木幡顔打赤め、ヲさんない一景も半景も娘子供の時ならば、こじほらしうもあれかし、持古した墨の肌、腰に廻した肌の物脇へずつと外れては手負鳥見る様で凄じかと吹き出す。……」

その文中にチラリ／＼とエロ味をしのばせて微をたたえ乍ら、この作者は筆を運ばせて書き下したであらう様かうかゞわれる。

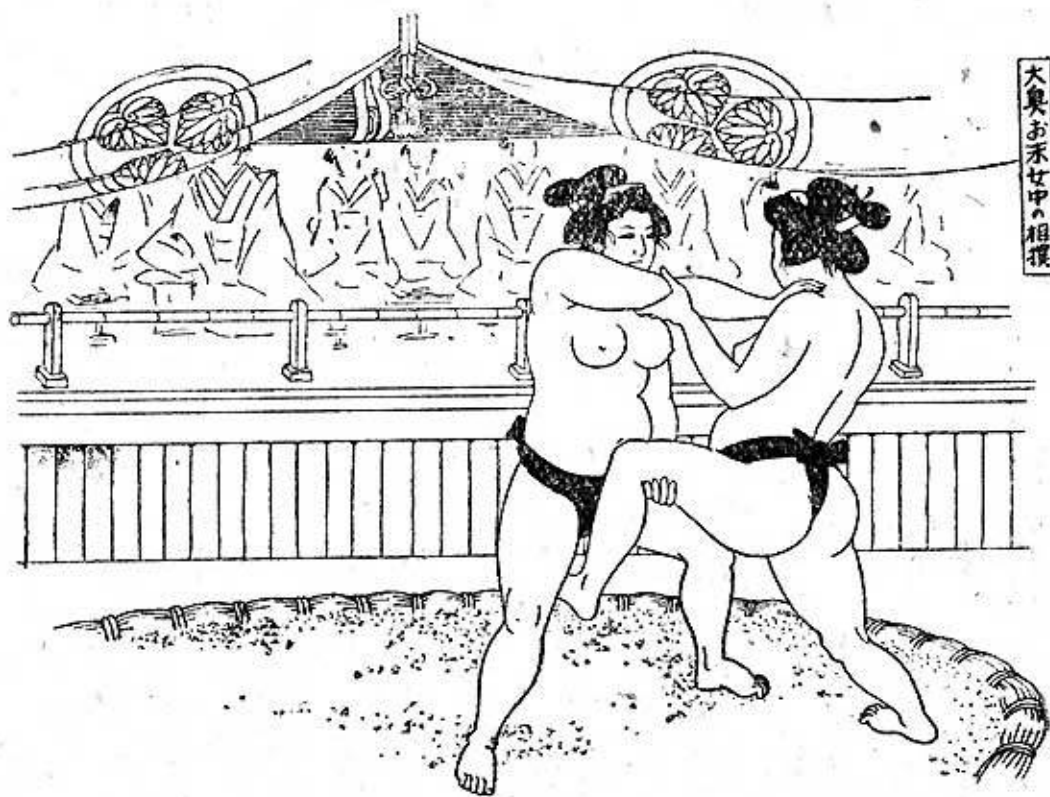
女中達の相撲の話が出たついでに、江戸大奥に於てもこれと同様にお末女中の裸相撲のことを掲げることが出来る。

千代田城内年中行事の一つに初午祭^{ハツウマ}がある。この日城内吹上の苑山里の庭に鎮座されて居る吾妻稲荷の祭典が早朝から取り行われる、先づ盛装に威儀を正した御台所の参拝に初められ、続いて表使、御使番の差図により踊り催し物に出る四十余人のお末の女中達は木遣音頭に美声を振るわせて繰込み一同社前の参拝の後、一と先づ引揚げるのであるが、其の後に色々な演芸の数々が初められる、そ

していよく最後
に呼物のお末女中
達に依る相撲の幕
が開くことになる

先づ土俵は、対
面所御庭先に設け
られた舞台前面の
芝生の上に敷いた
薄縁を土俵と定め
られ、各お末の力
士達はその脂の乗
つた裸身にしつか
り割禪を締め込み
二布を纏つて腰の
丸味をわずかに包
み、二双の乳房を
ゆらめかしての肉
弾戦が展開される

その名乗りも御殿女中にふさわしく、源水車
絹川、絹衣、等優しい四股名の呼出しに、行
司役も同様女中仲間より選ばれ、渋紙の袴を
着たり又は当日余興の狂言師から借りた華や
かな衣裳にその行司振りもおかしく、土俵上
転げつまろびつ織りなす女体相撲美の嬌態は
たしかに男子禁制の大奥にある女性達のなか



大奥お末女中相撲

に、よりたくまし
い肉体への思慕と
昂奮とを起さず
に置かなかつた事
であらう。

尙お末というの
は、昔から女中衆
の中に在つても比
較的労働仕事に従
事する下級の女達
で、例えば風呂膳
所用の水汲みに、
又は代参のお供、
姫君や諸家簾中登
城参入の際お座敷
より三の間迄その
乗物を^{カッ}昇ぎ入れる
^{ロクシヤク}陸尺の役目等も勤

めなければならなかつた。であるから自然、
女とは云え肉体的にも勝れて健強な者でなけ
ればならない。余興の出し物に相撲を選んだ
事は誠に適当な思い付きだとしなければなら
いであらう。

最後にもう一つ女中相撲の事を記そう。
之は武家の邸内で女中達に裸相撲を取らして

女体観賞に変態的な目を見張つた田沼山城守オキトモ意知の行状である。彼田沼主殿守トノモノカミこそは史上知られる通り好色飽く無き生活に奢侈を極めたなかに、女中相撲観賞の如きもその一端を知ることが出来る。

徳川家重、家治の二將軍に仕え、その寵遇を受け、近侍より身を起して遂には老中の要職に在つた意次、意知父子の権勢は幕府政治を己が意のままにした史実の数々は、後世まで色々な記事や、川柳にさえなつて俗間に伝えられる処となつた。

当時年寄の重職に在つた田沼意知は、毎日

殿中から退下して豪華な別邸を築地に設け此所に帰宅すると、公務のうさばらしには女の裸体観賞に限るとばかり、毎夜の様に、邸内の女中達を裸にして相撲を取らしたのであつた。大広間に、天鵞絨の敷物をして縮緬の布に綿を一



つばい入れた土俵を作り、その上に躍る美女の嬌姿に酒盃をかたむけ乍ら見入る好色漢田沼主殿の目は異様に輝きを増して、次々に現われる裸身の変化は、室内に配置された百目蠟燭の光りに映えて絹布の土俵に妖しい淫楽の夢を追つて行つた。

あまつさえ相撲の勝もさる事乍ら、怪しげな迄に好奇な取り口を見せた者には、その勝者敗者といわず、縮緬、羽二重の布一反を褒美として与えたと云うから、全くその権勢好色の豪華さは重ねて云う迄もない事である。とにかく女の相撲は江戸時上下各階級を通じ盛んに行われて

その扮装は髪も初めば普通の女髻で島田あり、丸髻ありといった具合であつたが次第に男髻に結ぶ様になり腰のものも赤い二布から本式な黒の締め込みに變つて唯相撲を取るだけでは興味の無い処から、色々な力技

に、相撲甚句に手踊り迄見せる様になつて新しい興行方法が江戸末期から明治年間に入つて益々その人気を満都にふり撒く様に發展して行つた。その為こうした人気の波に乗つて女相撲興行は次々に各所に起り観客吸引に火花を散らす事、現在のストリップ競演時代と何等変りない様な有様で、勢、中には相当危ない芸当に四十八手の裏表を表わすものも出て来る様になつて、四ツに組み合つては足をからめての勝負に、浴せ倒した相手の上に太鼓腹を押し当てて馬乗りとなれば、事更にグリ／＼と腰を使つての性交態位を想わせる等猥褻の限界スレ／＼の処迄演じては、此の様な興行を禁止しなければならぬので、明治六年七月時の太政大臣三条実美の名に依り御布告第二百五十六号「違式誹違條例」九十箇条が公布され、その第二十一条に、「男女相撲並に蛇使ひ、其他醜体を見せ物にする者、云々」という項目によりその幕を閉ざす運びとはなり、其の後は専ら力技のみを上演する事に依つて何うやら其の余命を保つ程度で済んだ。

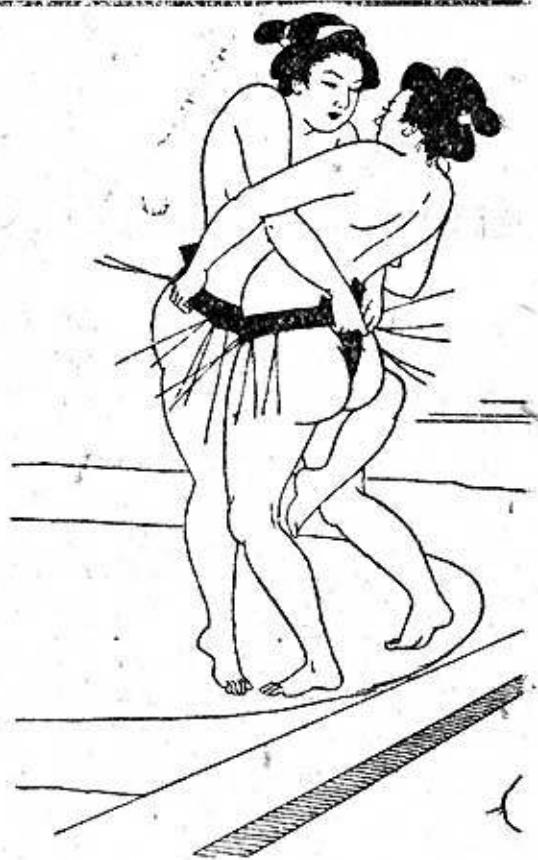
然し時代の要求と興行師との良心的な企劃によつて、再び明治十九年頃より山形県に本格的な女相撲興行が創められて、漸次各地

を巡業し乍ら遂に
東京の檜舞台両国
回向院に御目見得
したのは同二十三
年十一月十三日を
初日としての花々
しい開幕であつた

この時の興行高
玉一座女相撲団の
名儀人は石山兵四

郎という人物で、それから石山宗太郎、同じく嘉一と次々に受継がれて、明治、大正、昭和初期まで続けられた。殊に昭和五年には遠く布哇にまで興行に行き、海外進出の一大紀元を劃す程になつたのであつたが次第に深み行く軍国調の淵に何時しかその姿を没してしまわなければならぬ破目に導かれたのは何んとしても残念である。

筆者が女相撲の興行を見た最後は昭和十年頃、静岡でのことであつた。まだその当時の様子が昨日の事の様にはつきりと脳裏に浮んで来る然しもう此の当時は全裸の女体は望む可くもなく女力士は肉シャツに猿股の上から禪をしめ込んだ姿で、折角の胸の盛り上る丸味も波を打つた太鼓腹も、グツと力んだ時



の腰の線も総べて
おほいかくされた
布におさえられて
相撲美の織りなす
迫力はみじんも起
らない。わずかに
四肢の変化と股間
の動きに時折り色
気が漂うのみであ
つた。

当時静岡市の宝台院という可なり大きな寺院の境内に檜太鼓の音も勇しく女相撲の一行が小屋掛けして興行された。今この当時の様子を思い浮ぶままに記してみよう。

真中の土俵上には最初舞台が作られて舞踊の類からにぎやかにお囃子の音に幕があく。

元づお目見得かつぽれ、角力甚句、源太踊り安来節、八木節、等の踊りに女力士はそろいのハッピを短かく着て、豆しぼりの手拭の鉢巻を相撲鬘の上からキュツとしめての踊り振り、かえつて相撲の時とはちがつた色気の出るものである。亦中に「いちやな踊」というのがある、之はいちやな節という独得のもので多分山形地方の俗謡であろうか、別段の意味が有る訳でも無い、唄も大抵した俗謡を

其の儘えに依て唱える様になつて居るから便利だ、例えば、「ハー潮来イチャナ」出島の真蕪の中でアラオケサが……菖蒲咲くとは……イチャナしほらしや……イチャ／＼イチャナ」といつた様に三味線太鼓に合わせて踊るのである。この踊りの最中にも、胸のほだけた辺り、両の乳房のふくらみがかえつて着たものの上から目立つて、イチャナ踊りも案外捨て難い味があるのを発見する。次に力業曲芸の方に番組が進んで蓮台渡しというのが始まる「はい次は大井川は蓮台渡しの曲芸にて東海道は五十三次の内島田と金谷の合の宿、川の深さを渡ります様を御覧に入れます」との口上に仰臥した力士の胸と両方の膝とに各一人ずつ立つて両手で蓮台を組み、その上に別の一人が乗つて上下し乍ら川を渡る仕草に興をそゝられる。次に歯力試しというのになる、先ず最初、俵が一つ運ばれて之の目方を計つて見せ二十貫近くも有る事がわかると一人の力士が俵の真中に丈夫な紙で巻かれた所をくわえて、やつと大声一番の立合人の掛声に真赤な顔に土俵を離れた俵を次第／＼に胸の辺りに迄持ち上げる、満場手に思わず汗握りしめる一しゆんである。力技曲芸も白熱化していよいよ東の花は七人娘という口上

につられて土俵上に花形力士が一人現われ幅の広い革バンドを使つて前後左右に各一人、肩に二人都合六人を支えて土俵を廻るのであるが、全くインチキ無しの大力という訳けでいよく次は腹の上の餅搗きの段取りとなるが之とてもなか／＼の芸当である。土俵へ敷いた厚い蒲団の上に仰臥した一人の力士の腹の止へ一枚の板を横にしてその上へ俵を六俵程のせ最後の一番上に又丈夫な板を乗せて、之に二人の力士が上つて餅を搗くのである。この間大てい十五分位は掛つて、やがて搗き上つた餅は小さく丸められて力餅と称して場内一つばいの観客にベツ／＼と投げ餅として進呈されるのであつた。

さてこの様な力持ち女力士の相撲振りににも色々と手を尽して面白い真に迫つた取組の見られたのも当然で、土俵裏の猛練習の程もうかゞわれて堂々たる相撲振りに目を見張つたことであつた。

それであるから女相撲興行も静岡へは度々東京、大阪への行きかえり等、大小の一座がこの宝台院境内へはよく掛つたもので人氣が有つた。又正月はもとより春四月当市浅間神社の祭礼にはその杜前境内へ、平常或る時は市内千鳥座という芝居小屋跡の広場等へと云

う様に興行にやつて来た。

それから幾年、時代は大きく転換して何時しか人々から忘れ去られて居たが、本年正月から東京に突如女相撲興行がお目見得した。

新聞にニュース写真に色々話題をとり上げて問題となつたが、それもそのはず之れこ

そは、女角力専門で押し通して来た石山三代目兵四郎氏の卒いる「日本唯一石山大相撲」一座に外ならないからである。

筆者は未だ今回のこの興行を見物する機会が無いままに現在この稿を書き終ろうとして居るが、聞く処によれば内容は旧態を出でぬ

◎ 現代陰間茶屋談義 ◎

あながち性生活に限つたことではないが、人間の生活に於いて、単調や平凡さに倦いてくると勢い、より強い刺激を求め、そして単調から複雑へ、複雑から変態へと次第に類變的な享樂を追うようになつてくるのは自然の成行きである。変態が爛熟して類變的な享樂の花が、実を結んだのが所謂男娼と云われる陰間の變態行為である。

江戸時代の末期、爛熟類變した世相が生んだ落シ子、陰間茶屋が受動、能動あらゆる變態亡者を擁して隠然たる一大売淫王国を形成したように、現代に於ても、戦後の變態的な社会に傾いされて、戦争の落シ子ともいふべき、数十名の男娼達が、集団と

なつて珍奇極らない生活を続けていると云つても、或は信じられない方が多いかも知れない。然し事實は正に事實であつて、以下彼等の變態生活を詳述していつたならば読者は驚嘆し、好奇の眼を瞠るであらう。

彼等の巢くら本拠がよし知れなくとも、暮夜ひそかに、盛り場界限の道傍の電信柱にでも寄りかゝつて、佇んで見給え、諸君はそこに三人、四人否少くとも五人以上の女装の男を発見するだらう。彼等は裏町の旅館に共同でネグラを持つて陰間茶屋を形作つてゐるけれども、客を引く場所は思ひ／＼の縄張りを持つていて互いにそれを侵すことはしない。

ものゝ様で、明治大正時代の見世物女相撲の再現の様子ではとうてい、女体美の真価と相撲美特殊な持ち味は得られないのではなからうかと思う。男女を問わず相撲こそはその肉体とふれ合いと闘技の巧みさにより本来の意義があるのだ、女が相撲を取る場合裸であつてはどうしていけないのであろうか。今各地に盛んな女剣闘を見よ、ストリップのあくどい演出を見よ、と云い度い。それ等の方がよっぽど猥褻であると思われる。此の意味で女の相撲に本当の美技を要求し亦之を健全なものに育て上げるのが時代の観衆の頭であり理解の方法でなければならぬ。

然し女相撲を古くから個人的に指導し研究し乍ら最近に於ては女子の新しいスポーツの一部にまで順応させ、併せて「相撲舞踊」なるものさえ案出して之を婦人の間に振付し乍ら研究して居られる京都の土俵四股平氏の如きが有る事を忘れてはならない。

相撲史を書くつもりで色々余談を長々と述べたが、色々な変遷を経て来た女の相撲にはこの他に書きつくせぬ物語りの数々が有るが何れ之は他日にゆずり、現在行われて居る唯一の女相撲の石山興行に新しい時代への脱皮と発展を祈り乍らこの稿を終ることにしよう。(完)

客引きの生態なんかは今迄度々紹介したところであるから、一つ彼等の中の代表的人物の変つた生活を今迄発表しなかつた分から抜き書きしてみよう。

男娼といった特殊なグループの中に落ち込むようになった彼等の中には、生活に困つてやむを得ずオカマになつて、その為変態性が誘発された者と、最初から変態で、そのため何物も打捨て、オカマの群に投じている者と両方ある。芳ちゃんという今年二十一才になる若者は小柄な所へ瘦せ方で十人並の美少年といつていゝ位の容貌をしている。この男は幼い時から御化粧するのが好きで、頭髮は自分の髪でベーマをかけ薄化粧にルージュをつけると、どこか令嬢かと見間違ふ位である。一緒に喫茶店へ入つたつて、明るい燈の下で見ても絶対に男と見破られることがない。実家が呉服屋だというので、着物なんかも扱い好みで、それを上手に着こなした所等、男と知らなければ實際ふるいつきたい位の美貌である。

「芳ちゃんとは別嬪だな」「君は御化粧が上手だね」等と賞めてやると、「そう、嬉しいわ」と云つて身体をすり寄せてくる。本

当の女よりよっぽど色っぽい。僕も彼等の生活を観察するのには、こんな女になりきつたオカマの方が面白いだらうと思つて、彼と一晚を明かした事があつた。その時は約束の金を払つていゝ加減な口実を作つて帰つて来たのだが、それから、僕の姿を見るたびに執拗に誘惑してくるのには困つた。その都度コーヒ等を一緒に飲んで帰るのだが、何にしろ金儲けにやつている商売でないだけに、立派な二階建の家を一軒買つて住んでいたので、寄れ〜と云つて仕方がない。

余り僕が断るものだから、「私で御氣にいらぬなら、誰かよい姉さんを紹介しましょうか?」と云うのだ。「誰かテクニツクの巧い人でもあるのか?」と尋ねると「えゝ、とても達者なお姉さん、直ぐ御紹介しますわ」と歩き出した。何んでも芳ちゃん先輩に当る二十七才の道具屋の息子だそうで、何か参考になる事もあるだろうと思つて、彼の家へついて行つた。

露地裏だけれど、戦前の建築の立派な家で先ず僕を二階へ案内しておいて、そゝくさと出て行つた。僕は疊の上に寝ころび乍ら見るともなしに部屋の様子を眺めた。

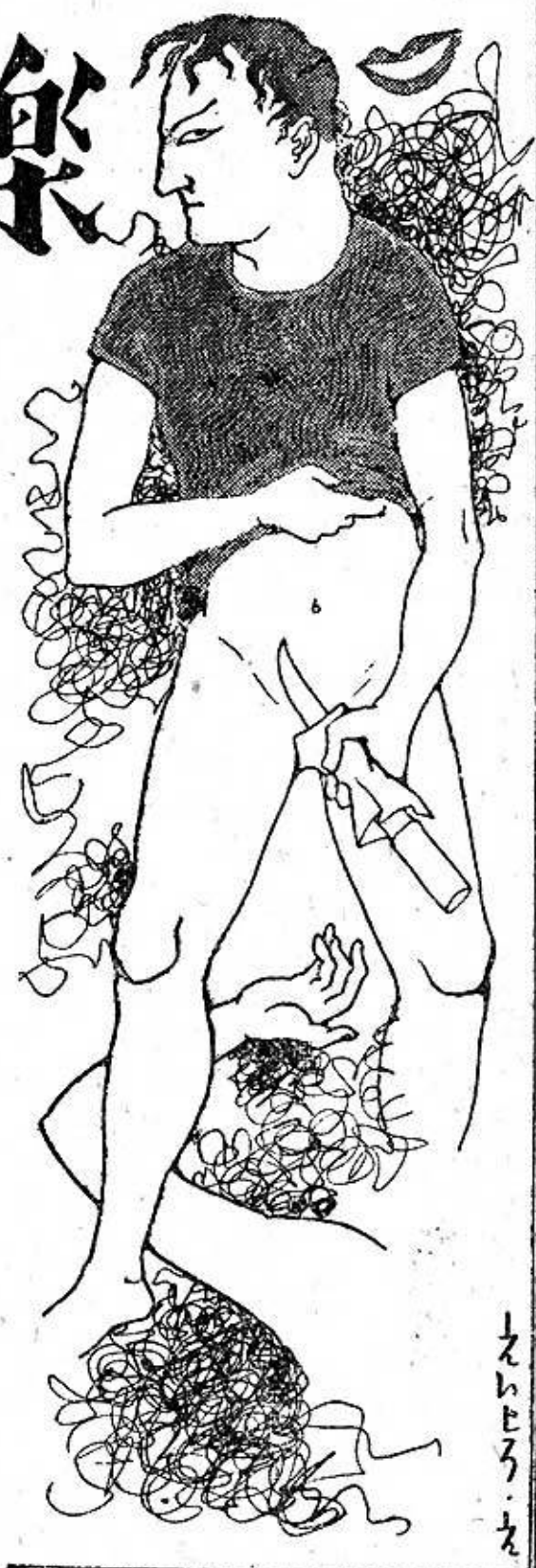
変態心理小説

自虐淫楽

—マゾヒストの手記—

三 富 浩 生

京都駅前の丸物百貨店の屋上に映画館がある。私は其の日、今見た許りの主演女優N子



の愛くるしい笑顔を思い浮べながら、外光の明るい屋上へ踏み出した。その瞬間、私は思わず、どきッとして足を緩めた。つい眼の前を、八才位の女兒の手を引いて、三崎藤代が出て行くのだ。彼女に会いたい一面、会いたくない心も動き、私は態と遅れようとした。然し彼女は連れた子供が金魚売場を覗き込んだのに従って立止った。私が逃げようも無く真直ぐ歩いて行つた、其の氣配に、ふツと振向いた彼女は、私に氣付いて、思いもよらず豊かな微笑みを浮かべて会釈する。私は慌てゝ頭を下げながら、何時も素気なく合つた瞳を横に逸らす彼女の、急な変化に不審だつた。彼女は私の狼狽に構わず「子供の御ともですわ」

と、眼で姪らしい女兒をし指した。私は得難い機会を、天から与えられた氣持で、永く心の中に燦らせていた決心を打ちあけよう、と咄嗟に思い定めた。珍しく打ち解けた彼女の態度に、自然に馴染む振りで、私は、勤め先の用件で、今夜でも会えないかと、彼女に頼み、季節柄未だ明るい七時過ぎ、行きつけの湯屋を出る時に落合う約束をした私は自殺を意味する此の構曳に心躍らせながら、彼女と別れ、二階の休憩室へ下りて行つた。

彼女は府庁の商工課に勤めていたし、私は或る工作機械の製造会社に勤めていた。山科から列車で通う仲間の知り合なのである。N子の偉は險から消え、今は藤代の、淡い水色のスーツ姿が残像になつていた。私は休憩室に、アンドデインズの裸婦写真展が有るのを知つていた。私に取つて儼ない足掻きに過ぎない視覚に頼る好色心を起す為に、是れを観るのが、今日の目的でもあつた。正面の壁一面に、奔放な裸婦の姿態が是れでもか、と許り私の眼を突き刺す。髪振り

乱し頸を反らし、恍惚と半眠に乳房を両掌に包んだ上半身が、浮き上つてゐる。淫らな程の表情が、乳房自慰の瞬間を連想させる。その横には、大腿に踏み出した半身を右下に捻り左腕は高く空を指す全身像である。素直に伸びた腕につれて、左の乳房が弾けば撥ね返しそうに張り切つてゐる。腋毛のない滑らかな腋窩から側腹へと流れる線が、強烈な「女の匂い」を画面一杯に放射する。私は是等の肉体に、当然有るべき恥毛をさえ想像裏に植えて付てみた。ひれ伏したい程神聖な調子で写されていたとしても、是等の女性像は、総べて、男達の衝動を刺激する筈である。然し私の内には何の動きも感じられないのだ。やはり駄目か、私は、今日藤代に会い、平常の決心を実行に移すべく決意した事も、当然の運命だつたのだ、と肯いた。どんな放蕩な女の裸体像を眼にしても、私には苛立たしい程性的な衝動が起らないのだつた。ストリップショウを見て昂奮させるものが、私にはないのだ。それを極致迄突き詰めた、私は自分の変態的な慾情を意識し始めた此の数年、悩み続けているのだつた。

休憩室の椅子に腰を下したまゝ、私は裸婦達の姿態を眼にしながら、あゝ、と溜息を吐

いた。あれを思い出さなければ、昂奮出来ないので、そう思つただけで、私は軽い血の動きを感じた。それ程、あれは強い魅力なのだ。独りぼつちで、女の裸像を、実物を偶見してさえ、昂奮しなかつた異常さが、私には我々から恨めしいのだつた。

私は勤め始めた此の三年来、藤代を心密かに或る対象にしてゐた。彼女の冷たい嘲りに似た微笑が、私の接近を拒否してから、それは一層燃え上つた。私は、彼女に、思うさま私の恥部を其の細く美しい指で玩弄して欲しいのだつた。それが成らぬ相談と知るだけに当然彼女が嘲笑えば、其の眼の前で恥ずかしい所作の限りを自分で自分に加えて、挙句に腹を切つて死んでしまいたかつた。色恋の成行き等に興味は無く、軽蔑され、嘲笑われ、冷たい態度で扱われる事が嬉しいのである。そしてそれが、幼い軟い頭脳に、傷ましい美しさで喰ひ入つた切腹の幻想と繋る時、私は無上に昂奮するのだつた。

幼い時から読書家だつた私は、一つには切腹の種々の姿態を探る意味が有つたらしい。

そしてとう／＼十三の年私は、太平記だの義経記だのを並べて読み較べ、鎧や、直垂ひたれれを脱ぎ棄て、筋肉の盛上つた裸身を殆ど露出

して、青白く光る刃を、力の限り我れと我が腹に突き刺し、苦痛に齒を食いしぼり乍ら、死を選ぶ武士達の姿態を想像に描いてゐる中に、今迄感じた事もない、尿意に似た感覚を下腹の辺りに覚えた。私は思わず夢中で握つた。齒が軌る程固く食いしぼり、一瞬の此の未知の世界は私を溺れさせ、切腹の描写を読む事が、私の二重の喜びとなつた。今迄小用を足す意外に使つた事の無い器官が、新しい目的を覚えさせ、その新しい目的に使つた後は、激しい喜びと同時に深いはずかしさが有つた。私は然しその喜びを追う為に、更に刺戟的な方法を探した。或る日買つた本で、私は更に刺戟的な方法を覚えた其の本の挿し絵には、美しい少年武士が、殆ど恥部も見えぬか、と思ふ程深く全身を裸にし、左の脇に刃を突き刺してゐた。迸る血潮を見つめる其の顔には楽しげな表情が有つた私は羨ましい程の昂奮を覚え、有合ふ切出しを手にすると、鏡の前で真裸になつた。刃先が鈍く本当に切れる心配は無い、と知つていたので、私は大胆に腹に切出しを当て、左から右へ引いた。私の眼は当然股間に走り、快さが身を震わせるのだつた。

私は何の反省も羞恥もなく自虐的な慾情に身を任せた。然し十七の年、私は近所の医院

の看護婦に心を奪われた毎朝夕通学の途で彼女を見る度に、純真で清潔そうな女に激しい羞恥を覚え、私の快楽を俄かに醜く感じたのである。自己嫌悪が自虐を深め、孤独な絶望が心を蔽った。彼女の愛嬌深い無意識な媚態が、却つて私を苦しめ、愚かな快楽に耽らせるのだつた。

私は彼女に恋心を打明けなかつた。嫌われたら、彼女の眼の前で、いつものように自瀆して見せ、彼女の嘲りを受けながら腹を切つたらどんなに快いだろうか、と幻想に描いた。すると一層快い昂奮の中に私は自瀆する事が出来た。然し、若しその幻想が実行に移されたら、私は忠実に幻想通り実行しそらだつた私は、もつと此の悦楽に耽りたかつたし、その為に生命が惜しかつた。

其の女は間もなく嫁ぎ、私も大人になつた二人目の対象が藤代だつたのである。藤代は最初は拘り無く私に近付いて来た。

私は自虐的な幻想に酔い乍ら自瀆する快感を忘れてはいなかつたが、藤代を恋し、若し藤代が応じてくれたら、初めて正常な性愛を知り得るような気がしたのである。然し藤代は、私を避け始め最近では私が頭を下げようとしても、つんと横を向いてしまふ始末だつ

た。私は、折角正常な性愛を手にしようと努力したのを踏みじられ一層自虐的な思いに沈んだ。或る日彼女が、はつきりと、近寄つて話しかけようとした私を軽蔑するような眼付きで笑つて、さつと身を翻して駅のホームを向うへ歩いて行つた時私は又しても片思いに破れた事を知つた。その夜、私は暫く止めていた自虐的な悦びに身を委ね、腹に幾つも見えず張れを作つた。よく張り切つた腹の皮膚を撫で乍ら、私は、かつての片思いの時と同様、もつと藤代に嘲笑われた挙句、一思いに腹を切つたらどんなに快いだろう、と、二十四才の青春を自分で棄てたかつたのである。自虐を追う為に生命が惜しく、自虐の限りを味う為には生命を棄てねばならぬ矛盾に、私は悩んでいた。

その日、偶然彼女に会い、彼女が久しぶりで私に話しかけ、微笑みかけた事が、私には定まつた運命のように思えた。私は彼女に構へ——それは私だけが意識しているのだが——を提案し、彼女が承知した事は、私の運命を定めたのだつた。深い喜びと、苦しみが、私の中で渦巻いていた。

山科へ帰る汽車の時間が近付いたので私は回想から覚めて立上つた。休憩室を出ようと



した時、今迄気付かなかつた端の一枚に眼が止つた。砂浜に正坐している裸婦の乳頭が美

しく高まり、両手に捧げたものを、女は凝視している。あゝ、それは醜態だった。女は生き、男は死んでいる——私はその醜態が男だと思いたかった、そう思わねば此の画面は何の意味もないと思えた——これこそマゾヒズムの極致でなくて何であろう、私は全身が震える程の昂奮を感じ、夜に迫った死を待ち受ける気持だった。

七時すぎ、私は約束通り湯屋の前で落ちつた藤代を、川の堤へ誘った。空梅雨の故で水の涸れた川の堤は、未だ仄明るいのに無人なのである、私は、ふくさに包んだヒ首を左の手に携えていた。藤代は、湯の道具を抱え、明るい表想であつた。冷たさが消え、それだけが却つて私の期待に反した。

「藤代さん会社の用なんて嘘なんだ。貴女が……、貴女にこれ程嫌われているんだ、と思うと死にたい位苦しい、貴女の知つた事じやない、だが、独り死ぬ前に只一つお願いがある」

私を振り切つて走り去るかも知れぬ、と思つた藤代が、意外にも、頬を染めて首を振る私はその意味が悟れなかつた。然し、彼女の気持などは何うでもいゝ、たゞ、もつと彼女に蔑まれたい一念だった。

「貴女を思つても叶わぬと知る程、苦しさに僕は、独りで恥ずかしい事を繰り返して来た。若し貴女の手がそれをしてくれたら、僕は何の心残りも無いんだ」

知らずく握つていた彼女の手が、私の掌から逃げず

「坐りましょう」

幾らか震えを常びた声で彼女は言うのだつた。私は意外な成り行きに慌てた。

「軽蔑しないんですか」

思わず詰るように言う私に、彼女は

「嫌いじゃないの、人の目さえ無かつたら」

私が彼女の性質と思つていた高慢さ——それが一層私の自虐を煽つていたのに——は消えていた。私は狼狽の中にも自棄的になつた。実際に彼女に私の恥部を触らせたら、彼女だつて軽蔑し、いつもの冷たさに返るかも知れない、と、破れかぶれな気持になつて来た。委ねられた彼女の手を、私は当てがつた。次第に仄暗さを増した堤で、私は草の匂いを嗅ぎながら横になつたのである。

彼女の軟かく細い指は、しなやかに絡り、意外な成り行きに焦慮した私の心其の儘に萎えていたが、次第に充血して行つた。

その夜、私は汚れた彼女の手を拭いながら

死なずに落んだ事への喜びと不満に、新しい悩みを感じていた。

同性の友達に私との仲を過ぎ過ぎた噂されて、強いて人前では私を避けていた彼女は、その後進んで私に体を与えてくれた。秋の夜の堤は、虫さへ鳴いている程の静かさだつた。然し其の時さえ、まづ彼女の指の力を借りなければ役立ち難かつた程、私には女体に傾倒する気持が無いのである。

私は藤代に失望し、其の失望と幻滅感、憐れみの度に深くなつて行く。彼女に、好きだと打明けた言葉の義理から、憐れみているような気さえしている。もつと大きな昂奮を、幻想する。

美貌で、其の美貌相応に高慢で、冷たい女が有つたら……私は其の女を何時迄も探すのだ。そしてその時、私は彼女の前にひざまずいて懇願してでも、嘲笑を浴びながら自虐し、彼女の冷たい嗤いに見守られて、切腹の痛苦を喜びたいのだ。私は藤代を恨みさえする。あの夜、藤代が私の狂態を嗤つてさへくれたらよかつたのに……と。

(終)

川柳瓦版



画 三 十

男の天国

女 工 情 史

早 崎 稻 穂

今は昔、と云つてもそう遠い昔の事ではありません。女工時代の

なるものがありました。謂ゆる「女工哀史」「籠の鳥時代」「格子なき牢獄」につながれた女工なるものの時代の事であります。

現在では労働組合などによつて女工と云う名称もなくなり、「女工員」「織姫」等の尊称を奉られています。が、昔は「女工」でありました。紡績と云えば女工、女工と云えば紡績、何か違つた人種の様に云われていました。

小さな風呂敷包み一つを持つて親のため、家のため、はるばる田舎から売られて来ました。そしてそれは世間からは、冷たい侮辱の

目で眺められていました。

朝早くから夜遅くまで、孜々として働らかされ、僅かの給料の大半は親元へ送金し、雀の涙か、蚤の糞丸程の小使銭で、やつと自分の女らしい生活をしていました。

食う事と寝る事以外には殆ど楽しみとてない、暗い毎日毎夜の明暮でありました。が、只こゝに一つ、

丈夫楽しい事があつたのです。公然の秘密、それその男と女のあの事、あれです。

数に於て紡績には十対一位の割合でしか男はいません、その数少ない男を十倍もの女が追いかけて廻すのですから、男こそ、正にもつて天国であります。反面女工には

競争率があり、努力がいらぬので、弱肉強食、汚い争いは女工達の間で絶え間なく続けられたのであります。

と、云えば少し大げさに聞えますが、男と女と居つて食う事と寝る事以外に楽しみとてない、その

楽しみも充分に与えられなければならぬ。言われた通り、教えられた通りに機械について動いて

わたり切つています。ネエ、アレより外に……まあこの様な訳で、うどん一杯、まんじゅう一つなどと云うのは程度のよい方

で、向うから呉れるな



三 十 三 画

田舎からはる／＼町の紡績に出て来た以上、お金を儲けなくてはなりません。言われた通り、教えられる機械について動いておれば、一金何某かの「せに」はもらえますが、少しでも楽をして一銭でも多くと云うのが人情ならば、早くそふなりたいたいものと誰でも願う事

でしょう。まして女工に於ておやです。一山いくらの中から上役に目をつけてもらつて、そうなるには、一寸やそつとでは中々なれるものではないですね。だからあれあれですよ、あれなら、ネ、ホラ。

「ネエ君、あの女工は素晴らしいネ」

「ハア……アノ……素晴らしいと云われますと……」

「なあんだ、君は係長の癖にまだ、何も知らないのか？」

「ハア」

「そうか、そんならまあよからう、

だがあの女工は近々出世させてやる必要があるそうだな」

「ハア……よく研究調査してみます」



あの女工課長も夜を知っている主任でも夜は女工の下になりあの用で女工居残りさゝれてい女工さん相手次第で出世もし

女工も生身なら、男も生身です

から、一晩にいくらか若い時は別だなんて言つても、数に制限が出来まさあネ、紡績の課長、係長、主任なんて大抵助け平たらしい男に

は決つていますがネエ老人が多いでしょう。だから、罪ですよ、まだあ

まり生え揃つていない様なのも男と名がつけば、それこそ目の色を変

えんばかりにして、……まあ、老人も経験があつてよいですが、生

きのいゝのは刺身にしても美味し

いですからネ、ヨツテクダンノゴ

トシ、女工百態を演出す。

「ネエ、此の頃少し冷たいのネ」

尻がるい女工だんく受けがよし

「他にいゝ人が、出来たんでし

う？」

「……」

「今晚是非来てネお話したい事があるの」

「……」

「ネエ……ネエ……」

女工などの序の口だと色男

話すにもすりつけて来るテクニ

ック

手がふれただけで女工は息づか

い

三回目女工今度ばそちらから

損得じやありませんよと女工言

い

十分にさせて女工はあきらまれる

便所でもよいわと女工の方が熱

立つてでもいゝ

と廊下で女工寄

り

早くして仕舞い

と女工立つたま

ゝ

立つたまゝ女工

上手に始末する

綿屑のかげで女工は待つている



腰抜けのまんまで女工綿ぼこり
凄じ事女工股ぐら明け渡し
五つ半六つ目あたり女工泣き
用のときやいつでも来いと女工
言い

こうなりますともう男も風と夜

との見境いがなくなるから不思議

まあ御様にお伺い立てた時〃何時

でも好きな時にやれ〃と、言われ

たのが人間の先祖なんですから仕

方がない事はないのですが、そう

そう女工だつて、風夜のべつまく

なしにと云うわけにはゆかない事

もあります。

「……」

「何さ、お尻をな

でたりいじつたり

して」

「何もしないよ」

「いたずらすると

ぶつよ

て

「じゃ休み時間に、いゝなあ」
「……」

およしよと女工木管持つて突き
仕事中だめよ好きだが女工追い
嫌いでもない癖屋は寄せつけず
ぶつわよと女工それでも嬉しそ
う
そうむごく言えば職場を変えら
れる

こうなつて終つてはもう結末に
なります。が、こゝまでになる道
程は色々です。女工女工と一口に
云つてもピンからキリまで、道具
の良否、位置の適不適。好きで美
人でない女工程悲
しいものがありま
せん。一度でも味
をしめるとそれこ
そ大変、もうダニ
の様なものです。
「おいどうにかし
て呉れよ」



災難は男に
せよ リレーされ

「天罰だよ」

「弱つてゐるんだ、うるさくて」
「まあいいじゃないか、どうせロ
ハだろ」

「只より安いものはないつて云う
けど、でもほんとうにあいつには
困るんだ」

日に三度でもよい女工けちな顔
くどくのを待つてましたと女工
言い

休日の度にどうにかして欲しい
時々にはネエネエと女工泣き
あわれみでなのに女工のうぬぼ
れて
もう這つてやらぬと女工見捨て
られ

今はピカソ時代
なる時代だそうで
美人の数が多くな
つたそうですが、
美しい女は何時の
時代でも得です。
反対に男の方は、
少々手間をかける

必要があり面倒です。ぜんざいを
食べさせたり、密豆をおごつたり
して。

「ネエ今度の休みに少し話がある
んだけど何処か行かないか」
「此処ではいけないの」

「うん、一寸その
つまり……」

「休みでも今度は
あたし外出出来な
いのよ」

「あのネ、お母さ
んか、誰かを病氣
にしてみえよ」



「何を見たのよ」
「なんだつていゝ俺は見たんだ
からな」

「見た見た言つた
つてわからないの
よ、何を見たつて
言うのよ」
「まあいゝや、知
つてゐるんだぞ、
全部」
「……」

「俺にも……な……いゝだろう」

女工でも少しは口説く手間がい
り
アン密で女工あつさり承知する
母病氣とは嘘女工よがり声

少し元かけときや後は大丈夫

兎に角、一度でもあうしてこ
してこゝなると、もう次から次へ
待つてましたと言わぬばかり
に、あの手、この手で綺麗なのへ

女工もう次の男に口説かれる
気の弱い女工あれにもこちらに
も

見破られまいと次々おどされる
一度づゝですよ女工順を決め
げつぷうの出る程女工せめられ
る

災難は女工男にリレーされ

中には一寸した弱みから仕方なく、そうしない事には、明日からおまんまの種がなくなるかもわからない破目になつて、遂にそうされたのかさせたのかわからないなんてのもあります。

「駄目だネ、何と云つても、謝まつただけですむ問題と問題が違うからな」

「すみません」

「すみません、すみません、すみません」

「すみません、すみません、すみません」

「すみません、すみません、すみません」

「すみません、すみません、すみません」

「すみません、すみません、すみません」

「すみません」

「すみません」

「すみません、すみません、すみません」

「すみません」

「すみません」

「すみません、すみません、すみません」

「すみません、すみません、すみません」

「すみません、すみません、すみません」

目をつぶれ、なら亦別の相談だ



取引が出来て女工は許される
魚心あれば何んとか水心
今日の詫今夜しますと女工詫び
肉体で詫びて女工は許される

一口に女工と云いまして、中には少々お堅すぎる様に見えるの
もあります。そんなのは余り好かれませんが、そこが又魅力で、か
えつて宣伝効果もとなつて逆効

果をもたらすもの
です。

「おい、あいつな
らバット一箱かけ
てもいゝぜ」

「ほうそんなに堅
いか」

「堅いのなんのつ
て、あいつの堅さは別だよ正真正正
銘の処女で処だろう」

「そうむきになるなよ、案外あん
なのは簡単かも知らないぞ、バ
ット一箱おまけがつけば、尙更つ
て処だ」

生真面目な女工
は色が二人だけ
堅そうで女工次
々手管する

それも又技巧女
工は堅そうに
一皮をむけば真
赤な血がたぎり

好い事をした後には悪い事があ
ると言います。……もらい得と云
うわけにはなんぼ女工でも、返礼
も時には必要です。

「ネエ、ほんとに結婚して呉れる
の？」

「……」

「ネエどうなの、ほんとうにして
呉れるんでしようネ」

「……」

「はつきりして呉れなきやキッス
も嫌」

「キッス位、いゝじゃないか」

「いや、いや」



浮気なら嫌だと
女工ぬかしたり
跡始末して呉れ
女工頭として
誰が智恵つけた
か女工もう受け
ず

恋する者には、少々の障碍など
なんの恐れん、塀を乗り越える位
朝めし前、いや晚めしあと、早く
夜が来ればよい、あゝ早く夜が、
ホラ、口笛が。

「今晚いゝか？」

「エ……」

「六時頃だよ」

「エ……」

「綺麗に洗つとけよ」

口笛が聞こえそわ／＼女工部屋
今晚はあれ明日はあれ女工部屋
待ち兼ねた女工じり／＼汗をか
き

塀越した女工こゝだと小声なり

俺だけは真剣だよとくどかれる

寄宿舎と云う処は面白い処であります。男の寄宿舎では女の話、女の寄宿舎では男の噂、写真出したり眺めたり、もの足らぬものはそれそのなんとやら。枕かゝえて男工の寄宿……忍び込んだが夜の一時……抱いて寝て呉れまだ夜は明けぬ……月は工場の屋根の上に……と云う具合です。男も女の寄宿を手探りで歩く。大抵一部屋五六人、多いのは十人位もいますから、配給洩れもあれば待ち遠しい者もあつて、てんやわんや、やつさもつさであります。

「もう部屋長さんいゝですか」
「いえ、いけません」
「ネエ、部屋長さんもういゝでしよう」
「まだ、まだ、もう一寸です」
「ネエ夜が明けそうだわ」
両隣り片睡のんでる女工部屋
部屋長を一番先に女工部屋
待てぬのか女工便所へ走つて来
夜夜中女工木管持つている

部屋長が三人分の時間かけ
女工部屋一人で行つてくたく
に
その型はもう古いわと女工言
い
型などを変えてるひまは更にな
し
次の順半分出して待つてゐる

花咲けば蝶舞い
おしべあればめし
べあり陰陽合すれ
ば何んとやらは天
の摂理。今こそ立
派なものがありま
すが、その頃はそ
んな便利なものは
なかつた、いやあつたのかもしれ
ませんが、使用方法も面倒くさし
それにネエ、直接の方がやつぱり
おまけに金がかゝるし、梅干なら
只ですけど、炊事から盗つて来る
のも何か、
あゝ神様は汝に別の生命を与へ
給う。



「少し大きくなつた様だな」
「ハイ……あの……いゝえなんでもありません」
「今月は成績も落ちてゐるぞ」
「ハイすみません」
「一度、医者に診せて、適当にし
てもらんだな、もし手遅れなら田
舎へ帰つてもよいし」
「いえ……あの大丈夫です、働きの
ます」

「処で誰だ、お父
ちゃんは」
物思い女工成績
下げてゐる
作業服包みきれ
ない腹になり
少しづつふくれ男はみんな逃げ
五人まで名差して女工泣きじや
くり
お土産はお腹に女工里がえり、

かくして田舎に帰り、二つの身
体になり、その一つはそのまゝ田
舎で朽ち果てるが、もう一つはだ

んぐ成長して、やがて、すべ
が揃うか揃わないか、ともかく一
応の年齢に達すると、町の紡績へ
と出て行くのであります。前者の
轍を後者はそのまゝ辿るのです。
歴史は繰返す。

之で終ります。誰です。俺も紡
績へ入社したいなどとおつしやる
のは、之は昔の話ですよ、一番始
めにそう書いた筈です。現在の事
は私より皆様の方が、詳しく御経
験済みだらうと思ひます。私はと
んと苦手で残念だが仕方ありませ
ん。では又ネ。バイバイ。

讀者の体験を募る

一、枚数は四百字詰原稿用紙十枚
から二十枚位迄。
二、夫婦生活を初め性生活の異色
体験又は性的倒錯に関する事柄
人身売買等。

三、資料だけ又は手紙や日記の類
でも結構です。誌上に発表しま
した分には相当の謝礼を差し上
げます。



「むかしより人の言い伝えしおそろしき事あやしき事をあつめて、百物語すれば、必ず恐ろしき事ありといえり。」

百物語には法式あり、月暗き夜、行燈に火を点じ、その行燈は青き紙にてはり立て、百筋の燈心を点じ、一つの物語に燈心一つ宛引きとりぬれば、座中漸々暗くなり、青き紙の色うつろにて、何となく物凄くなりゆくなり。それに語りつゞくれば、あやしき事、おそろしき事あらわるゝとかや

下京辺の人五人集り、いざや百物語せんとて、法の如く火をともし、めん／＼皆青き小袖着て、並み居て語るに六七十に及

ぶ。其の時分は臘月の初つかた風烈しく、雪降り、寒き事日比に替り、髪根しむるようになぞとして覺えたり。窓の外に火の光ちら／＼として、螢の多く

飛ぶが如く、幾千万ともなく終に座中に飛び入りて丸く集りて鏡の如く鞠の如く、又別れて砕け散り、変じて白くなり固まりたる形、わたり五尺ばかりにて天井につきて、畳の上にどうと落ちたる。其の音、いかづちの如くにして消え失せたり。

五人ながらうつぶして死に入るを、家の内のともがらささぎま扶け起しければ、甦りて別的事もなかりしなり。

諺に曰く、白日に人を談ずる

勿れ、人を談ずれば害を生ず。昏夜に鬼を語る事勿れ、鬼を語れば怪至るとは此の事なるべしと、物語百条に満

たずして、筆をこゝにとゞむ」と、江戸時代の怪談を集めた伽婢子という本の最後に「怪を語れば怪至」の最後の章にこう結んでいる。

記紀の昔から日本には怪しい神々が多かつた。平安朝の榮華の生活の裏には、はなやかな歡樂の後に追う淋しさがあつた。若い美しい男女の恋の戯れの中にも怪異に対する限らない脅えがあつた。生霊や死霊の祟りが不斷の脅威をかり立てゝいた。

現代のように燈火に対して電氣を用いる術を知らない当時は夜の暗黒はそのまゝに百鬼夜行の恐怖の世界であつた。江戸時代に流行した百物語の怪を語ば

怪至の思想も、元をたゞせば遠く上古、中古の妖怪、変化、怪異、或は器物百年を経て、化して精靈を得てより人を誑かすという付喪神思想に基づく。

歌舞伎が江戸の生活の半ばを支配する頃であつた。怪談趣味は当時の人の隅から隅まで行き亘り、幽霊の仕掛物の趣向や百物語を材料にして女を口説く男も現れ恐怖と惨虐と陰惨の中に一派のユーモラス味を加えてゐる。

腫れぼつたい顔をあげて、昨日の映画は面白かつたの一言が言いたさに、わざ／＼泣きに行く人は今も多いが、その晩から一人歩きも出来ない脅えを享樂するために馳せ参ずる狂熱は今では見られない。あの濡れ場の淫猥さと癡痺しきつた神経に刺さる恐怖の刺戟を求めるために外ならなかつたであらう。

私版好色
滑稽譚

幽霊屋敷の睦言

葦田郁也



「幽霊屋敷なんてものがそうざらにありますか」と問えば
「芝居や講談になるほど念の入ったのはこちらの方が怖いよ」
笑いもせず、薄くなつた頭から丸い鼻の先までつるりと撫で下して山形さんは煙管を吸いつける。

れば家主は大助りなので、そこが山形さんのつけ目だつた。勢い、因縁付きの空家に泊ろうという奇特な若者に、銚子の一本もつけて膳を運ぶことくらい実に安価なサービスだつたのである。

「あれは確か東京震災の年だつたね」

山形さんは平家の落武者の子孫だという村の古蹟を見るつもりで因幡の山村を旅していた。迷信深い土地だから、山形さんの望む無料宿泊所は至る所にあつた。ある古屋敷に泊つた翌朝、首斬屋敷と呼ばれるその家の管理人から振舞われた白い飯を食べていると、一人の老婆が又恭々しく朱塗りの高足膳を捧げてやつて来た。朝つばらから狐のいたずらでもあるまいと思つていると、老婆は地酒の徳利をすゝめながら

「今夜はどうしても手前の離室にお泊りつかあさる様に主人が申しとりますで」

「その当時のことだから、狐がいるとか狸が住んでるとかいふ空家はいくらでもあつたし首吊りのあつた家だの何のつて少しばかりの因縁付きの家は今だつてどの町にも村にも一つや二つあるじやないかね」

山形さんが代用教員の頃だから、大正半ばの時代である。山形さんは旅が好きで、夏休みは殆んどあちこち歩き廻つてくるのが毎年の例となつていた。一応の目的地までは汽車で行くが、それから次の目的地までは徒歩である。そして、途中の宿泊が大変奇抜な方法で、無料の上に御馳走まで出るのである。これが山形さんの自慢であつた。

奇抜な方法というのは因縁付きの、幽霊屋敷をたずねてそこに泊るのである。

住宅難というような文字は見られず、借手より貸したい人間の多かつた時代には、僅かのケチでもつけば尾ヒレが生えて、口へでも借り手のない空家がずい分あつた。一晚でも誰かが泊つて、化物の出ないことが証明され

と町寧を通り越して平グモのような挨拶だった。事情を聞けば、こういう次第。

荒島と云えば鳥取藩の年表にもしばしば見られる重役の家柄で、この村一帯がその知行所であつた。今でも資産こそ中流だが家の格式は第一である。明治になつてから新築した家だが、さすが昔が偲ばれる黒瓦の立派な屋根が村はずれからも望まれる。そのような家柄でいて、どうしたことか先々代から満足な縁組が一つもない。今の主人も東京の学校で知り合つた友人の妹と恋愛して結婚したのでとてもこの土地では嫁が得られなかつたろうという。娘も三十過ぎまで家に居て、家格を七光りの後妻かなんかで漸く納まるような状態であつた。

先代の未亡人が氣鬱症で離室に籠り、誰にも顔を見せなくなつて五年目に死んだ後、当主の一人娘が肺病になつた。やはり離室が病室としてあてがわれたが、或る夜家人の際に腰紐でくびれて死んだ。それから一層村の噂は高くなつたのである。一口に云えば呪いの家だといふのである。離室の建つてゐる位置が昔の仕置場であつたとか、皿屋敷まがいな女中を手打にしたことがあるとか、先祖の一人が領民を無惨にしほり上げて責め殺したと

か、風説が風説を生んで果しなかつた。今は滅多にその離室を使わないが、先頃よりそこに女の幽霊が出ると村の評判になり、折も折当主はじめ親族一同迷惑しているというわけであつた。

「しかし、私のような若い者が一夜二夜泊つてみたつてどうにもならんでしょう」

山形さんはそう云つたが、実は薄気味悪いのだつた。借家とか狐や狸の出る程度の家ならとも角、旧家の因縁づくでは実感が生々しくて空怖しくもあるのだ。

「いゝえ、あんた様。主人の御一族には縁談のきまつたお嬢さんもあり、新婚早々の若旦那様もあります。それが、この噂が高くなりましてからは、縁談も取消さうの、そがいな家とは知らんでやつた娘が可哀さうだの云うて、そりやえらいことです。頼みますけえ一夜泊つて、そないな評判が嘘じやというて証明して下さい。どれだけ私共も助かるか知れません。氣の毒なお嬢さんや若旦那様が助かります。人助けでござります」

人は助かるうがこちらはどうなるのだ、万一本当にお化が出てはいくら山形さんだとして腰を抜かすだろう。今まで幸に出逢わなかつただけのことだ。迷信だと云つてしまえばそ

れまでだが、山形さんだつて泊るについては多少その噂の根拠も調べた上で無料宿泊を行つたわけだから、このような旧家のもつともらしい家は敬遠してきていたのであつた。

いくら柔道三段でも肝つ玉には限度があるしかし、怖いもの見たさで、多少のアバンチユールも感じないわけでもなかつた。好奇心は承諾と同義語である。泊ることに泣き落されたのである。念のために

「しかし、見た者があるのかね、その幽霊といふのを」

と山形さんは老婆に聞いてみた。

「は、……いゝえ」

甚だ不得要領な老婆の返事は、彼女自身一度や二度それらしい影を見たと言白するに等しいではないか。もやもやと背すじを撫でる氣味の悪さに、山形さんは、早まつたと感じないわけにはいかなかつた。

その日、荒島家の離室は雨戸をすつかり取り、払つて大掃除が施され、夜に入ると一番明るい電球がともされたのである。荒島の当主は恰幅の好い男盛りだつたが、積る心痛の故か多少神経質な白い額を見せていた。早くから酒が出され、二の膳付の大振舞いに、却つて山形さんの方が面喰つた形であつた。

「身内の者では世間が信用しませんでな。一つ今夜は、この荒島家に何のたまりもないというあかしをこの村の連中に示してやつて下されや、お願いです」

と、この家の当主も自身で酌をしながら頼み入る姿はむしろ痛々しい風情だつた。

「いや、もうそんな御挨拶は恐縮です。こうなつたら止むを得ません。何が出ようと私も命がけですよ。自分で充分頂きますからどうかお引取り下さい」

山形さんも、酔いの勢いで度胸が据つた。すつかり家人が母家へ引上げてから、今まで手をつけなかつた二の膳の肴も気軽につついて勝手に火鉢で酒を温めては飲んだ。夏のこどだから下ばき一つのあられもない姿である。何が出ようと怖くもない酒の勢であつた。いつそきれいな娘の幽霊でも現われようものなら酌をさせてやる。

——だが、流石につぶれるほどに酔えないのは矢張り底気味悪い故であろう。飲むほどに、山形さんの顔は蒼白く冴えてくる。酔いを駈つて寝込んでしまつたつもりだつたが、こうなるとしたたる汗を拭きながら尙更飲まねばならぬ。時刻は一時を過ぎようとしている。母家では燈火こそ消してはいるが、家族

が寝もやらず離室の気配をうかがっているらしい様子は察しられた。今夜は村には内密の企画であつた。今夜何のたたりもなければ村に公表して、明日の夜は村の誰彼を招いて披露する手筈になつてゐることは、既に山形さんとも打合わせが出来てゐるのだつた。

夏とは云いながら、山村の夜半はさすがに冷えが感じられる。酔いそびれた故もある。酒はにがくなつた。母家の時計が二時を打つのを聞くと、山形さんはどつと身体中にひろがる疲労を覚えた。徳利の底はもう軽い。彼は次の間に伸べてある寢床に蚊帳をめくつてもぐり込んだ。母家の人達も寝てしまつたようである。しんかんと更けた夜気が蚊帳の裾をゆるがせるだけだ。横になると、飲んだ酒がさすがに全身にまわつて、尖つた神経にはかわりなく肉体をしびらせてゐるのが知れた。引きずり込まれるように眠りに落ちていつたのである。

やがて、山形さんは眼を覚ました。蚊帳をはためかす風の故であつたろうか。酒の後しばしば小用を催す生理的現象の故か。それもある。しかし、眠つてはいてもこの因縁付きの一室に居るといふ酒にも酔い切れない恐怖の本能が、人の気配をさとして眼覚めさせた

というのが本音であろう。

隣室の電燈が消えているのを先づ山形さんは知つた。つゝんと背すじを走る寒さに、一時歯をかねて身を固くしたのである。隣室に人のうごめく気配がするではないか。全身を耳にして隣室の様子を察し取ろうとした。短い、かすれた、人のさゝやきが洩れる。とまもなく身もだえしてすゝり泣く声に変わつて、唯でさえ鬼氣を孕んだ山村の深夜に、むせぶが如きすゝり泣きは地虫のすだく音のよりに地を這い地に吸われるかとばかり断続して止まないものであつた。山形さんは、自分の方がわつと叫び出したい程の恐怖に襲われて、思わず薄い夏布団を引つかむつてしまつた。しかし、このままでは山形さんの責任は済むまい。すゝり泣きの正体は果して幽霊であるか尾花であるか。持前の冀度胸と好奇心とが僅かに頭を上げた。山形さんはそろそろと蚊帳を這い出て襖のすき間に手をかけた。一寸、二寸。開いて覗いてみたが、暗くてよくわからぬのである。たしかに人が低くうごめいているのだけはわかるのだつた。すゝり泣きはいつか止んで、深い沈黙である。相手もこちらを伺つてゐるのではないか。だが、突然「ふゝふゝ」と忍び笑いが暗闇を這つ

てきこえてきた。

闇に慣れた眼は、

白い人影が畳に長

く這っているのが

おぼろに見えた。

山形さんはそつと

立ち上つてこちら

の部屋の電燈に手

を伸ばした。スキ

ツチをひねると、

同時に「あつ」と

低く叫んだのは隣

室の人影である。

振り返つて、山形

さんも思わず「あ

あつ」と声を飲ん

だ。浴衣がけの男女が固く抱き合つたまゝひ

たと顔を伏せていたのである。

「何だい、色つばい幽霊だつたんだな」

抱き合つた二人はとたんにばつと離れて、

逃げようとした。

「馬鹿ッ、さわいだら人に知れるぞ」

逃げようとした二人へ一喝したので、思わ

ず立ちすくんだ。しかし、すぐに男の方は縁

から飛び下りて築山の植込みの中へまぎれこ



んでしまつた。女

も後を追おうとし

たが、このような

場合、女の姿勢は

すぐに駆け出せる

ほど始末よく出来

ていないものであ

る。第一に帯を巻

いて結ばねばなら

ぬではないか。山

形さんは黙つて襖

のかげに身をかく

した。若いに似合

わぬ心遣いであつ

た。しばらく女は

身づくろいしてい

る様子だつたが、やがてすゝり泣く声になつ

た。

「どうした？」

「男のくせに、自分だけ逃げ出して……」

きれぎれに逃げた相手への恨みを云うので

ある。電燈の消えた隣室にうずくまつてしや

くり上げる女の肢体に、山形さんは鈍痛のよ

うなはげしい慾情を覚えすにはいられなかつ

た。

「こちらえおいで」

声をかけると、女は素直に入つてきた。

「誰にも内緒にして、頼みます」

「わかつてる。でも、もう幽霊だけは止せ

よ」

「でも、こゝより他に……」

場所がなかつたとは云うものゝ女の恋のは

げしさが山形さんの若い心を打つのだつた。

山形さんは女の丸い肩に手を置いた。女は何

を感じたものか（いや、感違いだつたか

どうかわからぬが、山形さんはそう云うので

ある）崩れるように山形さんの胸に顔をうず

めてきたのである。

「それから？」

固唾をのんでこゝろ催促すると

「コースは同じことよ」

と山形さんはつるりと丸い鼻の顔をなでて

笑いもしないのである。だが、もう一夜この

離室に山形さんが泊つたことを書き添えてお

くのは蛇足ではあるまい。

×

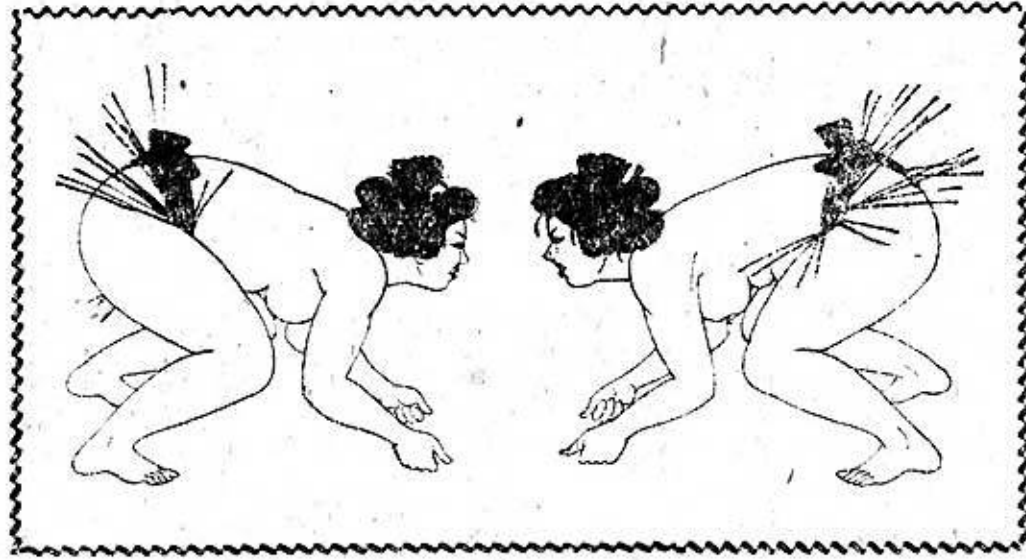
×

×

×

×

×



見世物としての

女相撲

土岐相良

江戸時代の見世物に於ける女角力の位置は、技術的見世物に属するのであるが、転じて他から見れば、見世物華やかなりし頃の、最も卑俗を極めた煽情的露出もの、中にあつては、比較的非難されることの少ない部類にあつた。

女角力の興行意識は、露出に其の重点を置いていたのではあるが演戯とする処は、角力であると云う点に、逃げ道があつたのである。是が所謂エロティックシヨウとしての女角力の立場を稀薄にしている処であろう。そうして裸女群像の躍動は、視覚に映じて決して卑猥ならずして、却つて芸術的美の感覚に迄達せしめることが出来た。

然しその時代の観客である民衆は、その様な目を以て之を見ないでエロティックシヨウとしてのみ觀賞したであらうことは、数々の挿話として残されし文献の上に、明確に見ることが出来る。

興行者と観衆の好色的期待の視

野の中に、無自覚であつたに相違ない裸群像の悲しき踊りは、幾春秋を重ね来しことであらうか。

さて、延享年中の文献に見える女角力から、大正年間に至る見世物女角力の姿を、其力士の扮装の変遷に依つて、臆気ながらも忍ぶことにしよう。

◎第一期を成すものは、力士の扮装、女鬘に脚布一つの風姿である。即ち女装から着衣を脱せしめた儘の姿であつて、当時の見世物女角力が、今日の其れのように、純然たる相撲技巧を演じたものではなくして、単なる露出見世物たるに止まり、相撲四十八手の秘術を尽すと云うが如き演戯ではなかつたことから、容易に領き得る扮装であつたことは「空音本調子」(安永九年)「鎌倉山女角力闘腸」(天明五年)「玉磨青砥銭」(寛政二年)等に依つて知ることが出来る。この期の興行を文献の上に求めれば「流言記」(延享二年)「俳諧時津風」(延享三年)

にある江戸両国のもの「街談録」にある（明和六年）江戸浅草のもの「撰陽奇観」及び「浪華見世物年鑑」（明和六年）の条にある、大阪坂町裏のもの「世間化物気質」（明和八年）「孝行娘袖日記」（明和七年）にある京阪のもの等を挙げる事が出来る。「江戸繁昌記」（天保二年）も「明和の間、婦人相撲大に行はる。趙宋之世上元、或は此の戯を設けしと同一の奇なり」と云つてゐる如く延享の初めから其の盛期に達する迄即ち寛政享和の頃迄を第一期と見る事が出来る。もとより競争の激しい見世物興行界のことであるから、力士扮装上の異例は当然あり得ることであつて、総てをこの範圍の中に律することの出来ないことは、認めて頂かねばならぬことである。

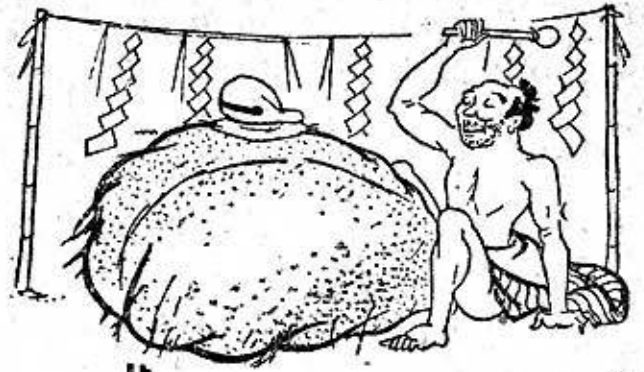
した。この推移は、女角力の進歩を物語るものであつて、即ち單なる露出と云う条件のみでは、到底観客の意を迎える事が出来なくなつた結果、相撲的技術の必要を生じ、従つて演戲は軽快なる扮装を要求した結果の、変化に外ならぬいからである。是は当時のエロテックショウの極端なもの、盛行を見た見世物興行界を考えることに依つて、初めて諒解出来る処である。この期に興行されたものを求めれば、一枚刷番附に依る文政九年江戸両国のもの、「江戸繁昌記」（天保二年）に依る江戸両国のものを挙げる事が出来るよう。

◎第三期は、嘉永から明治二十余年頃を指す期間であつて、この期の女力士の扮装は、前期迄女鬘であつたものが、男力士の如く俗に槽落しと云う結髪様式に変化して、女鬘に鉢巻等して髪を乱れを防いでいた以前から見ると、一層角力技術の進展を来して、男力士と同様の激しい土俵振りを思わせる。廻しは従前と変化はない。この期のものは、一枚刷番附に依る嘉永元年大阪難波新地のもの「藤岡屋日記」（嘉永二年）の条に見える江戸回向院のもの、一枚刷番附及び売茶翁「女相撲物語」に依る。明治二十三年東京回向院に於けるもの等である。この期間中、明治六年七月御布告第二百五十六号を以て「違式註違条例」九十箇条の公布施行を見、其第二十一条「男女相撲並に蛇遣い其他醜體を見せ物にする者」とある項に依つて事実上女角力は禁止さるゝの狀態に陥つたのであるが右明治二十三年東京回向院興行のものは、僅か数日の後禁ぜられしとは云え、江戸期同様の扮装を以て行われた事は、特に記録すべき事実であつて、この興行を最後として、華麗を極めた江戸見世物女角力の興行は屏息するに至つた。

◎第四期は、明治二十年代より大正初年頃迄の期間であつて、髪は槽落し肉襦衣に猿股を穿ち其上から馬簾下ある締込の風姿となり、見世物女角力本来の露出的魅力を失い去つた訳となつたので唯角力技術の巧みさを以て、演戲の全部とするの止む無き狀態となつた。然し三都中心の女角力史から、更に視野を遡遠の地方に興行されるものに及ばせば、この期と雖も露出的扮装の興行のあつたことは事實であつた。即ち女角力の本場とされる、山形地方から奥羽、北海道へ掛けて行われていたのである。

◎第五期は、大正中期後を指すのであつて、髪は槽落し、全身を白布のシャツ、股引に包み、其上から馬簾ある下る締込の風姿であつて、この様に變化して來ては、土俵上の技巧は勇壯活潑、唯特異の掛声に依つて、女力士なりと知り得るのみの狀態となつた。

(完)



日本性見世物變遷史

潮

マ
リ

現在、劇場にそしてキャバレーに煽情的

なストリップ・ショウ、秘密クラブ、性交映画、俗悪な裸、即ち性見世物なるものが氾濫しているが、これ等エロ・ショウなるものの現今までのその変遷を作者研究なる程を此の誌に出来るだけ詳しく記して行つてみたいと思う。実に興味しん／＼たるものがある。とかくこの種性見世物なるものは言をまたずして文化程度の低い年代に遡のばればのぼるほど、それはグロと無分別さに富み、低級さは言語に絶するものがある。文化の発達と共にそれは同じ客を魅するものであつても、どこかにあか抜けのした真の色つぽさを呈し、次第に陶冶されて行つた様である。ほんとう

の意味からの性見世物は江戸時代であつて、その人気は誠に全盛時代を髣髴させるものであつた。

性見世物なるものが初めて公開に及んだのは室町時代からであつて、この時代に初めて「懐胎十ヶ月擬様の見世物」というのがあつた。これは言うまでもなく女の懐妊から妊娠十ヶ月の様をいろ／＼善男善女に説明し、又その懐妊の様をあらから様に器物を持つて実際に行わしめたものである。そして賽銭なるものを取りこれを喜んで客は色つぽい興奮のまなざしでみたのである。その口上の一説を述べてみるならば

「女人の玉門、三世出身也、一際皆仏身の飾物は女人の胎内に宿る道具也、はなせば仏の道具となり合すれば女人の道具と胎内に備わ

る。胎内一月目の形惣じて人間の生るゝ姿、みなこれ此の錫杖のはじめ、起りなりと」
又、

「男女一しづくの精液、女子の子宮に入りますれば時々子をはらむ、その日は形錫杖の如く、また桃の花の如しとなる」

この懐胎十月の見世物は、江戸時代になつて一層いろ／＼しく、しきりに性交の理、姿態技巧を論じ、出生の不思議を語り客をあほりたてたものである。誌上にあまりその様を詳しく書くことの出来ぬのは残念であるが、これは当時の所謂生理衛生というものであつたがこれを悪用するに至つたわけである。

次に生れてきたものとしては不具者、畸型者の性見世物であつて、たとえば両性（ふたなり）無陸女、無毛女、これと反対に多毛女

陰部肥太女、又男の性器肥大なるものなどである。そしてこの不具者達にあやしげな性の芸をしこみ、いかにも滑稽愉快に興味をそそつて見せたのである。この興行の様子を一寸述べてみると、たとえば陰部肥太なる女を高い処に立たせ後には青襦をたて、男が扇を持つて口上をまくしたてたのである。

「この女子、越の国なにがし村に生れ、この度ひきえて普く人に見せたてまつるなり」

こう言つて彼女の陰部をおほつてゐる薄絹を全部はらいのけ

「げに言いしにたがわず、大きき正に天下一品、玉門開きて……子宮云々……」

この様な俗悪極まるものであつた。これと併行して手無し、足芸、口クロ首、踊りせむし等のショウがあつたことは言うまでもない。又鞆皮、硬頭、深目の変態ショウ等もあつたが表題に少しはなれるので説明をばく事にする。

次に大女の出現である。これも厳然とエロショウの中に入るものであつて丈七尺三寸、足の長さ一尺三寸、手の長さ一尺のまつ、又大女力持ちの滝、十六才で体重四十貫といわれる様などこれらは皆その全裸を客に見せて興行を行いその変態的異性肉体に、やんやん

やと客は拍手を送つたのである。これと共に小女の所謂ストリップショウも出現した。身長二尺三寸、当年廿五才、面体形不美、だが乳房、性器は実に立派な隆起となやましさを持つて普通人以上である所に客は興味があつたのである。

大女の図



これより下つては腹芸というエロ・ショウがあつたのである。即ち腹の上で色々の器物をたててみたり種々の軽業姿態をやつてみせる。又足で生花をたてたり、縫物、三味線などを弾いた。そして性器で色々の業をみせたその腹部と局部の線に実にエロチックなものがあふれ出たのである。

以上は江戸時代以前にすでに性見世物としてあつたものであるが、江戸時代に入ると驚異的なものが出現している。本誌で一寸のべたことがあるが「やれつけそれ突け」である。その口上をみても驚く外はない。

「さあ、さあ、御開帳、そりあ出た、出た。そり、出ちやたまらぬ、上見て、下見て、八

文じや、安い——」

「——評判、評判おぼこ娘の玉門は、すいつきたがる、たこの評判たこの評判色の好きな奴は目付きで知れる、嫌いなお方がなにあるものか、そのわけだよ。このわけだよ」

こう言つた口上に我れも我れもと、先を争つてのぞいたのである。普通三間ばかりのむしろ張りの小屋で行われたもの、島田に結つて簪をかざり、こつてりと化粧して真赤な長襦袢につつまれ大きくひろげ高台に坐つてゐる。その姿をちよいとむしろをあけて通行人に見せ客を引きこむ。これは特に江戸の盛り場両国に軒をならべていたものであつて客は竹棹の先端に陽物に形どつた軟かいタンポのついたもので女の股間をつくののである。だがこの棹がシナシナしてゐて見当が狂い易く、女の方も修練を積んでゐるので巧みに体をかかわしなかく、命中しないのである。全くたまげた見世物である。女は股間に美しく化粧をし、陰毛で可愛らしい寸髻や島田髻を結

つて、吹きだす様な誠にふざけたものなのである。

この頃牛娘、蛇遣いなぞも見世物として発達したのであつて、これは牛をたくみにあやつり又蛇をあしらつてその妙技をみせたまではよかつたが、これだけではすまず、牛の舌

に触れさせて慾情

する姿をみせたり

その他蛇をしのび

こませたりする場

面を大胆にも見せ

たのである。

又女相撲なるも

のも始まり、これ

より男女相撲とな

り、「取口拝見」

と言つて、見物人

のお好みにより男

女のむつ言を聞か

せ、閨房の實際を

その始まりから終りまで、所謂四十八手うら

おもてを公開したのである。(これは明和四

年になつて漸く風紀上禁止されるに至つた)

次はこれも江戸時代の見世物として、シヨ

ウとまでは行かなかつたが、大金玉乞食とい



うのが現われているのである。

その金玉は米五斗を袋に入れた程大きく、形丸くして足を前の方へ組んで坐つた姿の頭より金玉の方少し高く、前より見ると身体は陰囊にかくれてみえない程なのである。又これとは異つたのに大きさは米二三斗ほどの袋の

大きさが、朝の四つ頃より八つ半

頃迄は大きく、夕方になると小さく

なり半分程になつて首につつて帰つ

て行くという変つた大金玉乞食があ

つた。

「ふら、ふらつんだせ。金玉乞食」

という流行歌まで當時はやつた程

なのである。

これら乞食は金玉の上に鉦を置いて

て打ちならし、あわれさを乞い錢を

貰つていたのである。

この外湯屋の女湯のぞき場、婦女

子の慰み事、即ちさまざまの器物、

はり形を使つての行為の方法などを

金を取つてみせていた所もあつた。

この外同性同志の器物を使つての満足場面

の姿をみせたりしたものなのである。

まだまだ種々江戸の町にはおかしげな性見

世物があつたのだが、以上は代表的なものば

かりなのである。

何がなんと言つても日本人が世界の中で一番スケベであると言ふことは、以上の諸見世物をみて、はつきりとうなづける事である。これ以上の性見世物はまずないといえるであらう。いなむ事の出来ぬ事実である。

明治五年における風俗取締令から次第にこ

う言つたエロ・シヨウはなくなり歌舞伎に、

新派にそして新劇にと客は文化人として強く

魅せられて行つた。

現今その江戸時代における姿が長い間の抑

制、底に根ざしていたものが湧き上り、こゝ

に自然の姿としてストリップ・シヨウなるも

のが現われて、更に再び色を売る女剣戟と移

つて行つたものとみることもあながち誤ちで

はあるまい。これは誰しもがうなづける事実

であらうと思う。

今回は日本の性見世物、現今のストリップ

シヨウに移る変遷をのべるにとどめ、いづれ

機会をあらためて、その一つ一つについて歴

史的背景、時代風俗と相まつてくわしく述べ

て行きたいと思う。

又性見世物と類を同じくする、枕草紙、戯

絵、張子、子おろし医者にまで及ぼうと思

う。

(終)

或る露出症者の告白

(山口) 伊 吹 孝

私の今迄人といきゝか変つていると思われ
れる傾向の自覚している点を書いてみたい
と思います。私は只今四十二才の会社員で
あります。私は十八才の時、学校の寄宿舎
生活をしていた頃、同級生からオナニーを
教えられ、それ以後、その悪習慣を続けて
いたのであります。学校卒業後、今の会社
に勤め、二十八の年に十九才の娘と結婚を
しました。私はその女によつて二十三年來
抱いて來た神秘の扉を開いたのでありまし
た。

然しその女は三カ月で遂に出て行つたの
です。私は次の女を得る迄、性慾と戦つて
來ました。けれども、私は商売女に走る勇
氣はもつていませんでした。早起きの私は
毎朝町はずれに散歩に出ましたが、そこに
は工場が建ち並んでいて、工場へ出勤する
工員達がよく通りました。或る朝、起きぬ

けに下駄をつつかけて家を出したので、
小便が辛抱出来なくなり路傍の溝へ放尿を
していますと、向うから二人連れの中年の
女工員がやつてきました。

何にしろ朝起きたばかりでしたので、小
便は中々終りにならず、とうとう彼女達は
私の立つている眼の前に迫つてきました。
そしてすつかり私は放尿している所を見ら
れてしまったのです。

早く終つてしまいたいという焦燥と、彼
女達が見る事によつて興奮を感じるだろう
という期待の折り混つた複雑な感情の中に
不思議な云々に云われない快感を覚えまし
た。

それから再びその時の快感を味いたい
為に、工場の倉庫の附近へ行くと、そこに
働いている雑役の女人夫がいましたので、
彼女達の前で放尿の真似をして見せまし

た。その時は最初の時のような快感はあり
ませんでした。その衝動を抑える事が出
来なくて、だんだん重つてきたので、その
女達は私が通る度に、妙な顔をして互に顔
を見合せたり、ボソボソと囁やき合つたり
して、私が行き過ぎた後で何か嘲笑する気
配のあるのを、私は一種の快感を以て聞い
たのです。

その翌年の秋、再婚しました。そして夫
婦の性生活も円満でしたが、暫くしてその
女は実家へ歸つてしまいました。半年後に
第三の結婚をしました。それが現在の妻で
す。彼女との情交は極めてスムーズで、家
庭も円満であります。子供はありませ
ん。そのうち会社に於ける私の地位も次第
に向上しまして庶務課長となつて多くの男
女の部下を使うようになりましたが、時に
は嘗て若い時に味つた放尿時に年増の女に
のぞかれた時の快感が強い衝動となつて襲
つてくるのに苦しめられました。然し不思
議に若い美しい女に対しては別に興味が起
りませんでした。

現在の妻は貞淑でしかも十人並以上の容
貌で私も満足しておりますが、いつ此の理
性が本能的な衝動に打ち負されるのではな
いかという恐迫観念が去りません。



私の妻は、お乳の美しいので会う人毎に褒められるので、私は得意なのですが、実は、あれは、近頃流行の乳型の「パット」を入れて居るのです。私の妻の美知子は、本当は、今よりも、もつとく美しい大きな乳房を持つて居たのですが、今では、あの様な人工的なものでスタイルを作らねばならなくなつたのには、悲しいわけがあるのです。その話を、これから申し上げ様と思います。

先づ、最初にお話せねばならないのは、私自身の恥を申さねば理解していただけないと思いますので、私の事から申しませう。

私の父は、材木問屋をして居りまして、大震災の時に、どれくらい儲けをしましたか。それで生涯、金と女で遊び暮し、結婚したのが遅かつたのです。私が生れた時父は四十でした。私が大学生の時、母が死に、父は、前から妾にしていた芸者上りの女を後妻として迎えました。この女は、美しい女でしたが、大学生の私より五ヶ年上の三十前の女でした。この女は、私より一ヶ年下の妹の慶子を連れて私の家へ来たのです。私には兄妹もなく、自分で言うのも変ですが気の弱いお坊ちゃんでしたから、義母とも、割合に折合がよかつたのです。義母は、何とか自分の妹の慶子を、私の嫁にと思つていたので。慶子は、一度、結婚したらしいのですが、直ぐ別れて来てしまつたのだそうです。慶子も姉に似て大柄な美しい女でしたが、どうも本当に好きになれませんでした。慶子は、いろいろと誘惑をして来て、一度等は、酔つた末、肉体関係に入つた事もありました。この事は、私の一生の失敗だつたのです。私は、当時、恋人があつたのです。私の友人で社会主義かぶれをした為に、捕えられて獄中に居た男の妹で、デパートの売子をして居る美知子を愛して居たのです。私は、学校を出ると直ぐに、美知子と結婚をしました。

義母を始め、慶子は極力反対したのですが、私は父に強要して美知子を妻に迎えました。美知子は天涯の孤児に近い身の上で、私だけ頼りにして居たのです。美知子は、私の好きな小柄なやせ型の女で、広い理智的な顔と、黒い大きな瞳をもち、十八の娘ながら、実に豊満な乳房の持主でした。美知子を妻に迎えた事が、義母や慶子に、大きな憎悪をもたせた事は私も知つて居ました。私達の幸福は、一年と続きませんでした。戦争が進むにつれ、思想的に私の様な自由主義者までも、捕えらる事になりました。私が捕えられ、警察で調べられて居る間に父が急病で死にました。父の死と、矢田と言う家に出入の医者友人に特高の刑事が居た事とで、私は許されて家に帰つて来ました。その頃、美知子は、臨月の身でした。私は許されて帰つて来たものの、警察で喀血したのが原因で寝たつ切りの体になつてしまつたのです。父の死後、義母は、ガラリと態度を変え、美知子を女中以上に酷使し出しました。その頃、既に、義母は、矢田と言う医者と関係し、矢田が毎日の様に宿つて居ました。今まで居た女中が帰ると、義母は、私の病気を理由に、美知子の床を私の部屋から離して女中部屋に追いやつてしまつたのです。「病人には女は毒ですからね、美知子は、今夜から女中部屋に寝かせますよ、それから、美知子は雇間用がありますから、あんなの世話には慶子にさせて下さい」と釘をさす様に言うのでした。

又、ある時は、こんな事も言うのでした。「美知子には、子を生まさせませんよ。若し生んだとしても、子供は直ぐ、里子にやりますからね、戦争で忙しいのに、子供等生んだりして、第一、赤の女の子供なんて」

美知子が子供を生むと、三日もしないのに前よりも酷使し出し、

子供は、里子に出してしまつたのです。

「あんな、赤の子は、日本から追い出すのが一番ですよ、信一も信一ですよ。あんな女を連れて来て、いゝえあの女の動物の様に大きなお乳に誘惑されたんですよ。」と義母は、大声で矢田や出入の者に話すのでした。

私は、美知子の顔さえ見る事が出来ませんでした。毎日、慶子が私の床にビツタリくついて離れないのです。

「ねえ、信ちゃん、美知子さん、可愛そうよ。」

ホホホ……毎日、姉さんにいじめられてるのよ。子供は里子に出されて、あんな大きなお乳房が張つて苦しがつてるわ。あんな女なんか捨てなさいよ。それが二人の身のためよ……」等とニヤ／＼笑いながら言うのです。

ある晩の事です。慶子が白い乳の一パイ入つて居るコップを持つて来て私の枕もとでコップを見せながら「これ何だと思ふ」と言うのです。

「牛乳だろう」

「異う、これはね、あんなの奥様の涙」そう言つて慶子はゴクリ／＼と飲みながら「毎晩、乳しぼり機で取るのよ。これだけ取るのに大騒ぎよ。ギョウ／＼つてしぼつてやるのよ。」

ホホホ……そんな顔したつて駄目よ。私と姉さんで、あの憎い国賊を改心させてやるのよ。

あんなは、今迄知らなかつたでしょうが、毎晩、拷問するのよ。面白いわよ。どう、今夜見物させて上げましょうか。もつともまだ信ちゃん歩けない体だから駄目ね。二階の姉さんの部屋でやつてるのよ。見に来たければ、廊下の障子のガラスから見られるわよ」

そう言つて慶子は、室から出て行くのです。私は眠られないままに、シーンとした家の中に聞き耳を立てて居ました。時々、義母のカン高い声と矢田の酒に酔つたダミ声があるだけです。

私は、我慢出来なくなつて、そつと起き上つてヒョロ／＼しながら部屋を出て、二階の階段の下まで、壁につかまりながら歩きました。階段の下まで来ると、二階の音がハッキリと聞えました。

「さあ、こんなにされても、お前は、別れると言わないんだね。強情な女だよ！」

「私は、殺されても、別れません」美知子の低いがシツカリした声がしました。

「フン、どうせ、お前の様な女は、日本人じゃないから殺したつていゝのさ。だが、ゆつくり責殺してやるよ。慶ちゃん、さあ、始めようよ……」

その声を後に、二階はシーンとしてしまつた。私は、とても、二階に上る事は出来ない体でしたが、ソロリ／＼と二階に這い上つて行きました。

「どう、これでも平気かね。熱いだろう、段々苦しくなるよ」と義母の声がしました。

「姉さん、もつと、お乳の上に。矢田さん、足を動かない様に、もつと力を入れてよ……」

慶子の声でした。私は、呼吸の苦しくなるのを我慢して、やつと二階に上りました。そして、そろり／＼と、義母の部屋の前へと歩きました。義母の部屋は、二階の一番手前で廊下に向つて、障子の腰にガラスが入つて居ました。私は、腰をかゝめて、ガラスから部屋を覗いて、ドキツとしました。

まあ、どうでしょう、部屋の真中に美知子が素裸にされ、両足を矢田が押さえ、両手は慶子が押えて仰向に横たわつて居て、義母が美知子の体中に大きな灸をすえて居るのです。美知子のあの美しい鉄砲乳の上に両側に二つ／＼の灸が据えてあり。腹部から陰部にかけて六つ、両股に四つ、大きな灸から、煙が上つて居るのです。「ウ、ウ」と美知子は、体をくねらせて唸つて居るのです。

私は、眼がクラ／＼として何か叫ぼうとしましたが、喀血しそうなので、そのまゝの姿で、目をカツと開いて黙つて見て居ました。

部屋の中の人々は、私の来た事に一寸も気がつきませんでした。「どうだい、少しは苦しいかえ、え、美知子どうだい」と義母は、憎々しげに言いました。

「お母さま、許して……」と美知子は、バツチリと目を開いて言うのでした。目から大きな涙が流れて居ました。

「じゃ、信一と別れるかい」

「いゝえ……」と美知子は首を横に振りました。

「そう、それもいゝさ、次の拷問にかけるまでの事さ……ねえ、矢田さん、一休みしましょう、下の食堂にお酒もあるから、こゝは慶子にまかせて……」

「駄目よ、姉さん、こんな事じゃ、この女は平気よ。もつと／＼責め上げなければ」と慶子が反対しました。

「だから、一休みしてから、すればいいよでしょう……」と義母は、矢田の手を取つてニヤツと笑つて居るのです。だらけた着物の前から子を生んだ事のない固い三十女の乳首が見えました。

「姉さんは、ずるいわ、さゝ續けてしましうよ。まだ、今夜は、一度も氣を失わないじゃないの。それに、両方のオツパイだつて、

乳しぼりとお灸だけじゃあないの……」

「慶子さんは、よほど、その乳房が憎いらしいのですね」と矢田のダミ声でした。

「え、この乳房のため、私、恋人をとられたのですもの」

「じゃ、慶子さんに、よい物を作つて来ました」と矢田は、何か鞆の中から出すのです。

「これは、特製の乳房責めの道具ですよ。これを、その女の乳房に掛けて御覧なさい、面白い事になりますよ」

「まあ、嬉しい、さあ、姉さん、やつてみましょうよ……」と慶子は大声で言いました。

「そうね、どうするの、矢田さん」と義母が、木で出来た変な道具を手にして言うと、

「まず、坐らせて、後手に縛つて、両足も動けない様に縛つて下さい。そして、前かきみにして、乳房が少したれ下つた方がよいのです。そう……そうして、この箱の様なものに両方の乳房を入れ、ねこ……で締めて、このバンドを背中結びます。さあ、これで用意は出来ました」

矢田の声に、私は、美知子の姿の見える地位まで身をずらせて覗き込みました。美知子の前には、矢田や義母が居るので、よく見えなかつたが、美知子は、後手に縛られ、私の方を向いて坐らされ、大きな乳房は、両方共、変な木の箱の中に入れられ首の乳先だけが一寸見えませんでした。

「さあ、慶子さん、箱の上のネジを廻して御覧なさい、段々に、乳房が押しつぶされて行きます。これは、昔、拇指杆と言う拷問具の原理を用いたものです」

「そう、こゝを廻すのね、こうね……」

「ウ……アツ……許して……アレ……」と美知子は、身をくねらせて叫ぶのです。

「そう、もつと廻して、そう、そこで止めて今度は、僕が後から、バンドを締め上げますから、二人で前からよく見て居て下さい」

矢田が立つて美知子の後へ廻ると、

「ウウ……アツ……ウ……」と美知子は、顔中に脂汗をかいて苦しがつて居るのです。

「ホホホ……乳首から、あんなにお乳が出て来るわね」と慶子が嬉しそうに笑い、「大分、苦しいわね、矢田さん、もつと締めてみてよ」と義母も言うのです。「もう、締りませんね。このまゝで置きましょう、ほら、もう、乳首から血が出て来たでしょう、内出血をしたのです。」

実際、美知子の乳首から乳に混じつて血がポタ／＼と出て来ました。美知子は、唯、ハア／＼と大きく息をするだけでした。私は興奮と怒りのために、部屋に飛び込みました時、グググと胸が苦しくなり、カツと咳血をしてその場に倒れてしまいました。

それから、何時間過ぎたか解りません。ハツと気がつくと、私は床の中で、美知子が心配そうに覗き込んで居るのです。美知子の黒い大きな瞳に涙が一パイでした。私は、何か言い出そうとしましたが、何も言えませんでした。

「心配しないで、私は、どんなことがあつても別れないわ、それより元気になつて……それだけ」美知子はニツと淋しく笑っているのです。再び、気がつくと矢田と慶子の顔が、私を見て居ます。私はすべてが夢であつた様な気がしました。

そんな事があつてから、私は再び病状が悪くなり、身動きも許されない体になつてしまいました。美知子は、私の部屋に近づく事も許されないのです。私の看護は慶子がして呉れるのですが、私は慶子の顔を見るのも不愉快だつたのです。そして、毎晩、遠くで美知子の責め苦しめられる声を聞かねばならなかつたのです。義母も、時々、私の部屋に来ては、美知子と別れろと言いに来ますし、矢田は、若し、義母の命令に従わない時は、二人を警察に手渡すといや味を言うのです。

特に、慶子は、毎晩の様に、「今夜は、鞭打ちだ」とか「水責めにして来た」とか、私の枕もとで、拷問の様子を面白そうに話すのです。

「ねえ、信ちゃん、矢田さんの発明の乳房責めの道具ね、あれは、一番よくきくよ。あれを掛けると、強情な奥さんでも、羊の様になるのよ。今日も、生意気な事を言つたのであれを掛けるわよと言つたらブル／＼震えて私のひざ下に坐つて、手を合して居るのよ。ホホホ……でも、矢田さんも言つて居たけど、あれは、毎日掛けない事よ。殺すのが目的ではないでしょう。大丈夫よ。奥さんは元氣だから、唯、両方のお乳が紫色に腫れ上つてただけよ。

それに、もうお乳は出ないのよ。今日の報告は、これで終り。まだ、今晚の拷問は、これからでしょう。今夜、蠟燭責めだから面白いわよ。こゝまで聞える様な泣き声を出すでしょう。それから、報告を忘れたけど、あんなの奥さんは、もう、風呂、倉の中に閉込められて、一步も外へは出されないのよ。私は、あんなが、私を好きになつて呉れなくても、美知子さんを許す時が来たら、信ちゃんの手に返して上げるから心配しなくてよいのよ。唯、その時、あんな

があんな女を愛せるかどうか疑問だけだね。今夜は、久し振りに矢田さんが居ないから、姉さんの部屋で拷問するから、こゝまで聞えるわよ。美知子さんの声、楽しみにして居らつしやい。様子は今晚遅くでも報告して上げます。多分、今夜は、強情女も、堪えられないから……」

そう言つて慶子は室を出て行つた。一時間程して、二階から、例の美知子の低い唸り声が、とぎれ／＼に聞えて来た。私は床の中で「美知子、許してくれ」と声を上げて泣く以外に、どうする事も出来なかつたのです。

そうした事が毎日の様に続きました。戦争の様子も次第に悪くなり、空襲が度々ある様になつたある日の事です。慶子が来て、「朝から空襲／＼でしょう、いやになるわよ。それに、昨日は三時半まで、美知子さんを拷問したのよ。姉さんが、責めて責め抜いたわ。

三度も氣を失つたのよ。そして、今日は、矢田さんの手術を受けるのよ。面白いわ」と言うのです。

又ある日の事です。慶子が来て

「今日、私、イラ／＼したから、今、倉に行つて、美知子さんを素裸にして、馬にしてビシ／＼鞭打つて来てやつたわ。氣持がスーとしたわ。

近頃は、時々倉から出してやるの。裸のままなら逃げられないでしょう。食事の時とお便所の時だけ。ホホホ……いゝ婆よ……」

「慶子さん、美知子を許してお呉れ、僕、どんな事でもきくから」「さあ……では、私を愛して呉れる。ホラ、こんなに胸がドキ／＼してるのよ。」と言つて慶子は、病人のやせた手を自分の胸にもつ



て行くのです。ヒンヤリとした冷めたい肌と固い小さな乳房が手に触れると、私はゾツとして手を無理に引きました。

「フンまだ、あの女のお乳が恋しいのね、もう、どんな事があつても許さないから。あの女のお乳が、どんなになつて居るか、今夜見せて上げるわよ。片方のお乳は、まだ、何ともないから、今夜、最後のお別れをさせて上げるわ。」そう言う、慶子は、部屋から出て行きました。

その夜、十一時頃、慶子が私を呼びに来ました。やつと床の上に起きられる私を、無理に立たせて、紐で軽く後手に縛り、倉に案内

するのです。

「さあ見物人を連れて来たわよ。」と慶子が私を倉につき入れました。倉の真中にテーブルの様な台があつて、その上に、胸の上までシーツをかけた美知子が、後手に縛られて足を投げ出して坐つて居ます。矢田が後から美知子が倒れない様に押さえて居て、その向に義母が椅子に掛けて居ました。「御聲さんの御入来だね、さあ、お嫁さんがよく見える前に坐らせてお呉れ」と義母が言いました。

「お嫁さんは、死んでるのじやないよ、氣を失つて居るだけさ。さああんたの好きなお乳をとつくりと御覧」と義母は、白いシーツを少しずり下ろしました。私は、ハツと息をのんだのです。左の乳房がふつくらと現れたのに反し右の乳房は、どんな手術をしたのか、大きな切り傷があり、乳首のあつたと思われるところが、黒く穴が開いて居るのです。

「どう、矢田さんの手術の跡は。男の様な胸になつたでしょう」と慶子が指で差しました。

「右だつて、よく見てよ、前と異つてゐるから」

慶子に言われて、可を見ると、右は乳首もあつたのですが全体に紫色に脹れ上り、ボツ／＼と小さな黒い穴と、ふつくらした上部に灸の跡が深くついて居るのです。

「ね、素晴らしいでしょう。さあ、今夜は、これから右のお乳をやめるのよ。そして、最後に又、矢田さんに手術して乳房を完全に取つ

てしまうのよ。その前に、うんと苦しめるから見て居てね。姉さん始めましょう。姉さんは、蠟燭で乳首を焼いて、私は、そのアイロンで乳を缺んでやるから」

義母は、何時用意したのか、真赤に焼けた髪のアイロンを慶子に手渡しました。慶子は、アイロンで、一寸前かぐみの美知子の右の乳房をぐいと缺んだのです。

「ウウ……」と美知子は気がついたらしく唸きました。義母が、蠟燭の火を乳首に近づけると、ジジ／＼と肉の焼ける臭いがしました。「これでもか、ホホホ……」と慶子が幾度も、アイロンで乳房を缺み返すのです。乳房の上には、幾本もの赤い筋が出来ました。「ウ……」と泣く様な唸き声を小さく出すだけで、美知子は、私が前に居るのも気がつかないのです。

閉じた眼からは、大きな涙がにじみ出て居ました。

「どうせ後で切り取る肉だから、もつと焼いても平気だぜ」と矢田がニヤ／＼して言うのでした。

「姉さん、もつと根元も焼いてやつてよ」

慶子が言つた時でした、空襲警報が鳴りB29の爆音が、もう頭上で鳴り出しました。

「焼夷弾だ……、逃げろ」

矢田が、叫びました。義母も、慶子も灯を消すのも忘れて逃げ出しました。美知子は、矢田が手を離すと、ぐつたりと台の上に倒れてしまいました。矢田は、私の後手をとくと

「何処へでも逃げろ」と言い、自分も倉から飛び出して行つてしまいました。私は、立ち上ると、美知子の側に駆けより、白いシーツをはぎ取りました。美知子の腹部から両股にかけ、灸の跡が一面に

ついて居ました。

バリ／＼シニエと言う焼夷弾の音と一緒に、倉の外は、鼠の様に明るくなつて居ます。私は、精一杯の力を出して、美知子を抱起し着物をさがしました。

「あなた……」と美知子は、弱々しく言うのです。

「逃げるんだ」

私は、美知子を抱き上げましたが、外はもう煙で一杯でした。私は土蔵の扉を閉めて辛じて火焰を防ぎました。

亡父が特にこの倉を広く造つておいて呉れたので、私達は蒸焼きにもならず生き延びたのです。

不思議なもので、その後、私の体は目に見えてよくなる一方で、苦しい生活の中に、美知子と一緒に居られると言うだけで幸福でした。義母は行衛不明になり、慶子と矢田は、終戦後しばらくしてから田舎に同棲して居る事が解りました。義母は、多分死んだのでしよう。私と美知子は、経済的には、いろ／＼苦労しましたが、今では幸に、こうして楽しくやつて居ります。里に出した子供も引き取つて居ます。美知子は、あの拷問のため、もう子供は出来ません。そして、あの美しい乳房も失つてしまいましたが、私は、深く／＼美知子を愛して居ます。今でも、傷跡だらけの妻の体を見ますと、より以上の愛情が湧いて来るのです。

とんだ、のろけ話になりましたが許して下さい。（おわり）

日本淫婦傳之内

土器お傳

本莊幽蘭

福森耕司

文化文政の頃、江戸の四里四方に淫婦の名を馳せたる土器お伝と云う女があつた。船宿扇屋万五郎の娘で本名をおむらと云い、天明寛政の頃、芝で名高い義太夫の名入お伝の門に入つて師匠の名を襲ぎ小伝といつた。三代目阪東三津五郎（秀佳）の女房となつたが、第六代目瀬川菊之丞を始め、多くの俳優芸人と関係して、放縦荒淫の生活を送つた。それがため世上の大評判となつたので、利を射るに敏なる出版屋はその情夫の全部を交名にして顔見世番附に擬し、その似顔を歌川国貞に画かせて発売した。之を出版するに百金余を費したが、二百金以上の利得があつたと云う。

これに依つて観ても、如何に淫婦として彼女の名高かつたかを知

ることが出来る。「巷街贅説」に

も「淫婦にして、みそか男多かる中に、路考（六代目瀬川菊之丞）に密通してその事隠れなく世の中に嘶草となりぬ。さるを何人か戯れに作りけん、顔見せの入り代り番附に似せて、そのたわれ男の數々を浮世絵師歌川国貞が筆にして写し出づ。桜木に載せて専らに玩ぶに、程なくその版を禁ぜらる。

此の番附を摺り出すの費、百金に余れりとかや、又利を得ること二百金に過ぎたりと、痴呆たることしあれど、大江戸の広き、他国には在らじ、余も亦た痴漢の數に入りて講ひ見て爰に写し、後の笑草とはなしぬ」と記して、その写しを掲げている。之を見ると、瀬川

菊之丞を瀬川いくの丞、岩井久米三郎を岩見久米三郎、岩井半四郎

を岩見伴四郎とあるように情夫の名を少しく変えてあるが、それに列挙された男の數だけでも五十余人を算する。

なおこれ以外に關係した男の數も多く、情夫の總數九十人に達したことがあるが、実にローマ古代の大淫婦メツサリナ皇后も三舎を避けん許りで、我國では蓋し空前の淫婦と謂つても可い。百六人の異性の關係があつたと云うエジプトのクレオパトラに此すれば遜色があるにしても、兎に角有夫の婦人にして、九十人の間夫をこしらえた土器のお伝の如きものは、東西古今を通じて実に稀に見る処の淫婦である。

江戸時代の土器お伝に對峙すべき女性には明治大正時代の本莊幽蘭である。彼女の本名は久代といふ佐賀県土族の生れで、妙齡時代には失恋のためと思わぬ家に嫁した煩悶とのために精神病に罹つて巢鴨病院に入院し、全治後、嚴本善治氏の経営せし栗女学校に入学した閑歴のある女で、女学校時代には文芸的天才の閃きを放つたところであるが、その行動は極めて放逸で、職業や住所を交換すること恰も走馬燈の如く、神田にミルクホールを開業したかと思えば、上

野公園に花見時の休憩所を開店しそれも長く続かずして、女落語家となり、女講談師に転じ、次いで新聞記者になつたかと思えば、忽ち女優に變じ、活動写真の女弁士と化け、救世軍の兵士となり、程なく上野山下に幽蘭軒と云える餅屋を開いたかと思つと、東京を去つて大阪に移り、台湾に行き満洲に赴いたりなどして、種々に職業をかえ、再び内地に歸りては各地方を歴遊して浪花節をうなり、支那人芝居の監督となり、女講談師に早替りする等、職業及び住所に千変万化のあるが如く、その關係した異性をも頻繁に取り換え、その男の數八十余名、亭主を代えたこと十九回に及んだとある。

そして彼女は一人でも關係した男の名を必ず記載し「錦蘭」と称する一冊の帳面を所持して居るものである。青柳有美氏の記す処に依れば、彼女は此く多數の異性と關係しても、相手の男を欺いて金を捲き上げようとか、或は男を窮地に陥れても恋情を遂げようとか云うような毒婦らしい処は無く、唯頻々と回数多くの男と關係しただけのことであると云う。そこに彼女の變質者であり病的放逸症の人間たることが現われている。



夢性の美少年

三村雅夫

—— 一色慾異常青年の告白 ——

(第二期)

その日は朝からしとしと雨が降り、鬱陶しい日でした。僕は映画を見るために雨の中を町へ出ました。性教育映画で「美しき本能、愛の道標」という題名でした。画面に現れてくる全裸の青年の肉体は、胸から腹、腰の窪み、きりつと緊つた腰部、筋肉の盛り上つた臀部から隆々たる腰にかけ、僕には堪らない魅力がありました。上体をぐつと下げる時に生ずるうねるよ

うな腰部の躍動、そして元に戻るため、くろりと横向きに身体を後からくねらせた時チラリと見えた偉大なる男性のシンボルに思わず溜息をつく、直ぐ画面は消え去っていました。僕はその場面を見る為に三回も続けて見たのです。

その翌年の正月に五六人の気の合う友人と連れ立って、出雲大社へ詣つて帰途、玉造温泉へ寄りました。そして日本一の大プ

ールの天然浴槽を誇る某旅館へ投宿しました。宿に着いたのは夕方七時半頃でした。正月で客が多くて満員のため、みんなで一つの部屋へ押し込められ、温泉は初めてなので只もう珍しくて一時間毎位に何回も入りました。大プールは庭前の露天でしたので、雪も相当積つていましたが、湯の温度は熱くて、岩の上から滝の様に熱湯が噴出してきて、それが外気に冷えて丁度よい加

減の温度になるのです。

プールは男女混浴でしたから、女の人も時々僕達の側へ寄つてきます。友人達は女の裸体が近づくのを喜んで、互にけしかけ合つて女の裸をジロ／＼と珍しそうに見ていました。僕は女の人には興味はないので、泳ぎながら女達と離れて、岩の方へ行きました。

それよりも、友人の中の一人が女の裸体にそゝのかされて興奮状態になつてゐるのをす早く見つけ出したのです。僕は思わず顔をそむけました。いや、そむける様な風をしてすっかり見てしまつたのです。何時か、公園で小学校の同窓生を見せて貰つた時と二度目です。

僕は友人達と別れて素裸でプールを飛び出し、部屋の中の浴室へ飛び込もうとしましたが、丁度新婚夫婦らしい男女が浴槽に入つていたので、僕はどうしようかと迷いましたが、そのまゝでは寒いので背中の方を向けながら入つてゆきました。二人の若い男女はちよつと当惑したような顔つきでしたが、直ぐそゝくさと相ついで上つてしまいました。

その夜、友達に誘れて宿の下テラに下駄

をかりて、土産物売店並をひやかしながら、町の裏通りの赤い飾り電燈のついた喫茶店へ入りました。そこは酒場ではありませんでしたが、酒も出すらしく厚化粧の女が五六人、煙草の煙が蒙蒙と立ちこめた薄暗い部屋の中に、佇んでいました。友達達はそれらの女に悪戯をしては、きやツきやツという嬌声を出させて喜んでいました。僕は少しも面白くなく、何んだが独りぼつちの様な淋しい気がしていましたが、暫くの間は友達と同じ様に面白そうに見せかける苦痛を忍ばねばなりませんでした。

だが、僕はもうその辛抱に堪えられなくなり、一番年下の気のいい男を誘つて、旅館へ帰りました。彼と二人で家族風呂へ入りました。白い湯気が狭い部屋一杯にこもつて、ガラス戸には宝石のような水滴がモザイクのように彩つて、それが潰れて次々へ落ちてゆきます。瓢箪のような形の浴槽でした。膨らんだ所へ一人宛入るようになった二人連れ専用の風呂であつたのかも知れません。

僕は彼の背中を「流してやろう」と云つて石鹸の泡を殊更ゆつくりと立てながら、身体の間から隅まで見てしまいました。大

柄ではありませんが、まだ大人になりきつていない子供／＼した所の残つてゐる身体でした。上つてからも僕は彼の身体を拭いてやつたのです。

彼は一向に平氣でした。ちらつと見たところでは彼のシンボルは僕の十六才位の時のようでした。不思議に此の時は興奮しませんでした。知性に富んだ男らしい美少年に憧れてゐた僕だつたからです。

「お前も一人前になつたなア」

と云つてやると、彼は流石に恥しそりに慌てゝ猿又をはいて更衣室を出ていつてしまいました。僕の眼には今さき見た彼の生えかけのが、ちらりと浮んで消えてゆきました。友人達がやつと帰つてきたのは十一時頃でした。然し旅館の中、あちこちの部屋から三味線の音や馬鹿騒ぎのドラ声がい／＼と聞えてまだ宵の口といった様子でした。

僕は抱つて又大プールへ入りました。平素は重労働で真黒になつてゐる手も度々の入浴ですつかり奇麗になつてしまいました。久しぶりの骨休みでのび／＼と湯に浸つてゐると、突然プールに沿つた部屋から外人の男が日本人の女を連れて、声高にわ

けのわからぬ言葉を喋り乍ら湯しぶきを上げて飛び込んで来ました。六尺豊かな大きな裸体は胸から脛へかけて毛むくじやで、茶色の毛が房々と股の方まで続いています。外人の裸体を眼のあたりに眺めたのは生れて初めてでした。

外人は傍若無人に女と戯れあつていましたので、立ち上つた時彼の腰あたり迄か湯がないため、茶色がかつた毛が水面になびいていました。僕は瞬間、眼を走らせて見ました彼のは皮かむりでした。女を抱き上げたり、潜つて足を引つぱつたりして戯れていました。その中、傍のノブールな顔立ちの青年の股間へ悪戯をしかけたので、びつくりして湯から飛び出してしまいました。僕も気味が悪くなつて上りました。部屋へ帰ろうとすると、小さな家族風呂に友人達が五人も入つて、僕にも来い々と手招きします。裸になつて入つてゆきました。長い間ふざけていたのか、湯はすつかり冷えて上ることが出来ません。寒いので小さい浴槽に割り込むと、友人達の生温かい肌がジカに僕の肌に触れて、丁度互いに抱擁しあうような恰好になり、身体中がぞくぞくとして来ました。何んとも云

えない快感が背筋を走るのを覚えました。普段から見たい見たいと思つていた逞ましい同性の裸体に直接触れることが出来たのですから……。

彼等の間に混りながら、僕は自分の性器が一番小さいのじやないかという劣等感に襲われ、寒いのを我慢してぬるい湯から上り、そのまゝ寝床へもぐり込みました。寝床は二人宛、四ツ敷いてありました。僕と一緒に寝るのは、馬場というこのグループで一番上品な青年でした。彼は僕の横へ入ると、五分と経たない中に高いびきで寝入つてしまいました。僕は先刻の外人の事や外人に悪戯をされた美青年の事等が頭の中に浮んで、それを打消そうと焦れば焦るほど、頭がのぼせて眠れませんでした。

仕方がないのでそつと蒲団を出て風呂場へ向いました。着物を脱ごうとすると、後の戸が開いて三好という友人の中の気よい一人で、彼も眠れなかつたのか、一緒に入ろうと云い出したので、「今度は一寸変わった風呂へ入ろうや」と云ふ。

と云ふ隣りの浴室の電燈をつけて戸を開けました。途端に僕はあつと声を挙げました。風呂ではなく畳を敷いた部屋だつた

んです。そこには若い男女が寝ていました。二人は突然の僕の出現に驚いてとび離れました。

「何んだ、人の部屋へ！」

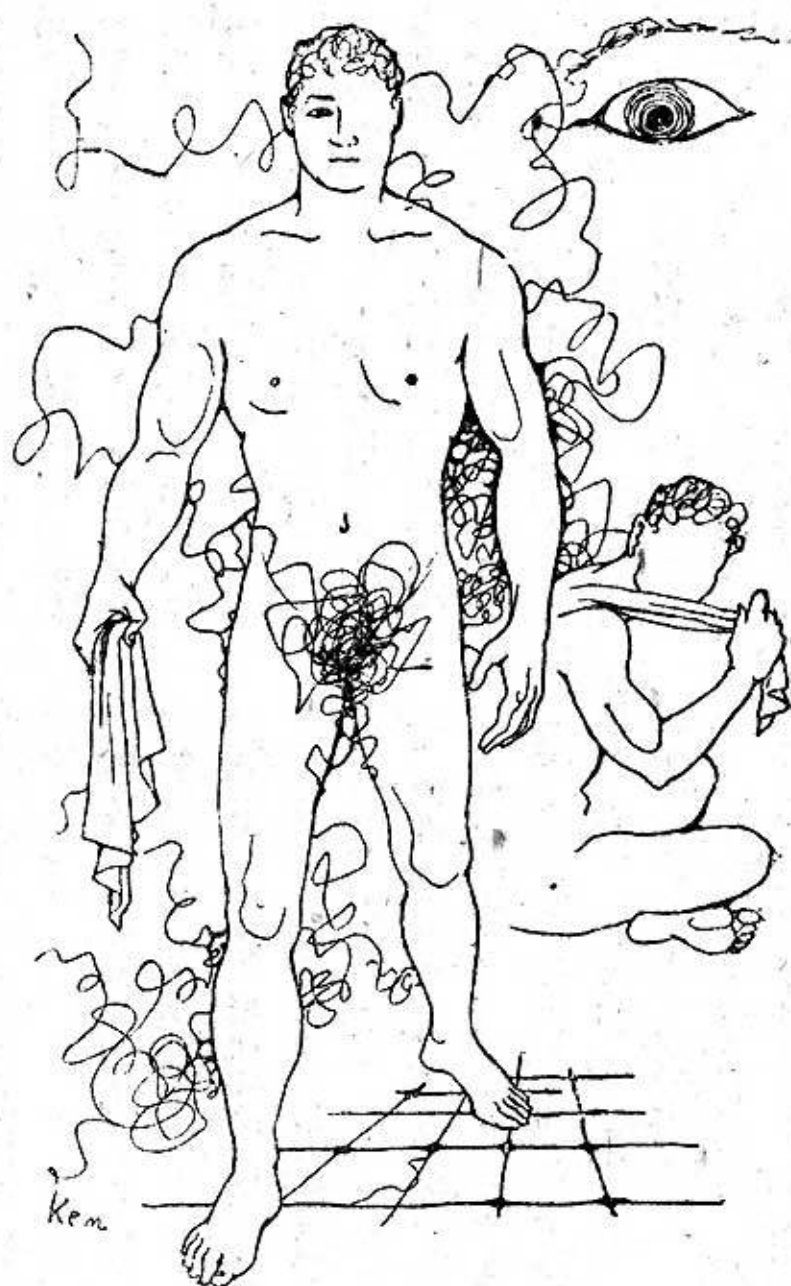
その男は、さつきプールで外人に悪戯されかけた青年ではありませんか。僕は大概に慌て、扉を閉めると電燈のスイッチを押しました。中では女のブツ／＼と云う声が聞えました。外に待つていた三好は、「何かあつたのか、えらい慌てゝいるな」と尋ねましたので、

「違う／＼、此処は風呂と違う、アベックアベック」

と小さな声で耳打ちして、急いで自分の部屋へ引返して寝床へもぐり込みました。あゝ、やはりあの美青年も矢張り好きな女がいたんだ。一人前の男性として……。

僕はかすかな嫉妬をその相手の女に対して覚えました。然し男を愛する宿命を負わされた自分ではあるが、その男には何ら関係のない事ではあるし、まして、その恋人の女に対して嫉妬をするなんて恥しいことだ。なんとかして自分も異性を愛するように努力しなくてはいけない等と考えている中にいつしか寝入つてしまいました。

翌朝、朝食を済ませて、三朝温泉へ向いました。夕方早い目に着いたので三朝の温泉街を見物して歩き、土産物を買いました。夕食後、宿の女中が風呂へ案内して呉れましたが、玉造温泉と比べて三朝は湯が少いので浴場は旅館に一つよりありませんでした。温泉郷には珍しい鉄筋の洋館風の旅館でした。友人達は女中に、色街の話をかけ合いました。一晚千円と心付けだけで泊めて呉れると女中が返事しました。まだ十八九位のぶく／＼肥えたのと、三十五六の中



年の二人の女中でしたが、その女中達自身が淫売婦でもあるかのように、平気で卑猥なことを喋り、身のこなしも下品で色っぽいのです。僕は何かしろ、ぞつと嫌悪を感じました。

「タクシーを頼みましょうか、電話をすれば直ぐ来ますよ」

女中達は猥らな想像を働かして、ゲラ／＼笑い乍ら階段を下りてゆきました。待つ程もなく自動車が参りました。「横付けタクシーに乗るなんて気持のいいもんだ」

中の一人がそう言うのを合図に一同、いそ／＼と立ち上りました。家に居る時は、毎日荒仕事に追われて、タクシーなんて乗った事もない連中ばかりでしたから……。とに角、運転手は心得たもので、何も云わないのに遊廓の方へ運んで呉れました。町の名は確か倉吉と言いました。この町は松竹の新進三国連太郎の出生地だと聞きました。倉吉の大分街はずれだと思えます。がつちりとした奇麗な二階建がずらりと並んでいました。僕は生れて初めて、こんな処へ足を踏み入れたので、胸がドキ／＼と高鳴りました。友人と一緒にでなかつたら、とても一人では此処へ来るだけの元気はありません。

自動車を下りて皆はバラバラと、てんでに格子戸の家へ近づいてゆくのに従ってゆきました。白粉をこつてりと塗った女が出てきて強引に引つ張り込もうとするのを、無理に振り払って、賑やかな町通りへ逃げてきました。一度上りかけた三好も仕方なしに下りてきて僕の後を追ってきました。馬場も勿論、皆と一緒に上っておりますが、僕と三好が出て行つたので、皆を集めて僕の側へ寄つてきました。

「どうしたんだい、上らんのか？」

と云いました。僕は返事に困り、突嗟に「僕は彼女があるから、若し土産（病氣）を貰つては困るから、落さないが先に帰るから君等はゆつくり遊んできてくれ」

と嘘をついて断り、結局三好と二人で、倉吉の町でラッキー・ゲームをして遊び、十時頃旅館へ帰りました。僕が女が恐れることについて、前にこんな事があつたのです。

それは、一ト月程前、神戸駅前の人千代劇場へ芝居を見に行つての帰り、「ちよいと、兄さん！」と夜の女の極り文句で誘われたのです。そこは丁度ガードの陰の薄暗い所で人影ありませんでした。勿論僕は返事もせずに自分の腕にかゝつた女の手を払うと、さつさと行きかけましたが、その女はそんな事位で諦めません。走りかけようとした僕の胸へ両手を廻して抱きついてきたのです。驚いてその手を振りほどこうとすると、忽ち前へ廻つて唇を強要してきたので、無我夢中で押しのけて、駅の方へ駆け出しました。切符買うのも、もどかしくホームへ上つてはつとしました。こんな事があつてから、この種類の女が余計に怖

くてならないのです。

旅館へ帰ると、僕は直ぐ風呂へ行きました。浴槽の中に青年が一人入つておりました。僕が脱衣していると、彼はすつくと、向うむきに立ち上りました。その後姿が大変美しく、彼は自分の身体を伸したり縮めたりして、鏡に写しては、さも恍惚としています。自己愛慕性とかいう人なのでしょいか。背中から臀部にかけての筋肉のむつくり盛り上つているのを見つめている中に僕は思わず興奮してしまいました。広い肩幅、引き緊つた胸、大層色の白い身体の主でした。

僕は暫くうつとりと見つめていましたが意を決して入つてゆきました。シミ一つない彼の臀部が僕の素肌に直接触れました。僕は故意にそれ程に近く寄つて入つたのです。彼は僕が入ると直ぐ上つてしまいました。僕は一人ぼっちになり、彼の青年の裸体を思い浮かべて、自分と一度でも一緒に寝てくれたらと想像を逞ましくする中に、思わずいけない事をしてしまいました。浴槽の中では初めての事です。

温泉旅行から帰ると、子供への土産を持つて親戚の家へ行きました。その途中に大

変美しい少年の住んでいる家があるので、僕は何時もその家の前を通るのが楽しみでした。その少年の家の直ぐ側に工場の寮があり、その前を通る度に、戦争中、徴用工として寮生活をしていた当時の事を思い出すのです。寮生の中に露出狂の男がいて、学校へ通う女の生徒を呼びとめては、自分のシンボルを御披露に及ぶのです。女の子供達はキャツキャツと騒いで相手になつていました。だから今でも其処を通る度にその寮の二階へ目がゆくのです。

温泉へ行つてから風呂へ行くのが唯一の楽しみになりました。或る日、神戸の湊川温泉での事です。脱衣場で服を脱いでいると、見覚えのある青年が湯から上つてきて「やあッ、久し振りだね、此処へ入りにわざわざ来たんだね」

と言葉をかけました。彼は学校時代、海水浴に来て禪を忘れて、僕の家へ手拭を借りて来た事がありました。成績は中以下でしたが紅顔の美少年だったので、僕は是非彼の裸体を見たいと思つていたので、その機会がなかつたのです。それが何年か後の現在一条纏わぬ姿で僕の前に立つていたので、彼の広い胸から下へかけて足の

爪先まで僕は見るともなしに見てしまつたのです。僕は彼との話も浮の空で、嘗めるように彼の裸体に眼を注ぎました。彼は落着いて、ゆつくり衣服をつけると、「さようなら」と快活に笑顔を見せて帰つてゆきました。

浴槽には、丁度思春期の少年が沢山入つていて、僕の胸をワク／＼させました。僕がこの時間を選んで湊川温泉迄わざ／＼足を伸ばす理由もここにゐるのです。まだ少年時代の天真爛漫を失わず、恥しがりもせず子供から大人への過渡期の特徴を如実に肉体上に表しながら、水をかけ合つたり洗い合つたりしているのを、僕は浴槽のふちに腰かけて、それとなく、じつと見つめていました。

女の子の裸体を見ても不思議に少しも欲情が起らないのに、何故この様に僕は同性の裸体を見たいのでしうか、然し、今迄僕は人から変な眼で見られた事は一回もありませんでした。それは極く自然を装つていたからです。同性同志という事が大変こんな際都合がよかつたのです。

タイルの上で石鹼を身体中に塗つてゐると丁度向い合つた所に色の浅黒い僕よりも

大分年上のガツチリとした体格の青年が、頭髮から顔にかけて石鹼の泡を盛んに立てゝ洗つてゐるので、僕はもう自分の体を洗うのも忘れて、じつと彼の下腹部に石鹼の白い水が流れてゆく様を眺めていました。やがて洗い終つて手さぐりで湯桶を探してゐると、さつきから僕の隣りで寝そべつて僕の体に眼を注いだいた男が、

「これを使いなさい」

と自分の手拭を入れていた桶を貸してくれましたので「有難う」と礼を云つて、身体を石鹼を流してゐると、その男の手があぐらをかいた足に無理に当つてきました。僕が足をすくめると、今度は左手が太腿部に伸びてくるのです。僕は思わず股間を手拭で掩つてずつと後ずさりして湯をかゝると慌てゝ浴槽へ飛び込みました。白い艶のある肌の四十過ぎの中年男でしたが、頭髮は頭の頂が少し禿げてその廻りも薄くなつていました。赤ら顔でつぶりと肥つた重役タイプといった風でした。

僕はその男の頭髮を見て一ぺんに嫌氣がさしました。潑刺とした青年であれば、相手が積極的に行動するようであれば相手になつてもいいと思つていたのですが、少し

とはいへ禿げているのを見て、うんざりしてしまいました。彼は僕の後を追つて浴槽へ入ると言葉をかけてきました。

「にいちやん。風呂を上つてから一緒に映画でも見ないかい？」

そして、やつぱり手は僕の股間へと伸びて来るのです。

「いゝえ結構です。さつきは桶を有難う」
そう答えて慌てゝ上りました。上り口で身体を拭いてゐると、その男も引續いて上つてきました。愈々氣味が悪くなつて、拭くのもそこそこに外へ出ました。男性に愛されたいという立場の男なら、いゝでしうが、僕の方は、自分から積極的に出たいのですから——そのくせ、男娼に対しては一向に興味を持たないのです。

足早やに新開地の本通りの方へ行くと相生座へ入りました。眼がまだ闇に慣れず、まごまごしてゐると、横から不意に

「神戸の映画館は幾つ位あるのですか？」

と話しかけてきた男があつた。僕はさつきの男ではないかと、どき／＼としました。まだ若い男で、どうやら神戸は始めてらしい様子で、言葉も少々訛があるのです。

「さあ、新開地だけでも、公園からガード

下迄、十二三はあるでせよう」

「随分あるんですね」

「然し、僕は新開地や三宮なんて、あまり来ませんので、よく知りませんが……」

「そうですか、僕も始めてなんです。まああがりませんか？」

なんだ、此の男は初対面なのに心易くしやがるなと思いましたが、眼の前に彼の手が伸びて南京豆の袋が乗っていました。僕は「いゝんです」と答えて、知らん顔をして居たが、その男はスクリーンの方は一向に見ずに僕の顔ばかりを見つめているのです。彼の鋭い視線をシーンと感じながら、チラチラと観察したところによると、色の黒い目ふちに隈の出来た、ドングリ目玉の男でした。

僕は嫌になつて、座席を探して坐り一通り観ると、外へ出ました。

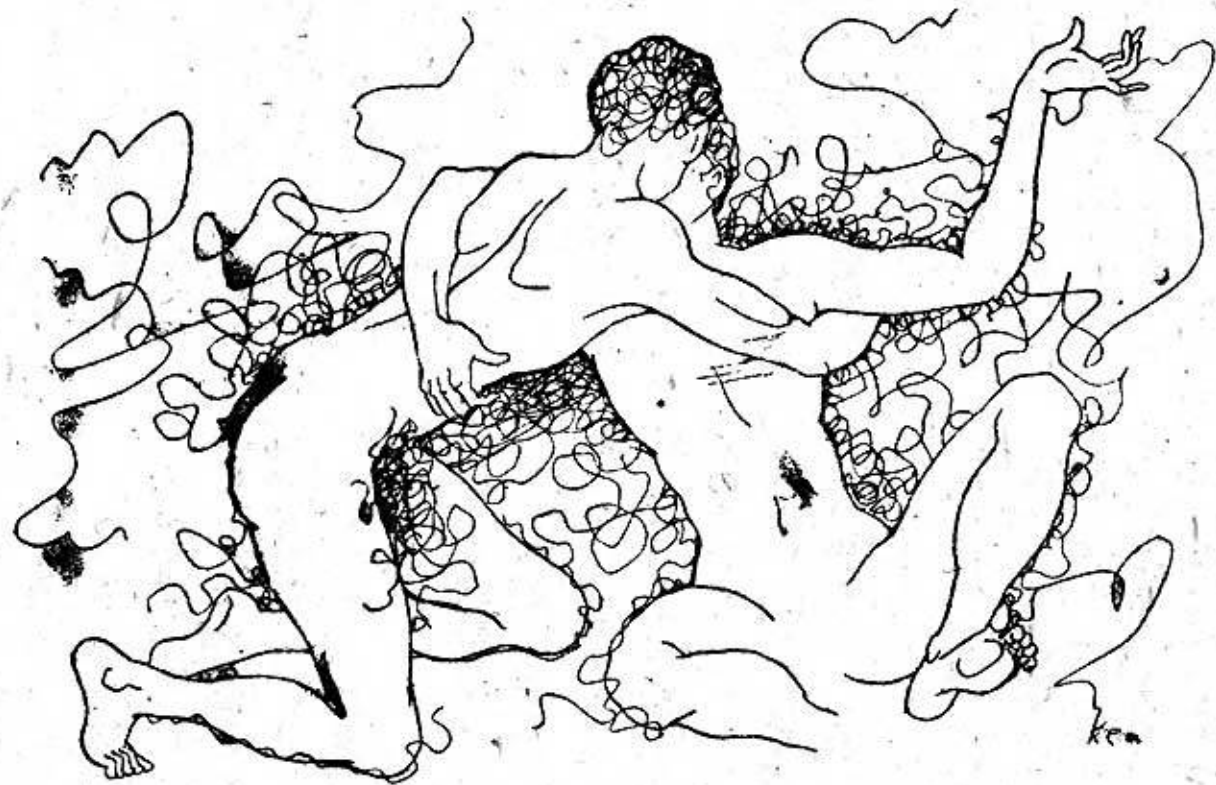
その年の七月、僕は又叔父の家へ田の草取りを手伝いに行きました。夏の事ですから叔父の子供と一緒によく池へ泳ぎにゆきました。誰も来ない山の中の事ですから、二人共何も纏わず全裸で泳ぎ廻りました。随の上に跨つて一休憩する彼の裸体を太陽光線の下でつくずくと眺めました。今丁度

背丈が伸びる時期なのかほつそりとして、肌は白く滑らかでした。

泳ぎ疲れて岸へ上ろうとしていると、彼の友人達が三人裸のまゝで、ざぶ／＼と池の中へ入つて来ました。一番身体の大い

少年は流石に手拭で前を当てゝいました。が他の二人は素裸のまゝでした。三人は僕がいるのに気づくと、直ぐ上つてしまいました。その時、チラリと見た彼等の秘密の場所……。

何故僕はこう、男の、しかも裸体にばかり興味があるんだらう。馬鹿な奴だ、と自分で自分を叱るですが、こういつた気持は直りそうにもありません。積極的に女に接近するよう



に努力すれば治るんだらうかと心掛けた事がありました。然し異性に対しては全然感興が湧いて来ないのです。それかといつて相互手淫とか、吸茎とか、鶏姦とか、素股といった事は一度だつてした事はないのです。

僕は少年を呼び寄せる、五人で沈め合いをして戯れました。少年の肌にさえ触れる事の出来なかつた僕なのに、彼等の裸体を思いきり抱いて沈め、又故意に彼等の手によつて足や腕を引張られて沈められました。今迄にない愉快な一日でした。

こういつた僕の美少年に対する憧憬は益々強くなり空想は果しない大空のように拡がつ

てゆくのです。美少年を愛撫している光景を夢に描いて一人寝の淋しさをかこつ僕でした。白蟻のようないや、男性的なりきつと肉の緊つた肌に接吻して、そしてすべすべとした少年の全身を背中から尻へ、尻から肖へと撫で廻し、舌で体中隈なく舐め廻し、そして四つ這いにさせて……。

遂には手足を縛り上げて、美しい肉体を責め虐んで、苦痛感にのたうつ美少年の肌にミミズ張れになるまで鞭うつのです。此処で僕は現実に戻えつて、自分の裸体の肩から下も鏡に映して、相手の男を想像して自ら慰めるのです。

商売女に言い寄られてさえ逃げ出す僕です。意中の美少年であつても、誘惑するだけの気力もなく、独りで慰めていなければ仕方がなかつたのです。だから奇譚クラブとか、あまとりあ、人間探検とかいつた同性愛の悩みを訴える記事のある雑誌を読むのが楽しみでした。中でも奇譚クラブの「男色天国繁昌記」や、「こんな男に誰がした」「囚人男色記」の記事は何度となく繰返して読みました。男性の裸体の挿絵や、ギリシャの男身裸像の写真等は好きなものの一つでした。

年頃になつていくうちに、どうしても女房を持ちたいと思わない悲しい男性になつてしまいました。街へ出て浮浪児でも拾つてと思いましたが、それも只空想だけで現実には僕の理性が許さないので。それに経済的に恵まれない労働者である僕には、その外に取りたてゝ慾望を満足させる手段もありません。進んで僕の意を受けいれてくれる少年があればと思うのですが、これも儚ない僕の望みでしかありません。

僕の友人にも、どうやら男色に興味を持つ青年がいるのですが、顔は一面のニキビ面でもとても嫌な感じの男なのです。僕はこんな男には興味がないので、何も打明けておりません。前にも申しましたように、男娼的な男にはぞつとする嫌悪の印象しか残りません。或る日、知人宅へ用で行きますと、五十才位（実際はもつと若く見えましたが）のなよなよと女の様な歩き方をする男の人が、知人と話していました。

「ネエ、ちよいと、そんな事ないわよ」とか「あのう、うち好きやし」とか「あら、男前ですわネエ」とまるで、アクセントもゼスチュアも女そつくりなのです。僕は怖気にくるつて逃げて帰りました。そ

の日は一日中嫌な気持ちでした。

現在も僕は銭湯へ行くのを大きな楽しみの一つとしております。先日も青味がかった肌の背の高い青年が僕の先に入つていました。僕はその肉付きを見て一べんで好きになり、初めから終いまで、ずつとその青年に注目していました。湯から上るのも一緒でした。上り場のマットの上に立つた足を見ました。長い目の指が奇麗に揃つて、毛の少ないすべ／＼とした脛でした。彼は大鏡の前に全裸の自分の姿を映した、横向きになつたり前向きになつたりして満足したような顔付きで眺めていました。

背後から抱きつきたいような身体つきでした。僕はうつとりと眺めていました。やがて顧つた彼とガツチリ視線が合いました。彼は恥しそりに横へ視線をそらすと、慌てゝパンツをはいてしまいました。僕が下駄をはいていると「すみません」と一寸会釈して僕の前を通つて出て行つてしまいました。彼の後姿を見えなくなる迄見送つて思わず溜息が出ました。でも一言でも彼の言葉を聞いたのが、幾分僕の心に満足を与えてくれました。

（未完）

—源氏物語に於ける—

光源氏の性的生活

畑 村 連 治



◇醜婦末摘花の深情

末摘花は、源氏の恋愛生活に現れて来る女の中でも一番醜女であつた。

源氏は末摘花と性慾生活を結ぶまで、その容貌を知らなかつた。源氏は末摘花の歌を知つた時に、今まで見て居た美しい夢が、幻のように消えて行くのを知つたけれども、悪女の深情という、ある面白味を忘れることは出来なかつた。今更捨てるということも出来なくなつたのである。

末摘花と源氏とは、どうして知合になつたかという、帝に仕えていた大輔の命婦という女房が、源氏を殊に親しくしていたので、つれづれの折に自分がよく出入りする。故に常隆宮の姫君の噂をして聞かせた。内気な女で、琴の名手だと云つた。源氏から容貌のことを聞かれて——物越しにお目にかゝつただけでと云つた。

その実、常隆宮の姫末摘花が、世に珍らしい醜婦であることを知つて居たが、それは

故意に口に出さず、源氏の好奇心をそゝるうちに末摘花の話をするのであつた。

常隆宮の遺族が零落して居ると聞いた源氏は、そんな家の嬢なら、案外に、心易く、そして面白いかも知れないと思つて、命婦に案内させた。

それは美しい月の夜のことで、源氏は余所ながら末摘花の弾ずる琴の音をしんみりとした氣持で聞き惚れて居た。

源氏が末摘花の家を出ようとすると、一人の男が佇んで居た。その男は頭の中將であつた。

それから、源氏と頭の中將とは、競争する氣で末摘花へ文を送りはじめた。源氏は頭の中將などに敗北すると自分の估券に關すると思つて、負けぬ氣になつて文を書くのであつた。八月も末に近かい月の夜のことであつた。大輔の命婦は源氏を案内した。末摘花は異性から文を貰つて嬉しくてならなかつたが、自分の容貌が醜いので氣が引けて、度々の文も返事をしないで居た。

源氏は初めは、几帳越しに末摘花と話をし居た、そして、ただの対面のように見せかけて居たが、物越しに居る懂がれの女の声を聞くと、もう、じつとしては居れなくなつて

そつと、几帳の中へ入つてしまつた。

命婦はそれを見て、はつとした。源氏がどんなに好色であつても、末摘花のような女では永続きはしまい、あさはかなことをして、末摘花に嘆をかけはしまいかとそれを心に憂いて居た。

几帳に入つて行つた源氏は、末摘花が自分の想像して居た女とは、まるで違つていたので失望してしまつたが、それとて逃げかえるような薄情なことは出来なかつた。

源氏は帰る途すがら自分の想像に反して、いた女の容貌が失望された。そして、あんな女のために頭の中將とまで競争したこと馬鹿くしさを、苦笑せずには居れなかつた。

けれど、源氏は醜い女にはまた変つた味があると思つて、末摘花に何にかの発見はありますまいかと通うて見た。

冬の夜のこと、源氏は珍らしく、その家で一夜を明そうと思つて、自身で格子を上げて前栽の雪景色を眺めた。雪の光りにも、荒れ果てた家の有様が偲ばれた。あの怖しかった夕顔が急死した。——河原の院のように荒して居た。

源氏は末摘花を呼んだ。けれども末摘花は自分の顔を源氏に見られるのが嫌であつたし

また、そのために捨てられはしまいかと思ふ懸念もあつたので恥かしがるようにして躊躇して居ると、老女が強いてそののかすので、末摘花はようやく起き上つた。

源氏は今夜こそはつきりと末摘花の顔を見てやろうと思つて居た。けれどもともに顔を見ることは出来ないで、横目でそつと見た。

背が高過ぎるほどなのに源氏は驚いてしまつた。それから、鼻が象の鼻のように長くて尖端が少し赤味を帯びて居た。色は雪の光りのためでもあつたが青白いほどで、額が出て居た。

着物などは何れも昔のもので、流行とはかなり、かけ離れて居た。黒貂の表衣の上着などを着て居るのを見ると、若い女に、今時こんな着物を着て居るこの一家の貧しさに涙がこぼれて来た。

末摘花は何時もうち臥して細い声で話をしていた——そんなことから、源氏はこの女が何だか哀れになつて来た。捨て、しまふのが罪深いことのように思われて、源氏は、常陸宮一家の者に、着物ばかりでなく、日用品まで買つてやつたりした。

源氏のこうした心ずくしは、末摘花には忘

れることが出来ないほど嬉しかつた。末摘花が源氏を恋する情は日に／＼深くなつて行くばかりであつた。

「如何かは存じましたなれど、お目にかければならぬと思ひまして」と云つて、命婦が源氏の許に末摘花からの贈物をもつて来たからごろも君がころのつらければ

袂はかくぞそほぢつゝのみ
という歌も添えてあつた。それは末摘花から源氏の元日の着料にというのであつた。

その贈物は流行に遅れた極めて粗末なもので、とても、源氏などが身につけるようなものではなかつた。

源氏は末摘花のおろかな心に苦笑せずには居れなかつた。そして命婦に

なつかしの色ともなりになに／＼この

すゑつむ花を袖に触れけむ

と末摘花に対する自分の感情を洩した。

源氏は自分の分際も知らず、恋に惑溺して浅墓なことをする女の愚かしさを知つて、もう末摘花が嫌になつて来た。

末摘花が、じつとして居さえすれば、源氏は何処までも憐れみをかけて行き度いと思つたが、恋に足りて、あまりに無智なことをする女の心もちが嫌になつて来た。

◇舞姿美しき源氏と藤壺の心理

朱雀院帝の行幸が神無月の十日にあるといふので、前々から音楽や舞などの稽古に、宮仕えする人々の家では騒いで居たが、帝は女御などには、華やかな舞樂が見られないので宮中でその試樂を催される事になった。

源氏は青海波を舞つた。相手は頭の中將であつたが、源氏の様子は、きわ立つて美しく見えた。誰にも、源氏の美しさを、讃めぬ者はなかつた。ただ弘徽殿だけは「神がくしなどに逢うべき容姿である、あゝ忌わしい」と源氏の産みの母、桐壺の更衣への嫉妬は、今は源氏の身にふりかゝつて来るのであつた。源氏は今日の自分の舞に就いて、藤壺はどう思つて居られるかと思つて文を送つた。物思ふに立ち舞うべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや

あなかしこ——

とあつた。藤壺はその歌を見て、どうしても返事を書かずには居られなかつた。からひとの袖ふることは遠けれど立居につけてあわれとは見き

左方には——

と書いてやつた。

藤壺の妊娠が三月であるから、十二月が分娩の時だと宮中では待つて居たが、その氣配が無かつた。そうするうちに、年も改つてしまつたので、何かの祟りではないかと噂し合つて居た。

二月になつて産があつた。美しい皇子であつた。

源氏はその消息を聞いて、人目を忍ぶようにして藤壺の許を訪れた。

「帝も何かと心配なされて居る御様子であるから、皇子にお目にかゝつて、その赴きを申し上げたいから」と云つた。それは源氏の口実に過ぎなかつた。けれども藤壺は源氏に逢わせなかつた。

皇子は源氏そのまゝの姿をして居たので、この事が露見するようなことがあればというて、どうしても逢わせる氣にならなかつた。

源氏は失望して

いかさまに昔むすべるちぎりにて

この世にかゝるなかのへだてぞ

と云うと、命婦は源氏の心が哀れに思う様になつて

見ても思が見ぬはたいかなげくらむこの世の人の惑ふて不圖と涙ぐんで居た。

四月になつて、皇子は宮中に参上した。帝は深く寵愛なされた。源氏が折よく参内したときに、帝は源氏に向つて

「子供はおゝぜいあつたけれど、こうして子供の時から見て居たのは、そなただけであつた。その故か何だかこの子は、そなたに似て居るように思われる小さい時には、皆、同じように見えるのだらう」と仰せられた

源氏はその言葉を聞いて、空怖しいような忝けないような、うれしいような心持が胸に起つて来てはては、涙ぐましい心持になつた

◇老婆に戀す源氏の好奇心

源氏の恋愛生活も深刻になつて行つた。美しい女若い女を追おうとする輕薄さはぬけて行つて、末摘花のような女に興味をもつばかりでなく、その好奇心は祖母のような六十に近い源内侍に向つて行つた。

源内侍は古くから宮廷に仕えて、帝のつとめを承つて居た。人柄もよく、人に重ぜられて居る女であつたが、恋の道には輕卒な女であつた。

源氏はその内侍に眼をつけた。そして、老女は、性的にきつと興味あるに違いないと源氏は信じて居た。

源氏と情交を結ぶようになった内侍は、源氏に棄てられることを怖れたと見えて、急に若作りするようになった。六十に近い女のそうした心の動揺は帝にはすぐ見えて、帝は不快な顔をして居られた。

源氏が源内侍と情交を結んで居るといふことは誰にも気づかれなかつた。こんな老女にまではと誰でも思つて居たらしかつた。

源内侍は色情狂のような女であつた——あまりに強い執着心に源氏は内侍をうとましく

思うようになる、秋風が立ちそめたのを知つて、内侍は源氏の顔さえ見ると、恨みごとを並べたりした。

源氏は老女の性的衝動にある興味をもつたけれども枯淡しきつた老女の肉体は、若々しい源氏を魅するに力が足りなかつた。今夜は通つて見たいとの氣まぐれな心も起つて来たが、いざとなると、懶くて内侍の許に行く氣などは起つて来なかつた。

源内侍には昔、修理太夫という情人があつ

◆浮世三文経◆

青蛙 太郎

◎ 倒錯心理

ピカソ、マチスが芸術で
チャタレー夫人が文学なら
便所の落書きも芸術。

◎ 新装ビース

あちら仕込みの新意匠で
役人商法うまいけど
中味はちつともうまくない

◎ あぶれ長者

お山で当てたお大尽
稼ぎの秘訣をたずねたら
あとは野となれ山となれ。

◎ 耐火住居

戦と火事で二度焼かれ
墮ちて土管のわび住居
これで焼かれる憂なし。

◎ 人口調節

バスに妊婦を詰め込んで
凸凹道を飛ばしたら
コントロールになるだろう

◎ 全面降服

電気が騰り瓦斯あがり
お台所は火の車
とうとう女房も音をあげた

たことを源氏は知つて居た。ある時、内侍が源氏に恨みごとを並べたときに源氏は「他に恋人のあるそなたに關係してゐると、どのような面倒が起ろうとも計られぬ故に余り親しくはせぬつもりである」

頭の中將はその道の達人であつただけに、源氏と源内侍の間に情交のあることを、早くも嗅ぎつけて居た。

源氏が人の前で、自分の浮気を攻撃してその裏面では女を慥えて、内々通うて行くのを忌々しく思つて居たので、頭の中將は、源氏の鼻を挫いてやるために、源氏が通うてゐる時に、押しかけて、内侍などをおいかけては楽しんだりした。

源氏の恋愛生活は、頭の中將という競争者があつて、張合いがあつた。そのために、いろ／＼な女に關係して、相手に誇つて見たい虚栄心もあつた。

けれど、頭の中將は、何時も源氏に後れをとつて居た。

それには、源氏が女を誘惑するには、唯一の武器ともいふべき、優れた容貌をもつて居たからであつた。

善男を騒がれて居る頭の中將も、源氏と並べると光りが消えたような見劣りがあつた。

変態コレクトマニア

庄 司 浩 平

(第一話)

先ず手はじめは近所のキャバレーの女の持ち物だつた。或る秋の朝、見るともなく窓越しに隣家の物干し合に眼をやると、爽涼の秋空にへんぽんと飄つてゐるのは日の丸ならぬそれはいともなまめかしいピンク色の布片であつた。

「おやつ」

この色彩に平助は確かに見おぼえがあつた。女給の八重子の身につけているものに相違なかつた。

彼女が小走りに使いなどに行くとき、或はまた店頭などで酔客をあしらつて居るとき、そのたんびに裾の下でちらちらしていたものでそれが平助の頭に忘れ難い印象をあたえていたのである。見つめてゐるうちに持ち前の

彼、特有の慾望がむくむくと五体からたぎり立つてきた。彼の全身は妙にくすぐつたいようなしびれを感じた。そして無意識のうちに窓から半身を乗り出してゐた。彼は注意深くあたりを見廻した。正午にならなければ商売にならないこの界限だから、もちろん人影は見えない。隣家といつても同ど軒並みであるから我が家同然である。屋根に降り立ちながらもう一度あたりを眺め、物干し合に飛び上ると、右手を素早く延ばし、電光石火の早業でそのピンク色の布をたぐり寄せた。やわらかい感触がぐつと全身に迫つた。

「八重ちゃん、すんまへんな」

そう念じながら夢中で部屋に戻るときすがにほつとした。まるで百里の道を一気に走つたよるな動悸を覚え、じつとりと汗ばんでさえた。彼は鬼の首でも獲たようにその布片



を恭々しく捧げ持つていたがやがて感きわまつて、いきなり、ズボン、下着を脱ぎ捨てた。そしてそのピンクの布を肌につたりとまといつけるのである。このときの彼の面上には神々しいまでに満悦の気色が溢れていた。彼は昂奮のあまり、立つたり座つたり、身をくねらせたりして心ゆくまでその感触を味わつ

ていた。

平助は生来の変態性慾者でそのため家族親類知人にも敬遠され、したがって定職もなくまたその性質上、妻を迎えることも出来ず三十九才の今日、尙独身なのである。これ迄にも偶発的に便所や銭湯を覗き見したりしてはかない慾望を満たしていたのであるが、図らずも八重子の太刀ならぬ腰のものを手に入れたからは彼の全身全霊が専らそのことにのみ集注して他の面にはさつぱり興味が持てなくなつた。

史上、伝えるところによると、洋の東西を問はず昔から平助型の男も数多く存在していた中には悲願千枚集とか百枚集とかの猛者連の記録も遺つていようであるが、平助自身としてはそのように何十、何百というような大それた望みは持つていない。が然し、せめて十枚位いは獲得したいと念願していた。

(第二話)

第一回が成功してから平助は終日、部屋に寝転びながら沈思熟考、おもむろに第二、第三の策戦を練つた。さまざまの女の幻影が彼の頭脳リストに浮かび上つてくる。口が少し広いが眼に愛嬌のある置屋の年増芸妓、ちと

かび臭いけれどもお臀に魅力のある戦争未亡人、眼もとの涼しい堅肥りの課長夫人、丸顔でお乳の椀のように盛り上つた質屋の娘等々いずれも彼の近隣に住む光榮ある候補者達である。終日終夜、虎視眈々としてチャンスを探るのであるが、これらの候補者は要害堅固キャバレ一の女のような好機がなく、今や尋常の手段では、ちよつと手がつけられない工合である。

処がこゝに果報は寝て待てのたとえ通り、全く奇蹟的に絶好のチャンスが訪れてきた。その年の暮も押しつまつた或る日の夜明けがた、四、五軒先の飲食店から火が出て、折からの木枯しに煽られ一時火勢猛烈をきわめ類焼の惧れが充分にあつた。平助は生命より大切な例のピンクの布を急いで身にまとい、しかと紐をしめつけ表へ飛び出た。風しにも当つて西隣の質屋では商品の搬出に血眼になつて居り、中でも吝で通つて主婦は半ば半狂乱の状態で平助の姿を見付けると、大声で応援を求めた。この時、或る計画が稲妻のように平助の脳裡をかすめた。

得たりや応とばかり、平助は逸る心を抑えて隣家へ飛び込んだ。当るを幸い矢つぎばやに品物を表道路に放り出し、こゝを先途と立

ち働くさまは、真に華々しき活躍振りだつた。そうした働らきの中にも彼の特殊意識が敏感に作用した。彼は狂奔する人々の眼を逃れて奥の室に浸入した。娘の寢室であつた。途端に彼は

「あつ」

と感激に満ち満ちたうめき声をはつし、勇氣百倍、欣喜雀躍した。火事ツと云う叫び声に曉の夢を破られた娘は、周章狼狽おそらく着のみ着のまま飛び出したに相違ない。都屋の有様を見れば一目瞭然である。おゝ真紅の腰巻、緋の長襦袢、そのうえズロースまで散乱しているのである。

「ははっ」

再び平助は、感きわまつた叫びをあげた。平常ならば絶対、立入ることの出来ないこの禁園、しかもこの価値高き逸品のかずかず！突発事件に際してのみ得られる一大特典を天与の賜と喜び且つ感謝感激した。

人々の声は間近であつた。名残りが惜しいがそうはして居られぬ火急の場合である。彼は得意の早業で他の物には目もくれず、その貴重な三個の品を懷中にねじ込むと、裏庭へ廻り、板べいを這い上つて、ぼんと屋根へ飛び上つた。部屋に戻ると急いでその逸品を行

季の底へ仕舞い込み、再び何喰わぬ顔付きで元へ引き返し

「だいぶ下火になりましたぜ、こりやもう大丈夫だす」

など、言いながら勇氣百倍、以前に優る活躍振りには雄々しくもまた頼母しき限りであつた。火は質屋の隣り迄きて危く鎮火した。

その日の午後、平助は今日の戦利品を永久に記念すべく、その要項を丹念にメモしていった。ところへ階下でがらりと戸の開く音がして

「けさ程はまあ、大へんなお世話をおかけ致しまして……」

と、質屋の主婦の声がひびいてきた。余程有難かつたと見えて菓子折にくぼくかの金を添え、この人に似合わぬ過分の礼を持つてきた。わてはそんな菓子や金には全然、魅力おまへん、先刻、けつこうな物、たと頂戴しとりますさかい、心にそうつぶやきながらも

「何の、ねつからお役に立ちませんで、けどまあ奥さん、大事にならんうちに消えまして結構だったなあ」

と、そこは如才なく愛想笑いを返した。部屋に戻ると彼は徐ろに三個の逸品を取り

出し、あらためて恭々しく鑑賞するのである手に取つて熟視すること暫し、はては抱擁しそして肌にとろろ。世間の普通人ども、笑わば笑え、そしらは誹れ、酒もたばこもくそくらえ、わてはこれが唯一無二のたのしみだす平助は彼独得の法悦境にひたりながらこの天与の珍宝逸品に対して今更ながら感謝感激し三拝九拝するのである。

(第三話)

年がかわつて三月末の或日、朝から沈丁花のむせるような香がいちめんに漂うている頃である。その濃厚な香りにひたると、木石ならぬ平助の体内にも何となく春情勃々たるものを覚えるのである。その日、平助は日傭労働者として街路の清掃に当つていた。如何に酒食などに魅力がない彼とても人の子であるからには金も要る訳である。手許が不如意になれば専ら日傭労働者として小遣錢にありつくのである。これは仕事も割合にらくで彼のような、なまくら者にはうつつつけの職業である。もとより衣食嗜好品などに金のかゝらぬ至つて経済的に出来ている男のことであるからさして出費は嵩まぬ。この程度の日当で結構生計が立つていくのである。

さて怠け放題の一日の務を終え、今や帰途につこうとした時、つと眼の前を通り過ぎたのはかねてよりの候補者の一人、課長夫人である。歳頃は先ず三十七、八、眼元にはえもいわれぬ可憐さがあつてこれが近所の評判である。平助はその眼よりも爛熟期の女の堅くしまつた逞ましい肉体に惹かれていた。後からかいま見る腰のうねりなど、中年男を悩殺せずにはおかぬ魔力が藏されていた。黒味がかつたこうとな着物の裾が折柄のそよ風にばつと捌けて着物とは反対にこれはまた歳より派手な長襦袢が妖しく赤く舞い、そして尙その下の白い布までちらりとそのぞく情景を眺めると、平助はもう耐え切れなかつた。以前から心惹かれる想いはあつたが、それは只それだけのものではしなかつたのである。ところが八重子や質屋の娘の光子の一件が生じてから後は、こゝに新なる活路が眼前に開けてきたのである。平助はいま、課長夫人を悲願第三号の候補に自薦したのである。

平助はそのまま夫人の後をつけはじめた。見れば見る程、その身体には娘に見られないうま味が溢れていた。あの奥様の下着が手に入ることが出来れば今こゝで死んでも何ら悔が残らないと思つた。もとより確信はなかつ

たけれども只、馮かれたものゝように夫人の影を追つて行つた。やがて夫人は自宅の玄関へ消えた。平助は露路から裏へ廻つて見た。賑やかな子供の声に交つて夫人のおつとりとした品のある話し声が伝わってきた。そのうち主人も帰宅するだろう。

「まあ帰つてからじっくり考えよう」

まだ冷たい夜気に始めて我に帰つた平助は引返した。流石に侵入するだけの度胸はなかつた。もともと平助は悪意のある男でなく、むしろお人好しで親切な男である。止むに止まれぬ何とやらで図らずも八重子の腰のものを失敬し、また突発事件発生之余波で光子の逸品を頂戴に及んだが、これとても内心、良心の苛責に攻め悩まされているのである。

やるせない思いを胸に抱きながら部屋に戻つたが、心のウツが容易に除かれそうにもない。頭をかゝえて座つていたがやがて、にんまりと笑みを泛べると起ち上つて例の行李を開けた。取り出したのは質屋の娘、光子の下着類である。急いでズボン、猿又を脱ぎ捨てそして代りに真紅の腰巻を身にまとい、それからその上に同じく光子の緋の長襦袢を着込み、いとも満足気に蒲団の中にもぐり込んだ。

翌日から彼は眼を皿のようにして夫人の家の周囲を彷徨つた。こうなると仕事も金もてんで問題ではなかつた。成功するかも知れないぞ、いやきつと手に入れて見せる、そんな予感がした。身につけている以上、必らず洗濯するに違いない。そうすれば八重子の場合に倣つて実行にうつそう。判りきつたことが今、やつと憶い出されて平助は武者振いした。彼のような徹底した変質男は洗濯したきれいなものよりは、出来得る限りよごれめのあつる品の方が非常に有難いのであるが今の場合そんなぜいたくは言えない。その点、あの光子の場合は本当に有難かつた。脱ぎすてたばかりの、まだねつとりとした娘の体臭の沁みについている、またと得難い代物が手に入つたのであるから彼はその時の火事に対して満腔の感謝を捧げているのである。彼の熱望するような香り高き珍品を手に入れようと思えば勢い屋内侵入の非常手段に訴えねばならぬ。だがそれは先にも言つた通り平助のような温順な男には到底実行出来ないことである。結局八重子の場合と同じような洗濯物を一寸失敬ということに落着くのである。

そのチャンスが意外に早く三日目に到来した。平助の渴望してやまない懐かしい紐つき

の白布が、どんよりとした空の下、裏庭の目立たぬ片隅に垂れさがつていた。光子や八重子の物と違つてこの場合、色つきの物より白布の方が却て魅力があつた。あれから三日目あの朝、着換えたとしても正味四日である。これによつてあの奥様の下着を身につけている期間が最少限度四日であることが推察されるのである。或は予想外に無精で、五日か六日か、それとも一週間以上かも知れない。肌に着けている期間が長ければ長い程、平助にとつては崇拝価値が高まるのであるが、洗濯など余計なことをして価値を下落さすものと、彼は特有の論法を頭に描いていた。

「いや、これで結構、ぜいたくは禁物」

平助は板べいの隙間から邸内を窺つた。赤い芽の出た芍薬の傍に三毛猫がしゃがんでいてだけで人の気配が感ぜられなかつた。主人は出勤、子供は学校で不在は確実、さて奥様は、まさか朝から買物でもあるまい、がしかし、猫の呼吸が聞きとれる程、しんと静まりかえつてゐる。まさに好機、躊躇逡巡はとらぬところ、兵は拙速をたつとぶ、妙な処へ復古調を出して平助は攻勢にうつつた。

あたりを見廻し、念のため御免下さいと大声をはり上げ、反応のないのを確かめると、

ひらりと板べいを乗り越え、目標の白布目掛けて突進した。三毛は不意の闖入者に驚いて屋根にかけ上った。縁に足を掛けようとした瞬間、がたりと廁の戸があいて夫人が眼の前に現われた。

「あつ」

夫人はかすかな声を洩らしながら驚きの色を見せて棒立ちになつたまゝである。南無三しまつた、だが平助は突進に予定していたことを憶い出し、狼狽振りをさつと隠して立ち直つた。そして元陸軍兵長の態よろしく、さながら上官に対するように直立不動の姿勢をとつた。

「おや、あんたでしたの」

平助を知つていたと見えて案外おだやかに声をかけた。やゝ古風なおつとりとした爪実顔であるが、このような涼しい眼元で、しまりのある肉付の人に滅多に険しい人は居ないと、かねてより平助が予想していた通りであつた。そのような夫人の優しい態度に力を得て平助は悠々心の冷靜を取

り戻し

「奥様、裏庭から訪問したりしてまことに恐縮です、一寸、こみいつた事情がありましたものですから」

彼は大阪弁を使用せずとつておきの用語に出来るだけ誠意をこめるようにして言つた。

後から気が付いたのであるが裏庭の西に小さなくぐり戸のあつた事と、縁に足を掛けて居なかつたことがこの際、何よりも幸いであつた。夫人は疑つて居なかつた。そして平助の言葉に好意さえ見せて

「それはどんなことでしょうか」

と、言つてそれから



「まあ、そこへお掛けになつて」

直立不動の平助を氣の毒に思つてか縁に腰かけるようにすゝめるのである。ここが大事と彼は相変らずの姿勢で

「奥様、まことに申しにくい事なのですが……」

……このようなことを申し上げると御立腹なさると存じますが、恥を忍んで卒直に申し上げます。実は奥さま、あれを私にお譲り下さる訳にはまいりませぬでしょうか」

と言つて一隅に垂れてゐる白布をはつきりと指さした。

「あれは、あのう……」

夫人の涼しい目元にさすがにさつと紅が漲り、口ごもつた。明らかに狼狽の色が見えた。「はい？ まことに不躰なお願いですが、実は郷里に居る母が永年、子宮癌で臥つて居るのです。母の申しますにはこの病いには婦人の身に着けている下着を集めると効めがあると言ふのです。そんなことがあるものですか？ 私は今日の日まで、極力止めてきたのですがたとえ効かなくともよい、昔から言い伝えてきたものだからたつた一度だけわしの願望を聞き入れて呉れと老の眼に涙をたゝえて申すのです、私としましてそれを聞きますと……」

子宮癌に腰巻がよいなど曾て聞いたことが

ない。我ながらよくもこんな出鱈目がすらすら言えたものだ。とつくづく感心し且つは呆れながらも彼はあくまで真摯な態度を崩さず、悲痛の色さえ泛べてこゝを先途と泣き落し戦術をつづけた。

「御事情はよく解りましたが……けど物が物だけにわたくしと致しまして……」

夫人の面に当惑の色が見えた。平助の鋭鋒を受け流し、他所でも当つて来なさつてはくる氣配を感じた。どつこいそりは言わせぬぞと先手を打つてすかさず

「御無理もございませぬ。第一このようなことを望むものが無理なのです。けれども余命いくばくもない老人の願いを思いますると、子として断腸の思いが致します。もちろん、素姓の知れぬ夜の女などに掛合えば簡単かも知れませぬが、私はそのような婦人のものを母に与えたくはございせん。死ぬ思いで当家を訪れたのもその為なのであります」

平助は自分の言葉に感激しながらこれでもかとばかり、然しあく迄も深刻沈痛な面持で相手の顔色をうかがうのである。効果があつた。

「解りました、じゃあ、持つて下さいますか？」

意外に早く折れて出た。やれやれ骨を折らせる奥様だ、まさに冷汗三斗の思いだつた。断腸とか死ぬ思いとかの表現が夫人の胸を打つたと見える。さてこうなると女の特性として少しでも良い物を出したがるものである。おそろく夫人は相当、使い古したと見える白布を氣にしているのであらう。と言つて仕立おろしの新品を持ち出されたりしては折角の苦心が水泡に帰してしまふ。

「いえ、それで大いに結構であります、御無理をおき……と……下さつて恐縮の至りです。母もさぞかし喜ぶこととございましょう、就きましては甚だ不躰でございますが如何程でお譲り願えましょうか」

おそろくは受取るまいと想像しながら財布を取り出した。

「あら、あんなものにお金など結構ですわ、どうぞ御心配なく」

予想通りにしてもさすがに相済まぬ氣持ちで

「それでは私としまして……」

おどおどしている平助にかまわず、夫人は物干竿から白布を取りおろすと無難作にたゞみ新聞紙に包んで

「じゃ、どうぞ」

と、差出した。こちらからお帰り下さいと表へ案内してから、あの、一寸と平助を呼び止め

「このことは誰にも言わないで下さいね、口外なさると取消しですよ」

と、笑つて言つた。夫人のこの優しい微笑みを見ると、平助は衷心から手を合わせた氣持ちがこみ上げてきた。

平助は今日程、シンから疲労したことがなかつた。考えれば考える程、冷汗が滲んでくるあの時、品物に手をかけている処を見付けられていたならば、夫人が人間の悪いひとだつたら住居侵入、窃盜容疑の罪に問われて今頃は警察の厄介になつてゐるだらう。夫人に對して相済まぬ氣持ちでいつばいだつた。

彼は例の通り今日の収獲物を徐ろにひろげて心ゆく迄、抱擁し、それを鄭重に行李の底へ仕舞い込むと、これまた例の如く年月日、時刻その他の要項を記帳した。それから百円紙幣を数枚つかんで表へ出た。前回異り、兩者話合ひの末、譲つてもらつたのであるからどうも礼のことが氣にかゝるのである。角店で手頃の菓子折を求め、それを持つて夫人の宅を再び訪れ、先程はどうもと言つて受け取ろうとしないのを無理矢理におしつけるよう

にして帰つてきた。やつと肩の荷がおりた感じがした。あゝそれにしても、この度の一件は難物だった。手に入れることには一応成功したけれども、また一面から見れば失敗のようになつて仕様がなかつた。考へて見ればこのような趣味は相手の女性の関知せぬ間に自分が所有しているという点にえも言われぬ妙味、快感が味わえるのであつて、それが今回のように

「じゃ譲ります」

「では戴きます、お金は如何程？」

「いえ、お金など要りません」

では形式的、義務的觀念が先行して、さつぱり妙味がのらないのである。これでは苦心さんたん、三拝九拝、骨身を削る労苦の代償としては、むしろ軽きに過ぎはしないだろう

か、あの男の母親のために恵んでやつたのだと思つてゐる先方の気持ちがこの白布にこもつてゐるようになつて、それが八重子や光子の物のように、ぬくぬくとした感覚を彼に与えないのである。徹底してゐる変質漢、平助には只、単に骨董品のように物を蒐集するだけでは心底から満足出来ぬのである。

それから間もなく平助の姿がこの町内から消えた。八重子や光子は兎も角として、あの夫人と顔を合わせる事が気が引けたのではあるまいか、

「郷里へでも帰つたんやろ」

彼を世話してゐた老人がそう言うだけではつきりしたことが解らなかつた。

「平さんは男前で至つておとなしい人やつた

が、物凄く変態じやつたそらな」

「ほんまに見かけによらんもんや」

「黙つて、おとなしい人、却て油断ならんもんやで」

やはり近隣の人には平助の行状について、うすうす感付いてゐたらしい。時が絶つに随つて人々の脳裡から平助の印象が薄らいでいつた。

ところで最近、ある新聞紙上に若い女性の下着を専門にねらう常習犯が捕われたことが記載されてゐた。係官の取調に対して稀にする柔順素直な態度で遂一事実を白状し、自宅に秘藏してゐた十数枚の現物には一々丹念に年月日時刻など記されてゐた云々の記事を見ると或はこれが平助であつたかも知れない。

(完)

春四月、京島原太夫の五彩けんらんたる道中を私はまだ見たことはないが、八文字踏む足どりの鮮さがなによりのものだそうである。日は太夫も足に、けはいを施し爪先にこぼれる紅の香もゆかしいと

れがましいもので、素足の美と云うような事も云いたくなる。美女を語るには其足袋の下につまみれ、たかすかな爪の色すら忘れてはならぬ。足の好みと云う様なことも云いたくなる。

貞享三年版西鶴の一代女に、所

謂当世女の条件として「顔は少し丸く、色は薄花桜にし、面道具の四つ不足なく揃えて、目は細きを好まず眉厚く鼻の間せ、わしからず次第高に口少さく、齒並あら／＼として白く耳長みあつ

き、額はわざとならず自然の生えどまり、首筋立ちのびて後なしの後髪手の指はかよはく長くあつて爪薄く、足は八文三分に定め拇指反つて裏すきて胴間常の人より長く」

面道具は兎も角も足の大き指の

反りと、なし／＼迄細な注文である又一方、東国育ちの女は不束で首筋太くその上、足ひらたく、と矢張り足までけなして居る。而し之は西鶴が自分の理想的女の好みを勝手に云つたものでなく、既に一代女の前年貞享二年版の「好色増鏡」に「黒目勝なる……桜色なる……足の拇指の反りたる」とある。

もとより此時代の事であるからたゞ花のかんばせ纏える綺羅のみで簡単に女を鑑賞する筈も無い襟かけの肌のつや／＼かさ白い素足の小さい指のうねりすら見逃さないのは尤である。元禄十四年版「傾城譜状」にも「足は恰好相応足の拇指少し反り加減に足の裏ぐいとすきて」と一代女と同様の好みで恰好相応というから余り大足は忌んだと見える。西鶴のいう入文三分が当時恰好相応だつたらう。而していづれにも「拇指反りて」と殊更に拇指と云うのはどうい

おやゆびそ 拇指反つたる素足の美

的場通



けだらうか。ずつと降つて、安永七年版、田にし金魚の「当世虎の巻」の瀬川のみうけの処にも「この女中で御座いますか珍らしい生れつきだ……足の拇指は反るし言分なしの玉だ」と云つてゐる。ともかくも、足の拇指反りて、とたゞこゝ云つただけで、そこに白々とすつきり反つたなやましう美しい足を髣髴させるに充分である

けだらうか。ずつと降つて、安永七年版、田にし金魚の「当世虎の巻」の瀬川のみうけの処にも「この女中で御座いますか珍らしい生れつきだ……足の拇指は反るし言分なしの玉だ」と云つてゐる。ともかくも、足の拇指反りて、とたゞこゝ云つただけで、そこに白々とすつきり反つたなやましう美しい足を髣髴させるに充分である

いとすき、拇指殊更反つて艶になやましい。

而し勿論それ／＼絵師の筆癖もあり、中には可成り扁平なのや大足もあつて、必ずしも時好に応じたものばかりとも云えない。

明治の紅葉や一葉などの小説の下町女の凄艶さにも、もつと悩ましうせまつて来る白い素足の描写のないのは聊か残念である。

谷崎潤一郎の「刺青」は女の素足を取扱つて凄艶なものである。前田夕暮の作の中に、女の白い裸の足を見て、指が小さく丸く尖つてゐる様々と喜び、踵に薄紅く色づいた靴ずれの痕を美しいと見とれてゐる。

「足の好み」と云うようなものも時代により変つて来るものだらう江戸以前の物語小説等には素足については余り見当らぬ。

×

×

×



王朝好色本

音なし草紙

宮内早次郎

一、夫の留守のツマミ喰い

平安朝は一条帝の御代、絢爛たる文化は咲く花の匂うように榮えていましたが、性道德に至つては極めて自由奔放、無軌道的に行われておりました。京は西の洞院にとても美しい一人の若い女が住んでおりました。

初恋の人と思ひ思われて夫婦になりましたが、二年ほど楽しい夢の枕を交わして、あきもあかれもせぬ仲を男が勅命で筑紫の国へ行かなければならず。原文にはこのところを、「わが行く方は西なるに、都は東の空なれば、月の出で入る山をこそ、恋しき方のしるべにて、互いに眺め待らめ」若い二人の別れの有様を書いてありますが、こうした処は現代流にカットして、長い留守に退

屈して来たこの美しい新妻の肉体に忍び入つて来た者の方へ話を進めましょう。

京の早春は桜の蕾のふくらみと共に野にも山にもやつて来ましたが、寒い冬の間はさほどになかつたのに、ぽかぽかと暖くなつて来ると、男恋しさに彼女の若い肉体は夜毎毎日にうずいて、寝られない夜々が続くのでした。娘の頃と違つて、二年もの間を思ひ思われた夫と同じ褥の中で過して来た後ですから、それがどの様に苦しいものであつたかは想像することができましょう。

この原文には名を書いておりませんので、まぎらわしいから色男らしく右太郎とでもしておきましょう。この男は彼女の美貌に結婚前から思ひをかけていましたが、横から自分以上の男に取られてしまつて、あきらめかね



ていた所へ男が長い留守となつて、彼女が春の夜毎を若い肉体をもてあましているのを見ると、ときこそ来たれりと食指を動かして来たのでした。

今夜も眠れぬままに彼女は部屋の窓近くで、夫の居る西の方の空をぼんやりと眺めていると、

「筑紫の国ではお変わりなくお越しになられていられますか、ときどきお便りが参りますか」

垣の外から声があつたので、物思いを破られておぼろ月夜の木の下を見ると、右太郎が立つていた。

「おかげ様にて丈夫に過して居ります様子ですが、紙のみの便りでは心が淋しくて……」

一人心に思っていることを他から云つて貰うと嬉しいものです。

「春の夜とても夜風は毒とか、さあこちらに入らせられませ」

女一人の部屋に狼を引入れてしまつたのでした。右太郎は思ひの第一歩は進行したと、庭から部屋へ入つて行つて、彼女の淋しさを慰め顔でいろいろと話していたが話の半ばで、ホツと深い溜息を吐いて見せたのでした。

「妾こそ夫の留守の淋しさに深い息も洩れましようが、お一人身にて夜毎を思ひの通りにお暮しなされている貴方が、溜息とは思ひもかけませぬ。お話下されば妾で出来ますお世話なれば、どのようにでもお骨折りをして差上げましよう」

親切心と云うよりも、女の生来の物好きで他人のそう

した話が聞いて見たいもの、彼女が今度は右太郎を慰め顔で云うと

「話して見ました処でどうにもならない物思いで、我身一人の重荷を貴女にまで負せては申訳ありません」

現代の青年と違つて右太郎は誠に上手に持ちかけます女は話さなければ話さないほど聞きたくなると云うことをちやんと計算に入れているのです。

さあそうなると彼女は好奇心も手伝つて、右太郎の心の中を聞いて見たくてたまらない。自分の憂鬱なぞはすつかり忘れてしまふと、酒肴を取り出して右太郎にも飲ませ自分も飲みながら、

「酒の上ならば心の中も語り好いものと申します。女を相手と思召さずに話のみにても、お話しなされませ」

又も云うのでした。右太郎は思ひの壺と心の中では喜びながらも、表面はさも語りかねる様子をして口をしづらせる。盃が行つたり来たりする間に春の夜はおぼろに更けて、京の都のさんざめきも静まり、六日の月も西山へ入つてしまつた。

二、右手は働く巧者

頃はよしと右太郎はやつと重そうに口を開いた。

「このように明るい灯の下で美しい方と正面に向ひ合つて居ては、どのようにに心の強い男でも己の胸の中の恥しい物語りをできはいたしませんよ。酒の上の冗談にまでも口の外に出すことが出来ますれば、本当に心も体もか



るくなりましようが」

第二步として彼は部屋を暗くする必要があつたのです。それでこう云うと、さてこそ色話と彼女は右太郎の手段に乗つてしまふことも知らずに。

「殿御も恋にはお心の弱りなさるものとか承りますが、さてさて右太郎様としたことが、見知らぬ妾にでもないものを、あまりにもお意気地のないことを申されます。さあこうでございますか」

フツと灯を吹き消してしまつた。

「これでよし。右太郎はすっかり喜んだが、こうまで上手にことが運ぶとは考えていなかったので、何から話し出そうかと用意がなくちよつと言葉に詰つてしまつた。

だが、それがさらに右太郎の仕事の助ける働をしたのだから、恋の手段と云うものもあり完全に作り過ぎるよりも、大略にして置いてその時その時に応じてことを進行せしめる方がよいものらしく、平安朝の昔も現代でも変らないものでしょう。

「右太郎様。なにを男らしくもなくうぢくなさるのでございますか、大声にてお話がなさり度くないようでしたら、お身真近に参りましよう。早うお話しなさりませ」

右太郎の体にふれるばかりにいざり寄つて来た彼女は男の膝に手を置くと又も話を引出そうと云うのでした。

「左程までに申されるのでしたらば、心の中を明ら様に

物語り申上げましようが、お笑いなさらずにお聞になられて頂けましようか」

事の八分は成功したと右太郎は声を震わせながらも、その女の手をやはり震える左手に握つて、やつとの思いでこゝろを出した。

「これは又右太郎様、としたことが、声までお震わせになつての御心配。なんの他人様のお心を無理にお聞してから笑う者が居りましようぞ。右太郎様ほどのお方をそのように悪狂いさせる娘御はどこのどのような果報者か妾が身代りにでもなれるものならば、夫には申訳のないことですが、今この場でも身代りになつて差上げようものを」

男の体の震えから彼女は童貞と処女で結婚した夜の新しい枕の場面を思い出して、彼女自身も震えたが、夫も今のこの右太郎のように身震いしていたがと、全身がほてつたようにカッと熱して来るのでした。

その頃の木立の多い京の都のこととて、どこで鳴くのか夜鶯がホホケキョウ、と、涼しいなやましい声を二人の耳に送つて来て、夜風とは云い生暖い風が、ヂツとりと早春の暖気と内心からの熱に汗ばんだ二人を吹いて窓から入つて出て行くのでした。

「思ひの色をかうとだにいはいはまほしくはありしかど、人目の関に洩らしわび、徒らにのみ蘆垣のま近きながらかひもなく、明し暮してすぎの戸を、さすがに忍びはてずして……」



原文はここを光源氏、在原の業平、等のその時代の色男を出して右太郎が口説く有様を書いてありますが、チャタレー発禁以来この場面を原文の通りに書くことは残念ながらも許されそうにありません。

彼女のしなやかな手の掌を左手に握つて、右太郎の右手が光の君や業平の情事を語りながら、どんなふうにも活動したか皆さんに想像して頂くより手段がありません。

男の癖の恋しさに日毎夜毎を狂ほしいほどになつていた彼女が、言葉と、そしてその右手の上手な働きに、右太郎に身を任せてしまったことは云うまでもないことでした。

妻に別れて海に入り、共に自害するもあり。歎きわびつつ程もなく思い消ゆる（死ぬ）もあるものを、などかは同じ世にかはる心のうたてさよ。又も原文ですが、恋し恋された夫婦が、夫が留守になつたからと云つて、彼女が外の男に身を任せたことを原文の筆者は、妻に死なれて海へ飛込んだり、夫に先立て共に自害したり、夫婦のどちらかが死んだと云うので、歎きのあまりに泣き死にをする者もある同じ世に、こうしたこともあるものかと彼女の行為を非難していますが、右太郎のような男にかゝつてはどんな貞女でも操を全うすることはできないでしょう。だが、その右太郎の上を越す男がまだ居たのですから、世の中には上には上があるものです。

さて、その男も多次郎と名付けて、章を新にして、多次郎の方に話を進めましょう。

三、闇夜の代り男

夕暮ごとを松虫の吹く笛を知るべにぞ、笛を吹いての右太郎が呼出しに、彼女が切戸を開いて導き入れて灯もなき部屋で、夜毎夜毎の逢瀬を夜のみぢかさをなげきながら楽しむのです。不良青年が口笛で女を呼び出す現代と、平安時代の逢引も変りがないことも面白いではないですか。

当人は誰も知らない、知られていないと思つているが呼名は殊にもれ易き世のならひなるに、まして阿漕の浦に引く綱の度重なりて人目にも、余るばかりの其の気色を、いかでか人の知らざるべき、いとも愚かなる心にこそ。誠に原文が上手に書き表して居ますが、美青年であれ情事には未知の夫と異つて、すれつからしの右太郎は肉体的にたくましい上に、あの方は最初の口説きに右手を巧者に使用して彼女を参らせたほどだから、チャタレー夫人が森の番人に熱を入れ上げたも同様で、彼女たるものすつかり夢中になつてしまつて、夜の来るのを待ち切れないほどそわ／＼していたから、とうとう人目に知られるようになってしまつたのでしよう。

その話を小耳に入れた多次郎は、結婚前の彼女に思いを懸けていたが失恋した組で、それから後は一生を共にと思う女もなく、色狂いに身をくずしていたほどだったので、勞せずして美果を得んと一策を考え出したのでした。



源氏物語に浮船の御方へ、薫の真似をして光の君が忍び入つたとありますが、多次郎も右太郎に混らわしい様子をして、遅月の夜の闇を利用して彼女の家の軒端の近くで、笛をふき鳴らして佇んだのでした。

そうしたことがあるとは夢にも知らぬ彼女は、自分達二人のことは誰も知らぬと信じて居るのだからたゞもう右太郎と信じて、袖を引きながら部屋に案内すると、暗闇の中で用意の酒肴を取り出して、彼女は嬉しさに自分一人ではしやぎながら、右太郎と信じて多次郎にも飲ませ、自分も飲んで後の覚えもないほどに酔つて共に寝てしまつた。と云うのだから酒を不老の薬とか云うが、それ以上にお芽出度い話で多次郎の技巧も右太郎に甲乙がなかつたのでしよう。

闇の部屋で盃をやりとりして居る男女が、正面に座して酒を呑んでいるはずがなく、原文にはこのところはカットされていますが、多次郎が多年の宿望を遂げるために全智全能をかたむけたであらうことが伺われます。

こちらは右太郎、夜毎の恋の通い路に闇夜とはあつても勝手が知れて居ますから、いつもの木立の間で笛を吹きましたが、酔つて疲れて睡つたばかりのところですから氣付くはずはありません。

しびれを切らした右太郎は切戸に近付いて見ると、ときどき今夜のように遅くなることがあつても差鍵の下りにいたこともない戸が、内から差し固められているのでもう帰ろうかとも考えたが、初春以来この秋まで五月余

り毎夜をこの家で過しているし、彼女の柔肌なしで一人寝る淋しさを考えると、とてもこのまゝ帰る氣にもなれず。

忍ぶ妻戸も忘れつつ、叩けど音の聞えぬは耳無山か怪しやな。この原文を読んで頂くと、右太郎が夜更けに忍ぶ身の引目も忘れて切戸をどんなに叩いたかが知つて頂けると思います。

頼みなき人の心を果なくも、

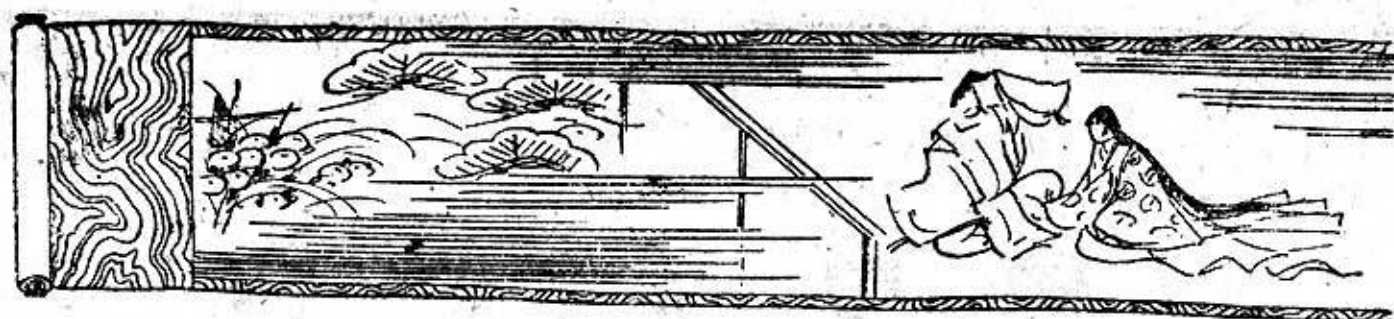
後の世かけて何契りけむ。

自分が間男であることも忘れた右太郎が、彼女が心變りをしたのであらうと恨みながら、こう一首を残して歸つたとありますが、臭いもの身知らずとはよく云つたものです。

彼女は共に寝ている男が右太郎でないとは全然氣付かずに、遅い男の胸の中に切戸を叩く音に目覚めると顔をうずめて

「まあ煩さいこと、この夜更けに戸を叩くなんて、近所の方達がどんなに変に思いなさるでしょう。あんないたずらをなさる人は妾はよく知つていてよ。右太郎さん貴方もそう思いなさいません。きつと多次郎さんよ。ほんとにいい好きかないつてありはしない」

おやおやこれは又。多次郎も返事ができないでいると「このあたりでは多次郎が多く不良青年の中で一番悪い人ですよ。夜にでもなると小暗いところで待ち伏せて女とさえ見れば弄びふざけて、こんな悪いことまでも女



一人の留守家と思つてするんですよ」

あまりなことに多次郎は自分だと云おうと思つたが、それよりも色気の方が大事だと、言葉少なに云い混らわして、そのまゝ一睡もせず、情事の限りを尽して夜の明けぬに女に人違も悟らせずに帰つたとは、誠に早や驚ろいた心臓の持主ではあつたものです。

四、音なしの秘事

夜中に戸を叩かれてこうした事が度々あつては世間体が悪いと、彼女が人を頼んで多次郎の家へやつたと云うのだからことが面白い。

使いは本人の多次郎がその夜彼女と寝ていたと知る由もないから、多次郎を咎め顔で文句を云うと、今度は多次郎の云い草がよい。

「戸を叩いたのが私でしたらお咎めも道理ですが、それは毎夜お通いになつていられる右太郎さんです。文句がお有りならあちらへ云われて下さい。私は昨夜は秋の夜長が退屈ですので横笛を吹きながら歩いていきますと、袖を引く女の人がありましたので、引かれるまゝにその方の処へ宿りましたが、私とて男と生れて女は嫌いではないのですから袖を引かれて入つた私がお咎めを受けるのは少々道理が違ふようです。それにあのお方は酒や肴まで取出してお馳走して下さつたので私はすっかり酔つて主のあるお方に悪いとは思いましたが、あのお方の自身からも私に身を寄せて来られましたので、………（ここ

で情事の有様を語っていますが、カットします）私自身から押して参りましたものでもなく、私のような者がどうしてあんな美しいお方に好いて頂けたかと思議で、もう一度の幸運を祈つていましたのに、私が悪いと云われるのでしたら、私もどのような罪になつてもかまいません。筑紫の御主人にこのことをお知らせしましょう」

こう開き直られて使ひも道理には勝てず。
「貴女がそんなことをなさつて居られるとも知らずに、多次郎さんのところへ行つて、すっかり恥をかきましたよ。本当に馬鹿々々しい」

彼女に多次郎の云つた通りを告げて更に自分の腹立たでも附加えたら、彼女はすっかり肝を潰してしまつた。

ここで平安版のチャタレー夫人は怒つてゐる使ひの者を沢山の品物でなだめて、多次郎にこのことは音なしに願いますと詫びを入れて貰つた。それで音なし草紙と云うことになつていますが、性戯の上手に会つては、惚れ合つて夫婦になつた人妻までがころりと欺されてしまふ平安朝も現代も男女の間のことには何も変りのないはずチャタレー夫人が性に感覚のない夫から森番の逞しい腕に走つたのも、この女が右太郎や多次郎に欺されたのも元宮さま夫人の行状も人間と生れたからには仕方のない出来事で、性愛技術の未熟こそが非難されるべきではないでしうか。

この彼女がその後はどうしたか、それがこの物語りにないことが残念です。

(完)

淫神「ヴィナス」

紅 雨 部 安

ギリシヤの愛の神、美の神たるヴィナスは、又名をアフロディテと呼ぶるゝ女神であるが、古今東西、此女神ほど多情な不貞節な女神はない。かくも多情不貞節なものを神として尊崇したとはむしろ不思議な位であるが、人文未だ開けなかつた原始民族間にありては、多情とか不貞節とかいうような所謂道德的節制は問題ではなかつた。只彼等が経験する一切の不思議の内でも、生殖により新生命を生ずることほど驚異を感じたものはなかつた。

此驚異より彼等は生殖そのものを神格化し尊崇するに至つたものである。というやうな理窟は暫く措き、女神ヴィナスの多情なりし生涯を紹介しよう。

ヴィナスが始めて恋した男神は、デュピタの子マーズである。二人の仲は初めはさまで濃厚というでもなかつたが、トロイ戦争の時、マーズがダイオミードの槍にかゝつて負傷したが、無情にもデュピターはマーズを紹介しなかつた。そこへヴィナスが助けてやつたので二人の仲はいよゝ濃くなり、ハーモニアという子まで設けた。

恋しゝマーズにのみ満足して居たらよさそうなものなのに、ヴィナスはまたアドニスという美しい男を見初めてから、明けても

暮れてもアドニアのあとをつけ廻り、遂に思いを遂げて歡樂の夢に耽溺し、自分の宮殿たるオリンパスに帰ることも忘れ一時も恋人の側を離れまいとして居つた。

アドニスと睦じく遊んでいるヴィナスの処へ或る日オリンパスから迎えの者がやつて来た。暫し別れでも恋仲となれば悲しいものである。ヴィナスは不精にオリンパスへ帰らなければならぬことゝなつた。根が嫉妬深いヴィナスは、留守中のアドニスの浮気を心配した。殊にアドニスは猟好きで、よく野山に遊獵に出掛けるので、若し他に美しい女でも見て心変わりしてはとの心配から、別れの際にどうか自分の留守中は出歩かないやうにと固く約束をして、スゴとオリンパスに帰つた。

それが永遠の別れにならうとは知らずに。多少歡樂に飽いてヴィナスのしつこいのに疲れ果てたアドニスはヴィナスとの約束は、ほんの一時欺し、ヴィナスが留守になるのを待ち兼ねて好きな獵に出かけた。ところが大きな猪が見えたので、よき獲物ござんなれとばかり、手にした槍を投げると見事命中。手負猪の強いのはギリシヤでも日本でも変りはなしいと見えて、其猪は非常に怒つてアドニスに

「肥ったヴィナス」の像

十六世紀のゴルチウスの描いた「肥ったヴィナス」である
彼女の肥った腹は人の眼の中へ飛び込んできそうに立派である



飛びかゝり、さしものアドニスも忽ち喰い殺されてしまった。

其時アドニスがあげた苦しい叫びをきゝつけて、すは一大事とばかり、ヴィナスは取るものも取敢ず、天降つて来た。けれども其時は遅かった。アドニスは既に此世の者ではなかつた。アドニスに手向の神酒を灑ぐと、ア

ドニスの血汐から血のしたたるような美しいアネモネという紅い花が咲き出した。ヴィナスはせめての恋の思い出として此花を携えて上天したということである。

一般に美人に嫉興心が深いように、ヴィナスも自分が美しいので他に美しい女があると嫉妬をよく現わして居る。

それはこうだ。サイキーという美しい女がいた。女ならではの夜のあけなかつたのは人の

国のならい、ギリシャでもよると触るとサイキーの方がヴィナスよりは美しいと噂されるようになつた。これを見たヴィナスは何とかしてサイキーを苦しめてやりたいのだと考えたが、神様の悲しさには残酷な手段を知らな。殊に愛の神だけに考えたことも亦なかなかてだ。自分の子供のキューピットに命じて

サイキーの胸に恋の白羽の矢を射して苦しめてやろうということになり、キューピットをサイキーの許に遣わしたところがミイラ取りがミイラになつたように、キューピットもサイキーを訪ねて見ると、反つてその美しさに見惚れ、恋の矢はキューピットの胸にさゝつた。

その後、サイキーはとても人間の妻にはなれぬから、神の妻になるがよいという神様のお告を蒙つて、風の神ゼフライスにつれられて天上に昇つて、ある美しい谷間におろされて眼をあけてみると、そこには立派な宮殿があつて、美しい女達が案内して其宮殿に導き入れた。それから後は、毎晩楽しい夢を結ぶことが出来たが、悲しいことにはいまだ恋しい男の顔を見たことがない。或夜の寝物語にどうぞ一度顔を見せて呉れと頼んだが、其男はきゝ入れなかつた。こうなるとサイキーにも里心が出る。それではせめて故郷の姉妹たちに会いたいと願つたが此願は許されて、其翌日姉妹たちはまた風の神につれられてサイキーに会いに来た。

羨ましいばかり美しい宮殿に華やかな其日を送っているサイキーに姉妹たちは多少嫉みを感じた。夫も定めて立派な方々

姉妹達の質問に、サイキーはどう答えていゝか判らなかつた。けれども姉妹達の追及にサイキーはとうとうまだ夫を見たことがないといふ白状した。人の成功を羨み、幸福を妬むは人情の弱点、姉妹達はサイキーの此の返答を聞いてソラ見たことかといわぬばかりに、それでは其方は顔の醜い方か、蛇体の方に違いないといつてサイキーを嘲笑した。

そういわれてみるとサイキーも何となく不安になつて、ある晩、夫の寝入るのを待つてソーツと灯をつけて夫の顔を盗み見た。ところがそれは案に相違して、いうにいわれぬ美しい顔であつたので、サイキーの喜びはいかばかり、なおも見惚れてよく見ようとしたはずみに、過つて灯の油を落した。驚いて眼醒めた夫は忽ち消えてしまつて、いままでの美しい宮殿も何処へやら、サイキー独り、野に棄てられていたのであつた。

まだ見ぬうちには兎に角も、相見ての後はいよく夫が恋しくなり、どうかして再びものと樂みをと、サイキーは恋の神ヱイナスに祈つたが、憎しと思ふ敵の願、ヱイナスの聞き入れそなたは等はない。けれども恋に全身を捧げたサイキーは、ヱイナスのきゝ入れないのは、まだ自分の誠が足りないのだと、一

生懸命に祈つた。ヱイナスは出来ないような難題を吹きかけて、サイキーを苦しめてやろうと思ひ、次の三つの難題が出来たら願を許してやろうといつた。

三つの難題というのは、一つは数百俵の大

「疲れたるヱイナス」の像

一六〇〇年に作られたマエタムの「疲れたるヱイナス」という銅版画である。彼女は過度の智慧から解き放されてぐつたりしている。



麦小麦、粟などを一粒つつ選り、に別々の俵に入れると、一つは川向うの金色の毛だけ集めて晩までに持つて来ることに、いま一つは一つの箱を持つて地獄に行き女王の美しさを願けてもらつて、其箱に入れて来るという難題である。

ところが第一の問題は蟻の手伝いで果し、第二の問題は川の神の助によつて解決し、第三の問題はまた地の神の助けによつて地獄にゆき、地獄の女王の美しさを箱の中に入れて帰途についた。浦島太郎の玉手箱と同じくサイキーも地獄の女王から、決して箱をあけて見てはならないと禁じられたが、止めらるればなお見たくなるのが人間の弱点としてサイキーも途中で箱をあけて見たくて、とうとうあけて見たら箱の

中から白い煙がフアーツとたつたと思うと同じに、サイキーは其処へ眠つてしまいました。サイキーに恋したキュービットがかけつけて箱をもとのようにし、サイキーを眠から呼び

好き者放談

驚見東一

序

おく病者にはすゝきもこわく、干してある着物もゆうれいに見ゆるが如し、我々のすきものには、まるい燈籠もリンガに見え、道に落ちて凹んだ石もヨニに見え、そして何にもかもリンガやヨニとして、そして、それかちこじつけて、みんなをアツと云わすような、論文を書こうとしているのが、好き者の道である。

「顔の赤い女は臭い」という。古くからよく言われている言葉だ。多血質婦人に対して相済まないが、血の臭気であらう。

「縮れ毛の女は淫乱だ」という。これも矢張

醒まし、箱を持たしてヴィナスの所へ赴かした。

かくも熱心なサイキーの恋の願いの前にはいかなヴィナスの嫉妬も忽ち氷解した。それり血液の關係が極めて深い因をなしているらしい。

男根の先端を学術的に龜頭と称し、一般的に雁(かり)又は雁さき、雁くびというが、同一作用を有する女根の陰核にはこうした動物的ネームがないのは不思議だ。核(さね)は植物的である。

○ 宗教の起りは皆、生殖器の崇拜。

○ 男子の逸物を見るにはその鼻を見、婦女子の一件を観察するには先ずその唇を見よと、これは大体的中するそうだが、但し真偽は知らず。

○ 或人の言に、西洋人の龜頭は三角形で日本人は円形であると、又或る道楽者の話によると西洋婦人は円く、日本婦人は長いと――。

とともにヂュピターが媒介者となりサイキーと其恋する夫とは晴れて添うことが出来るようになった。そしてその夫はキュービットであるというのである。

○ 女の味いはアイヌ婦人、即ちメノコを以て第一等に推すと、情味深く貞操の固いのは台湾の生蠻婦人であると。

○ 古川柳に「弁慶は不用の道具八つ持ち」七ツ道具の役に立たぬは知られているが、更に一本の役に立たぬものの追加が面白い。

○ 人参好きは助平、貝類の多食は精力旺盛。

○ 淫を好む性は男より女の方が遙かに強烈なりと。

○ 女はエクスタシーの瞬間、眼をとむ、男はその場合、眼を開いていると云う、たゞし見えるものは七色の虹のみなり。

○ 一寸の舌頭、よく一尺の男根に勝ると云うこと、御存じない方もある筈。しかしためすためさぬは、当方の知つたことではない。

(一) 男から男への戀文

「お兄さま、お兄さまのお便り嬉しくつて嬉しくつて、とうとう私、一晚中抱いて寝ちやつたの。そして何度も何度も、お寝間の中で繰りかえして読んだの。それで直ぐ書こうと思つた御返事、おくれてごめなさいネ、私の大好きな大好きなお兄さま、これから私、私を忘れずにきつと御便り下さいネ、私も忘れずに出しますわ、あゝ、それから私の着ているお寝巻お送りしますから、お兄さまも何かお身につけていらつしやるもの、送つて下さいませね、きつとよ、忘れずに……」

この恋文の一節を読んだ者は誰でも、この手紙の送り主を妙齡の乙女だと想像するのは無理はない。然し意外にも、この手紙は正真正銘の立派な男性に対して送られたものである。

とすれば何故、男性が同性である男性に対して、こんな幽の浮くような恋文を送つたのであろうか、——。という疑問が当然起つてくる。これは此の二人の男性が同性愛的関係——一つの性的倒錯——にあつた為であるがでは同性愛とは如何なるものか？



ソドミーとレスボスの愛

染田 玄

杉田直樹博士によれば「同性愛とは、自分と同性の者に対して、強い色情的の愛情を発し、異性には少しも心をひかれない。男性にして男性を愛し、相互手淫、股間度接、鶏姦等を行い、互に嫉妬し、情死するもさへある……。又、女性にして女性を愛するものは昔

有名な女詩人、サッフォがその傾向にあつたという所か、その出生地の名からとつて、レスビアの愛とも呼ばれ、女子同志が相抱擁し接吻し、強い恋情を発して、男女間に於けると同様な嫉妬や情死を伴う」と、

(二) 同性愛者の聖典

同性愛に耽溺する者にとつては經典とさえ云われる「秘密の結婚」の著者で最も同性愛の讚美者であつたアドルフ・ウィルブランドは言う。

「同性愛が奇体なことですか？、世間には私のような人間が無数に存在しているのですよ、世間は彼等を排斥し、怪しみ、笑い、且つ罰しようとする。然し世人は彼等を科学的に分解しようとしなさい」と、

ウィルブランドの不平は当然である。それ故、女性的傾向の濃厚な男子にとつて、彼の言葉は一道の光明であり、又千万人の味方のように思われるであらう。

同性愛といつても、何も昨日今日に始まつたことではない。旧約聖書創世記にも、紀元前二千年の昔、バレスチナの首府ソドムに於て、男色の風習が流行し、隣国のゴモラ・セ

ポインその他の国々にも流行して、遂に天帝の怒りに触れ、炎の雨、硫黄の露が降つて全滅した。

——とある。まさか炎の雨が降る筈もないから、この男色の風習が嚴重に処罰されたことを意味するものであらう。男色をソドミーと言う語源はこゝに起つたものと云われる次に、古代ギリシャの閨秀詩人サッフォーとそのレスボスの町の女友達は、男子に対する侮蔑の念の結果、彼女たちばかりで、男ぬきのヴィナス崇拜の新しい様式を創案したと云われる。サフィスムスは、その創始者の名に因んで後の人が附けたと云われる。

古代ギリシャに於ける同性愛の流行については、当時の社会的状態が必然的にそうさせたのであつて、スパルタ武士の剛健な勇氣は女色に耽溺することによつて奪われるという当時の一般思潮に影響され青年達は女性を排斥したので、女性も又男性に対する性示威から同性愛に溺れたと見るべきであらう。

(三) 同性愛に於ける三種

同性愛は普通の人間の性欲に反して、男性でありながら男性を愛し、女性でありながら女性を愛するものであるから、これを称して

性欲の顛倒という。男性に於ける此の種の变态性欲はこれを次の三種に分けることが出来る。

一、両性愛……女性の他に同性をも愛するものである。但しその中には異性に対する愛情が同性に対する愛情よりも濃厚なものもありまた両性に対する愛情の程度の殆ど同一なる者もあるが、然し最も多く認められるものは同性に対する愛の異性に対する愛より強いものである。

二、純粹の同性愛……全く同性のみを愛するものである。その中、身を受動的位置に置くものにあつては多女性的性質を帯びている。中には精神上にも一定の変化を伴い、思想感情共に女性の形式を具えている女性化の男子がある。即ち男子でありながら、皮下脂肪が多くて身体の輪廓は円く筋肉の發育弱く、皮膚纖弱で女子の形質に類似している。

此の種の男子に於ては肩甲帯と骨盤帯との幅径の差異は甚だ微小か或は無いと云われている。(女子に於ては骨盤帯の幅は肩甲帯の幅よりも大なるものである)此の点でも女性に類似している。又中には十四歳以来二十日目毎に偏頭痛、背痛、薦骨痛に悩む男子があつた。この様な現象は丁度女子の月経に伴

る症状に酷似している。その外、運動の状態歩行の有様から音声の調子に至るまで女性的である。

同性愛者と職業の關係を調査した処によると、職業の選択は個人の天性に基づくことが多いから、心身共に女型に近い同性愛の男子は、俳優、歌謡の唄手、給仕、理髮師等に従う者が多い。

三、仮性同性愛……一と二は先天的素質による同性愛であるが、後天的のものに至つてはその原因はいろいろである。漁色荒淫の結果異性に飽いて新奇の快を食はらんとする劣情から変態的な趣味に趨るもの。或は異性に接近する機会がないため一時その生理的必至の要求を満足せしめようとする動機から例えは軍隊とか刑務所内に於ては往々こういつた挑発が行われる。次に友情、師弟愛等の親密感から苦楽を共にせんとする心から同性愛に傾くもの等で、これ等に属するものは一括して仮性愛と称している。後天的の同性愛は先天的なものとその本性を異にしているからこれを病理的に異常と称することは出来ない。

(四) 対象の年齢による區別

男子に於ける同性愛を対者の年齢によつて

區別すると、(一)、二十歳以上の成人を愛するもの。(二)十五歳乃至二十歳の青年を愛するもの。(三)児童を愛するもの。この三種に分れる。この中で真に性欲顛倒と解されるのは(一)の二十歳以上の成人を愛するもので、この様な男子は自らを女性のように感じ、身体の完全に發育した男子によつて愛欲の喚起せられるものである。

此れに反して身体の尙十分に發育しきらない青年や児童を愛する者の中には、よし性欲の顛倒した者があるにしても、軽度のものと認めて差支えない。何んとなれば児童は女性に類似しているからである。男女は思春期前までは比較的に類似しているもので、思春期に達して初めて心身に著しい分化的差異を生じてくる。しかも、女性はその皮膚筋肉の纖弱な点で、又その全体のしおらしさの点に於て小児に似ている。それ故、性欲の普通なる男子でも、女性に類似した児童対にして往々愛欲の念を起すも敢て異とするに足りない

(五) 同性愛の謎

同性愛の謎を解くに當つて看過することの出来ない一現象は、小児時代に於て屢々同性に対して愛情の起ることである、また男女共

に思春期の初めに於て同性に対する愛情的感覺の起るもので、日夜親しく接触する同性の朋友教師等を愛慕するに至るものであるが、然し正常な心性を持つてゐる者は、漸次この傾向が消失して異性を愛恋するようになる。

此れに反して心身の異常なるものは、尙依然として同性に対する愛情の傾向を留めることがある。此の様に男女共にその少年時代に於て、往々一時的に同性を愛する傾向の現れるのは如何なる理由であるか明白ではないが二三の學者の説く所に依れば、元來人間は父母の生殖細胞の結合から出来るものであるから、人体は男女両性の原素の混合から成つてゐる。その故、女性の要素に富んだ男子は男子を愛し、男性の要素の多い女子は女性を愛するに至るのであるという説明を下してゐる。同性愛は性欲の分化の不十分なために起つた一種の異常であることは疑う余地がない。従つて、精神病學者メビウスの如く、性欲の顛倒、倒錯を悉く變質者とみなし、先天的の區別を認めず、ギリシャ古代に男色の大に行われたのを人間の変質したためであると言ひ、同性愛の原因をすべて變質に帰するのは極端な考えである。

男色の盛んであつた江戸時代の人間は悉く

先天的に變質素因のあつたものと認めねばならなくなる。此の様な事は到底信じる事の出来ない処であるし、美少年を愛した者は、異性に接する事の出来なかつた僧侶や、或は女色に飽き果てた町人や武士の輩であつたから純然たる同性愛は案外少く、その大部分は假性同性愛であつたと想像される。然しその相手となつた色子、蔭間若衆の中の一部には女性化された男子も相当あつたと思われる。それは當時の若衆陰間等の容姿を画いた浮世絵や、その言動を描いた小説を見ても容易に推知することが出来る。

又、古代ギリシャに於ては男色を許したから、男性間の親密なる交際は男性的信義、所謂武士道を養成するに与つて力があつたといふ、我が国では古來男色の盛んに行われた薩摩の国から、大山巖、東郷平八郎等の世界的人物を出した事を述べ、男色の社会的許可と男性的能力の養成との間に原因關係のあることを論じて、大いに男子の同性愛を鼓吹した然しこの考えも男色をすべて變質者の行為とするのと同じく辟見であると云わねばならぬ。

ギリシャの古代に男色の流行したのは肉体美を愛賞する風習から、美少年の姿容に対す

る愛慾の起つたがためであるのと、また一つにはスバルタに於ては、七歳以後の男子は最早や之を小児として取扱わず、毎年数ヶ月間陣営に置くことになつていたので、女性の缺乏は戦士をして同性の少年に対して愛慾の満足を充たさしめるに至つたがためであつた。そして男色の大に行われた結果、故意にその容姿外飾を優柔艶麗にして一見女性の如くならしめ、対者の注目を惹くが如き風習も起つて来た。アリストテレース、パレモン、アリストファーンネス、ルチアン等の如き人達もその歩み振り、眼の輝き、音声等、殆ど女性的であつたと伝えられている。我国でも男色の大に行われた時代には、男子にして眉を剃り白粉を粧つて女装をなし、同性に媚びる者が多かつた。尤も戦国時代に於ける男色の中には、衆道とて互いに深く交際を結んだが如き例もあるが、しかしその実は女色に接することが出来ないか、或は今日あつて明日をも頼み難き戦士の身として女性と偕老の契りを結びがたく、同性愛によつて一時の快を買う者が多かつたのである。薩摩の如き封建的氣風のある国に於て、女色を遠ざけ男色を好むのは、要するに戦国時代に於ける遺習である。併しその相手として花も恥じらう美少年

所謂「よか稚児」を選ぶのを見れば、女色を漁するのと五十歩百歩の差に過ぎない。故に

同性的情交が剛強なる男性的氣象を養成したものと信ずることが出来ない。

男色に関する文献

男色を材料とした小説の始めて現れたのは鎌倉時代の宝治元年以後乃至文永八年以前の作と見られる『石清水物語』で秋の中將とその従弟の伊予守との同性愛を描写している。室町時代に入つてより純然たる男色を描写した物語本が現れた。その最初のものは応永の頃の作と思われる『秋夜長物語』で胆西上人と花園の大臣の嫡児梅若との同性愛を描いたものである。

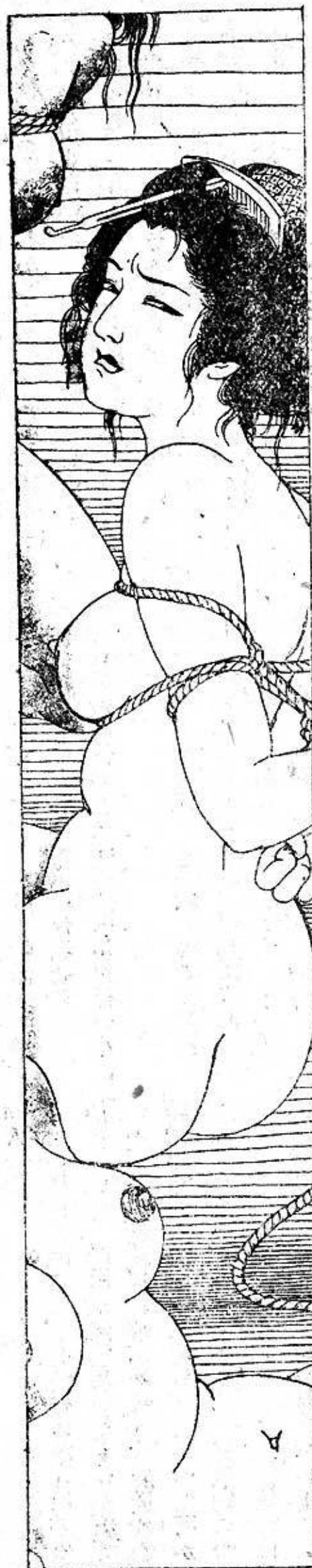
此れに引續いて『松帆浦物語』『嵯峨物語』『鳥部山物語』『幻夢物語』の純然たる男色本が世に出た。これ等の物語は所謂児物語部類という名称の下に合巻せられ、その大部分は僧侶と公卿の美少年を描いたものである。

『鎌倉物語』や『江島大草紙』等に描かれてある稚児白菊の説話も又、悲劇に終る一つの男色物語である。

柳原紀行の閑窓自語には陽物くらべ、放

屁巻、世にうつしを伝へたりしが寛政九年十月三日、富小路三条上ル西側、白粉やにて本紙展覧することを得たり、流布のうつしとは、こと葉書もおほくして筆勢大きにすぐれたり、ある人の物語に、醍醐山集院に男色の巻有といへり、実否しらざれども尋ねてみるべしという一文があつて、嘗て尾崎久彌氏が原始的稚児物語として紹介された『稚児の草紙』はこの男色絵巻の調書らしい。井原西鶴の『男色大鑑』は、特に有名である。其角の作で男色を讚美した歌集として『岩つつじ』があり平賀源内に『男色細見』がある。(淫本、瘡陰隠逸伝は同人の作)

この男色物の中に、又情交の種々相その他を書いた一種の指南物めいたものが出てゐる。『醜道秘伝』等がそれで、醜道は勿論衆道の同音語で男色を衆道といった所からもじつて附けた書名である。男色物について、石川巖氏が詳しく、又古い物では国学者喜多村信節の『男色考』がある。



観々堂手柄話の内

変化中条流

緑 猛比古

今 幾久藏画



江戸の女次々と誘拐カドワカされること

「先生、どうやら誘拐の目鼻がつかまりましたよ。何しろ次から次へと江戸中のこれと云つた小町娘、年増が何処へ連れて行かれるのか、それつきり行方知れずになるなんて、全く飛んでもねえ話で、この儘じゃ全く御用聞の面目丸潰れだからねえ——」

「ほう、では愈々源六旦那の登場つて云うわけだな。で、その手

掛りというのは……」

「さつぱり事件の緒口イトグチが掴めず、やきもきしてた折柄、いゝ案配アンペイにその手掛りが、向うから転がり込んで来たんで——」

昨夜イソツ戌刻過、もうそろ／＼煎餅布団に膝小僧でも抱き乍ら寝ようとした……」

丁度その時——」

「御免下さい。源六親分さんは此方で——」

門口で年配の女の声に、源六は仕方なく、ガタピシした格子を開けました。

「源六はあつしだが、一体どんな御用で——」

「あつ、親分様、大、大変な事が起りました」

「何？、するてーと、誰かでも誘拐かされたとでも云うんで……」

「えッ、どうしてそれを——」

「ハハ、お前さんの顔色に書いてあるよ。物騒な近頃の事だ。てつきりそんな用だと思つただけの話さ。まあ穢ねえ処だが、ズイと這入つておくんない。で誘拐されたのは誰方なんで？」

「そ、それがお嬢さまでございます」

「急の話で何処の誰様とも聞いちや居ねえが、そのお嬢さんとかが見えなくなつた、後先の事情を詳しく聴こうじやないか」

「あつ、これはトンだ失礼な事を——、私は本郷高町の呉服商、伊勢屋の乳母でお兼と申す者でございますが、お嬢様のお京様と一緒に、今朝薬師様へ御詣り致しました帰り途、あの方が甘いものを欲しいと仰有いましたので、大急ぎで最寄りの干菓子屋で一袋買求めまして戻つて参りますと、今じがた迄居られたお嬢様の姿は影も形もなく、さしておられた日傘だけが其の場に転がつていたのでございます」

「買求めに行つた間、手間はとらなかつただろうな、お兼さん——」

「ハイ、もう貰なら、ほんの二三服吸う間でございました」

お兼は折角結い上げた髪も乱して、慌てゝ来たのか、鼻の先にうつすら汗すらにじませて懸命の顔付です。

「どうも本郷じや縄張り違いだが……」

兎角本郷界限には、功名争いに汲々とする御用聞が多いだけに、源六は些か二の足を踏む気になるのです。

「親分様、どうかそれを仰有らずに、この乳母を助けると思つて——、これこの通りでいます。御尊に聞けば、親分様には、とても

おえらい先生がついておられるとの由——」

「あつしだけじや、わざ／＼こんな処迄頼みにも来なかつたと云うわけだな」

源六は苦笑して、煙草盆を引寄せました。

「と、とんでもない親分様。なんでその様なことが——」

お兼は大慌てに打消し乍らも、些か鼻白みましたが、女も盛りを過ぎると、憶面もなくなるのか、間の悪そうな顔も束の間、話を事件の核心へと進めます。

「とも角もそれから、早速その辺りを探しまわりましたが、何処にも見当りません。伊勢屋へも使いを走らせまして、奉公人の方や、御近所衆、御出入の人達も総出で手分けして探し廻つたのですが、いかにもく行方が知れませぬ。これはてつきり、この頃江戸中の騒ぎになつている、あの誘拐^{カドワカ}の手にかゝつたものに違いないと、御主人様始め皆様の嘆きも一方でなく、私はもう居ても立つてもおられぬ氣持になつて参りました……」

この十二年間、お京を守り育てゝ来たと言ふ乳母のお兼は蒼褪めた必死の顔色で、今にも泣き出しそうになり乍ら、源六の膝に縋らん許りに拝み込むのでした。

江戸の女達を、恐怖のどん底に引曳り込んだ誘拐魔の団が、暗躍を始めたのは、梅雨も上つた、何がなし、氣も心ものび／＼する初夏の頃からです。

数寄屋橋の奉行所に集録された記録によりますと——。

最初に行方を昏ましたのは、車町録掛屋の内儀で、近所でも評判の仇ッばい年増盛りのお葛と云う女で、親戚の法事からの戻り道行方不明になりました。その時は大分争つたらしく、点々と鮮血がそ

の辺りを染めておりました。

二番目が田町の酒屋の娘でお霜、十九才の年に似ず、多少商売柄運ツ葉な処もあります、滅法可愛らしく、男好きのする顔立ちで夕方便に出た儘で行方知れずになりました。

三番目が、深川木場町、料亭ちどりの女将、お政と云う三十過ぎの脂の乗り切つた小股の切れ上つた伝法肌の女で、水商売だけに兎角男出入の頻繁な噂もありましたが、器量は嘗つて深川一と謂われた程の、女も惚々する艶めかしさでした。芝居帰りにその儘何処かへ消えて、行方が知れません。

四番目が熊井町のお家人長田喜八の娘でお俊。父親のしがない素説もどうやら娘目当てで集まる旗本の二三男坊で賑わつていと云つた有様で、初々しい娘盛りは熊井小町の名にふさわしく、近々大家の二男坊と祝言すると云う間際になつて、突然何の前触れもなく我が家から姿を消して終いました。

五番目が本町の両替渡世、万屋治エ門の後添いでお種と云う二十八の女。弟程の子のある男に再婚して来た、世間では金が目当とも息子の治三郎とも出来ていと

の噂もある、男がなければ辛抱出来ぬと云つた、強烈な性的魅力を発散さす豊満な女盛りでした。貸金の取立てに行つての戻り道、百二十両の大金と共に煙の如く消えて仕舞いました。

そして六番目が、伊勢屋の娘お京——。



これと云つた器量の、内儀、後家、娘許りが、相次いで姿を昏まし、未だに一人として戻つて来ない有様に、江戸の女達は戦々兢兢として、暮れ六ツの鐘と共に、女の一人歩きは跡を絶つた今日此頃でした。不気味な失踪に脅えた江戸の巷には、漸く町方への非難の聲が昂まつて行きつゝあつたのです。



——中条流の子墮し大繁昌の事——

「ところが先生、お京が行方しらずになつた、あとさきの事情をよ／＼聞き訊した処、お兼がうつかかり口を滑らした事から妙なものが臭くなつて参りやしてね——。先生御存知と思いますが、子おろしの中条医者者の事なんで——、てつきり生娘と許り思つていた、大

店の箱入娘が、なんと誘拐される二三日前、中条医者で子をおろしたと云うんだから、こいつは全く驚き桃の木で——」

「ホホウ、中条流の女医者と云えば、近頃の悪い流行もの、ソ／＼話が面白くなつて来た様じやな。で……」

八卦占いのぜい竹をバラリと

扇に開いて、バタ／＼と風を入れ乍ら、観々堂先生は先を促します。話が誘拐しの一件から、突然とんでもない方面へ飛んだのが急に先生の好奇心をそゝつたのでしよう。風下りのじつとり汗ばむ暑さを避けて、浅草観音境内の大銀杏の蔭に身を入れた先生は、源六の真意を眼探ぐる如く、とぼけた山羊髭の中からキラリと鋭い光が輝きます。

「何でも親の眼を忍んで、二枚目面の手代と乳繰り合つていたとの事だ。度重なつた逢曳の挙句、どうやら体の異常に気がついた。親にも云えぬ話で、そこはそれ娘心に思い余つてお兼に打明けたらしい。お兼の附添いで、中条の門を潜つたのが二日前。全く当世の生娘も危ねえもんだぜ——」

「フーム、えらい事を嗅ぎ出したな」

「ところが御奉行所の集録によると、行方を昏ました女が、浪人の娘、お役の外どれもこれも色の道にかけちや素行の怪しいの許りで箱入娘のお京があゝの有様じや、或いは素読の浪人なんかも案外分つたものじやねえ。ひよつとすると、こいつは、揃いも揃つて、女医



者の厄介になつたのじやねえかと考えましたんで——」

源六の智慧は、手掛りを握んで、大飛躍をとげるのでした。「肝心の女共が、行方知れずでは、チト調べるのにホネじやな」

「そこなんで、勿論、相手の男あつての事だが、仲々に不義、密通は重いお仕置だから、おいそれとは口を割らねえでしやう」

「割らぬだらうな。まさかタネを蒔きましたとは申せぬから嘯鼠違いでゐいますと、ボンと蹴られるのがオチかもしれぬて」
「だがね、近所の噂つて奴には戸は立てられませんからね」
「商売柄、ぬかりもあるまい。」

ところが当今江戸八百八丁には中条流は随分あると云う話じやが、お京が始末をしたのは何処の女医者か分つておるのかな」

「なんとそれが、こゝから眼と鼻の先の、御藏前片町、露路の角の女医者なんで——。先生も御存知の、子持縞に錠を染め出した暖簾のかゝつてゐる、黒塗りの妙に湿っぽい家がそゝるなんで」

「せつかちな旦那の事だ。勿論飛んで行つた事だらうな——」

「さへ飛んでくる途すがら参りましたよ。だがね何しろ、相手が子おろし専門の中条流と来ちや、野郎にや用事のねえ所だ。十手をひけらかして上り込んだが、来合せていた好き者の女が二人許り袖で顔を蔽つて逃げただけで、女医者の妙真つてあまは、貝殻の様に口をしめて、てんでお話にならねえ」

「下口を開けつけていると、つい上口は閉めたくなるものと見える——」

「どうも独り者には、苦手で不可ねえよ、先生——」

カチ源もこの相手には些か持て余したらしく、小髭を掻きました。淫蕩な世相は、不義、密通、姦淫を生んで、必然の結果として、公に出来ない胎児の始末に困つた淫奔女や浮気女は、秘かにこの門を潜りました。

天明の頃、中条^{たてわき}帯刀によつて創始せられた中条流はいつしか女によつて継承され、女医者と云えば中条流の代名詞、子おろしの別称となつて、江戸の悪徳の温床と化し、隠然と榮えていたのです。

「中条はむごつたらしい藏を建て」と当時の川柳にもうたわれていた通り、秘密を握る事柄だけに相当あこぎに稼いで、懐ろを肥していた様です。

月水早流代、三百七十二文の引き札が、長屋の共同便所や、人眼につく所に貼り出され、朔日丸薬の如き通経剤をも売り捌いて、江戸の淫風を助長する一方、これを利用する女達は、愈々繁くなりつゝある有様で、

上は御殿女中から、下は相模下女、端女に至る、凡ゆる階級の女が、この悪徳の門を潜つた事は、末摘花や、柳多留寺の川柳によつても明らかです。

「いもじをぐつとまくりなと女医者」

「股倉に首ごと這入る女医者」

「何さ、御歴々も参じます」

「中条は孕み女の腹をさき」

「踊り子は事ともせずに又おろし」

淫蕩の跡仕末に寧日もない、こうした怪しげな女医者の中には、時として、女体の秘密をタネに、脅迫し、姦淫を強制しては、女達を墮落と淫蕩の市へ引曳り込み、しこたま稼ぐ、悪らつたる輩もあつた様です。

観々堂先生は、サラリとぜい竹を揃えると、やおらみこしを上げました。

「行つて見ることにするよ——」

「ど、どこへ——」

「きまつてるじやないか、片町の女医者の処へさ。伏魔殿の様な女医者の行状を暴いてやらねば、終いにや江戸中に生娘はいなくなるじやないか」

こうした存在が、或る程度は必要であると思う一方、先生の憂世感なり、正義感とは、こうした悪徳を、其儘見過してはおけなかつたのです。中条流と誘拐しとどんな繋がりがあるかは判然としない迄も、誘拐しの暗幕で糸を操る者が、中条流に違いあるまいと、源六の口吻からピンと察した先生の慧眼は、追つて判りますが矢張り間違つてはいなかつたのです。

「で、あつしの役柄はどうなんで……」

「旦那は一ツ走り、行方を昏ました女達の素性を洗つて、噂を掻き集めてきて貰い度い。女医者と近附きがなかつたかどうか、それが

「肝心な点じやよ——」

「心得えたよ、先生」

先生の出馬に、すっかり喜んで源六、屈托のない顔で、放れ駒の様に、肩を怒らせて飛んで行きました。

手早く八卦道具を包み終ると、成算あるものゝ如く、先生の足は御藏前片町の中条流の女医者、石井妙真の秘密を探るべく、禁男の家へ向つて乗り込んで行きました。



——さらわれた女、揃いも揃つて 子をおろした事——

数日後の夕刻。角行燈に灯を入れている観々堂先生の背中に源六の慌ただしい声がかゝりました。

「先生！すっかり洗いざら調べ上げましたよ。いや、どうも驚きましたぜ。あつしの眼にたがわず、どれもこれも、揃いも揃つて、いゝめをしていた連中ばかりだ——」

「挙句の果が〃おもしろいあと中条で待つてゐる〃つてやつだな」
「全くその通りなんで——。鑄掛屋のお葛は、鈍間亭主をいゝ事に
して、屋の日中から憶面もなく遊び人の彌太郎つて男をひき入れて
浅黄、あかねのめくり合いつて有様だ。酒屋のお霜つて娘も来た日
にや、とても娘なんて名のつく女^{ついでに}やねえ。あれこれと頼んだ男の
数が数え切れねえと云う達者な朔日丸の愛用者で、中条流にとつち

や、又とないいゝお得意だと云うから凄い。この女にや親爺も散々に手を焼いてたとの、御近所の噂——。

料亭ちどりの女将の男をくわえこむのは定評で、夜毎若い男を抱いて寝なくちや、オチ〃眠れねえとかで——。器量がよくて、金があつて、その上男が可愛いくて仕がねえと云うから、取巻き連がうよく〃していたつて云う事だ。

お俊と云う御家人の娘は、何でも素諳に來る若い男に、だまされてはらまされたとかで、近々一緒になる筈の大家の二男様との間にヒビが入つたとの、熊井町でのはらの岡焼き半分のうわさで——。

両替屋のお種は、後添いに入り込むとりの昔から、息子の治三郎と出来ていて、亭主がくたばるのに拍車をかける様に、夜風となくせがみつゞけて、し殺そうて腹で、近所の評判は散々、悪女の鑑の様に云われていましたよ。どいつもこいつも、亭主や、おやじの眼を盗んで、いゝ眼をしていた連中許りだけに、かどわかしにあつて反つていゝ氣味だと云う奴までいる始末であつしなんだか真逆〃しくなつて來ましたぜ——」

「成程な、旦那がこうして並べ立てると、一度や二度は、女医者の門を潜りそうな女狐許り揃つてゐるな。ところで、この行方を昏ました女、尽くが、例の片町の中条医者、石井妙真の手で、もみくちやにされたと分れば、旦那驚くじやろう。——」

「も、勿論、驚いたネ。流石先生だそのものズバリだ。じや早速、女医者を縛つちましようか——」

「待て〃墮した事は判つてゐるが、女共をかどわかしたと云う証拠にはならぬ。あの妙真と申す女は喰えぬ奴じやよ。洒々として申しおつた」

「へエ——何と……」

「成程、墮しは致しまするが、此方から墮させてくれと参つた事は唯の一度もムいせん。無理に頼み込まれて墮した迄の事、これでも本道（内科）ではムりませぬが、人助けの道、喜ばれはすれど、恨まれた事はたつたの一度もムりませぬ——と、あつさり一本やられたよ——」

「へー、盗泉にも三分の利つてやつた。それでよく女達の事が分つたもので——」

「抜目はない。小粒二ツ三ツ張り込んで、下女を買収して小当りに当つたら、ベラ／＼と数十名の名前を立ちどころに述べ立てた。その中には、旦那も知つてゐるあの女がと云う様なのが相当おつたようつかり悪い事は出来ぬな」

「チエツ、あつしならハナも引つかけねえ癖に——、どうせ先生の男ッ振り、いや山羊鬚ッ振りがよかつたのでしようよ」

「うらやむな／＼。そうかして下女のわしを見送つた眼が、ドウも妙に色ッポかつた」

「みいらとりがみいらになつちやいけませんぜ。商売柄、中条の下女は甚だ気が強し／＼つていうからね」

「粹な古川柳を知つてゐるじやないかえ。さては旦那、近頃その筋に凝つてゐるんじゃないのかい」

「近頃句会は大流行だ。片町裏の唐物屋勘兵衛宅じや、三日にあげず句会を開いて、物好きな連中で、夜更け迄賑わつてゐるつて噂でさあ」

「面白そうだ。駄句でもひねりに一度出掛けるとするかな」
「よしねえ。ありや閑人ひまじんのする事だよ」



「お誂らえ向きに、わしの商売はまあ閑でな。片町裏と云えば、女医者の丁度裏手辺りに当る様だが……」

「道を廻れば三丁足らずあるが、女医者の庭からなら、多分塀つゞきの裏手に当りやしよう」

「ふむ、うまく出来てゐるな」

「え？」

「いやなに……」

何を思つたのか、先生はしきりに山羊鬚をしごき出したのです。急に考え込んだ先生に、源六もどうやら醜ろげ乍ら、先生の思惑を

驚つた様です。

「先生！勘兵衛が怪しいんで？」

「フーム、たしかに臭い。匂うな。かどわかしの匂いが……」

「丁度、今夜句会の例会日だ。一層思い切つてやりましょうか」

「虎穴に入らんずんば虎児を得ずか——。ひよつとすると命掛けの仕事になるかも知れん。旦那つき合つてくれるか」

「チエツ、水臭いね。先生とならば命に糸目はつけねえ」

「尤も金に糸目をつける柄じゃないな」

「違えねえ。じや手配は万端引き受けましたよ。大船に乗つた気で乗り込んでおくんなさい」

「旦那の大船は当にならないが、狸の泥舟よりかチツトはましだらうよ」

何処迄も冗談の好きな二人でしたが、顔付だけは真剣に、先生は何事かヒソ／＼と、源六の耳許で秘策を続けたのでした。



——糸纏わぬ美女、大蛇に穴を 狙われるの事——

「では皆さん、そろ／＼例会を始めましょう」

こう云つて立上りましたのは、この家の主、唐物屋勘兵衛です

この夜の句会に集つた人々は、何れも祐福な商人、大家の隠居と云つた風体の者許りですが、句会とは表面、その実、世の中の凡ゆ



る道楽や漁色に飽きた挙句、強烈なる猟奇を求めて集つた、秘密クラブ的なつどいでありました。

勘兵衛の声につられて、それまで殊勝げに駄句をひねり、もつともらしく沈思黙吟していた人々は、池に放たれた鯉の様に、急に活気づいてザワ／＼と立上りました。

勘兵衛の手が、床間横の、床柱の窪みにかかると、正面の壁が厭なきしみ音をたてて三尺許り上にせり上りました。黒々と開いた密室への入口から急な階段が地下へ無気味に伸びております。

「一人……二人……三人……」

と彼は指で数えて八人、何時もの通り確めて一同を密室へ送り込むと、最後に己れもその階段から姿を消し、再び揚戸は何事もなかった如く壁に還りました。

ムーツと異様な空気の漂う、地下の密室に数本の八ツ目蠟燭が点されて、今宵の趣向に胸を躍らす人々の顔を、赤々と照らし出しております。

「さて皆さん、今宵はチト趣向を変えまして、目新しいのを、皆様にお目にかけますよう」

勘兵衛は云い終つて、一同の前に垂れ下つた黒幕の紐をサツと引きました。バラリと落ちたその場の光景に、座に居並らぶ人々はグツと息を呑み込みました。そこには一糸纏わぬ素裸の六人の女が、後手に手枷をはめられ、脚首には無気味な鉄鎖を引曳つて、恐怖と羞恥に身をくねらせていたのです。

勘兵衛は手許の革嚢をとり上げて、おもむろに口を開くと、女達の前に置きました。ふくろがうごめいて

「あッ、長虫——」

誰かの声につれて、その口からニューツと鎌首をもたげたのは、正しく纏れ合つた二匹の蒼白い鱗光を放つた大蛇でした。

サラ／＼と肌寒くなる擦音を立てて、五尺になん／＼とする大蛇は、女の群に這い出して行きました。

「女の匂いを求めて、大蛇は時を求めて参ります。一度もぐれば逆立つ鱗に二度と脱けない。雄蛇と女の争いは如何なものでふりましよう……」

余りにも淫虐な、常軌を逸した行為であるだけに、流石刺激になれた一座の者も、気を吞まれて、このグロテスクな戦慄の演出に、

目を叛けなくなる思いで、その癖息を凝らして魅入るのした。

唯でさえ無気味な大蛇が、しかも己れの裸身目掛けて慕い寄るその恐怖に、どの女も失心せん許りに悲鳴をあげ、儘ならぬ身をすくませ、鳥肌を立てて、狂気の如く悶えます。

いつしか大蛇は、一人の女の裸身にもつれ絡んで、チラ／＼と真紅の舌なめづりをし乍ら、穴を探つて腹から腰へ、ゆう／＼と鎌首を振りつつ、必死に太股をしめつける女の尻尾を擦る様に、無気味にその隙間へと、頭を下げて忍び込まんとして、蛇身に波を打たせてジリ／＼と鱗を逆立てて行くのでした。

「ヒーツ」と云う最後のあがきにスル／＼と……その瞬間、一座の中からパツと立上つた男の手が、電光石火、サツと女に近づくと、大蛇の尻尾をぐいつと引つ掴むなり、あつと驚く勘兵衛目掛けて、パツと投げつけたのです。

「あッ、何をする——信濃屋さん……」

バサリ飛んで来た大蛇を払いのけると、勘兵衛は一瞬キツと凄味を帯びて蒼白になりました。その間にも信濃屋と呼ばれた男は、今一匹のこれも女の首筋からふくよかな胸へヒシ／＼と巻きついて、豊かな乳房をベロ／＼となめづる大蛇を、ズル／＼としごきとると一振り二振り、孤を描いて勘兵衛の顔目掛けて投げつけました。

「ダ、誰だ、貴様——」

「信濃屋でのうて生憎じや。信濃屋はこうした、無惨な愚につかぬ劣かな交際いは嫌じやと申し……、いやこれは申しはせぬが、わしがそれと察して、チョイト来がけに入れ換つた迄の事——。今頃は木の株を枕にスヤ／＼お寝みじやろうて——」

「ウーヌ、さては氣付きおつたか。ヒヒヒ、うぬも唯の鼠じやある

めえが、知られたとなりや、生きては帰されねえ。覚悟はいいだらうな——」

「勿論、覚悟の上で参つたのじゃ、いいか勘兵衛、何もかも分つたぞそちが近頃この江戸中を恐怖に叩き込んだ、かどわかしの張本人である事も、中条流の妙真とぐるになつて、子おろしを脅しのタネに女達をおびき出しては、この地下の密室に閉じ込め、鬼畜にも等しき振舞いさせて、責めさいなんでは、奇を好み、漁色に飽いた亡者を集めて、これを見せ、多額の金を絞りとつて、己れの劣情を満足させ乍ら、あくどく儲けおる事もな——」

「ウヌツ、何をほざく。飛んで灯に入る夏の虫たあ、てめえの事。覚悟しやがれ。——」

「うるさい男だ。覚悟はとづくに定めている。浅草八卦占いの観々堂、も一つ素姓を洗えば、飛ぶ鳥落す田沼の親分と争つた平賀源内——。根つきり怖いと云うことを知らぬ男じゃ。よいか、ではそろく幕切れとするぞ」

「己れツノ」ぱつと斬りかかる勘兵衛の匕首を避けて、先生はサツ／＼とローソクの灯をふき消しました。漆黒の密室に男女の叫喚と死斗が渦を巻いて、それも寸時、スーッと一個所から灯りがさすとその戸口からドヤ／＼と、源六を先頭に、御用提灯、ガン燈をひらめかせて飛び込んで来た町方の一隊に、騒ぎはまたたく間に納まりました。

さらわれた六人の女達は、肉体の凡ゆる部分を凌辱され、玩弄されて、生々しい傷に蔽われており、中でも浪人の娘お俊は気が狂つておりましたが、兎も角も無事夫々戻りました。瓦版によつて、その真相が明るみに出た為、女達の其の後の生活は、恐らくみじめな

不幸を背負つて暮した事でしようが、身から出た錆でもあり、是非もありませんでした。これは後のお話。

大手柄を立てた源六が、浅草観音様に、先生を訪ねたのは、事件から数日後の事です。

「驚いたよ先生、まさかその山羊髯が附け髯だつたとは、全然知らなかつたよ——。信濃屋に当身を喰わして、マンマと化け込んで、潜り込んだのは知つていたが、実はその髯が氣にかかつて仕様がなかつたんで——」

「コレ／＼大きな声を出すな。髯をとると源内の顔がばれるではないか——。カチ源旦那さえこの髯に氣付かなかつたとはサテ／＼よく出来た髯であるわい——」

「全く左様で——。だがネ先生、女は魔性だネ。あの女医者の妙真つてアマは恐ろしい女だ。虫も殺さねえ面をして——」

「虫は殺さぬが、水児は相当に殺している。しかし兼ねての手配り通りうまく行つたな」

「妙真の裏庭のあづまやから、勘兵衛宅へ通ずる秘密の抜道のあることをにらんだ、先生の慧眼には驚きましたぜ——」

「なに、女中と話し込み乍ら、それとなく裏庭の辺りを探ると、あづまやの床下に、男草履が七八足、何に使うか知れないが重ねて揃えてあるじやないか。ピーンと来たね。男禁制の女医者に、男草履は無用の筈——」

「なに、全く左様で——」

気の早い蟬が、乏しい声で鳴き出す。初夏の風下り、こうしたサデイズムの事件にお構いもなく、境内には相も変わらず、のどかに鳩が群れ飛んでおりました。



男色の国、日本

男色とは男子同性愛の事であるが、しかし
 本来の意味から云えば、「男色」とはドイツ
 語の「ウルニング」Uring 即ち自己を女性
 的地位に置いて媚を同性に求めるものを云
 い、之を姦淫する者を「男風」即ち「ペデラ
 スト」Pederast と云うのである。けれども
 普通には両者を総括して男色と称している。
 男色は、東西何れの国にあつても、古から
 行われているものである。

法華経其他諸種の仏典に男
 色を説める文句が散見して
 いるところを見ると、天竺
 では、仏在世の以前より盛
 んに行われていたことが分
 る。

中国では、高祖が籍孺を
 愛し、衛の靈公は年少の彌
 子瑕に溺れ、武帝は李延年

に枕を定められ、大唐の鄭の莊公は、若年の
 頃、紅顔の子都を熱愛し、魏の哀王は、龍陽
 君と夜を共にしたことによつて、女乱がおさ
 まつたということである。

女ならでは夜も明けないという我国は、ま
 た男色の国として、幾多の艶話が伝えられて
 いる。口善悪ない人々に云わせると、信長と
 森蘭丸、某僧と美男子由比正雪などを挙げる
 ことであらうが、嬉遊美覽を繙いて見ると、
 白河院は東大寺別当敏寛の児童を召して寵し

給い、鳥羽院は、宰相中将信道に御思召があ
 つたと誌してある。

武人の世となつてからは、戦場へ婦女子を
 携帯するを嚴禁されていたので陣中で少年を
 愛して英気を養つたことは明らかな事実であ
 るし、徒然草には法師が男色を弄んだことが
 書かれている。そうして後代になると、この
 風習は街に流れて、一種の売笑行為となつて
 しまつた。文政天保の頃には、公然屋を張り
 帷をたれて所謂陰間としてさながら遊女の如

く男色をひさぐようになつ
 たのである。こうした大発
 展はどうしても我国でなけ
 れば他国に例の見られない
 ことで、我国を敢て男色の
 国と称するのも、徒らに筆
 を弄しての謂でないことは
 勿論であらう。

男色の起源

日本男色史略

朝倉支朗

我国に於ける男色の起源に就ては、実に諸説が紛々としてゐる。

古事記神功記を繙くと、既に男色に関係したようなところがある。然し確然としたことは誌されていないし神代のことであるから確かな根拠をつかむ事が出来ない。

本居内遠の賤者考に、「男色はいつの頃よりかありそめけむ。其始詳かならず。先は仏法渡来の後、僧の女犯を禁ずるより出しは自らの勢なり。俗に何の拠もいはずして空海よりなどというは、もとといふ伝うるところありてにや。凡そ僧徒のしはざあり。されど中世以後、応仁以来の乱世より、武家にも執する輩多く、其頃よりやゝ盛んになりたるも自らの勢なり」と誌されてあるのを見れば、仏道の伝来以後、中国より伝えられたものと解せられる。中国には古くから行われていたことが、歴然と書物に誌されているから、或いは我国は、中国の風習を習つたものかも知れない。そして後代になつてから、生理的行為にまで移らない行為即ち単に男が同性に親しみを感じた位のところを以つて男色関係にしてしまつたのかも知れない。

そうだとすると、我々日本人は、男色の生理的行為を中国人から教えられたことになる

のである。

男色大鑑は、誰も知つてゐる通り、井原西鶴の著で、貞享四年卯月正月に出版されたもので、例の調子で男色のことが艶めかしく書かれている。男色大鑑は小説であるから、考証とするには不適當であるが、中国の貴人の間に行われた例や、我国でも古来からあつたように書かれている。

僧侶の男色

確實な文献に誌されたところに依つて考えれば、我国で最初最も多く男色が行われたのは僧侶達の間である。「仏法渡来の後、僧の女犯を禁ずるより男色出しは自らの勢なり」と本居内遠が賤者考に述べてゐるのはその代表的なものである。筆者は、空海上人を以つて我国の男色の元祖とする意見には、ちと勿体ないように思えて賛じ兼ねるが、然し、生理的行為を伴う男色として完全な男色が果して中国から伝えられたと考へるなら、尤らしい説のようにも思える。何となれば、當時は中国へ留学する人といへば実に稀であつたのに、上人は永らく遊学し、単に仏教ばかりでなく、先進国のあらゆるものゝ研究をして帰られた人であつたから、或いは何かの拍子に

男色のことも耳にせられ、お土産の一つとして持つて帰られたのかも知れない。然しそれはともかくとして、当時、僧侶といへば総て独身であつたから、百人に一人か二人の高僧の外は、多く煩惱になやまされ、禁慾に耐えかねて、弟子の若い僧を愛したのであつた。

聖徳太子が執政遊ばされるようになって、仏教が愈々盛んになり、都は勿論、国々に大小の寺が建立され、従つて多くの僧侶が出るようになつてから、愈々男色は盛んに行われ殆んど公然の秘密とされて、僧院の中には淫らな風習が行われた。一般人民も、僧侶というものを非常に尊敬し、お寺に關することはどんなことでも非難するようになつた。たから、斯うした風習の行われていることは知つていても、誰一人として詮議立てするものは無かつた。そこで愈々僧侶の中には不徳の徒が出で、寺内の弟子僧ばかりでなく、美しい童子を往来で見ると、いきなりお寺に連れて歸つて慾をほしきまゝにする僧もあつた。そうした寺院内の激しい男色の風習は、修業するために入つてきた雛僧に非常な悪い影響を与えた。雛僧たちは、仏道への修業の苦しみよりも、師匠からの斯うした殆んど絶對命令的行為を順々とうけなければならぬ

ことがより苦しかつた。それがために、最初の発念を捨て、山を下る美しい雛僧が数多く見受けられたのであつた。

然し僧侶達にとつて、男色は、天理にそむく邪淫として在家出家の分ちなく諷めなければならぬものとはされていた。法華經、五戒相經、正法念經、十不善業道經、造像功德經、沙彌十戒儀則も、僧護經、阿含暮抄、四分律、五分律、僧祇律、有部律、十誦律、五百問論、瑜伽論などには堅く諷められているから、確かに仏道に背く行為であつたけれど、煩惱もだし難く、邪淫の快楽は、神聖なるべき僧院の奥深くで斯く盛んに行われていたのであつた。

武士の男色

次は、中世以後応仁以来、世が乱れて、武士が妻妾と遠く離れて戦場に幾星霜をくらすようになつて、少年を愛する風習が盛んになつた。小姓が即ちそれである。戦国時代の武将はそれ／＼愛らしい少年を馬側に侍らせていた。陣中のとばりの中では、妻妾と同じく枕頭に侍つていた。

森蘭丸は、人も知る如く才智溢れる計りの小姓であつて、その才を認められて、あのように信長に愛せられたのであつたが、然しそれ以上に二人の間には深い関係のあつたことは争われない事実である。武田信率、上杉謙信、大内義隆、其他戦国の武将は誰一人としてこの男色を以つて一つの職分とする愛らし

い小姓を持たないものはなかつた。小姓はそれがために、女性化して、或る場合は妾の如き嫉妬的行為さえ為すものがあつた。

小姓は其他徳川時代になつても存在し、妻妾に倦た殿の心を和けていたことは世間味知のことであらう。そのうちに、何時しか一般の民間に、この風習が伝つてきたのである。

そして男色は、純然たる、売笑行為となり江戸は霞町、芝神明社辺、京師は宮川町、浪花は道頓堀に、青楼軒をつらね、所謂男色茶屋には、美形の男子が宛かも女人の如く化粧して、その身を客の心の儘に任じ、西鶴をして「調達女には変ることなし」と言わせ、都下の遊客の心をそゝつたことは、芸妓や花魁と少しも変るところがなかつたのである。

【読者通信】

投稿歓迎・文通幹旋

東京のPL様へ――。

宿命で結ばれる者の気持を御推察の上、至急御通知乞う。
(大和T・S生)

貴誌七月号中のアブノーマル・レター及び

それに関する前々号の女画家の告白、並に責屋敷の二篇、洵に興味深く拝見した。更に七月号の表紙及び目次裏の写真版、美しき苦悶は驚異的なものと思う。但し製版により組み方が、肝心の中心を切り捨てゝいるのは残念だが、公開の雑誌であるからやむを得ぬことでしう。東京に於ては貴誌が余り書店に出ていないので遺憾、但し小生はさがして入手し

ている。次号以後を期待して貴書房の隆盛を祈る。伊藤晴雨の作品がレビュウ小屋のショールウィンドーに堂々と飾られている今日ですから、貴誌に於ても相当程度「責め場」をやつても大丈夫でしう。
(東京都内 Richard. Tolita)

◎ 私には奇譚クラブの一愛読者でございますが

七月号誌上の「同性愛者からの書信を拝見いたし勇を得てペンをとりました。私も他の方々と同じ悩みを持ち、日夜苦しんでいる者ですが、せめて私同様に苦しんでおられた方々と文通出来ましたらと思います。私は当二十一才の独身の青年です。現在自宅で商業にはげんでいますが、日夜孤独の中で淋しい人生を過しています。誌上では皆様の御名前がみな仮名になつております故、どうすることも出来ずにおります。どうか私にも御便りを下さい。

(山口・平井明夫)

◎

貴誌益々御発展の段お喜び申し上げます。小生今迄色々な雑誌を読んだのですが奇譚クラブが一番面白く、サド的マゾ的読みものが多いので愛読している様な次第です。と申しますのは、小生もマゾヒストの一人にてサド的女性と結婚致すのが、小生の夢にて二十七才の現在まだ独身で居ります。サド的女性又はマゾ的男性の方々と文通致したく存じますので紹介して頂けたら幸甚です。又小生の半生記も書いて見たいのですが、何分勤めの身にて中々暇がなく、又文章も下手なので書けない様な次第です。

(東京・中野安太郎)

◎

私は縛られた女の画、写真、文献を蒐集している一人です。嘗ては伊藤晴雨氏の物も集め、特にお願いして自分の好むポーズで画いて貰いました。あらゆる雑誌で縛られた女のあるものを全部買います。貴誌もどうぞ今後共責められる女で巻頭を埋めて下さい。特に女の美は全裸もさることながら、緋の長襦袢緋の腰巻の乱れです。そして縋て猿轡をはめて下さい。そして表情に苦痛、恥しさ、嫌悪の表情が出ていないと画龍点睛をかきます。私は夫婦生活でも妻を縛り猿轡をはめ、身をもがくの……この体験を一度まゝとめて投稿したいと思ひます。御一同の御健闘を祈る。

(金沢市 U 生)

◎

貴社益々御繁盛の御事御慶び申し上げます。私は奇譚クラブを毎月楽しみに拝読いたしております。本日七月号を求めました所、三村幾男氏作「夢性の美少年」を拝見し、三村氏の体験記がそのまゝ私の心に似かよつて居り同好の友が見つかった嬉しさに矢も楯もたまらず是非文通交際願いたく、御面倒ではございませんが、同封の手紙、宛名をお書き下さる三村さんへ御送り下さる様切に御願ひ申し上げます。

(西宮 桶谷 満)

「編集部より」 誌面の都合により一部分より掲載出来ないのは残念ですが、誌上匿名の分も通信のお取次は致します。封筒に切手貼付の上編集部宛御送付下さい。

◎

前号の本誌に同好の皆様方に御文通をお願いすべく読者通信に発表致しましたところ、本日までに編集部より廻送されて参りました私宛のおたよりが数十通に達しました。種々の御懇篤なる御教示、そして御鞭撻、貴重なコレクションを見せてやろうとのおたより等数ならぬ身の玲子をこれほどまでに御指導、御支援下さる方々の多いことに驚きまして、反面今さら乍ら私自身の勉強の足りないことをつくづくと感じた次第でございます。今までに御返事を差し上げた方もございますが、何分にも予想外の多数の為、一部の御方様にはまだ御返書も書けない始末でございます。女の身の悲しさ、こまごまとした用事に追われつゝ画を勉強して居りますので、今直ぐには参りかねますが、いずれ御返事差し上げたいと想つて居ります。その点よろしく御察し下さいまして、御返事の遅れますことをお許し下さいませ。

(喜多玲子)



男^ギ性^ナ的^ン女^ド子^リの^ル記

藤 安 節 子

「女子でありながら、その身体の状態が男子に於ける如く、骨格及び筋肉の發育が比較的強く、乳房小にして骨盤も狭く、喉頭が隆起して音声は太く濁り、その動作も活潑であつて女らしい優し味がなく、女子のなすべき裁縫、家事等を嫌い、喫煙飲酒を好み、且つ好んで男装をなすような女性がある。この様な女性を称してギナンドリール(Gynandriol) 男性的女子という。」

一

男色に対して、女色の世界がある。

かくいう私は女流画家である。モダン制作派の有力な会員であり、女流画家の第一人者と評されている。五十にちかい今日まで、独身をおして来た。すべてを芸術にさへげたと云つても、私も人間である以上、性欲にまつる苦悩がある。

私がいままで、一度も男に愛されたことがなく、結婚することもなかつたのは、ひとくちに云えば、私がいかに中性的だからである。その反動として、私が美しい女性にあられる気持は、非常につよい。

私の恋愛の対象は、いつも同性であり、すでに女学生時代、容貌こそ醜いが、優等生であることを利用して、美しい下級生に挑んだことも、いつさいでない。

ことに、絵をやるようになってからは、人物画専門で、裸体画習作のモデル女を対象とする職業上、ことさら、女体に興味をもつようになった。

或る大新聞社が発行している、週間雑誌があるとき、政治家、作家、画家、芸能人等、知名の未亡人、オールド・ミスに対して「貴女はいかにして、性欲を解決しているか」というアンケートを提出したことがある。

何しろ、失礼な質問だけに、解答者は僅か五指に足らず、それも、うまいことを云つたり、あいまいなことを云つて、お茶を濁しているなかで、敢然と「手淫、同性愛による」と答えたのは、私だけであつた。

じつさい、そのとおりなのである。またそれ以外に、解決の方法がないではないか。

私の家は、坂をのぼり、大きな邸宅ばかり並ぶ、閑静に山手にある。父が生きていた頃建ててくれたアトリエで、いまでは、アトリエの白いペンキも、ところどころ剝げ落ちてゐる。こんな邸町には、滅多に見られない、破れた板塀と、手入れのいきとどいていない生垣に、玄關から、すぐ洋風のアトリエの棟になつてゐる。

私はもう長いこと、たつたひとりで、自由で乱雑な、アトリエ生活をつづけている。

髪を短かめに剪つて、カールし、ズボンにブルース姿で、パイプをくわえながら、絵を描いていたり、胸をはだけてあぐらをかき、ビールを飲んだりしていると、男かと間違えられるのである。

じつさい、私は中性的で、性格もそうだが五尺四寸五分、十六貫の、外人のようなみごとな体軀なのにもかゝらず、胸は偏平で、かたちばかりの乳房の膨らみがあるだけ。大柄のなりもあるが、手足も男のように大きく且つ、毛深く、三日に一度は、髭を剃らねばならぬぐらいである。

そして、声もひどいバスで、つい、男のよ

うな口調になる。

万事、男のように振舞ふほうが、自然で、気分がよかつた。

生殖器だけは、女性であるが、私はものぐさなので用を足すのは、もつぱら立小便である。仕事をしているときは、便所へ立つのさえ億劫でシピンを使用するが、窓からとぼすことだつてある。

しかし、立小便といつても、素ッ裸でやるのなら、ともかく、男と違つて、われわれ女性には、ズボン姿では、とうてい出来兼ねるシロモノである。

私は巴里に遊学したとき、孤独のさびしさに堪えかねて、独逸製の、精巧な人工性器を買つたことがある。それは、男の陰莖にかた



どつた、ホンモノさながらの、ゴム製品で、あちらの女は、誰でもこれを利用して、もうばら自瀆を行うのである。

この精巧な、人工の陰莖を股にあてがえば立小便もらくに出来るのである。単に放尿器としても、誠に申分なく、私は外遊以来、ずつとこれを使用して、用を足している。

私は小用は到つて近く、写生や散歩に行く、よくこれで困惑する。辺鄙な山道ならW・Cはなく、女というものは、実に不便なものである。

ところが、私はますます男性化することに於いて、この人工の陰莖を利用し、辺鄙な場所はもとより、夜の町の帰り道などで、平気で立小便するようになった。便利なので、私はそれを始終、肌につけ、私の肉体の一部分

みたいになつてゐる。

また、私の長い孤独な独身生活のさびしさ暗い性欲に駆られ、幾夜も眠られないかなしさのなかで、この人工の陰室は、一つの不可能な恋愛を、無からつくり出すために必要だつた。

私はこの人工の陰室を利用して、自費を行い、自己の歓喜のために、かきたてられた未知の肉体からも離れ、空想裡の快楽の飽和をおぼえるとき、同性愛は私のべつな現実脱出となる。

二

百合子は私の前に、剃いたバナナのような真白い裸身を横えている。処女みたいに張つてゐる乳房、腰のあたりが大きく膨らみ、とても子供を生んだ女とは思えない、肌理の美しさである。

久しぶりに絵をはじめの喜びで、私の心も明るく平静さが漂つてゐる。百合子の裸身を前に、画布を走る木炭の音もさわやかだつた早春の日光が、アトリエの硝子屋根から、汎濫してゐる。

「きよりは、これでいゝ」

私は百合子に合図した。百合子は案外早く

ポーズがすんだので、いそいそとシユミーズを着始めた。均勢がよくとれ、かねがね描きたいと思つてゐた、美しい肉体である。

百合子は偶然、私が元町のギャラリイで出逢つた女だつた。私はその展覧会に「裸婦」の小品を三点ばかり出品してゐた。私は会場で、黒田画伯に逢い、百合子を紹介してもらつた。阪神沿線に住む有閑夫人であつた。

百合子のすばらしい眼と唇、唇の端から、耳へかけて浮きあがつてゐる官能的な頬のくぼみ、服のきこなしがうまくて、化粧のしかた、髪かたちが好もしく、頭のとツペンから爪先まで、一眼ですーつと眼のなかへいれながら、外線だけで結構、裸体を見る眼を養つてゐる私は、百合子をぜひ描きたいと思つた。その日、私は百合子を、ダンスホールへ案内した。私は百合子を抱いて、踊つた。万事男のように振舞う私は、男が女を抱くようにして、恋人を抱くようにして、百合子を抱いて踊つた。

私は百合子を、モデルにしたいと云つた。

「あら、駄目よ。あたし、小さいし、スタイルも悪いし、それに肉体美じゃないもの」

百合子は恥しがつたが、私は巧妙に、バナナの皮を剥くように、彼女のきものを脱がし

た。私が同性のゆえか、百合子はわりあい安心して、裸になつた。

私は同性の特権として、モデル女の中からだに、直接手をふれて、ポーズを矯正する。私は何度も、百合子の弾力のある乳房や、柔軟な腰のあたりに触れ、それから、いとも厳肅な顔つきで、かたちよく生えてゐる、かぐろい縮れ毛に、丁寧に、チツクを塗りつけた。私が男の画家のように、モデル女を口説くのは、いつも、一週間なり、十日なり、画の材料として、ぞんぶん費い果してからのことである。

私はモデル女には、片ツ端から口説いてゐる。なかには、気味悪かつたり、逃げたりする女もあるが、たいてい私は所有した。絵に描くだけでは承知出来ず、美しい肉体に復讐せずにはゐられないのである。

むかし、女学校の寄宿舎で、優等生であることを利用して、下級生を意のままにしたように、モダン制作派の有力な会員であり、女流画家の第一人者である私は、流行児であつて、どんな女でも自分のものに出来た。

私の「裸婦」のモデル女となつて、いまをときめく人気女優の津島千恵も、元伯爵夫人の山添あき子も、阪神沿線に住む幾人かの有

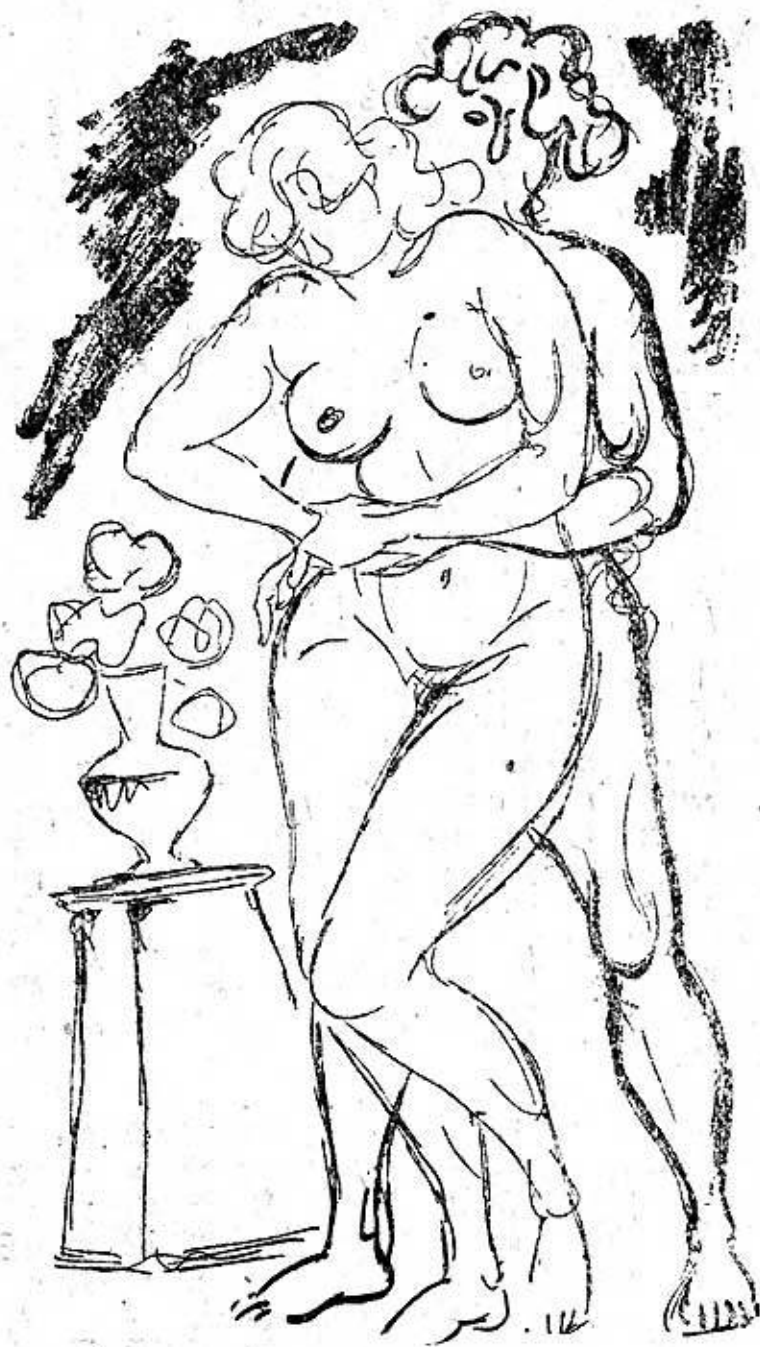
閑夫人、令嬢をはじめ、踊り子くずれのモデル女や、私が街で探して来た、何となく不安な生活に流されているえたいの知れぬ女たちと、その数はかぎりない。

三

百合子は有名な画家である私を、絶対に尊敬している。絵が好きで、豊富な知識をもっていた。二人で映画を観たり、仏蘭西料理を喰べにいつたりした。百合子のような女と歩くと、私は無意識に、男のようになってしまふ。私が万事、男のように振舞うことに、百合子はよく慣れている。

或る日、私が便所で、何気なく用を足している、扉がひらき、アツという百合子の叫び声がした。

百合子も用を足すために、便所へ来たのだろが、男便所で、平気で立小便をしている私を見て、さすがに、どきつとしたらしい。私はからだつきから、声から、口調から、歩きかたに到るまで、すべて男性化されてい



るが、まさか、こゝまでとは、百合子も想像出来なかつたろ。

私はちよつと狼狽したが、すまして用を足すと、男なのか、女なのかと、すつかり怯気づいてしまった百合子に、人工の陰茎を見せた。私が自分の手で、それを伸縮させてみせたのには、そのホンモノさながらの精巧さに百合子も眼を瞠つた。

私は百合子に、外遊のとき手に入れた、ロダンの「パウロとフランチェスカ」の接吻をはじめ、珍しい外国製の春画や写真を見せた。それは私好みの、変態的な性愛の類であつた。

最近の百合子の夫婦生活は異様なもので、もう長年月性交がなく、夫婦べつべつに手淫しているのである。

春画の影響が、百合子を昂奮させていた。私は何の前ぶれもなく、いきなりからだをかぶせた。防ぐ隙がなかつたにちがいない。百合子の顔は、逃げなかつた。私は両腕で、ぎゅつと百合子を抱きしめながら、口を封じた。異性さながらの

接吻である。それは、百合子にとつて、たしかに別な感覚の世界であつたろ。おそらくはじめて知る世界であつたろ。

百合子の美しい肉体、私の前にひらかれた両腰、唇のかんじも、抱擁と、そして、この……による、おのづからなる快感も、良人とはちがつていたろ。若し、百合子に他の男との経験があつたとしても、そのどれともちがつていたろ。

百合子は、不快ではないと云つた。嫌うどころか、むしろ、この世界が好ましいと云つた。この世界に、やがて、自分が深入りする

だろーという感じが強いとも云つた。

百合子はしきりに私を恋しがった。私と出逢う機会をつくらうとする。百合子ほどの美貌の女を、やすやすと所有し、夢中にさせる私の、性的技巧がいかに巧緻であるかがわかるであらう。

しかし、私はもう次の制作のことでいつばいなのである。私は今年 of 出品画にとりかゝらねばならない。私の新しい「裸婦」のモデル女である、桃子のことでいつばいなのである。

夢のように、ほのぼのと膨らむ処女の乳房少女期の匂うような無毛の丘、はだかになつた桃子という少女を、私は近所の銭湯で見かけたのである。桃子は隣家の大きな邸宅の娘であつた。

何故、桃子のような娘が銭湯へ来るのか、ちよつと意外であつたが、やはり戦後の緊迫した生活が原因しているのであらう。隣近所と交際せず、世間のことに関心をもちぬ私はこの美しい少女にもさして氣にとめていなかった。

混みあつた浴槽とちがつて、開店間際の湯は、豊かに、きれいに澄み、洗い場で誰かが背中を流しあつてゐる程度の閑散さだつた。

私は湯の中に浸りながら、ぼんやりしていた

そのとき、桃子は手拭いを前にあてて、湯殿に入つて来たのだつた。夢のようにほのぼのと膨らむ処女の乳房、少女期の匂うような無毛の丘、桃子のその肉体の発達の見事さはどう大人の世界に属していることを告げているのだつた。桃子の若い、すこやかな肉体から、私はふしぎな制作慾をゆすぶられたのである。

桃子は私と一緒に浴槽に沈んだ。銭湯の白いタイル張り、ところどころ剝げ落ちてゐるが、内部は青いタイル張りで、浴槽の湯はあざやかな緑であつた。青い湯の中に、桃子の膝はかなしいほど白く、桃子の白い女のからだが、ふつと浮きあがつてくるような、せつないニュアンスだつた。誰もいなければ、私は湯の中で桃子を抱きたかつた。

「背中を流してあげよう」

私は桃子のからだに触れてみたくて、洗い場で、桃子の背中を洗つた。背中は白くて、つるつるして、幾分かたい感じがだつた。私は桃子のからだを、石鹸の泡だらけにした。彼女は私に甘えて、子供供していた。ひとが見れば、母親と娘のように思われたにちがいない。

しかし、私は何ともわからぬ、桃子の純潔にふれてみたい衝動をかんじていたのだつた。私は桃子をうんと可愛いがりたい。接吻したり、抱擁したり、そして、まだ無毛の丘にもかゝわらず、私はこの純白無垢の少女を汚してしまいたい、危険な欲望でいつばいなのであつた。

私は自分の不逞な此の欲望が激しい奔流となつて身体の中を駆けめぐるのが感じた。

シミ一つなく汚れない裸身が自分の思いのままにして、自分の手によつて彼女が始めて性の開花を遂げる様を想像した。

この狂いたくなるような私の妄想が現実にかえつた時、私は桃子をカンバスの上で思うまゝに虐め、汚し、蹂躪しようと思つた。女流画家として名の知られた自分の願ひであつたなら、最初は拒んでも結局は承諾するに違ひない。私は晴々とした氣持で、桃子の真円い肩の上から湯をかけていた。

明日は正式に桃子の両親にモデルの件について相談しようと思ひながら……。

(おわり)

x x x

お尻の美学

波多野 新



お尻——というと、女のことであり、また女を連想するのは当然のことだが、一般にお尻の大きい女は性慾的だといわれている。「それでしょね、あの女はお尻が大きいんですもの」

人開が進化したものほどお尻は大きいというのは、学説上証明されている。

東洋婦人と西洋婦人とは、西洋婦人の方がずつとお尻は大きい。これは衣物の関係や、運動其他伝統上からきているもので、日本婦人が一朝一夕で彼女等にまけ

とすぐこう云う。全

く臀部の大きいということは、性慾と密接の関係があるものだ。そうして、臀部の大きいのは文明婦人なのだ。野蠻人や、未開地の婦人ほどお尻は小さい。

ないような大きなお尻の所有者に

なることは、なか／＼むつかしいのである。お尻の大きな女はお産も楽である。つまり骨盤が大きいからだ。私の知つたある細君で、平素の栄養は普通以下といつていくらいによくはない。それが妊娠したから、これはてつきり難産だぞと思つていたところ、事實は案に相違して、楽々と安産した実例がある。尤もこの女は丈も普通の人より高く、日本婦人としては先づ大きい方だが、何しろお尻の大きいといふことは有難いもので、少々栄養不良でもお産には影響はないようだ。

二

前述のように野蠻人、即ち下等民族は文明人より骨盤は小さいもので、それはまたお尻だけでは男女の相異さはつきりしないのである。例えば中央アフリカの数組の種族の女は、後ろから見ると殆んど男と区別がつかない。アラビヤの女は比較のお尻は大きいけれども、ヨーロッパの女のように発達してフツクリした丸味がない。人間は進化するに従つて骨盤がだん／＼発達したのである。男より女の方が大きいので、女の方が進化しているという理窟もたつが、それは出産という大役があるため

に、造物主が女のお尻を大きくしたので、男との比較論はまた別問題である。

三

将来は人間の肉性が殆んど消え去つて、純粹なる理性ばかりになるであろうという学者がある。彼等のいう肉性とは性的情慾即ち性慾を云うのである。しかし、この種の考えは何等の根拠も有していない。女の骨盤は将来ともだんだん大きく拡くなつて行くというの

が、一般学者の定説である。それはちやうど胎児の頭部が将来はだん／＼大きく発達してゆくので、

それに従つて女の骨盤も正比例的に大きくなつてゆかねばならないことになるからだというのだ。そこで、前言の如く、骨盤即ちお尻の大きいものは性慾も強いという論法になると、右の学者の説は根本から覆えられてしまうことになる。お尻は大きくなつてゆく。しかし性慾はなくなるだろうということは、どうしても考えられないことである。

我々は劣等民族に於ける性的情慾について、あまり多くを知つていないが、彼等の性的行為は多くの場合、甚だ自由であるけれどもその性的本能は甚だ強烈なもので

ないということを示す多くの証拠が、学者によつて挙げられている。恐らくは高等人種即ち大なる骨盤を有する人種は、殆んど常に最も強い性的衝動を有する人種であるであろう。文明が進むにつれて刺激が強くなり、性的衝動をそれられる機会は未開の土地より遙かに多い理由を以てしても想像はつく。且つまた文明につれて畸形が多くなり、嫌厭の情は激しくなつて行つて、遂には性を呪うような手合も出てくるのである。

四

こうした人間は例えよい健康を

有しようとも、例え高い知性を有しようとも子孫をのこしてゆく傾向の人間ではない。子孫をのこしてゆくに最も適した人間は、大きな骨盤をもつ人間である。骨盤は性的情慾の大なる中樞の座であるから、骨盤の発達及び骨盤に於ける神経と血管との分布は性的情慾が大なる高まりをひき起すといわれている。同時に脳中枢の働きを自己の目的のために服従させ、或いは利用してゆくから生殖はある度合までは制限せられ、たとえ性的情慾が強くなつても、知的活動のためある度合までは釣合がとれてゆくのである。

一

「私は裸体美と言われるけれども、同性の裸体や裸体画、写真等は羞恥を覚えて見ることを好まない」

そうね、そう云うことを言うお友達はいですワ。私も同性の裸形を見て羞恥を覚えることがあります。いえ、羞恥を覚える

時の方が多いかもしれませんワ。

しかし、「見ることを好まない」はどうかしら？。あやしいものですワ。女つて、案外こつそり同性の肉体を観察しているものですよ。鋭く、メンミツに、注意深く……案外なものですワ。口は重宝と云います。

では何故に羞恥を覚えるのか。と、反問された時、何と答えたらいいでしょう。

私は今ここに哲学的に、心理学的に裸体崇拜に就て書こうとは思いません。ロジカルに裸体讃美を書いたのでは、私の文などは振り向きもされないでしょう。ざつくばらんに言うのです。

私は裸体讃美者です。羞恥を覚えるのは裸体そのものにはありません。その答は皆さん自身が持つてゐる筈です。勿論私も羞恥心はあります。人間ですもの戦後の道徳的荒廢は羞恥心の喪失とその回復がスローであつたこと……おやおや道徳ですつて。

むつつり助平。

と言う言葉があります。私などは案外道心ケンゴな女なのかもしれせんよ。

公正であり、客

観的であつて、銭

湯や海水浴場でこ

つそり同性や異性

の肉体を、時には皮肉に、時にはセンボー

をもつて、又は嘲笑的に見るようなことは

しません。概して同性の多くがそうである

ことは悲しい事実です。悲しい性です。銭

湯であの娘は処女を失つていないとか、あ

れは妊娠したとか、そんな風にししか肉体を

見ることに出来ない人々の羞恥、その羞恥

に至るところにあります。

女性側より見たる

裸体狂崇に就て

二 俣 志 津 子

私は残念ですけれども銭湯へは殆んど行きません。それで同性の裸体を見る機会是非常に少いのです。月に一度程行くことがありますかしら。そして思うのです。ヌードフォトに写つてゐる同性はやはり選ばれた人々だな。つて。美しい、均勢のとれた同性は案外少いものだと感じさせられる

素晴らしい肉体でしたでしょう。処女でも、幾人も子供の居る女房のように乳房が豊かなチエ。

八月の初めの梨「入雲」のように初々しい君代——彼女等は町の銭湯にはいないのです。私はいつでも彼女達を見ることが出来ます。ふいつと、越後地方へ旅行する。

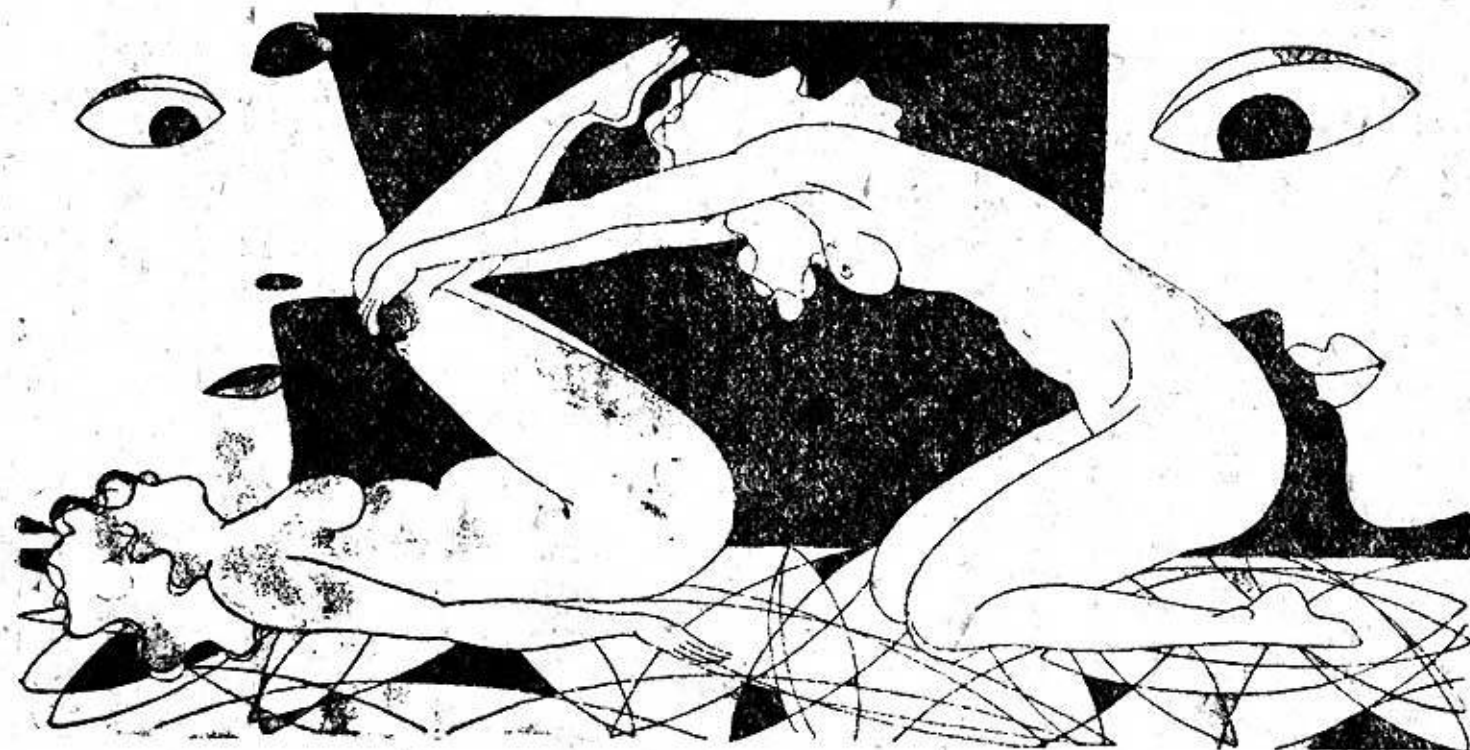
農家へ泊る。風呂が湧く。若衆は勝手間の囲炉裡を囲んで、娘達が風呂に入るのを眺めている。雑談をしながら、柴を折りたきながら、私も彼女等の裸体を眺める。川岸で水浴

のです。銭湯ではむしろ男達の高声に魅力を一まあ、これは肉体讃美論ではないですわね。いやな声もありますわよ。

大戦前までは信濃川流域の農村では、夏男も女も素裸で水浴をしたものです。疎開者が入つてから禪をしめたりシユミーズで泳ぐようになりましたが、かえつて変なものでした。その頃の農村の同性達の何と

している姿よりは健康ではない。しかし、何が羞かしいことがあるのでしよう。

ストリップ等で私も羞かしいと思ふことがあります。がそれは女体そのものにあるのではなく、若しそのストリップが男性であつても目をそむけたくなるであらうと思われる時です。私の観た限りでは、ストリップの肉体が「美」と言えるかどうか



は疑問で、むしろ裸形の貧弱さにこちらが哀しくなることが幾度もありました。勿論ストリップは如何に芸術と言つても興行ですの「ビ」を呈出するのではなく「コビ」を売る場合が殆んどで、舞台に浴槽を備えたストリップも観ましたが、騒いでみに行くほどのものではないでしょうね。男性つて、案外ウエているのね。

やはりフォトですワ。特に奇譚クラブのフォトは素晴らしい。お送りしていただいた中で一枚だけ初めて拝見した構図のものが、あり、もつと様々な姿態が欲しいと思つております。フォトでしたら、あかずに、誰にもさまたげられずに、いつまでも見ていただけます。羞かしい？ さあ、そうとは感じませんワ。その構図の手の位置、脚の型全体の組合せ、そのフォトにはリズムはありませんでしたけれど、フォトの中にもリズムがあるのです。ハーモニーがあるので。いいフォトにありとやはり興奮しますワ。もつといいのを！、もつといいのを！と、夢中になつてしまふのです。このフォトはとに角いいセンスを持っていますわ。おだてるわけではないのです。本当に感心しているのですよ。こんな姿態をよく

とれるわ。

同性の陰毛ではない感じ（私の好みかな？）の悪い感じのとがはつきり別れているのです。異性のは、フォトで見ても実際でもいいですわ。但し、ペニスに困るの。如何にも能のない無知な姿に見えて——まだフォトでも実際でもその効用？ 威力？ 利用価値？を見ておりませんので仕方がありませんわ。どなたか私が結婚する前にせめてフォトでもいいですからその活躍のをお見せ下さいませ。それも沢山！ 慾張っているでしょう。助平ですつて？ フォトを見て何で羞かしむことがありましよう。性交の姿態だつて結構じやありませんか？ 元来私達女性は性交崇拜者なのですよ。自からバイカイ者たることを認めよです。いくら否定してもだめです。男性よりもむしろ女性の方が性の秘密をのぞきたがるものです。多くの女性は自からを知らないのです。知つていても照れがくしをする。嘘をつく交合するのが好きなくせに、好かないと云う。

そう云う同性は「直接、且つ具体的」が好きであつて、喜ばしくて、少しも羞かしなくむしろオクメンもなくて、「美」を

觀賞するのが羞かしくて好かないのであると判断されます。(ゴメンなさい。同性の方々)

同性のヌードフォトや裸体画をいちいち羞かしがつていたり、婦人をブジョクするなどといきまいていましたら、美術展にも画廊にも行けませんわ。

私は若年の男子に対する裸体狂崇などしませんワ。裸体は女性に限ります。女性は誇るべきです。大ていの同性の裸体はフォトにも画にも向きませす、街を歩いていて行あたりばつたりに会った女性をとらえて裸にしてごらんない、あなたは感心しますわ。何か新らしく発見するでしょう。しかし、男性はダメです。ギリシャ時代以後男女は急速にスイビしつあります。地上に最後に残る者は私達女性です。男性と女性の裸体を比較してみても私はそう思います。私が男性の裸体を見たことがありますかつて！美術展、画展はまあ一応除外しておきましよう。そして、見ましてよ。海水浴場で？いえいえ、海水浴場なら戦時中千葉の谷津海岸の男子脱衣所がまる見えの場所があつて、子供の私はプラプラ動いたりするペニスを面白がつたものですワ。女学生時

代にはペニス恐怖症と云う言葉をあみ出して流行させましたし。

見たのはフォト。がっかりですつて？私はペニスの話をしていのではないのですですからそこに局限された話は今日はやめておきましよう。話せばいくらでもあるのですのよ。

一一

私が色気付いて、所謂思春期のきざしをその肉体の一部に備えてから男性の裸体を見る機会が案外ありました。勿論、全裸、すつ裸。私、お風呂屋の娘ではありませんのよ。お風呂屋なんか番台に坐つていたつてちつとも面白くありませんわよ。カマの方の小さな出入口は二寸四方位なのぞき窓があつて、(男女両方に)様々な姿態を間近に見ることが出来ますワ。股間でシャボンをやたらくしやにあわだてていたり、年の頃の少年がむきになつて前をかくしていたり。そんなの見たわ。

いけない。又、こんな出来事を書いてしまった。

男の方の裸像の中にはよく女のような肉付の方を見かけますワ。太股だとか、腰だ

とか……如何にも柔い感じで、それで股間にぶらぶらしているのを見ると、何だかそれだけが余計なものに感じる時があります。おかしいです。何だか滑稽なんです骨格や肉付が女性的である場合本当にそうですワ。何のためにあんなのかしらつて考えることがあります。

しかし、とに角、それは不思議なのですワ。女性に真似の出来ない芸当！手足以外にあれ程動く部分は女性にはありません。尤もそれは意志の力ではどうにもならないものでしょうね。男の方の中には、私達女性に会うとすぐに(？。それとも反射的な自然現象かな？)人が居りますけれど、愉快だわ。チョーコク家や画家達は何故にこれの……男の裸形をつくつたり書いたりしないのかしら？。百姓息子が……自分の肉体の部分をつくりだすことも出来ず持てあまして私達の前から逃げ出したことがあつたわ。私達大いに笑つた。可愛いわねつて。

銭湯で男湯を見せてもらったの。勿論男達には内緒で——。そして男達が前をかくして歩くのは実にふさわしくない姿だと思ひました。似合わない。中には握つて歩い

ているのじゃないかと思われるのをしばしば見掛けましたけれど、男つてそんなことする必要はないと思うわ。いいじゃないの。そんなことしなくても。別に曲つてゐるわけではないんでしよう。

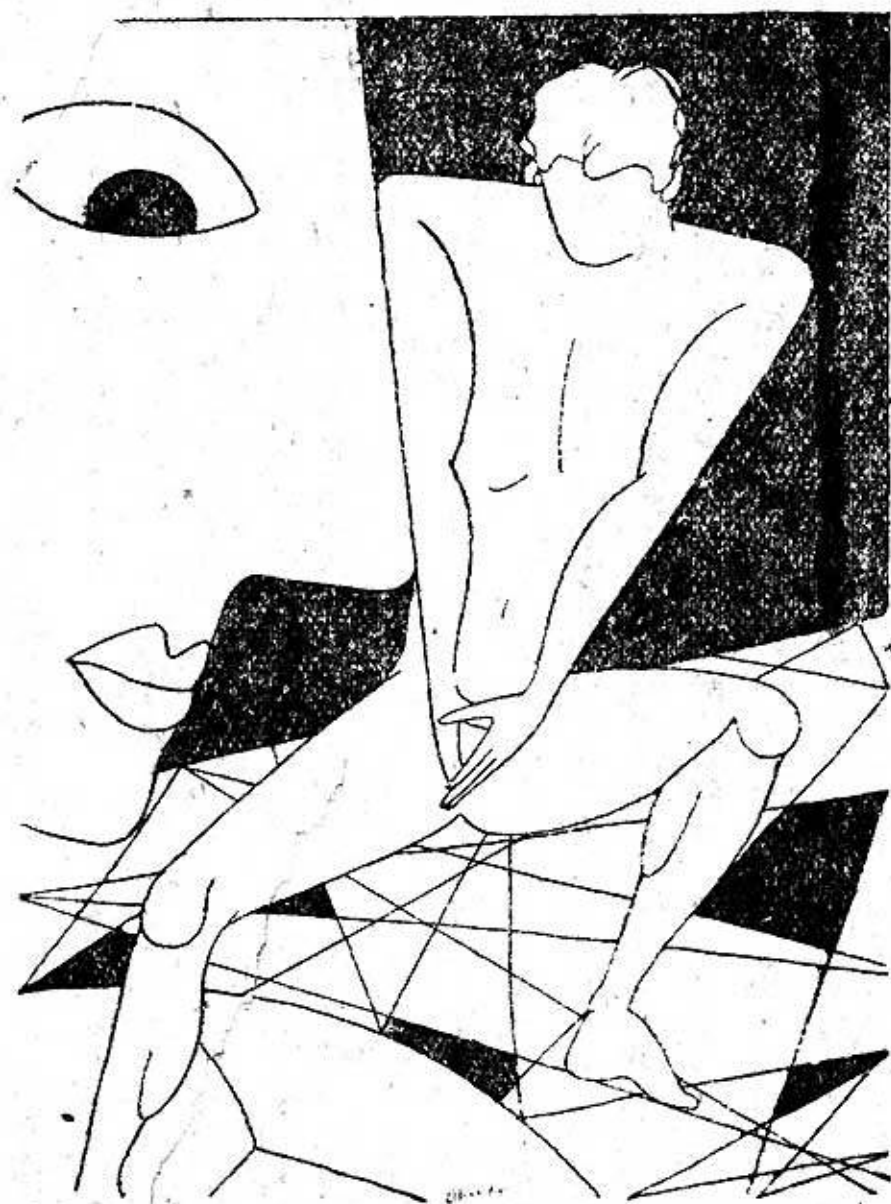
銭湯で男達を見て、その裸体を見て、様々な肉付きに感心しましたわ。脚だけが女性的なのや、お腹のあたりが全くそんな風に見えるのや、肩がそりなのや、動作がそりなのやフクザツですわね。……如何にも女性的な方がその……皮をむいて、セツケンでしきりに磨きたててゐる。しかも私の目の前で私の方を向いて（多くの男達からは見られないような姿勢で……）それは柔かそうでしたわ。一寸私もきれいに磨いてやつてみたいような……あらでも一番興味を感じるのはそのだけですよ。キタナイのはゴメンですよ。何となく薄汚いのが多いのですけれども毛を剃つてもダメなんでしょうね毛がなくなつたら奇妙でしょうね同性の方はなくても感じの方が多いのですけれども。男根崇拜じゃあないけれども、私の男性裸形の興味は

それですよ。そして、それは画やチョーコクになるのもうダメなんです。その魅力はあくまでも実物にあるのです。実物の裸体にくつついてぶくしらてゐるところが妙味寝ている男性の禪からちよこんと顔を出していたり、大儀そりに曲つてたれていたり——一寸女にはない風情ですよ。小さな彼は仲々愛嬌があるんですのね。健康な肉体には健康な男根宿る？。そうとばかりはかぎらないでしょう？

男性の裸体を見る時は、裸体美なんて見るよりも興味を男根に集中？

困つたことを書きちやつたな。

男性のヌードフォトや男体の裸体画なんて殆んどないでしょう。チョーコクには多いですけども……実際、現実には素晴らしい男性なんて見掛けませんのよ。女性是谁でも画になります。フォトになります。が男性には何か条件があるように考えられます。何かわからないけれども——。



お角力。あれはもうダメ。EXEと云うアメリカの雑誌に藤田山と八方山の様々なポーズが出ていましたけれども、よくありませんわ。何となく片輪みたいで——。女ならそれでもどこかセックスアツピールがあつて——かえつてそれがいやらしく醜く見える場合が多いのですけれども、男性美と云え

やはりスポーツマンね。

べつに男性の裸体を見たつて何でもないワ。

「美を鑑賞する」と、「裸体に興味を持つ」とは違うのですもの。心理的にも

オットー・イワニシゲルがこう云つたのです。人類には男も女も居ない。あるものは男性的状態と女性的状態だけである。とまさに至言です。肉体のごく小部分の相違をもつて男と女にはつきり分けてしまうのは不合理だ。つて云うの。成程ね。と思うワ。ガラガラ声で、髪が短かく、骨つばくて、乳房が小さい人間が、たゞベニスがないだけで女と規定される。活発で、男の仕事をどんどんやり、子供なんか産みそるもない——。男に就ても同様ですワ。

女みtainな肌、肉付きの男、いるワね。

私、なんでもいいわ。たゞ貴相なのはダメ男でも女でも。豊かなもの、瑞々しいもの、逞しいもの、いいわ。私、同性の裸体に目をそむけない。男性の裸体にも目をそむけない。私は直視する。美をそこに発見しようとする。そして失望する。そして更に求める。あゝ。つまらないことばかり書いて

しまいました。書きついでですのでもう少し書きますワ。裸体で最も親しく見るのは

肉身のものですわね。母の私を見る眼は、人形や女王や美しいものを見る眼ですワ

夜半、ふいつと母の手が私の肉体の一部をおさえて、さぐつていような——で、眼をさます。母はまだ若いのですのよ。乳房

も豊ですし、時にはそこへ顔をうめて温かさを吸取る。まだ廿才ですもの、オッパイ

がほしいですワ。私、そのせいではありませんが母には無条件に降参してしまいます

美を鑑賞するとか羞かしいとか言っている暇がございせん。除外例ですワ。母と父

の性行為も見たことありますけれど……醜いとかいやらしいとかでなくて、わけもなく興奮させられましたわ。その時も母の方

が素晴しかった。美しい受難者みたいで——。

苦しみを受けている者、特に女体の美くしさは別ですわ。奇々七月号のグラビヤ、

まだ合意的なものを感じさせられるものもありますけれど……ちよつといいじやないの。

とに角、裸体美を理解出来ない人を理解

できませんワ。何が羞かしいのですの？。ど

こが好きませんか？……私

のこんなざつくらんな放言？など研究対象になどなりません。いづれもつとま

とまつたのを書きますわ。たゞあたえられ

たテーマ、あたえられた紙数に私の意見のはしくれをちよつと書きなぐつただけ。御

無礼はお宥しを——、無礼もヘチマも私はハダカのニクタイのライサン者。よろしく。(終り)

北 濱

湯川胃腸病院

院長 湯川 永 洋
副院長 三 浦 洋

大阪市東区今橋三丁目
電話北濱②922・6057

M と S

岡田 咲子



京都の春

嵐山電鉄から流れる様に、はき出されて来る桜見物の酔客達の声や足音も、だいぶまばらになつた頃、福島茂は、顔なじみの「バーカサプランカ」でマダムを相手に、世間話を肴に、チビリチビリ、ウイスキーのグラスを口にはこんで居た。

「福島さん仕事終つたの？」

「うん、次の古い組がたつまで一休みさ」

「いいわね。映画会社の人はい」

「でもないよ。よそ目は良く見えるのさ」

「きれいな女優さんを相手にして働いて終つ

たら二ヶ月も休まれちやあ。月給をただもらつてゐたいなものね」

「女優なんて、全然よくないよ。なあ、マダム、そんな話より、何か面白いスリル満点てな事、ないかね」

「あつたら映画脚本にする？」

「すると、脚本家なんてな奴は、自分の経験した事を、色づけしては本にして居るんだよ。丁度ね。絵かきが、モデルでデッサンして構図を決めるだろ。あれだよ。脚本家も自分の経験談を本にするのが一番楽だし、仕易いのさ」

「とかなんとか言つて、私になんとか口にし

かせ様として、うまいね。さすがは、映画監督の卵だけあるよ」

マダムは、だまつて電話口で何番かへ、ダイヤルを廻して、福島をチラツと見下してウインクする。

「もしもし西村さん、私。先日はどうも、如何でした。ええ、あーそう。今夜どう？ええうちの良く知つてゐる人。スリルを味わいたいんですつてさー」

又、マダムは福島を見てウインクした。

「そう、じゃ、これから一緒にーええ、大丈夫、よ」

福島は聞きながら考えて居る。マダムが関係して居る、秘密倶楽部が有る事は会社の者も口にして居るが、残念ながら、又こんどでうまく逃げてしまふ。今夜は会社の奴たちを出しぬいて秘密倶楽部の見物も出来るかも知れない雰囲気、帰つても仕方がない独身者の福島は、心の中で張切つて居る。羽織を着換えたマダムが出て来て

「本当に行く気なら、二三日、泊まる積りで行ける？」

「御馳走してくれるんなら、一生いても良いよ」

「えらそうな事言つて、明日になつたら、真

青になつて逃げてこないでよ」

「分つたよ。何処だい？場所は——」

「かくごが出来たら、連れて行つて上げるわよ」

マダムは先になつて、扉を開いた。

待つて居た紙片

「喫茶にしむら」と染めぬいた甘党屋の、のれんをくぐつて中に入つた。二三組のアベツクが、おしることをたべて居る以外、だれも居ない上品な店。マダムは女の子に、なにか小聲で話しかけて居たが、うなずいた女の子が、ちいさな紙片をマダムに渡した。読んで居たマダムが

「円山公園の、静香と言う甘酒屋さんで待つて居るそうよ。洋服の胸に、白いカネーションつけた人がそうよ。カサブランカから来たつて言えば良いわ。じゃあ、ごゆつくり、さよなら」

なるほど秘密倶楽部と、言われるだけあつて手がこんでるわい。感心しながら、歩いて二十分とかからない円山公園まで「どうせカサブランカのマダムが言う所だ。未亡人の遊び相手になるぐらいが関の山だろう。などと考えながら、夜の四条通りを足早に歩いて行

つた。この時、馬鹿馬鹿しいと思つて、止めたら良かったのかも知れない。だがそれには余りに「静香」で待つて居た洋装の女は美しすぎた。

十二三分後、福島は、その女の前に座つて内心、その女の、ぬれて居る様な、うるんだひとみ、張切つた胸のふくらみ、組んで居る美しい脚の線、等を見て、予想外の人物におどろいたり、あきれたりして居た。

そして——

その女は静かに

「お供願えますか？」

「ええ、もちろんですとも」

「そう、うれしいわ」

につこり笑つて、福島をうながして、暗い公園の道へ出ると

「一寸、お待ちになつて、車よびますから」

「じゃ、僕が——」

「いいえ、私の車ですから——」

笑いながら、暗い道を小走りに去つた女の後姿を見送つて

「すごい。何者だろう。女優かな。未亡人かな。それとも、マダムだろうか？」

福島の判断では、つきかねる女には、ちがひなかつた。

考えて居る福島の前に、流線型のニューカーが止つて、その女が

「どうぞ」と扉を開いた。外国製の香水の匂いが、ぷーんと鼻をついた。静かに自動車は走り出した。しばらく、だまつて居た女が「これから、私が、する事、言う事は、なんでも服従して下さいますか？」

「承知しました」

「では第一に守つていただくことは、私の名前を、せつたに聞かない事。その代り、お呼びになる時は、あなたのお好きなお名前前で呼んで下さい。だから私も、あなたのお名前私の好きな名前で、お呼びしますわ。それから第二に、住所をおさぐりにならない様に。第三に、今後再び、あなたには、お目にかかれない事。この三つが守つていただくことなの。あとは、今夜から三日間、あなたは私のもの。良い。お分りになつて——」

「もし反則したら？」

福島が笑つて聞くと、女も笑つて横目で、福島の顔をにらんで

「さあ、それも私の思う様にしますわ」

目で笑いながら、ハンド・バックを開いてハンカチーフを取り出して

「一寸の間、目かくしするわ」

福島が目には布をかけ、ぎゅーつと結ぶ。

「それから両手をうしろへ廻してちようだい」

言われるままに、うなづき両手をうしろへまわすと、細いバンドの様なもので、縛られ両足もそろえたまま固く縛られてしまった。

「嫌にげんじゆうですね」

笑いながら言う福島は口へしなやかな女の手が、のびてふさぐ。

「でも、こうしないと、男の方は不安なのよじや嫌でしょうけれど、この布を口へお入れになつて——」

笑い声がして、福島は鼻をかるくつまむ。

一寸口が開いた中へ布がおしこまれ、その上から、にほいの良い布で、猿ぐつわがはまされてしまう。

「それから、外から見えない様に、私の上へ頭をのせて横になつて」

言いながら、福島は顔を、弾力で、はちきれそうな、ひざの上へおせて、横にしてしまった。

そして、そと耳に口をよせて

「私、あなたを茂さんとよびますわ」

はつきり自分の名前をあてられて、おどろいて体を、もががせたが、おさえる様に、

「駄目。静かに。おどろくことないわ。名刺を一枚拝見したの。あなたは、なんてよんで下さる？まあ、まあ、お口をふさいでい御免なさい。あとでゆつくり、うかがいますわ」

福島は額へ女のくちびるが、軽くおしつけられるのを感じた。身動き一つ出来ず、全く自由をうばわれた彼は「どうにでもなれ」と思つて居た。

自動車は何処を走つて居るのか、全然見当がつかなくなつた。外の騒音が聞えなくなつたのは、車は郊外、それも舗装の国道を、相当なスピードで走つて居る様な気持だつた。

「京阪国道か、山崎街道か」

と考へて居ると、女は一寸きびしく

「あなた、京都の土地、よく御存じの様ね」
言われて、首をふろりとしたのを、おさえられて

「あぶない、あぶない」

女は笑いながら、猿ぐつわの布を少しづらして、その上から、ブーンと鼻をつく揮発性の薬くさい布を強くおしつけて

「しばらく、いねむりして——」

さすがに、あわてた福島のもがく体を、抱く様に、布をおしつけたままにして居ると、

もがいて、居た体から、次第に力がぬけて行つた。

かいでは駄目だ。本当にねむつてしまふぞと思ひながらも、鼻口をつきさす様な、においの中で、福島は、女の体の中へ、引込まれて行く様な感じがして、そのまま何も分らなくなつてしまった。

——秘密倶楽部——

福島は、目がさめた。頭が痛む。起き上るに起きられず、見るに見られず、やつと自分は、まだ縛られたまま居る事を想ひ出した。でも自動車の中でない事は事実だ。素晴らしいベツトの上へねかされて居る事は間違いない。一体何処なんだろう。何故、縛つたまま放つて置くのだ。余り、スリルとサスペンスが有りすぎる。むかむかして居る福島の耳に女の笑い声が聞え、室が明るくなつたのを、目かくしの上から感じた。又女の声がして

「仕様がな。エスの方へ先に廻すわ。でも余り荒つぽく、あつかつちや駄目よ」

「分つてゐるわよ」

二三人の女の音がして福島の体は、両手両足を持つて、はこばれて行く。

エスの室

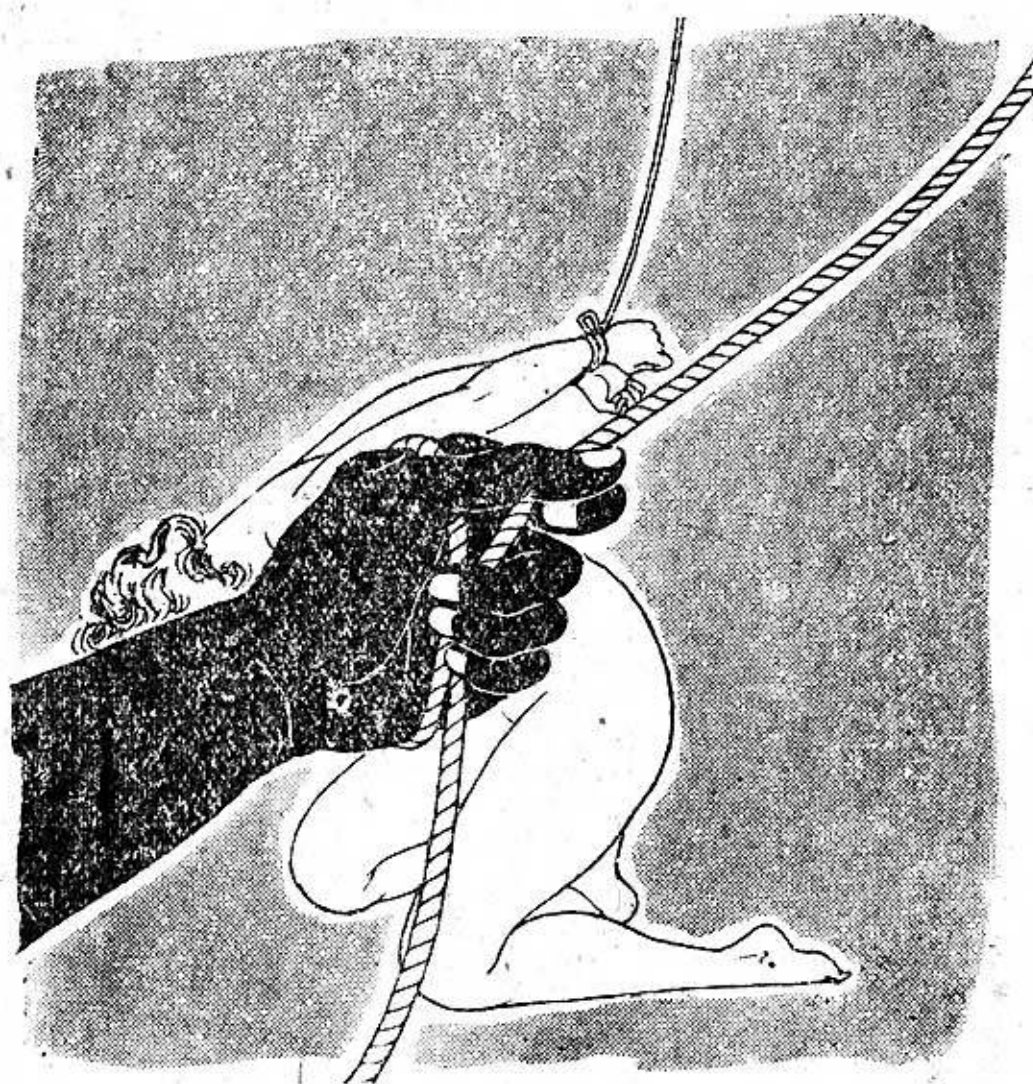
「苦しかつた。私がトランプに勝つてS組の

勝だから、
あなたの体
は、先にS
組のものな
の。S組つ
て言うのは
ね。今に分
るわ」

笑つて居
る女。先刻
の女より、
もう一倍美
しくした様
な女。混血
児かな？と
思う様な、
顔。均整の
とれた、し
まつた体。

「これから、遊ぶのよ。面白いわよ」

縛られたまま、椅子に座らされて居る福島
のそばへ、女中なのか、給仕なのか、そんな
風の女が二三人出て来て、彼の体をおさえつ
ける。縛つたバンドを解き、腕をおさえて、
上衣を脱がす。ズボンを脱がす。ワイシャツ



洋服を脱ぎ、ブラジャーも、そして、パンチ
ーズまで脱いだ全くの裸体で手に細い竹のむ
ちを持つて立つて居る。

「どうするんだ」

「私のむちを、五十回うけてくれたあとは良
い事して上げる」

「嫌だ。許して呉れ。金ならいくらでも出そ

も、ズボン

下も、靴下
も、遂に、
パンツ一枚
にして、に
んどは細い
くさりで、
彼の両腕を
縛り上げて
しまふ。

猿ぐつわ
の布は脱り
のぞかれて
福島は、や
つと苦しい
息から解放
された。そ
の間に女は

う」

大声でわめく福島を尻目に目で三人の女に
合図する。室の中央にある柱まで、引きずる
様に福島をつれて行き、もがくのを柱にしば
りつける。その一人が両足をおさえて、最後
のパンツのひもを解き、彼も一条まとわぬ裸
体になれ、両足を細い鎖でしばりつける。も
う一人は、とつたばかりの彼の口へ再び猿ぐ
つわをかませる。見て居る美しい女は

「さわがなければ、良いのに、大声をたてる
からよ。あんな 良い体ね」

ほれぼれする様に、胸、腹、腰、と美しい
マニキュアした手が、さする。

「でも、むちの味つて良いものよ。ほら」
ビューと風を切つて、ビシリと福島肉
にくいこむ。むち、颯、猿ぐつわの下でうめ
く。そしてもがく。

「良い気持だわ」

続けて、うなるむち、もがく福島の体。胸
に、腰に、何本ものみみずばれが、赤い線を
引いてはれ上る。

「まだ十回目よ。ほら、十一、十二、十三、
十四……」

もがく中に、気が遠くなる福島。

真赤に上気して、汗で、光る体を福島のそ

ばへよせて、髪をつかんで、口へ水をふくんでふきかける。

「今度は両手をつるすの」

体の位置をかえさすたびに、前の女が出て来て用意する。両腕を天井から、つられて、たたかれ、降ろされ、両腕をうしろへ、両足をうしろへ折り曲げさせ、床の上のところがされる。えびの様に曲つた体の上に、馬乗りになつて髪を引つ張り、体をひねり、はてはお尻で彼の鼻と口をふたして息が出来ず、苦しむのを見て、満足そうに、ぐつたりとなつてしまふ。

「苦しかつたでしょ。有難とう。私はこれでお終ひ。手当はあとで、うんとするわ。もう一人だけ待つてゐるの。ついでに楽しませて上げて——」

福島は、もう、もがく元氣も、さけぶ力もなかつた。ぐつたりと半死半生で、床にころがされて居た。これから、どうなるのか、それすら考える事が出来なかつた。

次の悪魔

扉が開くと、待ち切れない様に、室へとび込んで来た、年増の女、荒い息で「私も楽しませて——」

泣きそうな声で言つて、彼の猿ぐつわを解く。解きほどこかれても、大声も立てられぬ福島は、口の口へ、足の裏をのせる。足指で鼻をつまむ。口の中へ、足指をつつこむ。

なにをされても死んだものの様になつて居る男の体を、抱き上げ、かみつき、流れる血をなめ、体中にかまれた血が流れ出した頃に福島は、まつたく気が遠くなつてしまつた。

M の 組

二日たつたのか、三日たつたのか、次第に体が回復して来ると、最初の女がベットのそばで、マッサージしたり、薬をぬつたりしてゐる。

「帰らしてくれ。お願いだ」

「駄目。折角の大切なお客様なのに、今度は私が可愛がつて上げる番。いい。私の言う通りしてくれたら、今夜、お帰しするわ。大丈夫よ。私を可愛がつてくれたら良いのよ。今仕度して来るから——」

別室から出て来た、彼女も前と同じく一糸まとわぬ裸体、手をならす。

三人の給仕女が出て来て、今度は反対に細い鎖で、床に座つた女を縛り上げる。がんにがらめに縛り上げられ、床にころがされた女

鎖が、ふくよかな乳房にくいこみ、胸にくいこみ、腰に、太股に、足首に痛々しく、にくいこんで居る。

女が、縛られたまま

「早く、なぐつてよ。そのバンドで——」

仕方がなく、福島は、側にあつたバンドで真白い裸体をなぐる。

「もつと強く、強くうんと強く、血の出る程強く」

言われるままに、出せる限りの力をふりしぼつて、裸体をなぐりつける。ヒューヒュー言いながら、床をころげまわる。二三十回もなぐつた頃、女給仕が無表情のまま出て来て、次は女の体をベットのうへへ、あおむけにねかせ、両手をベットの鉄棒へしぼりつけ、両足を開かせ、縛りつける。

「お願い、うんとなぐつてね。それから貴方の自由。どんな事をして構わないわね」

言い終らぬ甲に、女給仕は、女の口へ猿ぐつわをかます。福島も今や、抵抗を失つた、真白い裸体。それも、あおむけにねかされた一糸まとわぬ裸体を見る中に、知らず知らずベルトをその裸体へ振り降ろして居た。

白い裸体もがく。もだえる。くいこむ鎖。

福島は来た時と同じ様に、自動車に乗せられ、目かくしされ、猿ぐつわの代りに、彼女の掌が、福島のお口をおさえて居る。

最後に

「御礼。ポケットに入れとくわ。でも、サジ

ストやマゾヒズムの患者にしたのは、みんな男なのよ。こんなになつた女も、この世の中に、たくさん居るの。たまにおもい出してね」

車が止る。腕を解かれ、目かくしを解くのと一緒に、女の口は福島のお口をふさぎ、そして自動車にとびのり、うごき出す車から「さよなら」

手を振り遠くなつて行く女。福島は呆然と暗の中を見送つて居た。

嵐山電鉄の乗場へ歩いて行く、彼のポケットの財布の中には、S、一万円、M、一万円と書かれた紙の中から、千円札の束が、はみ出して居た。

(おわり)

中国の男娼

相 シヤン

公 コウ

永野白楊

うな奇談珍聞が多くある。

×

×

これは中国の暗黒社会で行われている男色を売る少年の話である。この男色を売る少年を指して、上海辺りでは相公と称して、今尙お流行している、尤も今は昔のように盛んではなかつたが、それでも、盛んに薄暗い路次などの

廓の家に立て籠り、可なり大規模に、組織的に跳梁しているのは事実である。昔日本の野武士共や今の学生間の一部にも、美少年を愛するという傾向はあるがそれは所謂、変態性慾として取扱われる同性の愛の実現に止まり、男色を売

つて生計を営むと云う此の相公とは自ら世界が別で、それは今少し夢幻的神秘的のものである、然るにこの相公なるものは、此の夢幻神秘の殻を破り、黄白を朝夕枕を代え、同性の男に身を任すのでその裏面には、目を円くして聞くよ

相公はその営業の性質上眉目秀麗の美少年が必要であるのはいう迄もないことであるが、彼等は男であつてその実、全く女である、只、着物と足だけは仕方がないとして、その弁髪を垂らし（今は前髪したものが多いが）之れを美しく梳つて油気の失わぬよう手入れをして、顔には脂粉を絶やさず、外出の時はいつも懷中鏡を携帯し時々之れを取り出しては、紙白粉かなんかでお化粧をする。又手には香水をまいたくンカチを持ち

女のようなお尻の振り方をして楚々として歩を運ぶ様子等は全く女の盛装したものとしか受け取れない。

そして物云う時も女のような嬌態を作り、一寸横目で秋波を送つてあまれかゝつたり

時には寄席で多くの見物を前に控え、平気で黒い声で花鼓歌を唄つたりなどする姿などは全く女性そっくりで、これらの山出しの女等は、その容色に於いて、そのチャーミングな点に於いてとても彼等の足許にもよけけない。



じ堂内に於いて彼等が互に姉妹と呼んでいることである。

例えばその堂に十人の相公が居れば互に十姉妹と称し、五人なれば五姉妹と唱え、若し、茲に菊という名の年少者が居るとすれば、

年長者は此の年少者に対し菊妹と呼び菊妹は年上の少年を姉さんと呼ぶ。

常識を外れた非人道の事をなすように子供の時から訓育せられた彼等相公とし

ては、こんな風に呼ぶことは何の不思議もなからうが、常識の亡びない社会人には全く気狂い沙汰としか受け取れない。

それよりも、もつと酷いのは彼等の痴話喧嘩である。寄席に於いて公衆の前をも憚ら

ず、彼等同類が焼もち喧嘩をすることがあるが、その焼もちの対象は勿論男で、丁度芸妓等が互に一人の旦那を競争するように、相公同士がその好きな男を心の中で争つてみたり変な眼つきで恋敵を睨めつたりなんかする事もあり

時には潜在している男の力が発現して殴り合いをする事も少くない面白いのはその口失きの喧嘩だ「なんだいこの汚れ女郎」「腐れ尻」というかと思えば、

「好いた同志よ」「やかないでもいゝわ」なんてまるで女同志の痴話沙汰同様で、室外で聞いたなら、とても男性の会話とは受け取れない。

そして甲の客を乙が横取りすれば甲は乙に対して姦婦と呼ぶから振つてゐる、即ち「此の間男奴が」と怒罵する。尙、此の姦婦一件に就ては、やれ取つたとか、取らぬとか、いや取つたんじゃない私に惚れられた被害者だから私には罪がないなんて事をクドクドと喋

つて、其の是非曲直を公衆に訴えろと云う頗る撥くつたいような濡れ場の喜劇を實地に演ずることもある。

北京あたりの四花旦即ち女形の多くは此の相公の後身だそうだが成程これ程女性化した相公に女形も立派に勤まることであらう。さてこんな風に本来の男性を模して一人前の立派な社会的の女席とするにはどんな訓育やら圧迫を加えるか即ち相公を製造する方法を簡単に記して見よう。

相公堂を組織する原則は自ら二つになつてゐる。其の一つは対内即ち、相公の製造で其二は対外即ち相公の営業である、何れの相公堂も此の二原則を無視しては成り立つものではない。

汚い服装をしたヨボ／＼の爺さんが「小児売升」とふれて、二三才から五六才位迄の子女を或は籠に入れ或は手を引いて市中を売り

歩いて居るのをよく見かけることがある。その中の嫖妓のいゝ女の子は大抵娼妓屋に買われ、そして可愛いゝ息子は相公堂の強慾爺の手に買収せられる、値段は矢張り質のいゝ年の多い少年が高いが普通先づ大抵二三元から二三十元位、

もつて生れ出たものである。人買いが売つて来る子供の中から理想の相公たるべき好い玉を得るのは困難のことで、恰も城内あたりの露店の骨董屋から青磁でも掘り出すようなものだ。

しくなく、飛切り上等になると五六百元に達する。之れは大抵六七才から十二才位の子供で十三四才か或は十五六才のになれば値段はずつと落ちる。

それは一は相公そのものが性慾衝動の悩みに堪え兼ね、今迄被動的な感情に支配せられていたのが逆に、即ち人間本能の作用は最早や完全にアクチーブにならずに居られなくなる。そうなるを買方でも嫌だし、従つて売れない、売れないから止めさせる、結局十三才から十八までと制限し、北京あたりでは此の規定がチャンと守られているそうである。

のもので、売る奴も買う奴も、西瓜か、植木鉢でも売買するようにあつち向けたり、こつち向けたり手足を伸ばしてみたり叩いて見たりして値踏みし、それからやつと相談が決る、之等の少年は八分通り誘拐されたもので、転売又転売終に目鼻立ちのいゝ子はこういふ真つ闇な社会に抛り込まれて、非人道な非人間的な運命の生活を送らねばならぬ、又中には親が、貧乏の爲めとか或は娘が不義密通して因果の塊の始末に窮した結果人買いの手に売り渡すようなものもある。

そこで本当に上等の玉を手に入れようとするには相公堂主が自身直接さがしに出かけねばならぬ。堂主の鋭い眼は、路傍に遊ぶ子供の中から又何々世界などの遊劇場の群衆中から、眼光一閃でいゝ玉を選び出すことは頗る容易で、こいつは見込があると眼星がつけば堂主は事に託くしてその少年に話しかけたり、或はその帰るのをつけて行つて住宅をつき止め、もしその家庭が貧乏であれば踏み込んで種々甘言を並べて買収して了う、もし上流の家庭の子であれば時に誘拐して他都市の相公堂に売り飛してうまい汁を吸うこともある。

一体少年が相公として稼げる年限は、どの位かというに先づ十三才から十八才迄の五六年間で、二十を越えれば、どんな美しい少年でも売れなくなる。

伝説というのは僧侶と稚児の情死物語で、飾西郡蒲田村にある淵に伝説という稚児の白藤とか入水した為に稚児ヶ淵と名づけられたという、数多く存在する此の伝説は大抵稚児一人の投身伝説であるが、此の外に兩者の投身を物語るものは自休藏主という僧と稚児白菊の心中した相州江島の稚児ヶ淵であらう。

◎日本性伝説◎

鶴鶴傳説

陰陽の二神が鶴鶴の尾を揺するのを見て始めて性交の道を知つたという伝説は「日本書紀」神代巻に次の記事がある。

陽神先唱日美哉善少女、遂將合交、而不知其術、時有鶴鶴、飛來揺其首尾、二神見而学之、即得交道

稚子ヶ淵伝説

「播磨鑑」(宝暦十二年平野庸修撰)に載せてある稚児ヶ淵

鎌倉物語や新編鎌倉志には兩者の恋物語が精細に記録されている

要するに、相公は幼少の時より既に呪われた人の子で、道德圏外に抛り出さるべく真の闇い運命を

そして一番上等の玉はいくら位かというに一童二三百元するは珍

ルポタージュ ^{こん}混 ^{けつ}血 ^{エレ}の ^{ジー}悲歌

下 出 章 一

市立××中学の校舎が、米軍第8管下のキャンプとして接収されたのが、昭和二十三年の八月だった。校舎は比較的モダンな建物で、彼等が移住してくると、忽ちにして建物は、彼等の生活様式に適応したカラーに変貌してしまふ。

黄卵色の壁、青い屋根瓦、ガソリン庫が出来、ガレージが建築される。そして外界とを遮断する金網式の塀が、キャンプの広い土地をぐるりと囲繞してしまふ。すべてがスピード化したアチラ風の、一瞬のうちにうち建てる設営工事であつた。

まず、附近の貧しい住民たちは、自分たちとは異なり彼等の高い文化水準に大きく瞠目するのである。キャンプの周囲にはこの都市でも有名な貧民街が連つていて、住民たちは連日にわたり、もの珍らしそうにその光景を見ようとして蟻集してくる。

貧民街を北から南に貫いている泥川があるが、それがキャンプの西側壁外に沿つて、汚物をうかべ、濁つて淀みながら静かに流れている。その泥濘川に異様な臭気を発する薬物が放流された。それは、云わずと知れた消毒薬だが、これで泥濘の中のバイキンはいつべんに滅されてしまつた。

が、人間はバイキンのように容易くマイルものではない。数日を出ないで、その泥濘に沿つた空地に、ブラツク、マーケットが出来上つた。いろいろな闇の商品を列べた天幕張りの店舗が軒をつらねて、賤しい煮売物の匂いが、道行く人々の鼻孔を擽つた。

急に異人種が近所へ引越してきて、街ぜんたいが何となく祭礼気分になつてゐる。奸智な商人たちは、早くも、秘密裡に、紅毛碧眼の将兵から、高価で珍奇な品々を手に入れ、それを巧みに

に売捌く。此処のマーケットへ行けば、アチラの品物は何でも手に入ると云われていた。奸智な商人たちは、如何なる手段で、それらの品物を手に入れたか——その裏面に活躍したのが、その貧民街に住んでいたうら若い娘たちであつた。

この物語の主題は、即ち、その娘たちの生

▽

態である。

夕暮れがくると、キャンプの金網張りの塀近くには、大勢の娘たちが蟻集して来る。すると、外出を禁じられている兵隊たちが、そこへまた集つてくる。なんのことはないそれは安易な日米交歓である。

残念なことには、両者の中間に金網があつた。だから、接吻をしようにも、握手をしようにも、そのテがないのである。単に、顔を見合はして（むろん言葉も判らないのだし）ニヤ／＼、ソワ／＼するばかりが関の山であつた。

だが、必要といふことが、いかに人智を高揚さすか、それはまことに怖るべき現象であつて、十日もすると、娘たちはどこでどうおぼえたものか、軽く、アチラの会話に必要な単語を話し、兵隊たちも同じ程度で、

「コンバンワ」

「アナタ、スキ」

「ボク、サビシイ」

などと、コチラの単語を話し出す。結局、それで、互いの意志がどうにか通じ合うのだから不思議なものだ。

娘たちは始め、半ば好奇心と、半ば羨望から彼等に近づいて行つた。そして、金網を距て、顔見知りとなるのである。どの兵隊も同じような顔容に見える。が、所詮、誰というメアテもないのであるから、たいてい毎日相手が変るのである。

遮断線の金網は八番鉄線を編んだもののなのだから、ちつとやそつとの力ではヒン曲りもしない。無理をすれば、唇だけぐらゐは穴の中へ差しこむことが出来るのだが、その点鼻の高い彼等は都合が悪く、アベコベに娘たちは、親代々の恩恵で、その方法には困らなかつた。

兵隊が、手真似と表情をもつて、接吻を強要する。兵隊の手には一個のチョコレートとラッキーストライクが握られているのだ。それが欲しさに娘たちは、そつと唇を金網の中へ差し入れる。別に羞恥を感じたり、照れたりはしない。元より、愛情を離れた物欲から

だから、一種の商行為として、敢て彼等のバタ臭い接吻を嫌悪はしないのだ。

要するに、一回の接吻によつて、煙草とチョコレートが手に入れば、たゞそれだけで五百円の日当になるのだから、彼女たちが競つて出掛けて行つても、親たちは目隠しをしていて、何の叱言もいゝなかつた。

物欲というものには元来、限界はないものである。始めのうちはチョコレートや煙草でよかつたのだが、次第に彼女たちは欲望を大きくしていつた。金指輪やギヤバチンの洋服や、南京虫（小型腕時計）が対照となつていく。と同時に、兵隊たちも金網内外の接吻ぐらゐでは満足しないようになってきて、彼女らの要求を充たしてやる代償を求めて、最後には安ホテルに足を踏み入れるというコースに陥るのが普通であつた。

貧しい家に生れて、しかも戦時中、食うや食わずで暮らしてきた彼女らは、急に明るい生活がそんなに身近かになつたことを知つて却つて、驚いた位であつた。身辺を見廻して



みると若い男たちは、栄養不足の顔をしてみんな虚脱状態に陥つてゐる。誰一人、相手にするやうな若者はいないのである。

一度、兵隊のトリコになつてしまふと、その情愛の深さに、テクニクの巧妙さに、彼女らは茫然としてしまふ。もう、そうならないよ日本若者など、見向きもしないよになつて、自分たちは一段と高いところに居るかのような姿勢をして、街の男たちをへイゲイする。

親たちもまた、彼女たちの働きによつて、

いくぶんでも生活にユトリが出来てきたのだから、娘の乱行についても頼冠りをし、なるべく三猿主義を固執するようになっていく。

俄然、キャンプをとり巻く貧民街は、忽ちにしてペンペン街に化して行つた。すると、六ヶ月ほどして、キャンプに収容されていた兵隊の交代が行われた。

白人兵に代つて駐留してきたのは、同じ管下の黒人部隊であつた。

娘たちの間には大恐慌が惹起つた。というのは、流石に白人兵と違つて黒人兵には一種の人種蔑視の觀念がある。だから、当分の間は平隠だつた。がしかし、交際してみると彼等は白人兵にシンニウをかけた位親切であつて、その上、彼等は揃つて懐中がみんな温かだつた。

牛を馬に乗り換えるという言葉があるが、娘たちは自我を殺して、また新しい、異国兵に挑みかゝつて行つた。

そこに、大きな悲劇が胚胎していることを彼女たちは知らないのであつた。



た。

▽

古川千代子——彼女もその俗にいうペンパンの一人であつた。親父さんが繁華街へ靴磨きに出ていて、母親は郊外にある市立結核療養所の附添婦として働いていた。

母親がいつも留守がちの上に、父親は夕方ではなくては帰つて来ない。二人の働きでどうにか食うだけはやつていけたので、千代子はどこへも働きに出ずにいた。自然、監督のな自由の身で、謂わば巢から放たれた小鳥同様だつた。

だから、一タ、友達と一緒にキャンプ見物に行つて、そこで、P、ランゲツシュという美男の技術兵と知り合いになつた。まだ、ほんの少女で、他の娘たちとはちがひ、どこか純なところがあつた。

接吻はしなかつたけれど、その日、彼女は小さい牛肉の罐詰と、自分の頬の色によく似たラツキーストライクを一個貰つて帰つてきた。

「こんなものを、今日

アメリカの兵隊さんから貰つた」

といつて、働きから帰つてきた父親の前に差出した。

「うあッ！」

父親は声をたて、躍り上つた。元来から酒好きで、毎晩チュウを一杯きこしめすのが常例になつていた。牛肉の罐詰とは近來にない佳肴である。恥かしいが、戦時中から、もう何年も御無沙汰をしていた牛罐である。喜んだのも無理はなかつた。

洋モクを喫いながら、僅かな濁酒に酔つて上機嫌の父親を見ると、千代子はほんとに善いことをしたと、心底から悦んだ。

「これからも出掛けていつて、あの兵隊さんからいろいろな物を貰つて来よう……そして、それをみんなお父さんにくれてやつて喜ばしてやろう……それが親孝行というものである……」

千代子はそんな単純なことしか考えられない、そんな娘だつた。白痴というほどではないが、物の善悪邪正を見究めることの出来ない十七娘だつた。

日曜日にP、ランゲツシュに連れられてジープに乗り、宝塚へ遊びに行つた。何を話しかけられて何とも応答が出来なかつた。たゞ

首肯いて「YES」を示すことで一杯だった。

ホテルに連れこまれてP、ランゲツシユの爲すまゝになつたが、一度も抵抗をしなかつた。百円紙幣を二十枚も貰つていたし、ラツキーストライトを一グロスも握らされていたからだつた。

次の土曜日はまたジープに乗せてもらつて大阪へ行き、百貨店で豪華な洋服を買つてもらい日曜日にかけて、宝塚のホテルで二晩も泊つた。

言葉はよく通じないが、P、ランゲツシユはシカゴにある、有名な百貨店にババが送送部長をしているといつていた。そして自分は音楽兵の伍長だと言ひ、フリエートを吹奏している写真などを見せたりした。

その日も紙幣束を買つて家へ帰つてきた。すると珍らしく病院から母親が帰つていた。千代子がみせびらかした数々の品物を見て、いつたんはいたく喜んだが、すぐその後で、ちよつと小首を傾げた。いくらアメリカの兵



ないのであつた。

「そりや、とてもとても、可愛いがつてくれるわよ」

「さ、その、可愛いがりようにもイロイロとあるだろう……つまり、たゞ、可愛いがるとかもつと深く……」

「何言つてのよお母さん、あたしたちはフレンドなの」

「フレンド？、フレンドつて何のことだい？」

「英語でお友達ということなの」

「さ、そのお友達だつていろいろとあるからネ……男女七才にして何とか……云うし、！」

隊さんだからつて、社会奉仕でこんな物を購つてくれる訳はないと、そう考えたからであつた。

「お前は……アメリカの兵隊さんに可愛いがつてもらつてゐるのかい？」

質問がマトを外れてゐる。だが、露骨にも言い出せないし、どうも巧く核心をつかんで訊き出せ

阿父さん

とこんどは親父さんの方へ授けを求めた。「どつちだつて可いぢやねえか、若し赤ン坊が出来たらオロシヤ可いんだ」

と、コトもナゲにそう応えた。親父さんはいくぶんでも戦後の風潮を心得てゐる。だから、そうした問題は安易に考へてゐるのだけれど、昔風のお母さんには、それはよく理解されないことであつた。

「でも、そんな罪なことをしたら天罰が当たります。それに、折角生れてくる子を、闇から闇に葬るなんて、そんな恐ろしいことはゆるされませんよ」

「あ、そのことだつたら大丈夫よ！」

千代子は真顔で母親の言葉を遮つた。

「何故かといへば、いつもあたしコンドームを使ふんですもの」

娘の言葉には英語がちよいと混るのでお母さんは困つてゐる。

「コンドームというの？」

「お母さんは何にも知らないんだな。コンドームというのはゴムで出来た……」

「あゝ、判つた判つた！」

お母さんは苦笑を耐えながら、手を振つて娘の説明を頭から圧えた。考へてみるとまこ

とにオソルベキは時代の推移である。ほんのまだ、色気知らずのネンネだと思つていたのに、そのようなことにまで通曉しているのかと思うと、今更ながら呆れかえるのだつた。

この頃では、購和条約も発効されて、彼我の関係がゆるやかになつてきたから、街上で見るに堪えないような醜態をよく瞥見することがある。

だいたい、アメリカ兵と腕を組み合せていく日本の女には二つの種類があるように思われる。

その一ツは良家の子女（といつても進駐軍要員として働いているうちに出来合つた仲などが多いが）で、月々、定額の仕送りをうけ謂わば日本進駐中のワイフという型で囲われている連中がある。中には結婚をしていて、兵隊が帰国するときには同伴していく約束の出来ている者も少くはない。彼女等は、いくらか教養や節度の点が違うので、一見してバシ助でないということは判然する。

他の連中は、すべて、恰も渡り鳥に似た、外人専門の街娼と思つて間違ひはなからう。

P、ランゲツシュが引揚げていくと、千代子は続いてバトンを引継いだ、L、ヘンリー

軍曹のモノになつた。そしてそのL、ヘンリーが朝鮮戦線に出征していくと、こんどは誰彼かまわずに、相手にした。もうそりなるとパン助と一緒にあつて、界限では相当の顔になつて行つた。

去年（一九五一年）の一月になつて、千代子は躰に変調のあることに氣附いた。妊娠であるといふことは、酔っぱいものが矢鱈に食べたことでも判つていた。が肝腎の胎児のババが誰であるかが判らなかつた。

母親には極秘にしていたが、正月の休みで久々に帰つてきた母親に打明けずにはいられないほど、すでにお腹が突出していた。

「どうしよう？」

ある晩、千代子はそのことを秘つと母親に相談した。むろん、墮胎をしても……という千代子の提案に反対した。

「たどえ、どんな子が生れて来ようと、赤ん坊には罪はないんだ……あとは、何とかするだろうからお生みなさい」

と、情の籠つたことを言つた。お母さんにしてみれば、どのような嬰兒だろうと初孫にあたる訳である。

千代子にしてみるとお母さんの言い分が正しいとは思ふものゝ生むということにも不安

があつたし、一面、墮胎に、幽霊のように變せ細つてしまつた友達を見ていたので、その墮胎手術をうけるということにも、生む以上の不安があつた。

知人がいろいろ教えてくれる。劇しく電車に揺られてみよとか、秘密の漢法薬でよく効くのあるから服めとか。それ等を悉く実行してみたけれど、因果というものだろうかそれらはさつとも利目がないのであつた。母親は前よりも繁々家へ帰つて来て、娘の容子を監視している。

四月になつて、ある晩、銭湯から帰つてくると、千代子は晩の食膳につくと間もなく破水した。

座つていた薄い座布団がまるで、水浸しになるほどだつた。母親は顔色を変えて急いで産婆さんと呼ばびに走つた。そんなことは偶々あることで、胎児を覆っている袋の湯が破水しても、後に残つていゝるもう一個の袋の湯で完全に生むことが出来るのだと、駈けつけた産婆さんの説明で、お母さんも千代子もやつと愁眉をひらくことが出来た。

だが、促進剤を用いて、すぐに生むような手段を執らねばならないということなので、俄かに産室の用意から、湯沸しなど、テヤヤ

ワシヤの騒ぎになつた。
間もなく奥の間から、娘の陣痛の呻きが聞えてくる。カマドの前で火を焚きながらお母さんは一心に安産を祈つていた。と、突然、進軍ラッパにも似た、威勢のいい嬰兒の泣声が聞えて来た。

「や、有難い！」

お母さんはすぐに盥洗を持出して、産湯の仕度にとりかゝつた。

やがて、坊やですよとい

つて、産婆さんが嬰兒をつれてきた。濛々と上る湯気の中で、うぶ湯をつかわしている産婆さんの手元を見るといきなり母親は、ギヤツ！と大きな声をたてた。

いくら石鹸で洗つても、嬰兒の体は白くはならない。それは木炭のような色をした、明らかに黒人の混血児であつたから……。

母親にしてみれば、予め、混血児の生れてくることを予想はしていたのだが、黒人の子とは思つてもみなかつたのである。頭髮は生



れながらにしてさながらお釈迦さまのように渦を巻いているし、いくぶんでも白くしようと湯を使わすたびに嬰兒を丹念に洗つてはみるのだが、光沢が増しはすれ、すこしも白くはならないのである。だが、よく見るとどこか、娘の千代子に似た面ざしが窺えもするのだつた。

それ以来、父親もすべてを因縁として諦めた。人の噂さも七十五日で近頃では千代子も公然、黒い赤ん坊を背負いながら、手内職のミシン仕事にいそしんでいる。

これはまさに、敗戦が生んだ悲劇でなくてなんであろう！
(完)

ハナヲ、タカク、スル

問、私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻術というのをよく聞きますが、効果があるものでしょうか。

答、先づ特殊薬注入法があります。鼻すじだけ通じたいという人には理想的な方法です。次に象牙挿入法は今から三十年前から初め、アメリカでも使用され捨て難い方法です。合成樹脂も最近材料がよくなり使用され出しました。肉質法は少しづつ高くし度い方には良い方法です。以上は費用何れも六千円です。

更に当院独特な永久不変な弾力性物質が発明され、その自然性においては如何なる方法も追従を許しません。従来の象牙合成樹脂のもつ欠点は一掃されました。将来は当院で発表すれば、如何なる人も皆この方法で行うべき運命をもつていられるのです。費用は八千円以上です。

大阪市北区梅田新道交叉点
東一丁電車通

三山整形外科内

三山隆鼻法研究所長談

陸軍中尉時代の回想

森 井 晃



私が昭和十九年の春、旭川の連隊に赴任すると、間もなく、部下の兵隊の一人、西村勝男に心が引かれるようになった。西村は、浅黒い顔に、精悍な眼をした、中肉中背の、敏捷な男で、数え年二十ということである。

西村に対する気持がどういうものであるかは、自分にも判らなかつた、ことに、姉妹もなく、早く母親に死に別れてからは、親戚の老婆の手一つで育てられ、その上幼年学校に入つてからは、全く男の中だけで生活してきた自分にとつては、女に対する感情というものが、どんなものか、全く判らない。が、西村に対する気持が、世の男の女に対する気持のようにも思われた。

× × ×

七月の初めに、旭川から幌加内にかけて行われる演習の準備のため、二泊の予定で、出張することになった。自分は、さつそく従兵として、西村を連れて行くことにした。

早晩に旭川を發つて、幌加内に着いたのは九時頃である。すぐに、旅館の中央館へ行き、長靴を運動靴に履きかえ軍刀も上衣も宿に置いて出掛けることにした。西村にも、軍装を解いてシャツ一枚で随いて来させた。

今日の予定は、汽車で沼牛まで戻り、それから、高さ五百米の峠を越えて、江丹別部落までの状況を見て来ることである。快晴に恵まれて、沼牛から、畑の中の本路を、江丹別へ向つた。

「西村、お前の生れたのは、どこか。」

「樺太の炭礦であります。」

「ふん。それで、ずっと樺太にいたのか。」

「違うのであります。十八の時に、芦別に来たのであります。」

「学校は、高等小学校を出たのだつたな。」

「はッ。」

「学校を出てから、何をしていたのか。」

「電線工夫をしていたのであります。」

「工夫をしている間に、教練は受けたのか。」

「はいッ。樺太では、受けていました。」

「演習にも、行つたか。」

「はいッ。よく行きました、最後の時は、十五貫背負つて、徹夜で十里歩いたのであります。」

「へたばらなかつたのか。」

「大丈夫であります。もつと歩けます。」

「大したものだな。」

笑いながら、西村の、いかにも精悍な顔を見てみると、左の頬を、斜めに、細い痕跡が

眼についた。

「貴様の頬ツぺたの痕は、何か。喧嘩か。」

「そうであります。」

「いつやつたのか？」

「高等科の時であります。」

「喧嘩は、よくやるのか。」

「入隊する前、芦別で、朝鮮人とやつたこともあります。」

「なぜ朝鮮人と喧嘩したのか。」

「朝鮮人の若いのが、女をからかうので、止めろと言つたら、あとで仲間と束になつて掛つて来たのであります。」

「それで、……お前一人か。」

「そうであります。相手は四人で、初めの二人はなぐりつけて、鼻血を出したのでありますが、強い奴が一人いて、取組み合いになり、もう一人が後から掛つて来て、とう／＼のされてしまつたのであります。親方が来て、引分けてくれました。」

「危なかつたな。」

「はいッ。そのあとで、山神社の森で、そいつに出合い、今度は誰もいない一対一で、取組合つて、押えつけ、謝るまでやつつけてやりました。」

「気が済んだわけだな。」

「はいッ。」

峠を越えて、江丹別側の視察を終え、再び峠へ戻つてきたのは、二時近くであつた。この峠は、江丹別と幌加内との境で、こゝから両方を展望しておくことが、今日の、一番大事な仕事の一つである。

ところが、尾根に沿つて歩いてみても、熊笹が茂つていて、一向に見透しがきかない。そこで西村に、まばらに生えている木に登つて、様子を見させると、二尺も登れば、両側共によく見透せるとのことである。

自分は、朝から西村と二人きりでいるので西村に対して大分興奮を覚え、彼に触つてみたい気持ちにかられている。彼の報告を聞くと何とかこの機会を利用したいと考えた。

「そうか。木に登つて、眺めることにしよう。しかし、待て。木につかまつていては、地図を拡げられない。二尺位なら、何か、その位の合はないか。その上に立つて眺めよう。西村。探してみてくれ。」

西村は、あたりを探したが、木の株も、石も見当らなかつた。

「なにもないか。それは困つたな。そうだ。」

西村。お前、合になれ。」

「はいッ。どうするのでありますか。」

「お前の肩に乗せろ。」

「自分の肩に乗せるのでありますか。」

「うん。」

西村は、しやがみ、自分は、その首に跨つた。西村が立ち上ると、なる程、眺望は展けた。西村の頭の上に地図を拡げて、眺望と対照し始めた。しかし、朝からだん／＼と高まつてきた、西村に対する執着は、首に跨つた快感となつて、地図も景色も眼に入らなくなつてしまつた。

× × ×

峠を下りて、二人は、再び朝来た路を引き返して行つた。見渡す限り人影のない、初夏の馬鈴薯畠の中である。いくら歩いても、同じような景色に、自分は退屈になつてきた。「朝と同じ路を歩くのも退屈だな。遠乗りでもすると、よいところだが。」

「農家があつたら、馬を借りて来ますか。」

「農家から借りて乗れば、また返しに戻らなければならぬじゃないか。そうだ。それより、西村。お前十五貫背負つて、十里歩いたと言つたな。俺は十四貫ちよつとだ。俺の馬になつて、宿まで二里の路を歩けるか。」

「歩けると思います。」

「そうか。それではお前、馬の代りになれ。」

「どうするのでありますか。」

自分は、先刻、峠で味わった快感を、再び求めた。

「貴様、馬のように四つん這いで歩くこともできんだらう。やつぱり、俺を肩へ乗せろ。」

そのほうが、増物もよく見えていい。」

「はいッ。」

西村は、自分を肩に乗せて、歩きだした。

「人が来ても、このまゝ、行きますか。」

「うん。軍人が馬に乗っているのだから、人に会っても構わんが、まあ人が見えたら、降りよう。その代りに会いまで乗り続けるぞ。」

翌日は、時々小雨が降るので、野



外の視察は止めて、村役場や小学校との打合せに、一日を費した。

早目に、三時半頃宿へ帰って軍服を脱いで浴衣に着換えると、女中が茶を持って来て、風呂は、あと一時間位で沸くと告げた。

風呂へ入るまでの間、機密書類を調べるから誰も部屋へ来ないように、言いつけて、女中を帰した。

「西村。今日は、何も運動しないから、物足りないだらう。風呂までの間、少し鍛えてやろう。」

「はいッ。お願いします。」

「貴様、柔道をやったことがあるか？」

「あります。」

「寝業も知っているか。」

「少しは知っています。」

「宿屋では、立業

はできん。寝業を教えてやろ、暑いから、裸になれ。」

自分は、浴衣を脱いで、パンツ一つになった。西村も、浴衣を脱いだ、下に着けているのは、ふんどしである。

「貴様は、ふんどしだな。ふんどしでは、具合は悪い。その上に、昨日お前に洗って貰った、俺のさるまたをはけ。」

西村は、ふんどしの上に、まっ白いキヤラコのパンツをはいた。

「初めに、抑え込みを教えてやる。そこへ臥向けにねろ。」

袈裟固めに始まって、横四方、上四方、崩上四方と、いろ／＼な型を、一通り教えた。

「今度は、俺が下になるから、今教えたのを一通りやつてみる。」

西村に、復習させてから、

「今度は、俺がお前を抑え込むから、貴様起き上つてみる。」と言つて、まず西村を袈裟固めで抑えた。

西村は、大分もがいていたが、やがて、脚で自分の体を引きつけ、左に挑ねやつて、起き返つてしまった。

「よし。貴様、なか／＼強いな。今度は、崩上四方で抑えるから、起き上つてみる。」

西村は、初め自分の体を上の方に引きつけようともがいたが、効目がないと判ると、今度は、なるべく下へ引いて脚の力で、彼を挟んでいる、自分の脚を持ち上げ、自由になる体制を整えてしまった。自分は、電線工夫をしていたという西村の脚の力が、いかにも強いのに驚いたが、形勢不利とみるや、やにわに立ち上り、

「まけたッ。貴様強いぞ。」

と言いながら、起き上ろうとする西村の腹の上に、馬乗りになり、両手で西村の両腕を抑え、さらに、それを半ば、膝の下に組敷いた。

西村は、胸から横腹が、自分の内股で挟まれ、脇の下に膝頭が触れるので、くすぐたくてたまらず、笑いながら体をゆすぶった。

「何だ。」

「くすぐつたいのであります。」

「そうか。」

自分は、西村の腹の上に馬乗りになると、まもなく快感を感じ始めたが、西村が股の間で体をゆすぶるので、快感はゆれるたびに、ますます高ぶつていった。遂に我慢しきれなくなつて、

「ううっ。」と、声を出した。

西村は少し驚いて、

「何でありますか。」

と言いながら、頭を持ち上げて、自分のパンツを見た。

「もうすぐ、風呂だ。我慢しろ。」

自分は、くすぐつたいような顔で、答えたこの時、階下から、

「お客さん、お風呂が沸きました。」

という、女中の声が聞えた。

× × ×

明日は、大して骨の折れる仕事もないのでその晩は、夕食にビールをつけさせた。西村は、初めは固くなつていたが、アルコールがまわると、飲み口も速く、口も軽くなつた。二人で、半ダース程飲み干して、軽く飯を済ませた後も、なお二人は心地よい酔に浸っていた。女中が、跡片付けをして、去つてしまつた。

「西村、いゝ気持になつたか。俺も、いゝ気分になつた。東京では、こんなときよく、乗馬で戸山ヶ原へ出掛けたもんだ。」

「乗馬の用意をしますか。」

「うん。用意しろ。西村。」

「はいッ。自分が馬になるのでありますか。」

「ようし。貴様、なか／＼勘がいゝぞ。」

西村は、しやがんで、肩を自分の方へ向けた。しかし、平衡が保てず、体は前後に揺れた。

「ほかッ。駄目だぞ。貴様、酔つばらつとるではないか。立つては、歩くけん。足が四本なくては、駄目だぞ。」

西村が四つん這いになると、その上に、ひらりと跨つた。

「ようし。これで、本当の馬だ。俺の馬だ。なあ、西村。」

西村は、部屋の中を、ぐる／＼廻つていと、膝頭が痛くなつてきた。また、酔いが、ますますまわつてきて、ついに、のめつてしまつた。

「ようし。貴様、疲れたろ。休んでよし。」

西村は、これを聞いて、四つ這のまま止つていたので、

「四つ這では、休めん。仰向けになれ。」

と、いつて、仰向けにならせ、自分は、その上に馬乗りになつた。

西村は、馬になつて歩き廻つたため、酔がひどく出てきたらしい。頭を少し持ち上げて半ば酔眼朦朧として、自分を見ると、まつ白いキャラコのパンツの一角が突起して、幽か

に動いている。

好奇心にかられて、右手をパンツの裾に突
つ込み、固くなつているところをつかんだ。

× × ×

終戦の直後、西村と別れてから、既に七年

近い。この間、彼に会う機会に恵まれない。

自分は、近く予備隊に入りたいと思つてい

る。予備隊では、あるいは、西村のような部

× × ×

下に会えるかも知れない。それが、楽しみで
ある。



植物好色自慢

植田清志

アスパラガス

アスパラガスの根の先は薄赤
い、これは又人參なんかとは異
つた意味で、なか／＼に風味あ
るものである。このやわらかさ
その水々しさは感的覺にさえく
すぐつたいくらいだ。その辺か
ら暗示されて（御婦人アスパラ
ガスを好み給う図）なんていう

のが盛んにフランスのボンチ絵
に描かれてあるとか。ドイツで
はこの野菜は、男の精力剤にな
つてゐるらしい。

人參

人參はギリシャの昔から好色
なる野菜とはされている。興奮
剤として珍重されていることは
今日でも昔と変らない。「黄色

い人參は夫婦を仲良くさせる」
とか云つて。

言うのだろう。

日本でも人參の好きな人は好
色だとされている。その恰好、
色彩からして男性の表象として
人參が用いられてゐることは、
何等異存はない。娘さんは好き
なくせに嫌いなさそうな顔をす
るものである。喰わず嫌いだと
侮れない。

「花嫁は白い体に真赤な人參を
持つてゐる——」と、ロシアの
田舎では婚礼を祝う歌の中にあ
るそうだ。われら日本人だとい
くぶん雅拙な感じがするが、人
種毛色が異つた、あちらの物を
連想するとなると、なか／＼に

なんとなく動物的な感じをさえおもわせるではないか。

金盞花

子宮病にかゝつてゐる妖艶な美女を思わせる花である。とにかくどうもその様に感じられるのだ。やゝにおぼる疲れ、なやましきともいわんばかりの中年女の極致、神韻にちかい美の発散となり、燦ゆる情熱の醗酵となるであらう——この花を一寸嗅ぐと、女体の或る部分の様な匂いがする。

この花を嗅ぐと嚏が出そうになつて、春雨にぬれた様な湿潤を感じる。

鈴蘭

可愛い、純潔な処女の花。女学生諸嬢にあんなにも、もてはやされるように、肌膚の処女ともよばれるようになった二つの花卉が、あゝどんなにか、春の

めざめの心情をうずかせることか——生毛のようなものが、なんと羞恥おののくことだろう。クローバ、葦、それよりも好ましきはタンポ、である。あの白い乳の様なものを茎から滲み出すところ、ちよつとエロである。

胡瓜

「胡瓜は娘の様だ、永もちがしない」とオランダで云う、「胡瓜とスターは腐りが早い」とまさか日本でだつて云わないが、尤もいずれ早く何とかしろと云う意味のものかもしれない、でかい強そりな鼻のことを胡瓜の様だとは何処でも云つてゐるらしい。鼻の大きい男はそのシンボルも威大だと西洋で云う。胡瓜を以て之を代表させるわけか

南瓜

わが国では、南瓜は女の附物

である。西洋でも大きな黄色い恰好を、肥つた女のお臀に例え——否、驚くばかりでつかいお臀の女をかぼちや奴がと言う。

然しなんとしても、大きな女の臀の上を着物がゆたかに一杯円々と包んでいる風景は、見事である。のみならず、やせた男には或る種の圧倒をさえ感じる北米のある地方では女の美しいのを褒めるのに「あの女は最大大の南瓜だ」という処もあるとか、お臀ばかりではない、丸々とした恰好からして

「男は南瓜へ女は胡瓜へ」と尤もこれは節約デーのスローガンと感ちがいして貰つては困る。

無駄花の多いところから、尻軽な浮気女のことを南瓜といつたためしは昔にもある。現在では尻軽女の如何に多きことか。これはあながち、戦時中の代用食の南瓜のおかげでもあるまい。

玉葱

裸になるといえば、玉葱も、その皮を脱いだり、又殖えてゆくとところから、月の満ち缺けになぞえられ、月の神イジスにたとえられ、従つて、女そのものにも例えられたのである。と共にその匂いと味からして、女の腋臭にも比せられた。又、エジプトでは、死んだ女の棺桶の中へ一緒に入れて葬つたとか。けだし不死の意味だろうか。

それから又、腐つた塩水に玉葱をつけて食う、それは女の憂鬱なる匂いを云つたものらしいが、いさゝか、われら、そりかえらざるを得ない。「玉葱は娘だ、スカートをまくると男に涙を出させる」とはこれは又どうだ。

巴旦杏

古代フリギアの伝説によると

此時の天の神様が女神と交合の結果、その〇〇を地上に垂れると、そこから両性の人間が生れた。神様そこで、この人間の男の男根を抜き取つて土の中に埋めるとそこから生えたのが巴旦杏であるそうだ。だから、男性の象徴と見るのも、このような所以からであらう。

男は胡栗を割る、というのと女が巴旦杏を食うというのはどちらも色情的諷刺だ。甘い巴旦杏は口中をとろかせるのとことから、女性の〇〇に用いられる。

宜なるかな、人類閨房の秘密の中には、しめやかな香気とともに、巴旦杏の味が感じられてならないではないか。厚つぽい傷みのない肉の中に大切そうにつままれた巴旦杏の実の様な甘美な味が。

桃

エヌスの胸と呼んで、その美しい軟かい色と形から、女の太事なものにたとえられた。併しこの点では、日本の桃太郎の方がはるかに露骨だ。もつと具體的だ、さしあたり、動物の中では赤貝と共に、その方の双翼であらう。生毛が生えているところ等は余りにもリアル過ぎる位だ。

櫻んぼ

わが国でも、いろいろと、さくらの纏綿たる情景は、初代豊国あたりの浮世絵に描かれてあまりにも有名だ。あつちにだつて、例えば可愛い、男が樹に上つて桜んぼを摘んで落とすと、下に可愛い、娘がそれを拾つているといつた図は泰西的な好色的諷刺画だ。

好色的研究によると、桜んぼも、その形態色彩の上から大切な女の乳房にも見られ、女性器

にも考えられる、まづかに熟した、そして先が稍細く一寸薄のあると云つた微細な点までも。妖艶たる美女よ、おんみたちの秘められたるさくらんぼよ、につぼんでは、さくらんぼも小型である、桜を手折るということは、薔薇を折ると同じく祭壇の肉慾を築しむの意味である。念の為に申しておく。

無花果

無花果の葉は御承知の通り、至つて野暮な役目をしては、ニキビ面から、月ではねのけられたり、眼光、葉膜を撒しては、うん奥を究知せられたりするものであるが、その愛すべき果実に至つては、なか／＼に、好もしき形態である、無花束それ自身が恰かも、あれを、そのまゝに表現している、あまりにもいみじく、しみじみと――

林 檎

林檎といえはすぐアダムとイヴを、樂園における知恵の果実を想い出させるを得ない、しかし、そんなことは創世紀にまかせておくとしても、美とか恋愛と享樂とかに意味されて使われる林檎というものは麗わしいみばのわりに、味いは案外あつけない。

「あの子はまだ林檎の味を知らない」なんかと云つている内に「すばらしくきれいな林檎程虫が食つている」なんていうことになる。なめらかにあやしき情熱をたゝえた強情の果実オリブの実は永く清純なまゝでは放任されない。

薔 薇

ばらなればくれないに、濃きもよし淡きもよしくろきはおぞましくしろきはなさけこまやか

ならぬおもいこそすれ。——
恋と女と青春の花である以上
さもあるべきである。

燃えさかる炎の容としての赤
色はいざしらず。あのうるみを
含んだなつかしいくれないのば
らの花が、女を、そして女性器
を表示するのはうなずかれる。
人体に就て見ても、感覚の最も
こまやかな部分は赤い色だ。

ばらを探す、ばらを摘む、ば
らの花びらをむしる、荒野の野
ばら、病めるばら、といった様
な過程がラヴのすがたなのでは
あるまいか。又ばらの笑いと

うこの美しい言葉は、ある場合
とんでもない猥らな連想を走ら
せないでもない。

バナナ

アメリカでは淑女の前ではバ
ナナなる言葉は禁物であるそう
だ。或る貴夫人がしやなりしや
なりとビルの入口からお出まし
になつた途端、忽ちあられもな
い姿で、ハイヒールの両足を天
高く差し上げて、転がしてしまつ
たその原因たるや、一人の男性
の捨てたバナナの皮であつたと
は。——

バナナの皮を捨てた男は貴夫
人に対して莫大な慰謝料を支払
わせられたのは勿論である。し
かし、バナナなる言葉を淑女の
前で厭うのは、この辺に理由す
るものではない、いさゝかもない、
すべては、その形態に存する、
と思せば、ハハアンと賢明なる
読者は諒解せられることであろ
う。

日本では、芋、章魚、南瓜は
女性の好み給う食品の雄である
が、アチテでは、アスパラガス
バナナ……等と申せば叱られ
るに違いないから、これ位で。

× × ×
甘酸つばい葡萄の味覚、野性
的情趣の仄かに匂う百合の花の
秘めたる情婉、神経の疲れを慰
める憂愁の花、雨に濡れた紫陽
花、婀娜として、しかも繊麗な
メロンの風趣、其の外多くの興
味ある材料の持ち合せがあるが
この辺で、エキセントリックな
此の文章も一先ず結末を告げる
ことにしよう。——

完

読者通信

貴誌七月号を拝見し我が意を得
たという気持でいつばいの余り思
わずペンを走らせてしまいました
他の雑誌でも最近女を縛つたり
責めたりするのは大分出ています
が、貴誌の女天下特集のように男

が女に責められるというのは見て
いません、私は貴婦人やインテリ
女性に縛られたり足で踏みつけら
れたりしたいと常日頃思っていた
のですが女天下の特集でそういう
た画や記事が豊富にありましたの
で実に嬉しく拝見しました、その
中に拙文ですが、自分の体験を書
いて送ります。(広島県 笹枝

淳)

私のセックスの眼覚めは十四五
の頃に手あたり次第に濫読した本
や雑誌の中の責められる女や凌辱
される女の記事や挿絵によつてで
した、特に落城した城中の婦女子
の最後等は最も興味をひいたもの
の一つです、そしていつの頃から
か、そういう文獻をむやみたら
に集めました、一転して縛られ

る女の姿態に魅せられるようにな
り最近専らその方面の絵画写真
等の蒐集をやつております、若し
縛られる事に興味を持たれる女性
の読者の方がおありでしたら文通
を御願ひしたいと思います。種々
と共通の話題もある事と思いま
すから、直ぐ御返事差し上げます
から、どうぞ御遠慮なく御便り下
さい、住所本名等は時の御便りし
ます。
曙書房気付 鹿沢 宏

現代風物詩

温泉ホテルの母娘

矢代文世



煙草を吹か
すと

「あら、今日

は別のお話し

よ。少し折檻

してほしいの

よ」

「折檻？お前

にマゾヒズムがあるとは知らなかつたわ」

「いやな人。魚子を叱つてほしいんです。女

親一人だと思つて、あの子、あたしをなめて

るのよ。親の心、子知らずつて本当によく云

つたものね。あの子だけは堅気な人間にしよ

うと思つてるのに——」

「どうしたんだね、いつたい」

「わえ、あなた——」

お兼が膝を崩してしなだれかゝる時は録な

話ではない。だから辰造は苦い顔をして、

「また金かい？ 経営の手腕がゼロだね、お

前は。わしだつて金の成る木があるわけじや

ないんだぜ」

「男が出来たらしいんですよ」

「ほう、魚ちゃんもそんな年頃になつたのかね」

「感心してる場合じゃありませんよ」

「うむ、それはそうだ。ところで手紙でも見

つけたのかい？」

「いゝえ、そうじゃないんですけど——」

そう云つてお兼は説明した。

もともと兼は辰造が苦い顔をしたように

経営手腕のてんでない女だつた。辰造がお兼

にこの温泉ホテルを買つてやつたのには辰造

らしい思ひつきがあつたのである。余り氣前

のよくない辰造はお兼を囲うに就て色々考

えたが毎月費用を出すよりもたとえまとまつ

た額だつたとしてもホテルを買つてやつてや

ここから利益を得る方が遊ばせておくよりもとくと考えた。ところがそういう考えは実行してみても、結局大損だということを辰造は知らねばならなかったが、辰造に損をさせて何の苦痛も感じないお兼でもなかったのである。お兼はあせつていた。何とかして赤字を無くしたいと思つてゐる。そこで赤い温泉マークのネオンを看板にとりつけたりもした。一向客足は増えなかつた。お兼は何時も愚痴を云つてゐる。人の顔さえ見ればいゝ考えはないかと聞いてみるのだつた。そのお兼に娘の魚子が智慧をつてくれたのである。

魚子は各室に衝立をそなえつてゐることをすゝめた。普通の衝立ではない。片側に鏡をはめればいゝと云うのだ。

「名物になるわよ。そしてじゃん／＼はやるわ、きつと」

と魚子は云つた。

始めの内、その鏡が何の意味かお兼には分らなかつたが考へてみてギョツとした。そしてこんなことを云う魚子は男があるに違いないとお兼は思つたのである。

「ふうむ、それはそうかも知れぬ」

話を聞いて辰造はうなづいたが、

「しかしその鏡を部屋におくというのはいゝ

考えた。気分が出る。見ながら愉しめるつてわけだからな。魚ちゃんも仲々頭がいゝぞ」

鼻の下を長くしてやに下つたが、その辰造の腿をギョツとつねり、

「バカね、あなたまでそんなこと云つちやいけません」

お兼は柳眉を逆立てゝいた。

「それよりも叱つてくれるでしやうね？」

「うむ、お前がそうしてほしいというのならせぬこともない」

「じゃあきつとよ。今、部屋にいますから、さ、早く」

お兼は辰造の手を引つぱつて魚子の部屋へ案内した。

襖の外で立ち聞きしていると魚子は恐縮しているらしい。押し出しの立派な辰造を、お兼はやつぱりしつかりしてゐると思つた。

二

魚子の男は松田亀夫という学生だつた。ダンスパーティーで知り会つたとのことである。

「不良よ、絶対に不良よ」

とお兼は松田亀夫が不良でないといけなみたいに力説し、その学生と談判することを

も辰造に依頼した。そこで辰造は余り有難くない顔をして出かけて行つたが、

「割りに純真そうな男だつたよ」

と報告した。内密でこゝろ関係を結んだ自分の非を卒直に詫びたというのである。

「たゞ親の脛をかじつてゐる身分だからね、今すぐ結婚つてわけにはいかないと云うんだ。母親が後妻とかで家庭的に色んな問題があるらしい」

「やつぱり不良ね、結婚する気もなくして魚子をあんなにするなんて」

「しかしお前みたいにもきに腹を立てることもないさ。事情を聞けば無理もない」

「だつて不良でないのなら結婚出来る時まで最後のものを残しておくべきよ。それなのに喰べるだけ先に喰べちやつて後になつて知りませんなんて、そんなの絶対に不良よ」

「だが惚れたとなると誰だつておあずけさせられてゐるのはいやだからな。それにお前は男にだけ罪があるみたいだに云うが、あゝいうことは女も嫌いじゃないんだからな、お互いさまさ」

「あなたつていう人はそういう人なのよ。魚子が自分の種じないから何とも思つてないのね」

「まあまあそう云うな。物事は悲観しても仕様がな。その内に素晴らしい男が魚子に一眼惚れするさ」

「あたしが心配するのはその時なんですよ。」

魚子が生娘でないという理由で、そういういゝ縁談がこわれるかも知れないでしよ」

「その点なら心配無用さ。今時の娘は生れた時のまゝの身体でいるなんて、そんなのはどこを探したつていやしない。それに一応あのことの体験を持つてゐる女の方が男にとつては魅力のあるものだからね」

「あら、それでしよるか」

「うむ、一番汚いのは何にも知らない女だ。そういうのに出くわすと男はすぐに飽きちゃうよ。だから今度の問題は、もう済んだこととして忘れるんだね。魚ちゃんにもわしからよく云い聞かせておこらう、お母さんに心配をかけるんじゃないぞと云つてな」

そんな風にして事件は一応落ちついた。そして親のひいき目かも知れないが、あのことのあつた前と後とを較べて見て、お兼には魚子がきれいになつたように思えるのだつた。肌は色艶を増し、熟れた果実みたいだつた。

お兼にとつて魚子は希望の全てだつた。

家の貧しかつたお兼は小学校を出るとすぐ

に芸者家に売られたが、座敷勤めの辛さに泣き、十八日から丁度今の魚子と同じ年だ、同情してくれた出入りの魚屋伊三郎と駆け落ちをしたのだつた。転々と逃げ廻つたが追手は実に根気よく、二月目に函館で捕まつた。有無を云わさぬ強引さでまたも籠の鳥つまりこの逃避行は、結局のところ自分の借金をふやす役にだけしか経たなかつたけれど、帰つてから、お兼は身体の異常に氣付き、どんなに天の配合の妙を喜んだか知れなかつた。魚子という名前は伊三郎か魚屋だつたからつけたのである。

宥為転変の身の上だつた。

戦争中は軍人の座敷へ出、そこで加藤大佐に落籍された。老人のくせにひどく好色な加藤大佐だつたが、それでも時代の急変が考え方を變えたのか、終戦でページにかゝると暇をくれた。

だが伊三郎は南で死んでいた。

魚子のためにきれいに生きようと思つたお兼だが敗戦後の混乱と男の床にはべる以外、習い覚えたものゝ何一つ無い彼女だから、行きつく先は知れていた。

親切めかした男が登場する。ありきたりな繰り返しだつた。その果てにあらわれたのが

辰造である。そしてお兼は一先づ温泉ホテルの女将と立てられる今の身分に落ちついたのだつた。もつとも女中はたつた一人というわびしさではあるけれど、商売がはやらないから、その一人で結構間に合つてゐるのだ。

三

ところが、温泉ホテルは急に忙しくなつた。と云うのは、お兼が大英断で魚子の意見を入れたのだ。各室に鏡張りの獨立をおいた。それが大当りに當つたのである。

女中が給金を値上げしてくれと云い出した。そして本当に一人の手ではさばき切れな盛況だつた。だからお兼はもつと女をやとおうかと思つたが、今まで随分辰造には迷惑をかけて来たし、出来るだけ、稼げるだけ稼ぎたいという氣持があつた。そこでお兼も女中と一緒に働くことにした。そして時には魚子までが手伝つてゐる。

だが、これは魚子にいゝ影響を与えない、とお兼は思つた。温泉ホテルにやつてくるアベックは羞恥という感情をきれいさっぱり洗い落しているのだつた。

変態的な男女もゐる。

色恋の世界でだけ生きて来たお兼にはそう

した人間の気持が大抵分るのだが、そんな彼女をも辟易させるのは異常な露出症だった。

各室は内側から錠が下せるようにしてある。それなのに、錠をかけないばかりか扉をわざわざ開けておく組があるのだった。辰造の足が遠去いたりすると、お兼までが変な気持になることがあつた。いまいまして、力一杯扉を閉めてやりはするが、その僅かの時間を利用して、実ははつきりたしかめたがつている自分かも知れないと、そういう自分の気持に氣附いて、お兼は我が身が嫌になつた。ひどく罪深い生れつきのように思えるのである。「それにしても、この頃あの人、どうして来てくれないのか知ら」

一人寝の夜具の中で、お兼は辰造を思つてそんな風に呟くこともあつた。だが、お兼が辰造を待つのは、自分の肉体の要求からだけではなかつたのである。

松田亀夫というあの不良学生と、またもよりを戻している魚子らしいのだつた。

いゝ縁談があるように、お兼は魚子に女一通りのたしなみは身につけさせたいと思つてゐる。そこで毎週金曜日に生花の師匠のもとへ通わせてゐるのだが、その日の帰りが、近頃どうも遅いのである。

火遊びは得てして後を引き易いものだといふことをお兼は知つてゐた。魚子がずるずると泥沼へ落ち込む姿を見ているようで、真実耐えられぬ気持だつた。

「あの人にもう一度きつく叱つてもらわなくてははいけないわ。親身になつて必配してくれらるあの人云うことなら、魚子も聞くに決つてゐるし——。あゝあ、どうして来てくれないのか知ら？あたしの方がお金に困まらなくなつたと思つて安心してるのね。こんなことから赤字続きの頃の方が楽しいわ」

お兼は自分の男から男を経めぐつたただれた生活を思うと、魚子に意見めいたことが云えないのである。だがそんなお兼も遂に我慢出来なくなる時が来た。魚子が外泊したのだつた。

まんじりともしないで、お兼は娘の帰りを待つた。

それなのに、朝帰りの魚子は鼻歌を唄つてゐる。

「魚子」

青い顔をして、お兼は呼んだ。

しかし魚子はいけしあや／＼と嘘をつくのだつた。

「電車がなくなつたの。うゝん、先生んこ

ですよ。みんなでトランプしてゐたの」

「自動車がある筈よ」

「それがね、運悪くなかつたのよ」

「それならそうと、どうして電話してくれなかつたの？」

「だつて、たいしたことじゃないんだもの。

雑魚寝よ」

「それ本当？本当に雑魚寝なのね？」

「ママつてくごいわね」

「母さんはね、お前を嘘つきには育て上げなかつた心算よ」

お兼は泣いてゐた。ハンケチを噛んで、それなら生花の先生の所へ電話をかけて聞いてみると云つた。すると魚子は聞きたければ聞いたらいいが、そんなことをすれば悪い噂が立つだけだ。ママが胸一つにしまつておく方が、あたしは利口だと思ふんだけど、と云うのだつた。

お兼の烈しい悲しみには知らぬ顔で、魚子は奥の部屋に消えた。そして陽気な声でトンコ節を唄つてゐた。

四

お兼は辰造の会社へなるべく電話をかけないことに決めてゐた。呼び出しも一切しな

それは黙みたいで、且つ、おどかな顔はしていても、実はひどく勘定高い男たちの間を身体一つで渡つて来たお兼が、本能的に知つた処世の術であつた。

「会つて欲しい」

男と女の間では、先にそう云つた方が負けなのだ。だからお兼は辰造に電話をかけるのは得策ではないと思つてゐるのだが、魚子のあのありさまを見ると、もう瘦せ我慢を張つていられたかつた。魚子を叱つてほしい自分も慰めてもらいたい。

お兼は辰造の会社に電話をかけた。だが、辰造は九州へ出張してゐて帰りが何時になるか分らないとのことだつた。

こういう時に親身になつて心配してくれる兄弟や姉や妹の無い我が身をお兼は全くの天涯孤独だと思つた。そして早く辰造が出張から帰つて来てくれるように神棚へ灯りをつけてお願いしたりもしたが、辰造の帰りを、のんびりと待つてゐるわけにはいかない事態が迫

つていた。

日暮れ時が近附いて、ようやく商売が活氣を見せようという頃合だ。

お兼が便所で用を足して外へ出ようとする、魚子の若々しい声が聞えてきたのである。廊下の便所の一間ばかり横に電話器が備えてあるのだが、魚子はそこにゐるらしい便所のハンドルの握つた手を、お兼はそつと離した。

「あたしよ、魚子」

甘い声で魚子は囁いてゐた。

「ママにタコをつられたわ。でも勿論へいちやらよ。ママはもともとバカなのね」

電話の相手が何か奇習に富んだことを云つ

たらしく、魚子はオホオホと笑つてゐる。

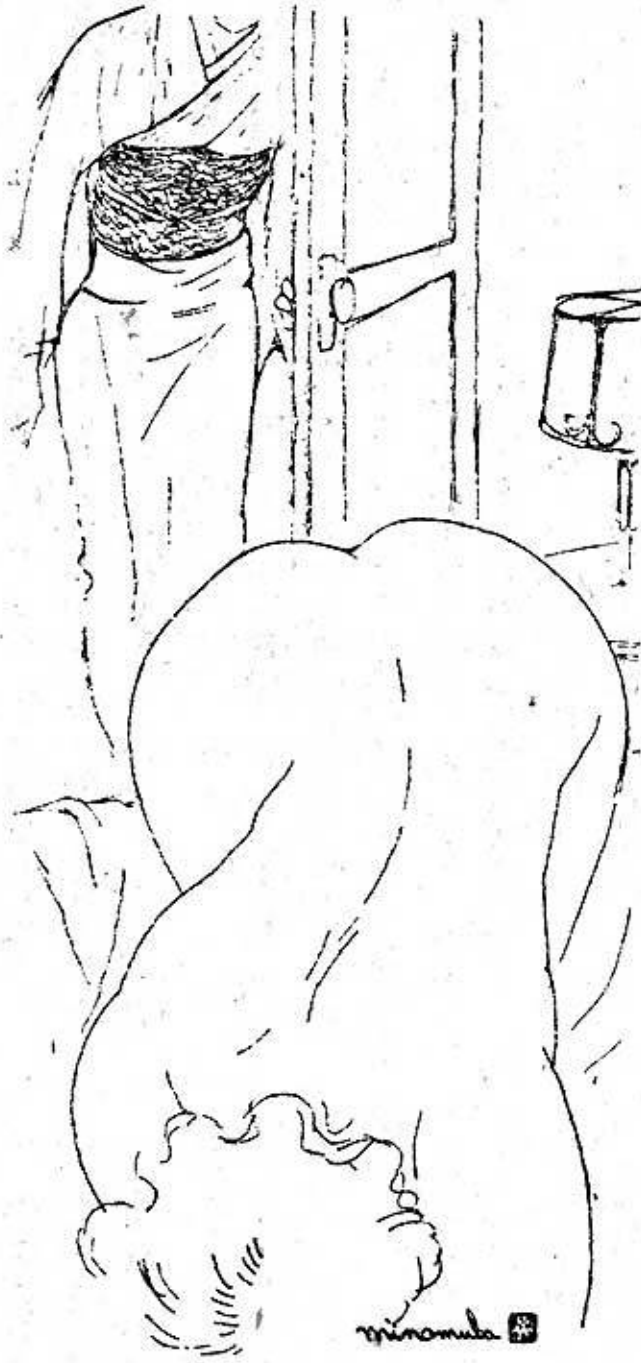
お兼は眼の前が真暗になつた。あの純情な伊三郎のことを思うと種が悪かつた筈はないそれなのにこんな子供が生れたのは、これはあたしの血が余程汚れてゐるのだらう、とお兼は思つた。

魚子の電話は逢びきの約束を結ぶためのものだつた。相手の名前を呼ばないので誰かわからないが、不良の松田亀夫に決つてゐる。

「じゃあきつとよ。えゝ、何時もの所で。先に行つて待つてなかつたらひどいわよ。うんといじめてやる。ホホホホ」

電話を切つて、魚子はバタバタと奥へ駈けて行つた。そこでやつとお兼は便所から

解放されたが、外へ出たお兼の気持は決つてゐた。お兼には多少男の心を知つてゐるという自信があつた。嘘つきでエゴイストで見栄坊で、ケチで偽善家で、その上助平なのが男だつた。お兼は魚子の前で松田亀夫の仮面をひんむき、魚子ののぼせた頭を冷やそうと思つ



た。母親の、それが深い愛情というものである。

五

雑踏を縫つて、魚子は歩いていった。お兼より、もう背は高い。背後姿を見ていると、その颯爽たる歩きつ振りはたしかに一人前の女だつた。足も早い。早く歩くと着物の裾がまわりつくとお兼は、ともすれば魚子の姿を見失いそうになるのだつた。

繁華街の裏、狭い通りへ魚子は曲つた。そこは酒場やお兼の家みたいな温泉ホテルが軒を並べ、いかにも不潔な感じの通りだが、魚子はいさゝかもためらう風はないのだつた。赤いネオンで青春ホテルと書いてある家へ魚子は消えた。

尾行して来たお兼は青春ホテルの前を二度三度往き来した。そして先づ女将を呼び出し事情を打ち開けると、女将も年頃の娘を持つてゐるとのこと、話はひどくよく分る女だつた。

「お宅をお騒がせしようなんて気持はちつともないんですけれど、本当にすみません」

「いゝえ、いゝえ」

と女将は手を振つて、

「こういう商売、本当にあざといとあたしも常々思つてゐるんですよ。御遠慮なんかありませんわ。さぞ御心配でしょうし、さ、お早くどうぞ。二階の九号室ですからね」

二階への階段を、お兼はゆつくりと上つた。落ちつこうと思いつく、胸の高鳴りはどうしようもないのだつた。

九号室は廊下の外れだつた。この扉を開けば、そこに娘のあられもない姿が見えるのである。

もしもあの子が好きだつていうのなら、どんな不良でもいい、その松田亀夫という学生を養子に迎えようか！。そんなことをお兼は思つた。

そしてそんな弱気を打ち消して、いやいやこんなことを考へてはいけない。断乎として、えゝそう、断乎として！

断乎として、お兼は扉を開いた。そして大声で叱りつけようと思つたのだが、喉まで出た声がすつと消えた。

何という情景だろう！

魚子は一絲をもまといつていないのだつた。だが、それは予想出来ぬことではない。お兼をびつくりさせたのはそんなことではなかつた。

男。問題は男なのだ。にやけた、色の生つ白い不良学生を想像していたお兼だつたのに魚子を愛撫し、意外な闖入者に驚いて顔を上げた男、その男は九州に出張している筈の辰造だつたのである。

一瞬、お兼は息が止まりそうになつた。何という破廉恥！何たる下卑た魂！

だが、お兼も男の中を渡り渡つて生きて来た女だつた。人の世の悲しみも、そして喜びも知りつくした女だつた。

につこり笑い、そしてお兼は次のように云つた。

「お金の浪費よ。だつてあたしんところなら部屋代なんかいらぬんですもの。そう思つてお迎えに来ましたの」

「あはははは——」

照れかくしみたい、辰造は笑つた。顔をくしゃくしゃにして、狸みtainな顔になつて——。

(終り)

或る変質者の告白「狂い咲いた私の女体」

なる一文を寄せられました羽村京子様、原稿末尾の略歴は発表してよろしきものや、否や至急御返事賜りたし、

編集部

マゾヒズムの男より

私は奇譚クラブの愛読者ですが七月号に発表されたあなたの絵とアブノマルラブレターを拝見し敢てこの手紙を書きました。私は当年とつて二十五才の男子ですが、十七才の時より一寸した事よりマゾヒズムになりました。その一寸した事とは戦時中、少年工として工場にかり立てられていた時、余りにも残業残業と攻めたてられますので、二日程さぼつてそこが要塞地帯とも気がつかず遊びに行きました、その現場を憲兵におさえられ要塞地帯へ侵入したのと、軍需生産を怠けたかどで捕えられ、軍機保護法違反及び国家総動員法違反で一ヶ月軍の監獄へほうり込まれました。その時縛るとかなぐるとかは日常の事でした。さんくひどい目に合わされました。もともとマゾヒズムの素質があつたかも知れませんが、縛られて体に捕縄が喰い込むと始め非常に痛かつたのが終いにはなんとも云えない快感になつてしまつたのです。あなたの場合は女を縛つて快感を得られるようですが、私の場合は男に縛つて貰つた方がずつと快く感ずるのです。もしアブノマルラブレターのよう

に取扱われたら本当に満足出来ると思ひます。縛られた裸女十態を拝見しますと、そういったのは甚だ失礼ですが、あの縛り方では縛られた者はさほど苦しくありません——中略——
——万が一あなたがアブノマルモデルにでもなれとおつしやるならすぐ参上します。そしてあの通りに扱つて頂きたい。しかし、その中で一寸訂正していただきたいのは一条もまたわれないのは困りますから何か着物を着せて下さい。万が一逃げ出す恐れがあると御心配なら一寸そのまゝでは歩けない恰好、例えばラニングシャツとパンツだけにし、それも特別な色に染めておく、例えば赤とか青にしておくとかよいでしょう。
又いつも縛つておかれるのはよいが、部屋は出来れば外部から見えない所へ昔の牢を作つてつないでおくようにして下さい。但しかような生活を一週間でもやれば体がもちませんから如何に取扱われてもよいが、食事だけは十分にして下さいその食事は皿に盛つて牢の中へ入れて貰えばよい。
薄暗い牢の中で真赤なラニングシャツやパンツの男が縄でしばり上げられ、その縄は肌に喰い込み二の腕は色も変つて、足も十分に歩けないのを膝をついて犬のような恰好で皿の飯を食べている姿をあなたが御覧になつ

たら、さぞ満足されるでしょう。そして朝ひき出しては好きなポーズをとらせ又牢へ入れておく、こんなのは如何ですか。——中略——
——しかし、呉々も御注意申し上げますが、首に縄をかける時は男であればのどぼとけの下にかけること、決してそれより上にかけない事です。私は今迄縛られた経験より申し上げます、のどぼとけより下ですと、苦しいには苦しいですが一寸顔が充血する程度ですが、一度だけ軍の監獄でのどぼとけの上をやられたことがあります、この時はのびてしまい人工呼吸でやつと生き返りましたから御注意のほどを、誌上で御返事下さい。住所氏名等はでたらめです。

喜多玲子様

× × ×

マゾヒズムの男より

お手紙ありがとうございました。妾もあなたのおたよりのようにして責めてみたいと常に思つています。でもあなたが男の方なんですもの、つまりませんわ、若しあなたが女性の方でしたら妾早速喜んであなたに来て頂くのですけど、……悪しからず御宥して下さいませ、御言葉により誌上にて御返事まで

かしこ

原賀芳夫様

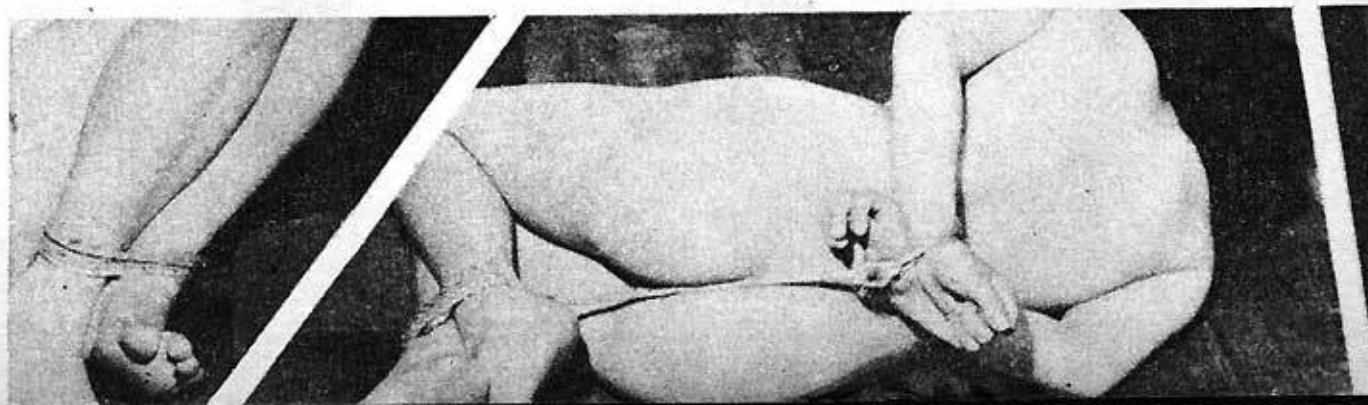
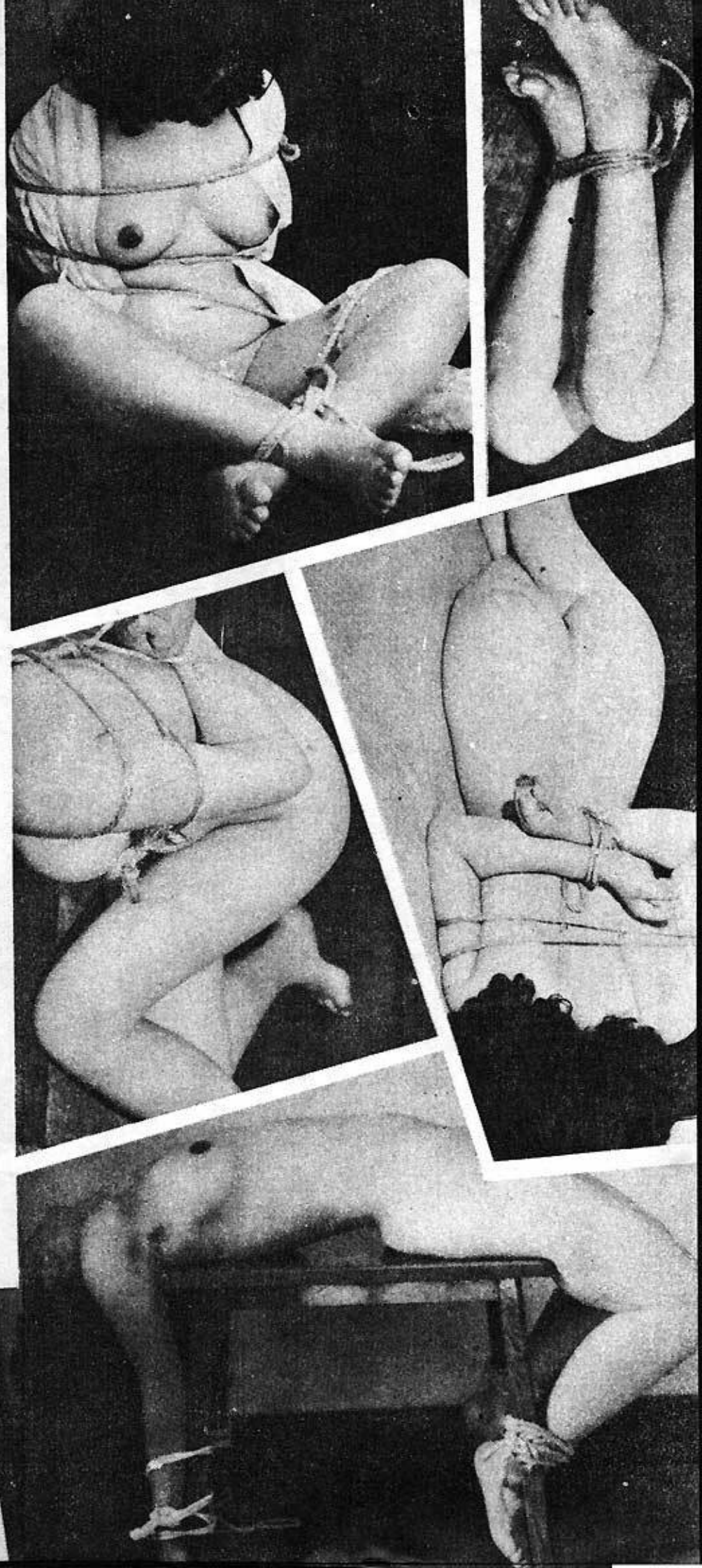
喜多玲子

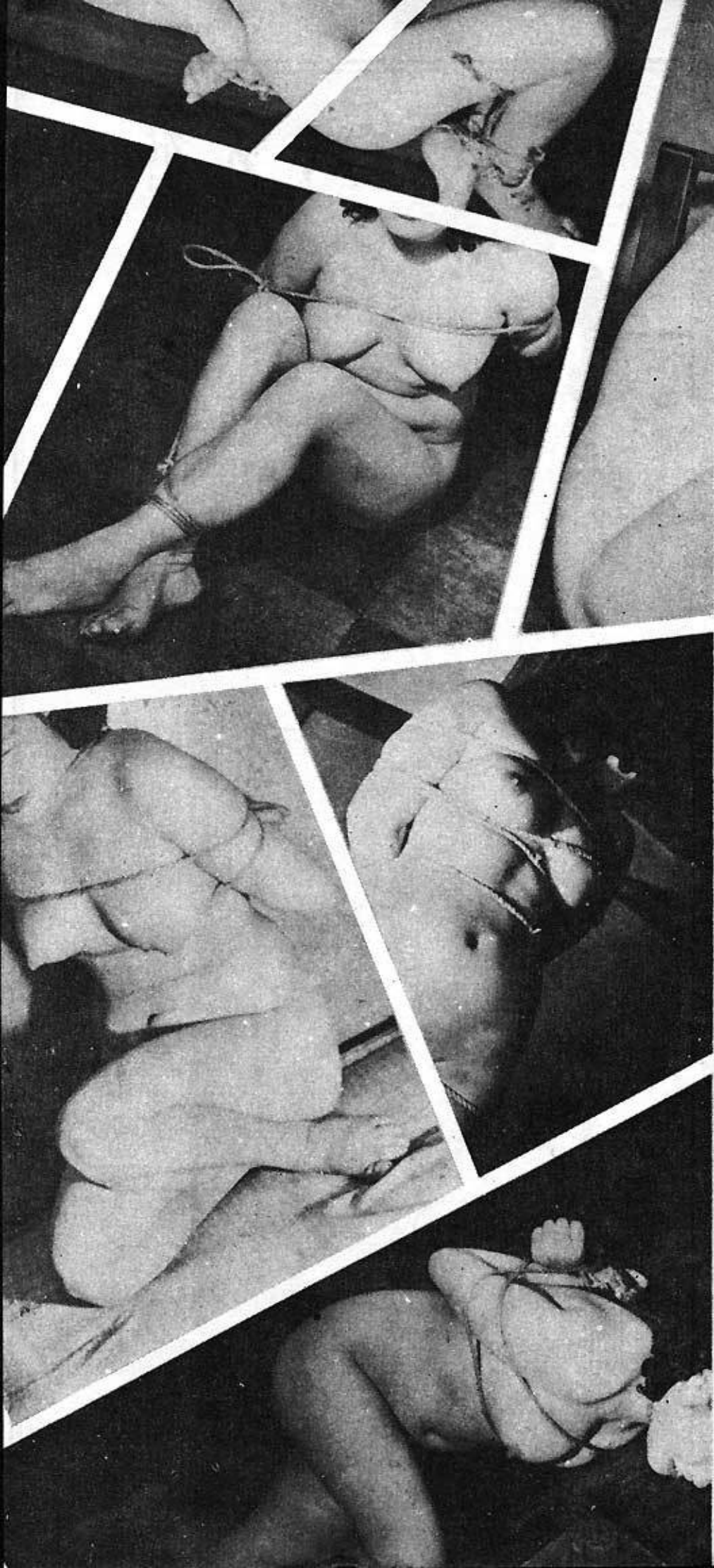
玲子



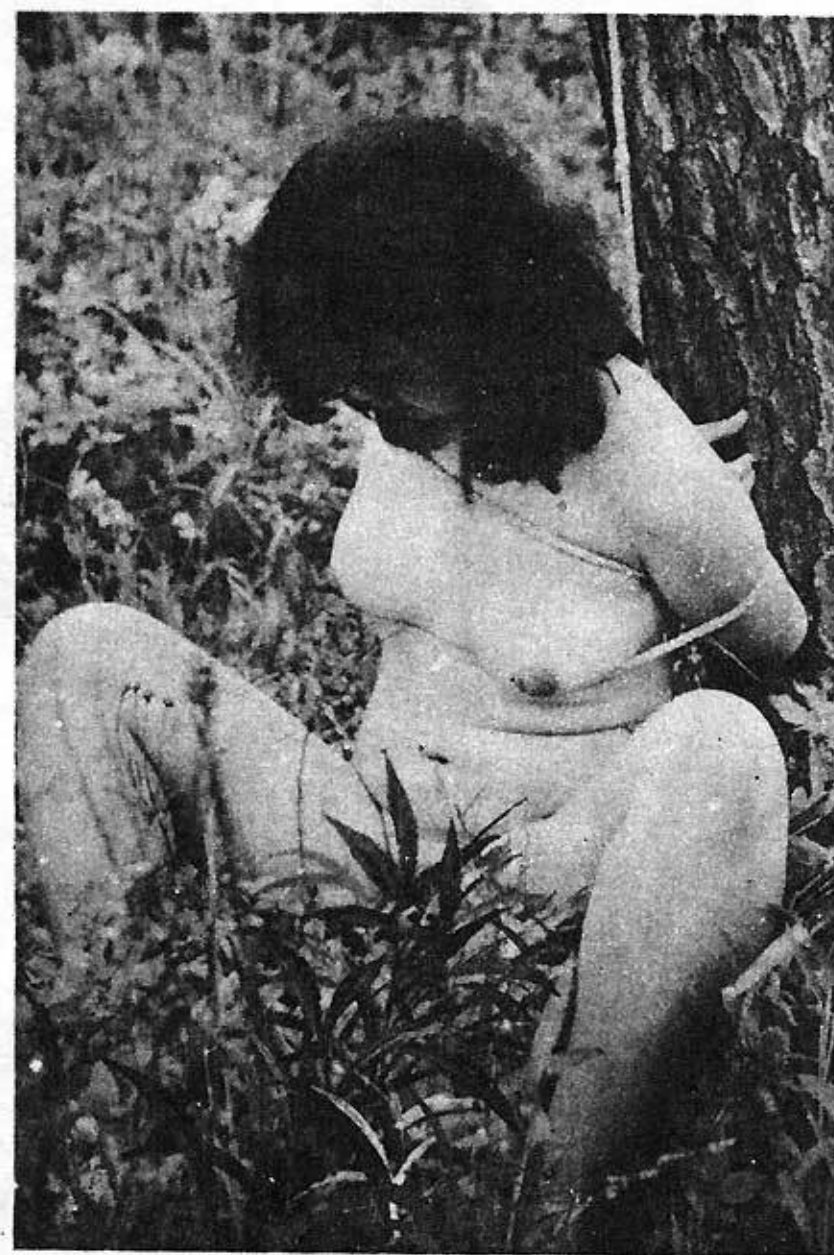


縛られたる女





緊縛美の斷片



態十五作習

子玲号表



奇譚クラブ最近号主要目次

○ 六月号 戦争と性慾特集 ○

口絵 戦争と性慾画集、ハレムの美妃

「責められる女の美」写真集

好色秘本 バルカン戦争

貞操特攻隊の悲劇……………杉山 清詩

モスコウの妖花……………藤田 盛治

ナポレオンの兵隊……………松谷 茂

成吉思汗の性慾戦術……………中沢 公平

テルマ病院の点描……………花本 史郎

人間便所の妄想狂……………二宮 忠一

男子同性愛雑考……………浅倉 文朗

陸軍特設第七天国……………真鍋 吟吾

港々の女たち……………下山 雄

南方特殊慰安施設こぼれ話……………三嶋 彰太

太平洋戦争戦塵漁色余話……………高原 順三

今は昔戦線エロ落穂集……………下出 章一

中国兵の妻となつた女……………田島由美子

戦争と娼婦……………田森 浩志

露性私刑……………街 啓介

小説・京マチ子……………夏目 千代

淫蕩歌舞伎図絵……………緑 猛比古

特選小説

男子同性愛者からの書信……………南里 文彦
屍姦の悲劇……………高野 彌助
女性陰毛の生理……………田中 芳生
女体哨戒線突破……………浪速 三郎

○ 七月号 女天下時代特集 ○

口絵 縛られた裸女十態……………喜多 玲子

緊縛裸婦写真集「美しき苦悶」

女天下時代(マゾの男達)画集

女の奴隷、マゾヒスト群像……………高取 辰治

女体の下に蠢めく男たち……………阿久津 猛

淫乱婦女伝……………花木 実

疾患の鶏……………藤安 節子

或る変態夫婦の死……………藤崎 洋美

お座敷ストリップ色勇伝鬼山……………絢策

女剣劇王健在なり……………富士 芳孝

国際文通好色噺……………二俣志津子

上海の売笑婦 野鷲族……………野中 愛三

色情倒錯者の手紙……………染田 玄

変態艶書……………岡田 咲子

千円札偽造犯人を探る……………宮川 力造

世界奴隷艶情史……………野溝 草兵

妾は早熟な箱入娘であつた……………辻 佳月子

女天下時代

肌を濡らした女学生……………秋山ルミ子
少年好色奇譚……………松谷 茂
維新志士漁色競べ……………花山 剣作

性愛の研究

性交なき遂情行為……………鳥上 源一
性愛と残酷……………仁比山 等
恥毛と腋毛……………田中 芳生
女の足の蠱惑……………赤坂 剛

洋妾(ラシヤメン)由来記……………福森 耕治

宗教美術抄説……………大宮喜代子

夏期と性的犯罪……………仲 信哉

夢性の美少年……………三村 幾夫

張形の謎……………緑 猛比古

倫敦の岐路……………壬生すみ子

都々逸に現われた性愛感情……………安部 雨紅

性神探訪 石神案内記……………七条美樹子

山村夜色……………吉井 川洋

軽快洒脱 内股のはくろ……………笹田 豊

重役の二号となつた女の手記……………伊沢 蘭子

獣類にも恋愛はあるか……………絹島 増夫

張型を用いた性愛の技巧……………白川 朝子

世界行脚 モナコ王国……………三瀬 淑朗

尼港事件余聞……………下出 章一

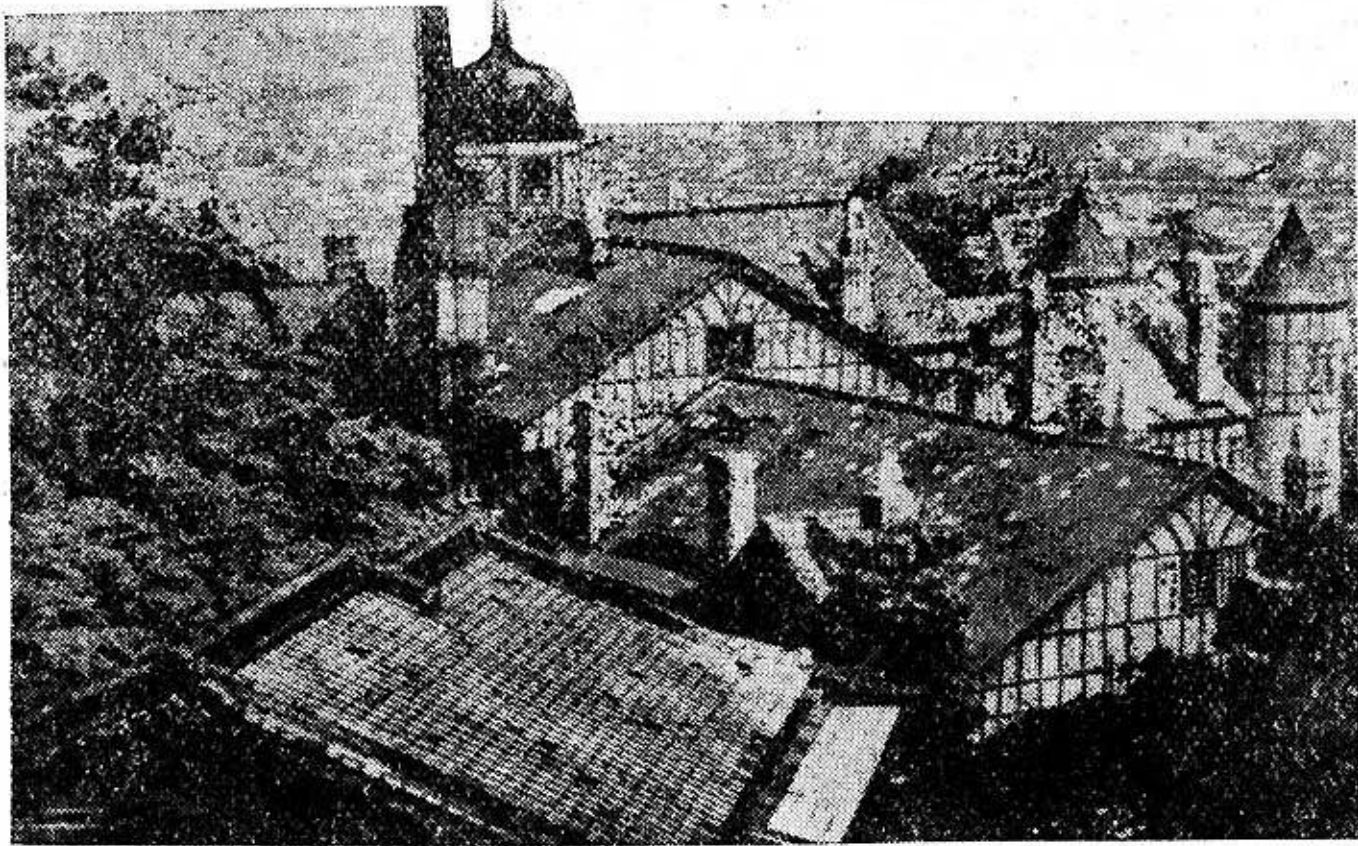
モデル台の女神……………朝倉 文朗

性愛談義

国際
港都

神 戸 暗 黒 街 探 訪 記

久 木 田 堅



貴女の仮名を脱いだ街

霧深い暁暗の波止場から今日も南支那海を渡つて来る異国の船が長旅の吐息をつくように長い警笛の尾をひいて響き渡る。山手に並ぶ数々の赤い家、青い家、無言のまゝ船上を見下しているその外貌は異国の人々の眼に東洋の臭を強烈に沁みこませる。

清潔な、日本の街特有の汚をすつかり洗い落した湯気の立つ貴女の裸身の如く、国際港都の名にふさわしい、取り澄ました美しい神戸の街も、ネオンに彩られる宵闇が忍び寄る頃、がらりと貴女の仮面をかなぐり捨て、奔放なその肢体を道行く人々に投げかけてくる。

その魅惑は阿片の如くとりつかれたら、ずる／＼とその魔境の中に人々をひきづり込んで行く夜の神戸、暗黒街の妖しい嬌笑を縫つて猥奇と戦慄に胸躍らせつゝ、生々しい息吹きを身に感じ乍らその渦中に身を泳がせねば暫し自身の存在さえ忘れてしまふ程である。

“オンリミットバー開けば”

三ノ宮駅と向い合せの阪急乗場よりガードに沿つて山側を西に行くと、仏映画の望郷に見られた異国のカスバ街を思い出させる隘路が縦横に走っている。擦れ違ふ事も出来ないようなその狭い小路は、御伽噺の花道の如くネオンの光に五彩に輝やき軒並に横文字の浮き出したバーが続く。オフリミットと書かれた所は外国人の出入禁止。絶えずMPが廻っているからマリン

もGIも其他外国人は入らさない。オンリミットはこの中に散見して見出される程で数は余り多くない。どちらも同じように日本人の女給がいて、私製の洋酒を飲ませるバーであるが、外観丈の話で中味は開けてびつくり玉手箱と云う所である。

オンリミのバーの女給は、写真と名前がその筋に登録される。外国人相手だから間違いを起した時を考えて身許を警察で知っておく必要があるからである。週に一度検診をうける。丁度終戦当時の外国人相手のダンサーの扱いをうけるわけだ。勿論日本人の客も入っている。わけだが、てんで日本人は相手にしてくれないから土地の者はよりつかない。

外国船でも入るものなら、彼女等は腕によりをかけて異国の客を待っている。船の碇泊期間の幾日かを、誰のオンリーになろうかと相手を血眼になつて探すのであるが、オンリーとは専属と云う意味で何もかも一切相手に属して他人には指一本触れさせない、総てあなた一人丈のものと云う事であるが、専属料を最も高価に相手へ出させた女が腕達者だと仲間の者達から認められる。

どや／＼と入つて来るあちやらの元気のいい客の傍にびつたりと膝をつけて、べら／＼

の英語で客と応酬を始める。痴話口説、皆表情をたつぷり盛り込んだあちやら言語であるが、彼女等の英語も先方様から聞くと、中国大陸で中国娘を口説いた日本軍兵士の恐る可き和製中国語と余り大差ないように思えるだろうが、とに角意味は通じるし、どんな交渉もすらすらとOKだから和製英語も正しいそれより調法かも知らない。

札束を積んだ客は、日本の愛すべき娘達を前にしてビール、洋酒と注文する度に現品引き換えに金を支払う。オールキャッシュである。シーメン(船員)セビリアン(民間外国人)が主であるが、一階がバー式になつて酒や料理を飲んだり喰つたりする事には変りはない。二階がホールであり、踊ればダンサーのように女給にチケットを与えねばならない。此処迄は大した事もないようであるが大抵バーは二十名近く女給がいて、全部OKである。殆ど一流のホテルに行くのであるがオールナイト五ダラーから二十ダラーが相場である。弗貨を貰つても仕方がないように見えるが、闇で高く売れるから日本金で同額を貰うより女達は喜ぶ。Sホテルはこの連中の専門宿のようであるが、一泊二人で二――三千円。ベットの枕元では紙まで備え付けて

ある程至れり尽せりである。馴れない間は、殊に未婚の娘達は始めは日本人を相手にするようにならねいそうである。外国人は総てに於て軀の部分が吾々より大きく出来ているから、よく娘達は怪我をして、婦人科医に通う事は珍しくない。その代り馴れてしまえば女は子供を生む程に融通の利くものであるからすぐ間に合うようになるのだが、こんな所にいた娘は、一年程尼寺へでも閉じ籠り一切男気を絶たない限り、日本人の夫を持つ事は出来ない。大海に洗われる何とかの如き状態であるから。

オンリミと云うのは早い話が外国人の期日を定めた妾であるが、そのオンリー料は二万円から十万円止りである。一緒に始終居るわけではなく、その間に日本人の彼氏と浮気もしたらと思えるが、一度、それが相手に暴れてしまふと、契約不履行と面子を潰した廉で物凄く目に合わされる。外国人は女のようにくにあ／＼として、女を見ればキッスしたり可愛い／＼娘よ、素晴らしい瞳よと頬ずりをして、随分だらしないように見える、が一度怒つたら、その物凄く事は日本人などの想像もつかない程に激しい。

外人は気前がいい／＼ように思えるが、一カ月

一万円足らずの金しかくれない者も居るからオンリー娘はどうにもやつて行けない事もある。と云つて外の男と浮気をすれば本物のメリケンが飛んで来るから金縛りになつたように身動きがとれない。顔は日本人でもすつかり外国人になりきつた此等の娘達は、駅のプラットホームでもキツス位平気でやるが隆とした身なりも立派であればある程その生活の裏を誇示しているように見る人を見ると悼ましくさえ思える。

灯影に立つナイトガール

三ノ宮界限は神戸の銀座裏である。駅前の駐車場(山側)から新世紀観光キャバレーに通ずる一丁程の道がガールストリートともよばれる夜の女の専用道路の感がある。ポン引きは殆んど年配の女許りだが、皆奥様然としていて場所柄みすぼらしい装をした者はない。コツ／＼と靴音を響かせて舗道を歩くと横にスイト寄り添つて来る。根城はカスバ街の山手によつたバラック建の粗末な狭い家が多く、女も大体商売女が多いが、中には実際に風間は会社に通つてゐるセミプロの娘も居る。ポン引の厄介にもならずとも、舗道の小

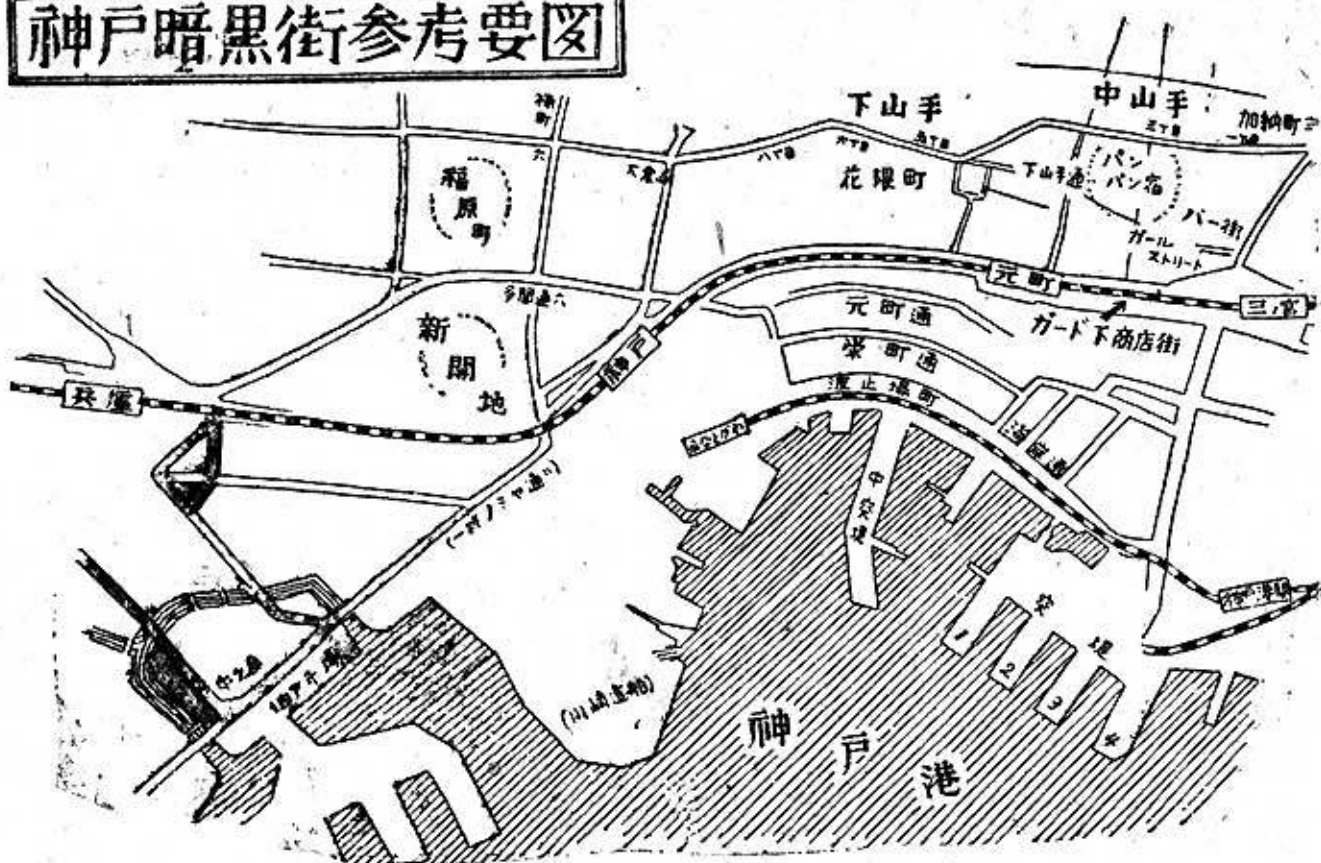
道の角にネツカチーフで顔を包み、凝然と立っている洋装の素晴らしく身についた娘達が、此方がある前に立ち止ればやおら面を上げて「行かない？」とぼつんと云い乍ら微笑みかける。ひつぱつたり、しつこくからみついたりあくどい事をしたりしない。顔も踊り子のように可憐な清潔な感じのする娘が多い。数は余り多くなくせい／＼十数名位で、現われている消え、消えては現われる。客にあぶれたバーの女給や、家出娘が独立して部屋借りをし、ポン引からピンをはねるのを厭つて勇敢に自ら街頭に立つてゐる。所謂一発五百円、泊りで千二三百円であり、娘の借りてゐる部屋に行くのだから、室内も潤いがあり、若い娘の自室に色男然と泊り込む気分も悪くはない。所謂衛生設備がないから、病気の点は用心して鉄兜を用意する方が無難である。

此れは、真正面から女を漁る場合、誰でも容易に旅行者でも手に入る女達であるが、神戸の水商売の女は百人の中九十九人迄、春を売るのである。喫茶店の女、バーの女、ダンス、夜の商売に従事している娘は全部ホテル行キOKである。併し、それにはルトトがある。複雑な陰影を伴う街の表情にマッチして、女達の姿態も妖しい色彩に彩られた動き

をする。バーに入ると、或程度の金を費う代り、その店の女給は御氣に召すまゝ。まあ飲みなさいよ、それからよ、そんな話は、と来るのを、飲ませる丈飲ませて、又来てネ、さようならなんてひどい平手打ちは食わせない。港神戸の女は、矢張りエチケットを心得えている。約束すれば必らず実行する。二千元程使つて、千五百円程出せば、翌朝迄目ざす娘を堪能出来る。バーの女は、せい／＼一晩に一人しか相手にせず、それも毎日と云うわけでないから、肉体も新鮮であり、素人娘と同じセンスも又外観を持つてゐる。少し高がつくが、懐中豊かな時は、土地の者でも夜の女など見向きをしない。

何処の土地でもそうであるが、夜の女は肉体の掘え物である。不潔な動物に抱えついたように後味が悪い。飢えてゐる時は馬鹿に煽情的に見えるが、事済めばやりきれない不快な思出を残す。素人娘にはそれが無いから、高く評価される訳だが、同じ事なら、女を抱いて寝る場合、安心して諸々の女の持つ甘い量感を満喫した方がいゝ。魚の生煮を、調味料もつけずに食ひ食つては、腹はふくれるが、お茶漬の味にも及ばない。せめて、矢張り味のついた奴でないとうまくない筈だ。

神戸暗黒街参考要図



三宮にある二三のキャバレーは、日本人専用のものが総てに於て立派であるが、軍人以上は外人も入れるから、碧い眼をしたお客さ

るから、一緒に歩いて下手をする。此方のネクタイの柄が気になる程である。商売女のように、夜一回、朝起きる前に一回、それ以

んと肩を並べて踊る事もある。

ダンサーは、バーの女より安い。チケットを二千円も買う必要もないし、女が目的で行くのだからキャバレーに入つてもせいゝくビールの一二本で済ましてしまふ。ホールの退けるのは、十一時だから、外で待つてると必らずやつて来る。千五百円から四五千円迄がオールナイトの相場である。この開きは矢張り優劣の激しい女群達であるから、ナンバー5迄を連れ出そうと思えば安くは上らない。ホテルは一步ホテルを出れば右の路次、左の街角、至る所に連れ込み宿があるから、目にふれた家に入りこめばいい。普通、二時間二人で五六百円、泊りで千円前後であり、ダブルベットの洒落れた洋室も備つて、案外安いものである。

上はなんて助平男だらうと罵倒される心配もなく、軀の続く限り十回でも突貫して行つても厭と云わないのがこゝろしたセミプロ娘の特長である。勿論、目もつむるし、火のような息使いもするし、ズロースも自分でとろうとはしないテクニクも心得ている。

泊り二万円の紅雲荘

何と云つても、金で買える女ではないか、泊り二万円なんて話が大き過ぎる。と誰も云うし、実際に行つた者でないと本気にはしない。第一、女を買うのにそんな相場は日本には存在しないと云うのが常識になつてゐる。

此の家を識つてゐるのは、極く小数の常連

客と所轄の警察署位のものである。神戸中のポン引きを集めて聞いても知つてゐる者はない。尤も山手でも泊り四五千円と云う家はざらで知らない方が笑われるが、山手の夜の女の最高水準を行く紅雲荘の絢爛たる夜の饗宴は、限られた客の一人となる事が出来た私のこのベンが、衆人の前にその裸身をさらけ出させた最初のものとなる。

名前は書けないが、花隈（神戸の新橋）芸妓で有名な元町三丁目からよつたその中心地で御茶屋を経営しているS氏の紹介で、始めて紅雲荘に連れて行かれた。

「相手の令嬢の顔を見ただけで、若し帰るとしても一万円は御茶代を請求される。」

S氏は念を押して、その宏大な門に入る時そつと私に囁いた。山手通りは海洋氣象台の近く迄上ると焼け残つた家が多い。戦前の豪華な生粋の洋館が、さ程色もあせずにその偉容を誇つてゐる姿が散見されるが、紅雲荘はこうした建物の一つである。今なら全然こうした本格的な洋館はいくら金をかけても建てられないだろうが、S氏の後から随いて内部に入つて全く度胆をぬかれた。戦前の神戸一流ホテルオリエンタルの特別室を見ている私は室内の調度や設備が筆舌に尽せぬ超高級品

で出来て居り、品物と云つても余り立派すぎると長年貧しい品を見てゐる人間には、生きた人間以上の威圧を感じしめるものである。

一万円と呼称されたお茶と御菓子に立派と云つても一つ千円のケーキでもないから知れてはいるが、結局、相手の女を買わない場合その自尊心を傷つけた慰藉料と云う意味なのであろう。幾回も出入りするようになり詳しく様子も後では判つたが、始めてのその時は現われた令嬢風の女の顔を見て全く女道楽をし尽した私でも腰を抜かす程愕然としたのであるから、凡そ想像がつく事と思われるが、金の値がつくく出て来たものだと思感した。

二万円と云われたが、二万円でも三万円でもその位の金で全身を一晚中自由に出来るのかと改めて聞きたゞした程の女である。翌日になつて今年の兵庫区から選出された準ミス神戸の一人だと判つたが、阪急などで時々見かける阪神間の上流階級の令嬢と伍しても決して負けをとらない程である。取引きが済んでも、では寝間に参りましょうなんて品の悪い事はこんな家では云わない。夜更け迄、タイル張りの風呂から上つて相手の女と喋々嘯々と語り尽してから寝室に入るのであるが、その間に交す会話の中に凡そその女の教養な

り育ちや、女としての魅力の合成された価値が判るものである。毎月二度程しか客をとらないし一年かゝつても、商売人の一日分だけしか性的交渉の回数がないから、肉体の新鮮さは変な素人娘を嫁に貰つた夜の娛しみ所の比ではない。尤も、嚴重な診査が娘に対して仕事を始める前に此の家の女主人から行われるから結局高価な料理はその質を吟味するうちに女の場合もこうした点に商品としての検討が行われるのであろう。

出入りしている女は、中流以上に育つた家庭の娘か、処女でない娘ならば抜けた美貌と教養の兼備したものか、阪神間の令夫人と云われる階級の者に限られてゐる。二万円の中、女と紅雲荘とがそれを折半するわけだが飲食物は持ち持ちである。経営者は第三国で元町裏に、有名な中華料理店を経営しているS氏であるが、後記する密輸品の大きいトラストの一方の頭分である。客は経営者が日本人でない癖に、外人は全然受け付けない。

日本の警察は融通が利くが、CIGとなると手を入れられたら徹底的にやられるし、芋蔓式にS氏の外の仕事のシツポを掴まれたらそれこそ本職倒れと云う事になる。相当名の通つた神戸の一流人許りが相手で、私などは

破格の扱いだと聞かされた。私とて、少しは名の通った元町通りの開業医であるが。

映画女優より、もつと綺麗な女を抱いて寝たいと思う時に、神戸否全国で唯一つの紅雲荘と云う存在であるが、一寸一般人には金があつても、伝手が無いと目的が達せられないから高嶺の花の感がある。

国際マーケット

ガード下の秘密

怪奇な港の街を目に見えぬ無気味なヴェールで包むその素は、皆様御存じのガード下であるが、三ノ宮と神戸駅近くの元町六丁目を結ぶ高架下、汽車も電車も頭の上を轟々と音立てゝ絶え間なく走っているそのレールの下に一大マーケットの街が細長い地下道の如く五六丁も続いている。戦後最初の闇市の発祥地であり、神戸の経済的供給源は殆んどこゝで牛耳られている。主に服地問屋が多いが、その中にはあらゆる商店が混っている。金齒を買い入れる地金屋から、大礼服を並べた古着屋、幾百と知れぬ其等の店舗は、一間程の小さい間口に仕切られているが、外国製の生地はこゝでないと手に入らない。勿論密輸許りだが、メイドインイングランドのスタンプも

うっかりそれだけで買々とK紡製あたりの和製の高級品にスタンプだけ押したのがあるから、素人では本物の外国製は買えない。スタンプを押すのに五百円位でやつてくれる商売人があるから。勿論スタンプは精巧を極めて真物とは区別がつかないので、生地そのものの目利きで真偽の程を判別するより手はない。禁製品の麻薬は阿片とヒロポンが王座を占めているが、密輸品のルートは、中国、台湾朝鮮からやつて来る船は先ず瀬戸内海に入り海上で内海通いの機帆船に品物を移す。受けた機帆船は絶対に神戸迄は品物を運ばない。姫路近郊の小さい漁港から陸に上げて、待機したトラックで神戸市内に運ぶ。市内に入る関門は須磨の検問所一箇所であり、満載したトラックの積荷の底に梱一個位忍ばせても、発見される事は先づ無いと云つていい。市内に入ると、何処に行こうとそれこそ自由だから苦もなく密輸品は買手に渡る、水上署が、海の上許り眼を光らせても絶対に密輸品が挙げられないのは、経路がこうした道を辿るからである。

一頃のように、砂糖、医薬品は影をひそめて、麻薬類が花形になつているが、密輸出のナンバーワンは金地金である、田舎廻りの金

買屋が集めた指環とか金齒とか、時計の側等は第三国人に闇値で買取られ、精練された純金となつて幾十貫と積出されるが、勿論神戸港からではなく、汽車に乗せられ、日本海沿岸の漁船から打合わせた通りか、川の汽船に渡される場合もある。沿岸監視所に発見されるようなへまはやらないか、検挙率も全く九牛の一毛程にもならない。三分間の沖合の停船、船腹の向う側に漁船が隠れ、何をしていいのか海岸からは、曲射レンズでも使わぬ限り発見する事は出来ない。

密輸密輸出の首魁は、巧妙な偽装を施して神戸の中心街に堂々と店舗を構えて住んでいる。日本人は下つ端許りで、第三国人に完全に牛耳られている。第一、億に近い金を動かして得る人間は、数える程しか居ないし、又そうした度胸を持った者は案外日本人には少ないのである。睨を破る拳銃戦が、三ノ宮の中心街、阪急横で行われたのは、つい最近の出来事であるが、隠然たる勢力を持つ一方の旗頭である中国人のみが、関西の元締と云われる拳銃の名手、大親分の台湾生れの同国人のSから狙われたのであるが、自動車を下りようとするKの前にSがひよいと現われて、Kの方が素早く発射したのであるが、殺られる

と云う先入感で慌てたのか、弾丸が相手からそれて、間髪を入れず応射したSの為に一発で打ち倒されてしまったのである。映画もどきのこうした活劇は流石に神戸の街でもそうざらには見られないが、表面に出ない暗黒街の殺傷事件は、想像以上に舗道の下を流れる泥水のように、毎日何処かで起っている。

阪急沿線に目をみはる許りの素晴らしい洋館が散見されるが、歴々とした一流名士以外の余り世間的に名の知れない主のいる家は、大抵密輸成金だと暗黙裡に口では云わないが世人はそう思っている。こんな想像も単なる憶測でなく事実である場合が多い。

家出娘の行方

東京の上野に負けをとらずに、関西の家出娘の集結地は三ノ宮である。これを物にする所謂ボン引連は、大抵女である。リーゼントの兄さんが色仕掛けでと云うのは先ず少ない。欺されて、秘密の穴倉に閉じこめられ、裸にされて鞭をふり上げる図を想像するが、これは話であつて、案外そうした現実放れのしたルートは辿らないのが普通である。家出をしようと云う程の娘は、よく／＼の事情のない限り大抵不良少女である。貞操なんて、

田舎の兄ちゃんに散々喰わしておいて、何となく都会の華やかさに焦れて出て来る者が多い。だから、警察で下手に保護でもしようものなら、志と喰い違い、反つて娘達に恨まれる場合が多い。いらぬお節介だと云う位の氣でいるから、部屋を与えて、原色の安手のスカートでも穿かせてやれば、その夜から客をとる位朝飯前の娘が多い。もう性的には熟練工の域に達したアブレ娘が、旧い道徳を笠にきて、毒牙にかけられた可弱き小羊なんて云おうものなら、彼女等は腹を抱えて笑う事であらう。

駅前の小路の陰に易者が沢山居るが此の易者が手引きをする事もある。心配そうに手相を見て貰う娘にそつと周囲を見廻してこら囁く。

「あなたは、水商売に向く。必らず水商売に入れば成功する。え？家を出て来たの。それなら、私が部屋を世話して上げるから、まあ任しておきなさい」

と店はその場でしまつて、兼て手筈を整えた部屋に連れて行く。出前の支那ソバなど食わしといて、第一の客をひつ張り上げる。家出娘の新鮮さに目をつけて来る常連客は多いからその一人を初穂だと云つて、相当の金を

出させて先ず娘の開店筆頭の客にするのである。娘は水商売でも、パン／＼だとは思っていないから、素直に云う事を聞かないが、錠をしめたり、暴力を用いたり、とに角物にされてしまふとあつさり諦めて、女易者の専属パンとなるのである。だから、易者に手をついて貰わずに、女の交渉をすると余り職業化していない女を買う事が出来る。

神戸駅の方は取締りが厳しいし、又、ボン引連中が恐がつて余り熱心でない。一見、安心出来そうなの、バーの女主人とか、ギヤバレの支配人とか、今云つた易者とか、が専門に家出娘の転落の手引きをする。

特飲街に娘を入れると、その娘が駆け込み訴えをすれば、商売は停止され、取調べをうけて中々入釜しいから、家出娘のように半分常軌を逸した女は特飲街では敬遠する。身許が成可く確かりして、本人が充分承知の上で働く娘を望むのも、一人や二人の娘に店を潰されたくない警戒心からに外ならない。

新開地の浜にある稲荷市場、神戸駅前のガード沿いの一杯飲み屋通りは、殆んどパンバンの待機店となつてゐるが、家出娘が、自動的に店に勤めてゐる外見を装つて、商売をしている娘が多い。泊り千円前後で最低料金と

云う所だが、案外質のいいのが多いが、亦物凄く病気の保有者も居る。区別は大抵寝なくとも見かけで判るが、相当の危険性は覚悟せねばならない。若し、素手で立向おうと云う場合は――。

一人入つたら、もう他の客は入れない程のマッチ箱程の店に女が二三人居て入つて行く。前後横からその柔かい肉体をすりつけて来る。大抵の悪戯は許されるが後でそつと耳許で

「二階で遊んでいらつしやらない？」

と来る。二階と云つても二疊位の板敷きに布団を敷つ放しにして、行李やトランクが積み重ねられていてと云う図である。這うようにしてその二階なる別室に上ると、二人並んで座れないから、女は帯も解かず、そのまゝ布団に寝る。客は、立つた儘、足許に転がった白い肉体を見下し乍ら、ズンドを外すのである。下では、次の客が入つていて、何かと騒がしい。とに角、重なつて泥棒猫のように目的を達してしまふと女は此方はズボンがずり下りてゐる無様な恰好をしているのを構わずに、ズボースだけペチンとたくし上げて、トン／＼と階下に下りる。そして、もう下の客と嬌声を上げている始末、気分もへつたくれ

読者通信

奇譚クラブ発刊以来の愛読

者、読者通信に一筆呈したくなりまして。人の誰でもが環境さえ許せば営み、又欲求し又のぞきたがる性のエンジヨイの極致たる変態愛戯を御誌ほどユーモラスに、ロマンチックに悩ましく、ふんわりと然かも痺れさす迫力で表現している雑誌はないと思ひます。僕は男性が女性の淫虐にその欲情の奴隷となるのに興味を覚えます。此れに関する画や写真の交換をしたいと思ひます。共感の女性又は男性はお

便りを下さい。早速御返事致しませう。(東京都在住)
曙書房氣付 森山幸治

○

発行の日が待ちきれなくなる位心の友として小生は奇譚クラブを愛読することによつて満されない淋しさを慰めております。何故なら小生異性を嫌悪し同性のみにリビドを感じずる者です故に……。十二月号、三月号、七月号等はとも興味深く拝見致しました。全国に私と同じ悩みに苦しむ恵まれない宿命に嘆き乍ら一人煩悶の夜を過しておられる方も多いと存じます。この悩み寂寥を慰める途、それは苦

悩を共にする方達と手を取り合つて慰め合い励ましあうより外ないと存じます。小生は極く平凡な独身青年です。でも小生の様な者にでも心の友としてレターの交換をお望み下さる方がございましたら喜んでペンフレンドにならせて頂きます。その時には又それ相應の話題もある事と存じます。同志の皆さんよりの御手紙の訪れをお待ち致します。どうか心淋しい小生に友となつて下さる方は御便りを下さい。(大阪府在住)
曙書房氣付 小柴智彦

もない。本当の只出したと云うだけに過ぎない。金のない時に試みる可きである。ラムネ十円飲んで、その金三百円でOK、最下等の安定なルート、一条は右の通りである。

土曜夫人専門店

新聞にも堂々と広告されている店。まさか

そんな名前の店はと云われそだが別名結婚相談所である。大阪でも騒いで大分下火になつたが結婚相談所で真目な結婚をしようと思つてゐる者は、現代世相色盲であり良縁を得ましたと云う話を聞いた人は余り聞いた事もない。援助と云う名目で妾を世話する所で

あるが、月極めでなく純然とその場限りと言う手もあるから、うまく話をもちかけると女を買う場合の一つのルートとも云える。

尤もパン／＼と変らぬような女も居るが広告を見て来る本当の素人も案外多い。

安く、純然たる素人娘を買う唯一の方法である。泊りで三千円程相談所の主人に渡すと相当の代物を出してくれる。朝注文して、夕方に出来るのであるから、すぐと云うわけには行かない。

尤も、違法だらけの話をしているのであるから、此の方法も勅令第何号によれば違法であるが、お互に金で買ったのだ、売ったのだと云わねば判らないから、特飲街のそれと大差ない。

女事務員、看護婦、良家の子女、薬剤師、あらゆる職業を網羅している。相談所廻り専門の娘がそれを職業にしているのも居るが、此んな手合は、素人娘と違つてどことなくす

れた面を現わしているから、よく目を利かしたら掴まされずに済む。

処女の中には居る。配給米を買う金がなくて致し方なし、たつた一度だけと云う長屋の十六の少女も現われる。運がいゝとこんなのにうち当る事もあるが好きそうな顔をした相談所の親爺は、始めに味見をして客に出す場合もあるから、そこを念を押しておかねばならない。素人娘は案外正直に何でも語るものであるから、例え二番目だつたとしても、目が利かなかつたと思つて諦める外はない。

三千円の中、娘が千五百円貰つていたら上々である、此れ程ピン跳ねのひどい所は、パン／＼宿の主人以上であるから、娘がいゝからと云つて、五千円も六千円もふつかけられて、ふら／＼と出す手はない。開いてみたら箱許り綺麗で何時も食い飽きているパンパン料理だつたなんて事もあるから。

如何に金で約束したとは云え、いざと云う

場合、そんな事は忘れて素人娘らしく逃げ廻つたり、泣いたり跳ねのけたり、息をひっこむような声を出す事もあり、スリルと煽情的な雰囲気は、中々捨て難いものがある。此れも娘次第であるが、大阪と違つて神戸の女は余りえげつない所が少なく、関西第一の垢抜けした面を誇りにしている街であるから、人心も氣質も綺麗である。

何処にそんな相談所があるか、新聞を見たから広告が出ているから、我れと思わん者は、三千円握つてかけつけたらいい。

夜は毎日訪れる。神戸の夜の魅惑は、地球に訪れた始めての夜のような新鮮さと強烈な力を以てそゞろ男心に迫つて来る。

酌めども尽きぬ瀟洒の如く、神戸に一歩足を印せば、人々は容易にその未練を絶ちきる事に苦痛を覚える事であらう。(終り)

体臭の性的考察

谷

純一

(一) 人間の臭い



人間にも動物と同じように特有の臭気がある。それには種々あつて、全身の皮膚にある汗腺及び皮脂腺の分泌物に由来する臭気を始めとし、毛髪、呼吸、腋窩、足跡、会陰、男子に於ける包皮垢、女子に於ける陰阜、陰門垢、陰粘液及び月経血の有する各自特殊の臭気で、健康清潔なる人に於ては、その度は強くないが、他よりよく之を感じる事が出来る。

この中、全身の皮膚より発散する臭気、(即ち狭義に於ける体臭)は、思春期に至つて始めて顕著となるもので、小児、成人老人にはそれ／＼固有の臭気がある。それ

故モナンは体臭によつて個人の年齢を識別することが出来ると云つた。

ジョルグは女子が思春期に達すると、その分泌物が一定の臭気を発するに至ることを説き、カーンは思春期に入つた者の汗液は、鋭利なる麝香に似た体臭を発すると言つてゐる。

体臭も第二次性徴の一つと認めるべきもので、第一次性徴たる生殖機関の發育成熟すると、その血液中に分泌するホルモンの作用によつて、骨格、体毛、喉頭等に特殊の性徴の喚起せられるのと同じく、皮膚の分泌物の性状にも変化が起つて、特殊の臭気を発するようになるのである。それ故、生殖腺の發育不完全なるもの及び之を除去せられたものは、体臭を異にし、或はそれが微弱である。ブルダツハは去勢者の臭気が通常の男子よりも遙かに弱いことを認めルーパーは通常の人間よりも異なることを記した。

此の様に体臭は性機関と一定の關係を持つてゐるから、性的興奮或は性的結合の場合には、皮膚或は呼吸または両者よりして特殊の臭気を放つことがある。グリマルジ

1はこの臭をばバターの臭といふ、他のものは「クロ、ホルム」の臭に似てゐると言つた。そして此の特異の臭は往々数歩の距離を隔てゝも感覺せられることがあり、また性交後二三時間までも持続すると云われてゐる。聖者フィリップ・スネリーは性慾を禁欲せる男子をその体臭によつて識別したそうである。シユリギウスの記する処に依れば、古代の多くの学者は性交の際、山羊の臭に類似せる臭気の發散せられることを認めたそうで、殊にそれは婦人に著しく、売笑婦及び新婚の婦人には最も強く、之を以て破瓜の確徴と看做したのもあつた。

処女及び年若き婦人が月経時に當つて、「クロ、ホルム」或は薑のような臭気を放ち、之によつて月経期に際會せることが識別し得られると云ふ説もある。プーゼー及びラチボルスキーは、月経の起る一日前には殆ど常に此のような臭気を放つと云つた。また月経時の処女は革皮の如き臭気を放つという説もある。アウベルトの説に依れば、月経時の婦人は芳香性或は「クロ、ホルム臭」を帯びた酸様の臭気を放ち、就

中、腋窩に於て最も強いと云い、ガロバンは婦人の性的興奮をなす際には、腋窩に於て吐山羊のように臭を放つと云い、他の学者は琥珀或は薑の如き臭を放つといった。グルド及びピュは、黒色の頭髮の婦人が性的に興奮すると、往々青酸様の臭を放ち、金髪婦人に於ては麝香様の臭を発散すると云い、ガロバンは特に金髪婦人に琥珀様の臭氣を感じることを記した、クルーケーの報告に依るに、ブラッドに於ては、接近し来る婦人の貞操をば自己の嗅覺によつて識別する僧侶があつたそうである。

(二) 体臭と性慾

人間にあつては、嗅覺機關が著しく退化しているため、動物に於けるように、異性の臭氣によつて性慾の興奮することは概して稀れである、併し特に嗅覺の鋭敏なるもの或は變質的人間に於ては、往々この事実が認められる。これに就いて茲に述べるに先だち、一言したいのは、芳香性の臭氣が神経系の機能を鼓舞する作用あることである。

揮発油を含む処の芳香物、例えば茴香、

肉桂、益智、薄荷等の香氣を適度に吸入すれば神経の機能が興奮し、血液循環及び消化を促進するが、余り多く吸入すると却つて是等の機能の抑制せられることは周知の事実である。シールツは、麝香、薑の香氣が血管運動神経に作用して、脳髓に於ける血行を増進し、且つ心臓の運動を鼓舞することを証明し、フェーレーは麝香が筋力を倍加することを認めた。單にそれ許りでない。一種の蘭科植物たる「ヴァニラ」が性慾をも興奮することは往古より人の知る所で、フォンサリールは之を性的に冷淡なるものに与えたことがある。

人間の体臭の中にも、腋臭は筋力を鼓舞する作用がある。フェーレーの記する所に依れば、一老婦が洗濯屋に於て労働していたが、晩方近くなつて疲労を来すと、幾度もその右手を他人の腋の下に挿入し、次いでその手先を自分の鼻の前に持つて来て、之を嗅ぐこと再三再四に及ぶことを見た。此のようなことは他の工場に於ても屢々認められると云う。

此の如く、腋臭が神経系を刺激し筋力を増進することが明かなる以上は、また性慾

を興奮する作用あることも疑いが無い。フェーレーの記述した六十才の一男子の如きは、不意に処女或は夫人の腋窩に手を挿入し、その手を鼻の前に持ち来つて先に残つた腋臭を嗅ぎ、以てその性慾を満足したと云う。またエリスの記する所に依るに、オーストリアの一農夫は年若き婦人と舞踏する際、自己の腋窩にさし入れた手巾で相手の女の顔を拭い、容易に誘惑の目的を達したということである。

エリスは次の如き事例を記した。ある紳士は旅行の途上、汽車の中で美しい妙齡の貴婦人に遭遇し、かなり長い間互いに談話していたが、その婦人が紳士の側から起つて窓を開き、身を屈めて窓の手すりに掴まり、その腋窩が紳士の顔に触れん許りになつた時、その臭を嗅いだ紳士は突然性的興奮をおぼえた。

また或る一婦人は平素は異性の臭氣によつて発情することもないが、その既に性慾の興奮した場合には、愛人の腋窩を嗅いで興奮の度を増強せしめたと云う。

(三) 汗臭の誘惑

単に腋臭ばかりで無い。皮膚の汗臭もまた往々性慾を興奮することもある。エーデルは汗臭を以て性慾の発動に必要にして、且つ特異なる誘惑者であると云つた。英國の作家ケンデン・デグビーはヴェネチア・スタンレー夫人を訪うた折、夫人はベツトの上で安眠していたが、その胸部にはダイヤモンドのように輝いた汗の滴がきらめき、蜜の香氣のような匂いが発散したので著しく愛慾の動いたことを記し、カドー・デボは、女体の汗臭が性的刺激として最高の意義を有することを説いた。トルストイの創作「戦争と平和」の中に、ペートル伯が舞踏場で皇女ヘレナの汗臭を嗅ぎ、突然皇女との結婚を決心したことが描記されている。また史上の事実としては、ハインリッヒ第三世がナチアル王の結婚式に臨み、コンデ王の皇太子妃マリアの汗に湿うた手布でその顔を拭かれた際、突然マリアに対する愛慾が起つて、之を姦淫したと云う有名な事例がある。

是等に類似した事実として挙ぐべきものは、ウィットマーレットの記述したインドの或る王は、その愛人を選択するに際し、

汗臭の滲みこんだ女の衣服を持ち来らしめそれを一々嗅いで最も愉快な匂いのする衣服の持主をば愛人にしたと云う事実があり、またオスカー・シュミットは、インドに於ては愛人同志が汗臭ある寝衣を交換して、之を着る風習のあることを語つた。また皇女シマイが浮浪人リゴーに愛着したのはその臭気による性的興奮のためだと伝えられている。イワン・ブロッホの記する所に依るに、フランスに於ては黒奴或は混血児の臭気によつて、特に性慾の発揚する者が尠く無い。その一人たる詩人ボードライルの如きは、異性の臭気を以て第三の快感及び最高度の快感と称した。

変質的人間には、異性或は同性の体臭に對して熱烈なる愛着心を有し、單に之のみによつて著しき性的興奮を來し、性慾を満足するよりな者もある。此の如きものを稱して嗅覺的フェチシズムスという。ハーゲンは此の種の変態性慾に関する実例を蒐集して精細に記述したが、異性の衣服を盗む所の「フェチシズムス」者の中には衣服にしみこんだ臭気を嗅ぐことによつて、快感をおぼえる者も尠く無いのである。またフ

エレの記する所に依るに、同性愛を好む一婦人がその愛人より頭髮を送らしめ、その臭気を嗅いで愛慾に陶醉したような者もあり、或は体臭の強い学友に接触すると、容易に性的興奮を來すが如き者もある。同性愛を好む男子に於ても同様であるが、ラッファロヴィツシは此の種の男子の中には自体の臭気によつても発情するものがあり、また戸外に作業する労働者、農夫等の体臭によつて、特に性的発揚を來す者もあることを記し、モルは一兒童に附着した蘇苔様の臭気を嗅いで、堪え難い程に発情する一男子に就いて述べたことがある。

さりながら体臭が却つて色情を抑制し、或は頓挫せしめることがある。モルの実験した神経病質の一男子は、異性の体臭に對して甚だしき不快の感を抱き、窈窕たる美人に接しても、その体臭を嗅ぐ時は忽ち陰萎となつた。

腋臭に對し嫌惡を感じる事は甚だ多い事例であつて、腋臭に對する好惡の外に、神經質の者は概してその強烈な臭氣に陰萎の傾向を示すものである。

一、不思議な縊殺

昭和十五年八月。山下汽船の山路丸は北支炭を入幡製鉄に揚げて、四十年に近い船齡ながら八千屯の巨体を、軍備拡張の製鉄のフルー運転に依つて、いくら運んでも不足する製鉄用炭の輸送の為に、二夜を荷役の為に停泊したのみで折返しで早朝出帆するのだつた。

時化で名高い玄海灘も、夏は鏡のような風で、南風に逆らつて走る船内は機関室と罐室以外は、窓々から吹き込む風で何とも云えない涼しさだ。

する海の銀座の玄海は、往復する船で賑つていたが、コースが最北方へ変ると船影がめつきり少くなる。

午後四時に普通船員、五時に士官の夕飯の調理を終ると、コックはもう何の用もなくなる。三等料理夫は甲板部か機関部の若い非当直の船員の船室へ遊びに行つたらしく、給士はまだ手が空かないと見えて帰つて来ず、コックの西野はコック二人、ボーイ二人の四人船室の上段の自分のベットに横になると、江戸川乱歩の探偵小説を広げて読み出した。

丸窓から涼しい風が流れ込んできて、狭い船室をぐるぐ廻つて、ドアの上の風抜き

小さな金網から飛出して行く。暑い調理場で一日中立ち通しだつた疲れもすっかり忘れて乱歩の小説の中へ夢中になつてとけこんで居た西野は、ドアの開いた音に半ば開いたベットのカーテンからヒョツと顔を出すと、二等給士の小野が帰つて来たのだつた。

コックの西野のベットの下が小野のベットで、向う側の上のベットが一等給士で下が三等料理夫のベットになつてゐる。

ベットに腰を下ろして何かコトと小野がやつていたが、ブーンと良い香料の匂が風に巻上げられて鼻に入つた。

「二等給士。良い匂がするじゃないか、この頃男前が上ると思つたらそんな物を使つたのかい」

本から目を離して、ベットから頭だけ出して下のベットを覗くと、

「今朝一等給士に貰つたんですよ。クリームなんて始めてなので今出して一寸使つて見たんですけど、何かヒリヒリしますね」

まだ中学生のような紅顔の小野が、美貌の涼しい眸で見上げたが、ほんの此の頃まで子供そのまゝだつた少年が、若い娘にも見られない色氣をたゝえた眸になつてゐるので、西



探偵小説 男色殺人事件



井口正憲

木林 あきら 画

「コックさん。八時の交替の当直士官にお茶を持って行く七時半までにまだ四十分あまりありますから、僕ちよつと横になりますけど、睡つてしまつたら起して頂けませんか」

「ああ、いいよ」

西野は本に眼を注いだまゝで答えた。軽い機関の音がかすかに聞えるだけで、船内はシ

野は「オヤツ」と思いながらも小説に気を取られて、再び本に目を戻した。

インと人気もないような静かさだつた。怪奇な小説の面白さに夢中になつていた西野がひよいと現実に戻つて、腕時計を覗くと七時二十分だつた。

「二等給士もう二十分だよ、二等給士」
目には文字を追いつながら下のベットへ呼びかけたが答えがない。

「二等給士起きないか、七時二十分だよ」
もう一度声を大きくして見たが、小野がベットに居る気配もないのだつた。起きた様子はなかつたがと不思議に思つて上半身をベットから乗り出して下のベットを覗き込んだ西

野は、

「大変だ。誰れか来てくれ」

大声で喚めくと、ベットから飛び下りた。

小野が両手で空を掴み目をむいて死んでゐるのだつた。

「オイ、どうしたんだドアを開けんか」

「ドアの外から呼ばれて、あまりの驚愕に棒立になつていた西野は、やつと我に返える事が出来た。ドアは把手の工合が悪く自然に開く事があるので、西野は苦にしなければならぬ。小野や三等料理人は、船室へ帰ると内部からホックで閉めてしまうので、外からは入れないのだつた。」

西野の開いたドアからさつきの叫声で近く居た船員達が、ドヤ／＼と入つて来たが、小野の死体を見ると全部が声もなくお互いの顔を見合すのみだつた。

小野は縊殺されているのだが、首に巻いたらしい物もなく、第一に不思議な事は上段のベットに本を読んでいた西野が何の物音も聞いていない事だつた。しかも船室のドアは外部からは入れないように内からホックで閉まつていた。

殺人事件の発生に山路丸は百八十度船首を廻らすと、無電で連絡を取りながら逆航して

午後から日本へ針路を取った。

二、再度の犯行

疑いは西野が受ける立場になるのはやむを得なかつた、内部からホックでドアを閉じた船室に二人の人間が居て、その内の一人が殺されたのだから、他の一人が犯人であると思はれるのは当然だつた。殺された小野が声も上げなかつたとか、すこしも知らずに本を読んでいたとか常識では信じる事が出来るものではなく、それに繞いた殺人が起らなければ無電で指示された門司の水上署の岸へ山路丸が着けば、小野二等給士の殺人犯人として西野は、船長の手から水上署へ何の疑問もなく渡されてしまふはずだつた。

いっしょに曇つて、明日の雨を思わせる闇夜の海上を、やはり空のように重苦しい空気を包んで、転舵してから三時間ほど山路丸は走っていた。

船橋は一等航海士の当直で、舵取りの左側に立つた彼は闇の海上をコースの前を見ていると、軽い靴音がタラップを昇つて来て見習航海士の佐々が船橋へ入つて来た。

「見習航海士まだ寝ずに居たのかね」
彼が声を掛けると、

「ハイ、三等機関士と機関室で話して居ました」

殺された小野と同年の若い声が答える。

「三等機関士と、機関士が男泣きをしていたでしょう。貴力達三人は兄弟以上に仲が良かったからね、小野も可愛想に」

「ハイ、一体なぜ殺されたのかと二人で話していたんです」

「コックが殺るはずはないと思うんだが、そうとしか考えられない現場だからな」

「二等航海士、ちよつと海図室へ入りますがよろしいでしょうか」

「ああ、いゝよ」

「機関士が何時に門司へ着くか、それまでに小野君の荷物を荷造りせんといかんからと云つていますので」

云いながら佐々は船橋の後部のドアを開いて海図室へ入つて行つた。

舵取りは一当直に二人で、山路丸では十分づきに交替するが、その舵取りの交替が下から昇つて来て交替したので、

「君すまないが交替したなら海図室へ行つて見て来てくれんか見習航海士が入港時間が計算出来ないと見えてまだ出て来ないんだ。この頃は色気が出て来たらしくクリームの良い

匂をさせていたが、死んだ小野も、佐々君もあまり美少年すぎるから、海の悪魔が見込むのかも知れない」

この一等航海士の冗談から駒が飛出したと云うべきだつた。

海図室へ入つて行つた舵取りの叫声に、一等航海士が海図室へ走り入つて見ると、海図机の前の椅子に腰を下した佐々が海図の広げられた机の上に、上半身を持たせて縊殺されて居るのだつた。

「オイ、海図はそのまま航海日誌だけ持つて出よう。入港して水上署が来るまで、そのままにして置かないと、無電で又ひどく叱られるぞ」

小野の殺人現場を目茶苦茶に荒した事で、連絡した無電で叱責されたばかりだつたから今度は狼狽しながらも一等航海士は用心したのだつた。

丸窓から入つて来る風が苦悶にゆがんだ佐々の死体の頬を撫でているのが、何か痛々しいもののようにドアを閉じる一等航海士の目に映るのだつた。

正午近くに門司水上署の岸壁へ着いて、待っていた専門家達の署員の手で調査されたが小野の殺人現場はすっかり荒されてしまつて

どうする事も出来なかつたが、佐々の殺された海図室は調査が進むに従つて、この殺人事件の解決の困難さを思わせた、佐々の殺される少し前の、十時に舵取りの手で海図室は隅々まで拭き上げられて、その後に入つたのは死体を発見した二人と、殺された佐々、それを犯人と見るべきだつたが、発見された指紋は、航橋から出入するドアの把手に三分と、海図机と椅子それから航路計算のコンパス類に佐々の物があるのみだつた、しかも殺人があつた事から甲板から海図室へ入るドアは鍵を下ろして、船橋以外からは海図室へ出入出来ないようにしてあつた事が、事件をさらに不可解の物にしてしまつて居た。犯人が丸窓から無理に侵入して来たと考えても、殺された佐々がそれに気付かないはずはなく、気付いて居たならば声も上げずに縊殺されると云う事はないはずだつた。

小野の犯人と信じられていたコックの西野は犯行現場である自室へ外部から鍵を下ろして入れられていたので、計らずして殺人の疑いが晴れると云う事になつて、彼の言葉も半分以上は信用されるようになった。

三、必ず仇を

大戦に突入しようとしていた当時の事として、石炭輸送の巨船を何日も休ませて置く事は許されるべき事ではなかつた。

西野と舵取りの二人を参考人として残して神戸本社から欠員の補充を入れると、山路丸は二人の被害者の死体解剖の報告を聞いて出帆する事になつた。

仲の良かった二人の少年を同じ日に殺されて、野口三等機関士は果然となつてしまつて何をやる事もいやだつたので、自室へ入つて事務机の前に腰を下し、机の上から頬杖をしながら物思ひに沈んでみると、新らたに乗組んで来た二等給士が、船長が呼んでいると伝えるに来了。

「何か御用がござりだそうですか」
応接用のテーブルの前に立つと、船長と水上署の刑事らしい男の顔を等分に見ながら野口は尋ねた。

「機関士腰を下ろしなさい」
野口が入つて来ても小声で話し合つて居た二人は話を止めると、船長がチラリと眸を野口にやつて云うのだつた。

「実は被害者の解剖の結果で意外な事が出て来まして、犯罪とこの事の間に関係があるかどうかを知り度いと思ひましたので、被害者

と最も親しかつたと云われる貴方を、船長にお願いしてお呼び申上げたのですが、恥しいと云うような事はお考えにならずに、正直な所を云つて頂き度いのです、犯罪に関係がないと知れますれば、そうした事を何も公表する必要はないのですから」
「ハア、隠さず申上げましょう、大凡は察して居ます」

「お承知のようですね、被害者二人の肛門内直腸から精液が出て来て居るのです、しかもそれは二人とも同一人の物であつて、犯行のほんの直前と云つても三十分以上から一時間以内らしいのですが、合意の上で鶏姦が行われているらしいのです、小野君の場合は判然としませんが、佐々君の方は被鶏姦者に最初に射精せしめて、その精液を使用して肉交を容易にしている上に、被鶏姦者は鶏姦される事に依つて二度目の射精をしています。それから考えられる事は、最初の射精は若い事ですから論はないとしても、被鶏姦中に二度目の射精があるほどの快感に浸り得る被鶏姦者は、鶏姦者を心から愛して居り又長い経験がその行為にあると見なくてはならないのです。それで船長さんにお心当りをお伺いしますと、貴方と二人の被害者との間に親交があられた

とのお話ですから、この事実が犯行と関係あるなしにかかわらず、解剖の結果に依つて判明した事を調べ上げなくてはならない必要上二人の友人を同時に失われた貴方にはお気の毒ですが、こうした事もお聞き申上げなくてはならないのです、さぞ云いにくい事もおありになるでしょうが、御承知の点だけ全部をお話し願ひ度いのです」

その当時の刑事としては実に民主的の男で静かな口調でそう順序立てゝ問われると、最初から云う心算で居た野口の口からスラ／＼と事実が云い出す事が出来た。

「小野二等給士は自分の船室に帰るまで僕の寝台に僕と二人で居ました、彼が僕の船室を出て行つたのが六時三十分頃でしたから、エツクの言葉と考え合せると、そう思えるのです」

「貴方と小野二等給士との関係は、それは以前からですか、それともその時が最初だったのですか」

「小野との関係は一年前にこの船に乗組む前に、横浜で予備員として乗船命令を待機中に結ばれたもので、佐々見習航海士ともその時から交渉であつて、偶然に三人とも同じ船に乗る事になり、三角関係の煩らわしさもな

く、僕達の間はあれから一年間スームスにやつて来ていました。小野の殺された事で僕も佐々も激しいショックを受けました、当直中の機関室へジツと立つて居ることが苦痛になつて、頭を涼ませる為にボートデッキへ昇つて行きますと、佐々がどこで見て居たか後を追つて来ました、お互いに手を握り合つて暗いボートデッキに佇んでいる内に、僕を慰めようと思つてか、何時になく佐々の方から積極的に出て来て、………、それで佐々の死体にそうした液体が残つたものと思います」

「わかりました、良く云つて下さい」

ました。それで貴方々の関係を外の船員の方々は気付いて居られましたか」

「遠洋航海を専門の船と異つて近海を航海するこの船の乗組の人達は、そうした事には知識もなく女にのみ走つていたようですから、純然たる友情と信じて居たのではないかと思ひますが」

「船長さん、貴方の御意見は？」

黙つて聞いている船長に刑事が問うと、

「私もそのように思います、若い頃には私に



も覚えのない事ではなかったのですが、友情が複数以上であつた事で、私も純然たる友情だと思つていました」

「そうなるこの事は犯行に全然関係がないと思えるようですが、被害者とそうした関係にあられた貴方には何か犯罪の起りそうな原因が心当りがありますか」

「何もありません、だが航海中に二人は殺されているのですから、犯人は乗組員の中に居ると僕は信じて居ます、どのような巧みな手品を使つたのか知りませんが、僕は必らず手品の種を見破つて犯人を見出して、二人の仇を取らずにはおきません」

「機関士お願いします水上署としてはまだ調べ度いのですが、この船の出帆を延ばす力が警察にはないので、匙をなげた型になつて居ります、貴方にぜひその手品の種を発見して頂き度いと思います、船長さんにも最前御協力をお願いしてあります」

それから十分ほど話すと刑事は帰つて行つた。

「機関士、貴方自身も狙われているかも知れないと思えるのだが」

野口が船長室を辞そうとするとドアまで立つて来た船長が云うのだつた。

「僕を襲つて呉ればその時こそ、大丈夫です。船長、僕はあの二人のように子供ではありませんか……」

答える野口の頬には自信の微笑が昇つていた。

四、この香りだ

三等機関士の当直はどの船でも午前及び午後の八時から十二時迄となつて居る。刑事が帰ると山路丸は午後二時に出帆した。

午後の当直が終ると野口は真夜中のボートデッキへ昇つた、小野や佐々の魂がまだ去り切らずにこのデッキで迷つて居るような氣持がするのだつた、幽霊でもよいもう一度弾力の多い若い肉體を抱き度い、ボートに背をもたれさせて野口は目を閉じると、殺された二人の思い出の中に浸つて夜の更けるのも知らなかつた。

「機関士、風を引かれますよ」

静かに声をかけられて横を見ると、何時の間に来たのか一等給士の則元が並んでボートに背をもたれさせて居る。

「ああ、部屋へ入つてもどうせ眠れそうになかつたから」

「本当にそうでしょうね。機関士は殺された

二人をととても愛して居られましたから、でもあまりお考えになつてお体でも悪くなさるとつまりませんか」

「うん、体は殺されても死に切れないほど丈夫だ」

「機関士は美しいお顔に似合わずよいお体をなさつていられるようですね」

一等給士の女のような細い指がそつと腕に巻きついて来る。

「機関士はまだ少年を愛される立場よりも、年上の者に愛されなさる方が本当に楽しいのではないのですか、僕にはそのように思われるのですが」

彼が意外の事を云い出したので、野口は腕に巻かれた彼の手を払うのを止めて、彼の次の言葉を待った。

「二人の少年を一時に失つて機関士の落膽なさつた有様を、私は黙つて見て居るのがお気の毒で仕方がないので、私でよかつたならどの様にしてでもお慰めいたしますよ」

言葉が妖しくなまめいて来て女のようなしなを作つた躰が、野口にすりよつて来る。

「ありがとう一等給士、だが僕には君が必要に思えない、好意だけで良いよ、僕は静かに考え度いのだ」



「そんなに云いなさるなくても——」

言葉ではチが行かないと見て、彼の手はツツと伸びると野口の胸にやつて来た。

「それ以上すると僕は怒るよ、僕を慰め度いのだつたら君は自分の部屋へ帰り給え」

野口の声が少し荒くなつて来たが、彼は更に積極的に出て来て、ボートから体を離すと両手で野口を抱こうとするのだつた。

「馬鹿」

声と同時に野口の手が動いて、彼の青白い

頬がビシヤリと鳴つた。ハッと一足退つた彼には目もくれずに野口は歩き出した。

翌朝の当直に機関室のドアの前まで来た野口を則元が呼び止めた。

「昨夜は失礼をしました。お気を悪くなさないで、これは私が遠洋船の頃にフランスで見付けたクリームですがお詫びの気持で差上げるのです。どうぞお使いになつて下さい」

素直に云われて受取つたクリームは瀟洒な美しい容器に入つて居た。

夜中の当直が終つて入浴してから思い出してクリームの蓋を取つた野口は、その強い香氣に何か思い出があつた。容器に差入れようとした指を止めて、彼はその香りを思い出の中に探つていたが、

「そうだ、あの時の香りだッ」

声に出して呟くと、ベットに手を入れてシートを引張り出して、作業ズボンを丸めてシートに入れて人の頭ほどに包むと、体の部分

に毛布を巻いて太くし、シートの頭のように作つた処にクリームをすり込み、ベットに寝せてから浴室に行つて入念に手を洗うと、「無駄かどうか、睡らずに待つて見よう」小声で呟くとソファにゴロリと横になつたが、もう一度起ると電燈のスキツチを切つてソファに帰つた。

五、まだ暖い死体で

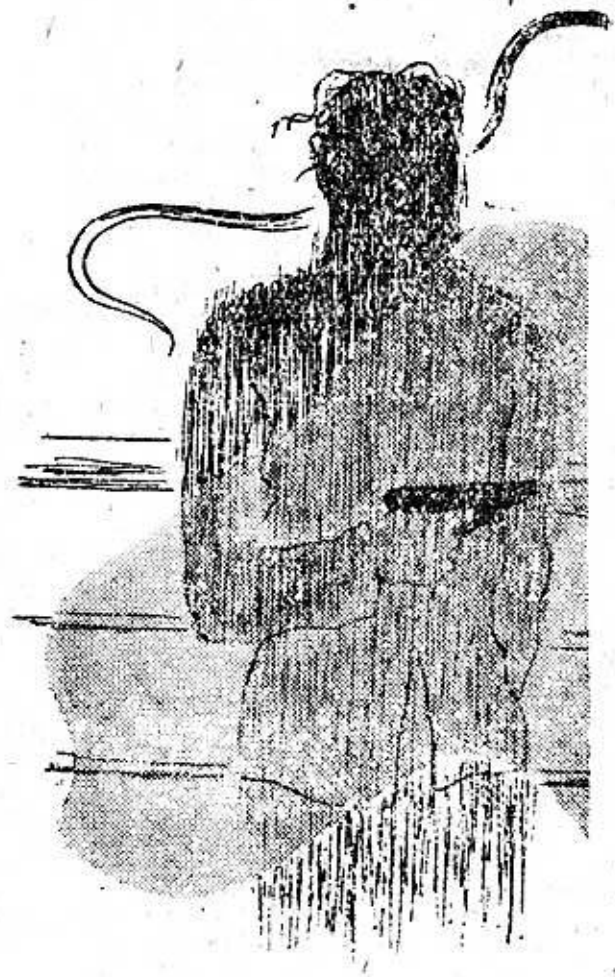
朝まで待つ覚悟の野口だつたが、そうば永く待つ必要はなかつた、電燈を消して四五十分も過ぎたかと思ふ頃、船室の上のボートデッキでひくい口笛の音がした。

それを聞くと野口はバツと立上つて丸窓をビシヤツと閉じて、電燈のスイッチを入れると同時に机の上の文鎮を取り上げるなりベツトの中へなげつけた、ベシヤツと嫌な音がして冷い血がベットに散つた。

大きな青白い長い物がベットでのたうつてゐる。野口の考えた通りに蛇だつたのだ。

誰かボートデッキに居てこの蛇を使つて、野口を縊殺仕様としたのだ。

蛇なればこそ閉じられた船室にも丸窓から入つて来れる、小野が眠つてゐる間に殺されたのをコックが小説に無中になつていて、全



然気付かなかつたのも道理だつたし、佐々の時にも海図室の丸窓から蛇を入れたものであつたろう。

野口の命を狙つた者こそ二人の少年を殺した犯人なのだ。

「畜生、どいつだらうか」

ドアを手荒し開くと、野口にはボートデッキへ走るのだった。

「機関士、お待ちしていましたよ」

不敵な笑いが唇をゆがめているのが、もしもデッキが明るかつたなら野口の目に写つたであらう。

「丸窓の閉じられた音で失敗したと知って、貴方が怒りに任せて飛んで来られると待つて

けるのだった。

「まあ最後までお聞きになつたら貴方も合点をなさるでしょう、機関士は私を御存知なかつたかも知れませんが、ハワイのハワイホテルの前で大田の腕にすがつた貴方を見かけて以来は、寝ても覚めても三年の間、私の思考の全部を専有していたのは貴方だったので、でも、柔道五段の大田が命より大切にしている貴方にはどう工風しても近よる事が出来なかつたが、一年前に大田と別れた貴方がエラト号を下船して日本船に乗つたと聞いて、私も長年の外国船の船員生活をすて、日本へ帰つて来ると貴方の後を追つて此の船に乗つたが、その時には貴方は、愛される立場を忘れ

いたんです、そうあわてなくともまだ夜明までには時間がありますよ、動いてはいけません、私の右手の物がお見えになりますか、これは今流行の消音ピストルです、お動きになつたり声を出されると音もなく弾がお見舞い申上げますよ」

ウフフフと笑い声をさへ出して、則元は言葉を続

て美しい少年を愛する事に夢中になつて、しかも、梅と桜のと少年を両腕に抱いていました、だがそれで諦めるほど私の貴方への恋情は浅いものでなかつた。私は二人の少年を貴方から離反させようと工作したがどうしても彼等を欺す事は出来ないもので三ヶ月前の修理中の休暇を利用して、私が性来好きな蛇を馴らした、香りに鋭敏な感受性も持つ青大将はあのクリームの香りで二人の少年を縊殺してくれたが、少年を失つても貴方は私の思う様にはなつてくれなかつた。それで今夜は貴方を仮死の状態にして置いて、私の意にその美しい肉躰に従つて頂こうと思つて、最初から口笛で蛇に強く締めないように命令したんですが、その口笛が失敗の原因でしたらしいですね。一思いに殺してしまつて、死に切らないまだ暖い貴方のお躰を拝借した方が良かったらしいが、今度こそ逃がしませんよ、貴方は素手だ。このピストルが総てを決して呉れるでしょう。さあ野口さん、貴方の二十五年の一生もこれで最後ですよ。

お両親なり大田や小野でも佐々、誰の事でも今の内に思い出して置かれるんですね」
二度殺人鬼。蛇性の男の口からひくい笑い声が薄気味悪く洩れるのだった。

「待ち給え、一等給士。則元君」

やや震えを帯びた声が野口の唇から出たが何を考えたか野口は寝間着の浴衣をスリと脱ぎすてた、雪のように純白な胴が、夜目にも艶やかな光沢を見せて、薄闇の中に滑らかにクツキリと浮び上る。

「僕は命が惜しいのではない、君の愛情のあまりにも烈しいのに敗けた、それだけに思つて貰えたら、それがアブノーマルな物であるだけに、僕は君の愛を心から信じそして受ける事が出来る氣持になつた、さあ則元君、こ

の躰は君に提供する、殺してから楽しむなり生きたままでなりと、君の勝手にするがいい」

意外な野口の言葉に則元はしばらく呆然としていたが、心の動きにつれてピストルの右手の意志が散つて、ピストルの銃先が下つて来る、ジツと薄闇に目をこらしていた野口の全裸の体が、油断を狙つてヒラリと宙に踊つた。

必殺の唐手の一撃に則元の手を離れたピストルが、ボルトを越えて舷側から海中へ飛ん

でしまつた。もつれ合う二個の肉塊、デツキを転がり廻つて居たのも四五分だつた。

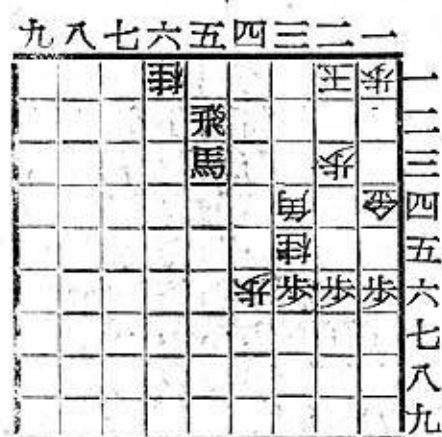
「畜生、畜生、半殺しにしてくれるぞ」

頭を潰された蛇のように組み伏せられてのたうつ則元の体に、目茶苦茶に鉄拳をふりおろす野口の目から、泪がポロ／＼とこぼれ落ちてゐるのだつた。

何も知らないかのように機関はリズムカルな音で廻転し、風の海上を夜光虫の光を割つて、山路丸は北西へ／＼と進んで航く。

大道棋問題解法 大橋 虚士

前号宿題図



持駒 銀

本図は初手五四馬と引き、一間四三に合駒を強要するのが狙いです。四三銀合が最善で他の桂香ならば次に二二銀打一二玉三三銀不成にて五二の飛を抜かれないからどこへ逃げてみまます。

又金、飛合なら同馬同角二二飛又金打にて問題ではない。四三銀合同馬と切る。同角手駒に銀二枚できたわけです。二二銀打一二玉一一銀成一三玉一二飛成二四玉一四

龍三三王四四銀四二玉四三銀成同玉次に六五角と離して打つこの処五四合なら同龍以下三三王なら三四龍三三玉なら四三龍二四玉三四金打以下詰む。

故に五二玉とかわす、五四龍五三角六三金五一玉五三角同桂六二角四一玉四二歩三一玉二一角成四二玉五三角成三三玉四三馬引二二玉三一馬同玉二一成銀四一玉五二金迄。

変化としては六五角五三玉なら五四龍六二玉六三歩打(好手)が面白いので七一玉七四龍これ又何でもない様で案外難かしい

七三歩合六二金打八一玉八三龍八二合七二金ヨル九一玉八二金迄七四龍七三銀合なら六二金八一玉八三龍八二金合七二金ヨル九一玉八二金同銀九二金打迄又七四龍の時七三金合なら同龍同桂六二金打八二玉八三金八一玉九二金迄。又七四龍の場合七三飛合同龍同桂六一飛打八二玉八三金打迄七四龍七二銀同六二金打八一玉でも八二玉でも七二龍でかんたんです。

四二歩打同玉なれば五三角成三三王四三角成二二玉なら三一馬あり二四玉なら三五馬一四玉二五馬引迄です。五四龍の時五三に角以外の合駒早詰みとなります。この変化は研究にまつ事として以上にて大道棋の

複雑な変化の一端を説明して御参考に供したわけですが、本題図式にて三五桂四六歩の配置は全く詰手に無関係の様考えられます。多分大道棋独特の誘いのオトリ駒とみるべきかも知れず、即ち初手二二銀一二玉二一銀成一三玉三五馬とゆく読み筋への誘いでいかにも即詰やにみえるからです。又四六歩も無関係に考えられる点は五四龍五三角同六三金五一玉とせず四一玉とかわす場合四三龍にて四二歩合としても五二金合三一玉三二龍迄、四二歩合で詰まないのなら四六歩の意味があるわけですが歩合を避けるための置駒でないとするれば如何なる意味をふく

むものか、不明です。さて最後に七四龍七五角合六三金五一玉の場合五二歩打は四一玉四三龍四二飛合で詰みません。この処誤り易い五三龍と切り同桂以下が正解順です。又、七四龍五三飛合の変化が少し難かしい様ですから記して置きましよう五三飛合なら四三金打六二玉五三金(三一玉は三二歩二一玉二二飛打以下)同桂六三飛打三一玉三二歩打二一玉四一龍一二玉一四龍以下詰みです。

本題は少し難問の方で解説も永くなりましたがこの辺で止めます。新年号より引続いて連載しました大道棋問題の解法はこの辺で一応打切ることいたします。

女陰と 詠んだ歌

在原業平が東国へ下つて、陸奥に行き八十島という処で宿つた時此処で死んだという小野小町の鬨の目の穴より、薄が一本生え出て風に靡いて「秋風の吹くにつけてもあなめく」と歌の上句を詠んだのを聞いて、その下句をつけ「をのとは言はじ薄生ひにけり

と詠んだということが「無名秘抄」に見えている。

秋風の吹くにつけてもあなめかなめ、をのとは言はじ薄生ひにけり、

此の歌が女陰を詠んだものであることは既に古人も説いた処で、鬨の目の穴を陰に見立て、それより生い出た薄を陰毛に連想したものであろう。

然しそれよりも具象的に陰毛を詠んだものは「堤中納言物語」の中に見えている。

かは虫にまぎるゝ前の毛の末にあたるばかりの人はなきかなという和歌である、//かは虫//は毛虫のことで、これを陰毛に譬えて詠んだのである、

世紀の大発明

理研ゴム歯ブラシ

歯ミガキ粉がいらないで、一本あれば一年以上使えます。歯を丈夫にして一生歯の抜ける心配がない

大型六〇円、小型五〇円

各地特約店募集 乞照会

大阪市南区生玉町一〇

近畿図書KK代理部

不貞の倫理

貴崎郷子

(一)

私の心の奥には、まだ何かすつきりとしなない蟬りが去来し続けている。此の頃は、もう何もかもいらなくなり、生きているのもいやだと云う気持ちになる。誰かヒステリーの事を精神的婦人病と云っていたが、その精神的婦人病が起りつゝあるようである。と云つてそれを爆発さす所もない。夫婦二人きりの生活。勤めから帰つてきた良人に、それを爆発さすには、余りにも良人が可哀いそうだ。何も知らない良人。この私の苦しみの原因はおろか、私がこうして煩悶していることすら知らない良人に、どうしてそんな事が出来ようか。

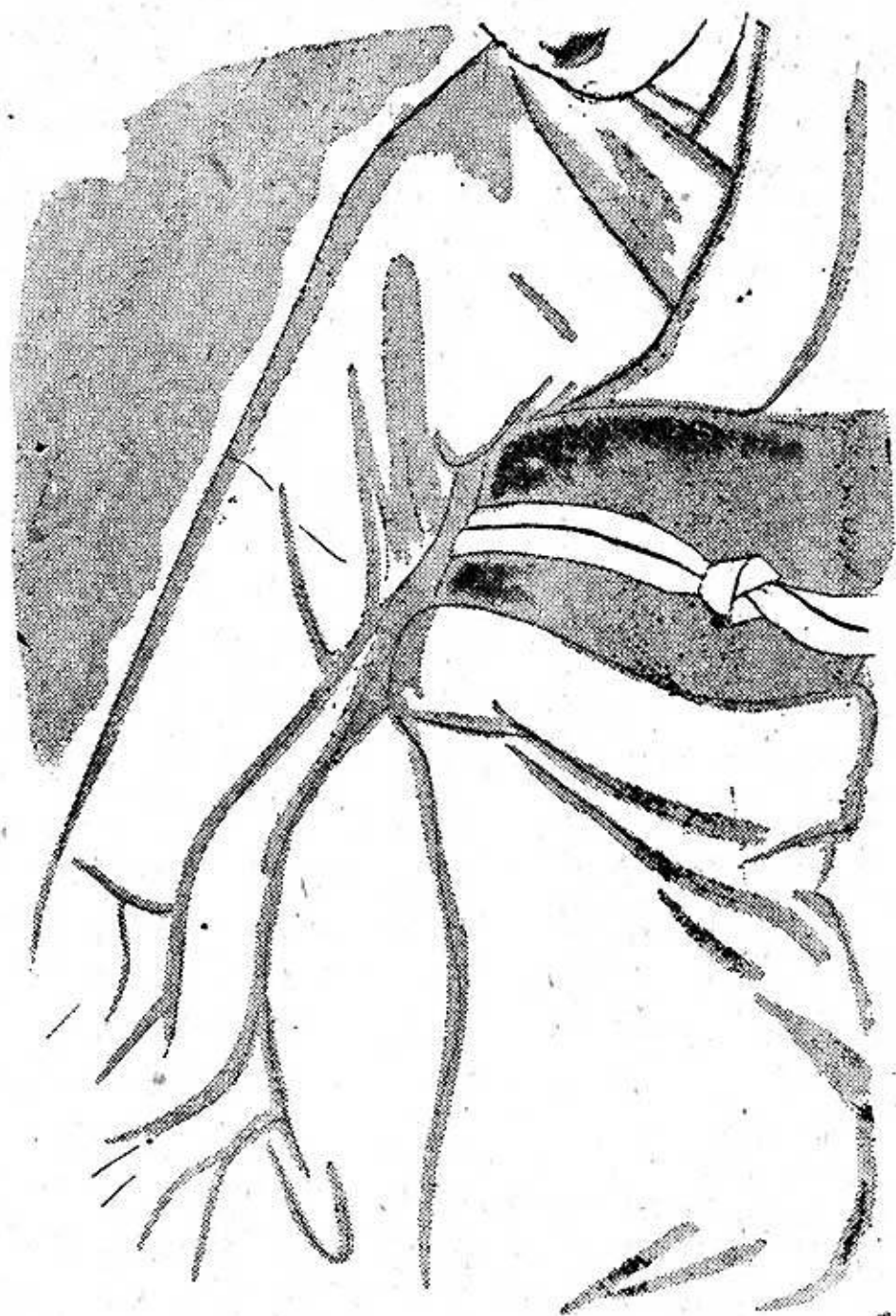
私は、外形的にはこの一ヶ月の夫婦生活によつて、一応家庭の主婦らしい振舞いに慣れ、そしてやつてきたつもりである。然し、本当に主婦、そして良き事と云えるだろうか。

私は愛情のジレンマに苦しんでいる。その苦しみは、良人と世帯を持つてからずっとである。私の心は、一方では良人を思い、他方では四年間の交際をしてきた春田をしたっているのである。良人は

気立ての優しい真面目な男で、別にこれと云う欠点もない。難を云えば、少し朝寝坊で、何か、何時もうつとりと考えているようで腰の重いところがあつた。酒も附合ひ程度の酒で、独りで遊びに行く事も決してなかつた。食物も無理な注文をするわけでもなく、なんでも好んで食べた。だから世間の人に云わせれば、なんの難点もないそして不足のないやり易い良人なのである。それがこの私には、ふいと鼻についた食物のように良人の柔和さに我慢がなくなると良人の出勤後、私は、肉のしまつた少し細い手足を敏捷に動かしてよく働く。働く事でこの私の気鬱症が少しは払われてゆくようであつた。

庭に幾枚かの洗濯物が真白い光を反射して並び、部屋の中は、ちらばつていた新聞や雑誌類は、きちんと整頓され、箒もすでに壁にかけられて、ひと通りの仕事がつむと、ぎゅつと頭をしばつてあるタオルを鏡の前でとりお化粧にかゝる。鏡に写る顔や姿には、まだ一ヶ月にしかないのに、結婚している女の匂いが俄かに滲み出しているように思える。

ほつとした気持ちになり、しばらくぼんやりと鏡の中の顔を見つめ



る。と、勃然と春田恋しの激情が湧いてくるのである。楽しかった
そして苦しい思いをさせられたあの春田との四年間の交際。つい一
ヶ月前に別れたばかりの彼の想出が髻髻として浮び、胸をせつなく
締めつけてくる。私は、じつとしていられない衝動にかられてくる
のである。

「このような私の気持は、現在の生活に、あき足らぬために起きる
のだろうか……。それとも、私の気持の持ちようが悪いのだろうか
……。私は思う。現在のこの平々凡々たる生活に退屈しているのだ
……。結婚一ヶ月程で退屈する……。然し、私は、結婚と云うもの

は、もつと楽しい、そして華やかなものだ」と期待してい
た。

が、現実には余りにも単純過ぎる。私は、良人と一緒に
なる迄、二人きりの生活に付いて、あれこれと楽しい生
活設計をたてゝいた。然し、それはあく迄空想であり、
夢のプランであつた事に気がついた。

私が、春田を慕う気持は、良人と一緒にいる時にもあ
つた。私と良人とは恋愛結婚である。私は良人より春田
の方に強く心を惹かれていたのであるが、春田と結婚出
来ない、と云う諦めが良人と結婚してしまつた動機と云
えるだろう。だから、私は本当に良人を愛していなかつ
た事になる。反動的な結婚とも云うべきであらう。春田
に対する諦めは、このような現実面の結果になり乍らも
容易に私の胸からは消えようとせず、家庭を持ち人
妻となつてからもますます彼への思慕はつのるばかりで
あつた。この一ヶ月足らずの間に、私は、春田の宅を三
回も訪問した。勿論、良人は知らないであらう。私と彼の四年間
の交際は、良人も知っている。然し、それは本当の私達の関係は知
らないようだ。たゞ、医師対看護婦の関係であり、或いは少しは恋
愛関係位あつたのではないか……と軽く推量している程度である。
そのデリケートな経緯は知つてないと思う。然し良人は、結婚前、
たび／＼私の気持を氣にして詰問した。それは、余りにも大胆なそ
して積極的な態度に出る私に不審を抱いたからであらう。事実、私
は初対面後数週間で彼に結婚を承諾させ、そして人が驚く位の早さ
で結婚してしまつた。

「君は、誰かとの恋愛に破れ、その代償に僕と結婚しようとするのではないか……。僕は、君の過去は問わない。然し、君は、その誰かに対する愛情と僕に對する愛情にデレンマしてないか……。僕はそんな不純な或いは反動的な愛情では結婚出来ない。僕は、真実の愛情がほしいのだ……」等と良人は云った。誰か……と云うのは、どうやら春田を意識しての言葉らしかった。私は、そのような言葉には、その都度、はつきりと否定した。然し、事實は良人の危惧していた通りであつた。春田への諦めは、春田、そして春田と結婚する私の友達和歌子に對しての強い反抗心となり、彼等に負けない幸福な家庭を持つと、と思つたのであるが……、然しそれも結局は、私の一つのプライドに過ぎなかつた。明日、良人と結婚するという前日、私はホテルの一室で春田と最後の別れのページをかわしてきつた。私の結婚は、不純そのものである反動的な結婚であつたのである。

良人の望んでいた真実の愛情からでは決してなかつた。本当に私は淫らな妻なのである。

過去はともかくとして、これからは良き妻にならなくては……とそう反省する心の奥から春田恋しの情念が奔流の如くこみ上つてくる。

だから、結婚後も、何かと用事を作つて外出し、春田宅を訪ずれたのだつた。良人に内密に、春田にバスコントロールの処置をも受けた。

その処置は、春田が病院でしばらく行つていた方法で、排卵期にヨーチンを子宮にぬる方法であつた。良人は、早く子供がほしい、子供が出来れば、この生活がもつと活々としてくる……と子供好き

の彼は口ぐせのように云っている。私は、まだ子供がほしいとは思わない。別に良人を嫌つてゐるわけではない。多少の愛情があればこそ結婚したのである。然し、私はこゝしばらくは子供はうみたくはなかつた。

四年前。春田に処女を捧げた私は、春田との結婚を夢に描きつゝ、医師對看護婦のビジネス上の関係でなく、良人對妻の気持ちで春田に誠を捧げてきた。その間、色々と春田のスキヤンダルも知つた。然し、それらによつて私の気持は、微動だにもしなかつた。真実に彼を信じ、彼がそうなるのは、私の誠実が足りないからだ……と、ますます神妙につかえてきた。

私達の噂が病院中にひろまり、二人一緒に病院をかわる破目にもなつた。私は、彼との楽しい胸もふくらむような生活設計をたてゝいた。それが、和歌子という女性が現われ、私が気付いた時には、春田から、君にはこんな事を云うのは、余りにも君が可哀いそうだと思つたが……と彼は、和歌子と結婚する旨を宣言したのであつた……あの時の私の気持。一言のうらみ言もよう云わずに、「では二人仲よく……」とあつさり彼の前から身を引いたものゝ、やはり女の悲しさ、何事かは、又元通りになる、と淡い希望を抱いていたのであつた。そんな時に、ふとした機会から、良人と知りあい、交際するようになり、そして、いまこゝして一家の主婦となり妻となり乍らも、未だに、春田を思いつづけ、一人もだえ苦しんでいるのである。去る日。彼の許へ、バス・コントロール（ヨーチン）を注入する避妊法ををしに行つた時、「時々手紙出すよ」と彼が云つたのに「待つてますわ。楽しみにして……でも、日曜日以外に着くように出して下さいね。良人が居るから」と云つてきた。然し、一片の葉

誓すらこない。和歌子とはや結婚したのだろうか。でも、結婚するならするで、なんとか便りのある筈。私の気持は高なるばかり。丁度。明日あたりがコントロールの日。久しぶりに明日、彼の宅に行こう。

(二)

やはり良心に責められるのか、バスが良人の会社の所在地附近にかゝると、自然と動悸が激しくなり、眼は絶えず窓の外を走る。バスから降りてホッとずる。少し歩いて行くと、春田病院と真新らしい看板が眼につく。何かなつかしい想いにかられる。こうして、たび／＼彼の所にくるが、やがて、彼が和歌子と結婚すれば、そうたやすくはこられまい、と思うと、ふつと淋しくなり胸が切なくなつた。

「ごめん下さい」と、白いペンキのぬつたドアを押す。「やあ。よくきたね」と、彼は笑顔で心よく迎えて呉れた。「又、お願いにあがりました」「そう、どうぞ」私は、彼について診察室に入つた。「何時あつたの?」「先月の中頃」「そう、じゃ丁度いゝ頃だね」彼はそう云つて器械の消毒にかゝりだした。私は、そのうしろ姿を黙つてみつめていた。(この人のために、私は毎日苦しんでいるのだ。良人のある身も忘れて此の人を恋いしたつているのだ……)私は、ジーンと胸が熱くなつてきた。「さあ。用意は出来た」と、彼はいゝ乍ら私に近づいてきて、「ねえ」と云つたかと思うと、ぐつと私を引きよせ唇を重ねてきた。「先生!」と云うまもなかつた。「大きな声を出すと駄目。母が居るから」と、彼は云つて、「ねえコントロールはすぐしてあげるから……」と、紅潮した顔で熱い息

を私の耳許にはくようにしてさゝやいた。私は、ゴクリと生睡をのみこんだ。私の脳裏に良人の顔が一瞬走つた。「でも……」「なぜ?」彼は強引だつた。私は、何時となく、かつての私達の雰囲気の中にしたつていた。びつたりと唇をつけ、生命の底迄と吸いあつたやがて、彼は、次の事を無言で要求してきた。「……こんな所で……」「いゝよ。誰もこないから」私の頭は、もはや人妻と云う觀念はなかつた。最後の別れをして一ヶ月目の抱擁であつた。それは、切ない思いに浸りきつていた私の心をバツと再び開いてくれた恍惚感だつた。(彼は、やはり私を離れないでいてくれた)と云う欲びで、私の胸は歓喜した。長い、そして息をこらすような抱擁から開放されると、私はまだ高なつてゐる呼吸をおさえるようにして診療合に上つた。彼は、手際よく処置をすませた。私が、身づくろいをしてゐると、彼は「僕。十五日に結婚するよ」と、ぼつんと云つた。私は瞬間、ガクンとした気持になつた。当然の事ながら、そして予期していた事ではあつたが、私の心は、あきらめの深い悲しさにおゝわれた。「そうですか。何処で?」「そこの神社で」「和歌子さん。ちゃんとした花嫁衣装で?」私は、何か嫉妬のような気持で云つた。私達は、そんな式めしなかつたのであるあいや。「。普通の服装だよ」こともなげにそう云つた彼は、「ねえ。僕の式迄に、もう一度逢つてくれない?」と云つた「……ええ。何時?でも、そんな事する日ありますの?」「うん。都合つけるよ。十四日は……十三日がいゝ。ね、いゝだろう?逢つてくれるね?、梅田のS茶房で、一時に、待つてゐるから……」春田は、私の顔を、両手ではさむようにして云つた。私は黙つてうなずいた。

まもなく私は、挨拶もそこ／＼に彼の宅を辞した。バスを待つて

いる間のもどかしさ。誰かに逢わないかしら……と、そればかり気になり、辺りを絶えず見まわしていた。やつとバスがくる。乗ると、（早く……）と心は家へとあせつていった。家に帰ると四時過ぎであった。大忙しで夕食の準備にかゝる。何時もなら、五時過ぎにする夕食のこしらえが、何故か帰るなりとりかゝつた。やはり、良心のためだろうか……。何も知らない良人は、機嫌よく帰つてきた。良人と向いあつてたべる夕飯もおいしくなく、のどにひつかゝるように思え、何時もより食欲がなかつた。「どうした？気分でも悪いのか」ときく良人。私は、頭をふるのみ。けぶんそうに私の顔を見る良人の眼を、私は正視出来なかつた。「少し、疲れているのだよ。早くやすむ方がよい」とこともなげに良人は云つた。然し私は、その良人のなんでもない言葉にも、神経がピクンと動いた。こともなげに云つてゐるが、そのぼんやりとした顔の下で、特別敏感なのかも知れない。今日の私の行動を感じてゐるのかも知れない……。私は早くから床にもぐりこんだ。が、なか／＼眠れなかつた。神経はさえて行くばかりだつた。私は、良人に対して、そんなにびく／＼する程おの／＼きの気持であり乍ら、明後日の春田との逢引きを楽しく胸に描いていたのであつた。

(三)

田舎から出てきた母を、神戸の叔母の家迄迎えに行かなくてはならない。荷物が相当あるらしい。春田とは一時の約束である。良人に「今日、神戸へ母を迎いに行くから遅くなります」と云つておく心の奥で、少し良心がとがめる。一時前に、梅田のS茶房につく。顔見知りの人は居なかつた。ホツとする。ボーイにコーヒを注文

する。この茶房は、良人と一緒になる迄に、たび／＼きた事がある店であつた。香り高いコーヒを味い乍ら、春田のくるのを待つ。二時前にやつと彼はきた。「出かけようと思つたら患者がきてね」と彼はコーヒを注文し、私に煙草をすゝめた。やがてそこを出る。「ウイスキーを買いから」と彼は、ポケット用の洋酒を一本買い求めた。もう行く所はきまつてゐる。

「先生。もうお逢い出来ませんね」私は切ない胸をおさえてぼつんと云つた。「うん。……当分僕も出られんだろうな」「いえ。もうお逢いしないほうがよろしいわ」私は、涙声で云つた。（今日が本当の最後……そして、お互いに、別々の道を歩んで行くのだ）と思うと、自然と涙があふれてきた。「どうして？そりや和歌子もくる事だし、当分の間は出るわけにもいかないが、そのうちに、また逢えるよ。いや、逢うようにする。それ迄は、手紙を出すからね」彼は、私をいたわるように云つて、そつと腕を組んできた。私は、こゝろして二人で腕を組んで、何時々迄も、そして何処迄も歩んで行きたかつた。山も谷も海も河も、幾山河、どんな苦しい思いをしても……。

やがて私達は、たび／＼以前に來た事のあるホテルの玄関についた。二階に案内され、お茶を持ってきた人が、「どうぞごゆっくり」と云つて出て行つた後、彼は鍵をおろし、さつき買ったウイスキーを飲み始めた。私も、ほんの少し頂く。私は彼への惜別と、いま自分のおかしている冒険（それは、今迄たび／＼してきたのであるが……）に対する後悔とが重なり、やたらに煙草をふかした。彼が打ちとけて話す話題にも私は乗つて行けず、沈んだ面持で窓から見える午後の街を惘然と眺めていた。やがて春田は、ほんのりとした

顔色になり、私のそばにやつてきて、ギョツと、それは息もつまる程の強さで抱きしめ唇を重ねてきた。長いベーズであつた。彼は、つと唇をはなすと、「どう？ 彼との夜の営みは？」と紅潮した顔で、私をのぞきみるようにして云つた。「……」私が黙っている、と、「満足している？」と彼は、私の返事をうながす。私はかぶりを振つた。事実、私は良人には、満足しきれないものがあるのを自覚していた。

何時も、何か不足な、そして物足りなさな思ひにかられていたのである。だからこそ、良人以外の、それはかつての恋人ではあつたが、春田に心ひかれ、こうして密会を重ねているのである。肉体的の不一致。その原因はどこにあるか。この事に付いて、私は、良人を責める気はなかつた。お互いの努力も必要であらうが、それは、私の今迄の生活に起因している事を私は自認するからである。四年間の春田との交渉。こゝに私と良人との大きなハンディキャップがある筈だ。良人にも、ある程度のロマンスやスキヤンダルもあつたのは私はきいて知つてゐる。然し、それは私と春田との事に比較すれば問題にはならない。私と春田は、恋人同志というより夫婦とも云える仲だつた。私は、四年間の夫婦生活をしてきた女とも云えるだろう。だから、性生活、性智識や、そのテクニクに関しては、良人より私の方がくわしくそうして熟練していた。こうした事を自認している私は、肉体的の不一致に関しては、一言も不満は云わなかつた。

然し、肉体的の満足を知つてゐる私にとつては、やはり、物足りなかつた。「結婚しよう……君の軀を僕に下さい……」と、春田にさゝやかれ、二十一才の春に処女を捧げて四年の間に、私は、心身共に

彼に捧げてきた。そして、彼の巧妙なテクニクにより、女の喜びもおしえられ、オルガスムスもおぼえてきた。又、良人との肉体的の不一致のもう一つの原因は、私が、春田を初恋の人、始めて知つた男性として、一応あきらめ乍らも、なお、恋々としている気持。感情は、良人との不一致により物足りなさからくるものもあつたがこのような先在的意識の感情は、より以上に精神面から肉体的に影響を及ぼす大きな要素となつていたと思う。

春田は、私が良人に満足していない、という事を知ると、如何にも勝ちほこつたかのように、満足な顔をして私を愛撫しだした。恍惚とした痙攣と共に、春田が力一杯抱きしめてくるのに、私は、息をとめ、涙を流し乍ら抱きかえしていた。眼前に七色の紅がかゝつてゐるような感覚であつた。やがて、落ちる所迄おちこんでしまふと、今迄、激しい勢いで押しまくつてきた時間が、急に停止したように思われた。私達は、しばらく口もきかずに横たわつていた。しばらくして私は、せつない、そして激しい愛撫から身をはなすと、春田は、「いくら満足してないと云つても、何か君の主人を嫉妬したいね」と云つて煙草に火をつけた。私は、彼が、ひと仕事が終わつた、やれ／＼と、ほつとして煙草をすつてゐるよりに思え、思わずぐつとにらみ「なに云つてゐるの。先生こそ、もうすぐ和歌子さんと……私より和歌子さんの方がいゝと云つたくせに……」と、少し激しい口調で云つた。「いや。又違つた気持さ」彼は、食後の一服を楽しんでいるように、うつとりと眼をほそめて、身ずくろいをする私を眺めていた。

そこを出たのは、四時過ぎであつた。梅田新道に出てバスで神戸へ。春田は、途中下車した。「じゃ……」と片手を上げて降りて行つ

た。彼の後ろ姿を、私は、万感をこめた瞳で見送った。シーンと熱いものが胸をついた。やがて、彼の姿が視野から消える、と私は、ぐつたりとした疲労感を覚えた。恍惚とした後味も、彼への惜情にかられる気持も湧いてこなかった。そして、車の動揺と共に気がせき出した。一刻も早く帰らなくては……の焦慮にかられた。神戸につき、母と共に帰宅したのは、七時過ぎであつた。良人は何も知らず、母と面白そうに世間話に打ち興じていた。私は、それに調子をあわせてはいたが、後悔と悔悟に身がちぎれるような気持だつた。私は、床に入ってから、なか／＼眠れなかつた。春田の事、良人の事……が、色彩めいた幻影となつて頭の中を交叉するのであつた。

(四)

貞節とはなにか。貞節なくして幸福な、そして平穩な家庭はなりたない。私はそれは知つてゐる。そして私は決して貞淑な立派な主婦妻でないことも知つてゐる。夫婦生活は唯物的に或は唯心的に一方的になる場合は正常な理解と愛情とを妨げる最大の原因の要素である事も知つてゐる。そして私達の夫婦生活に於て私自身が、その一方的になつてゐる事も自覺してゐる。ある婦人雑誌に「夫婦は、肉体的交渉のみにて存在するものでない」とあつた。然し私は、その反対の場合のみにても夫婦生活は存在出来るものではないと考へてゐる。又その雑誌に、こんな事も書いてあつた。「……統計によると妻の約半数近く、即ち四十五パー

セントは正常な肉体的交渉を営み得ないとされている。且つ、その内の十五パーセントは全く無関心であるか、或は嫌悪を感じるもので、原因としては、主として結婚前の不摂生、並びに当初の男性の無智と粗暴があげられる……」私はこれを読み、この数字の何処迄を信じてよいのか判らないが、これは確かに正当な愛情を醸成する上の一大障害といわなければならない。

ともかく、世間には何等かの欠陥のある事の多い事は事実であらう。と共に、私は、妻のみならず、その良人達にも、それはあてはまるのではないかと思う。と云つて、私の良人が不能者と云うのではない。私達の間は、多少のハンデキャップはあつても、二人の理



解あゝ努力により今迄のアンバランスがバランスに戻るのを知っている。それは、多少の時日を費す事であるが。然し、如何にそれらを知り、自分を反省しようと努めても、私の心は自由にならないのである。反省するすぐそのあとから、春田への思慕が勃然と湧いてくる。これは如何に責められても仕方がない。どのようにさいなまされても弁明出来ない不道德な事である。でも、春田に対する愛情は、如何なる事があつても、私にとつては、忘れる事の出来ない映像である。初恋、そして始めて知つた男性として、私の心の奥深く刻まれているのである。誰が、どんな事をして、それは取り去る事は出来ないであろう。月日は過去を忘れさす、と云うが、私はますます春田の事は刻明になつてゆく。彼の事を思うと、もうじつとしていられない衝動にかられ、現在の自分の境遇も何もかも忘れてしまひそうになる。こんな想いをするのが、私の定められた運命であるのだろうか……。私は、その私の運命をのろう……。

(五)

良人を送り出し 掃除をしていると、郵便がくる。私宛。裏を返えすと、東中千代子とある。春田だ！ とたん、私の胸は躍つた。思わず、その手紙をぐいと抱きしめたいようになる。急いで封を切る指先がかすかにふるえていた。どんな事が書いてあるのか。胸は期待と歓喜にふるえた。

(……小生十五日に、形の如き結婚式をしました。そしてそれから半月。別に、楽しい事もうれしい事もなく淡々と暮しています……。一度、逢つて話したい事がありますから、御来宅の程を……来たる四日に……)とあつた。

何の用だろふと思ひ乍らも、轟く胸をおさえて じつと彼の筆跡を幾度びも繰り返し見つめた。二伸として、(四日は、和歌子を用事で外出しますから……二階の窓があいていたら来てほしい。しまつておれば、あれがまだ居るから……)とある。この事で、彼の用件は、ほゞわかるような気がした。行けば、また私は罪を重ねるであらう……と思つた。然し、そういう反省は、春田恋しの私の情熱に消されてしまひ、私はその四日のくるのを、あたかも、小生が運動会が遠足にでも行くような期待に胸をはずませて、一日千秋の思ひで指折つて待つた。

朝からそわ／＼して何も出来ない。こんなに、彼に逢うのがうれしいのか……と思わず小首をかしげた。鏡に向つて化粧するにも自らとねんいりになる。

バスを降りると十一時前。窓はまだしまつていた。しばらくうろ／＼していたら窓があいた。何時もの工事中。仕方なくもう一つの道を行きかけると、丁度、和歌子さんが出かけるところ。急いで引き返す。ずつと廻り道をして行きかけると、又々和歌子さんと衝突する所だつた。何か忘れ物をしてとりに返つたらしい様子。又、少しの間、家陰にかくれて様子を見る。こんどは帰つてこないらしい。二階の窓があき、春田が顔を出して見ていた。私が近づくのをみとめたのが、窓はしまり下に降りたらしい。玄関を入ると、診察室のドアの所に立つていた。

「私。和歌子さん、もう少しでぶつかるところだつたので、かくれてしまひましたの……。用件はどんな事ですか？」と云ひ乍ら靴をぬいで診察室へと通つた。私は、平然とした素振りであつたが、胸は高なつていた。日夜苦しみ映像を描いてもだえてゐるその恋しい人

を眼の前に久し振りに見て、歓喜と期待が交叉して心の躍るのも無理からぬ事……。『傘を取りに帰つたんだよ。ぐずぐずしてすまなかつた』と云い乍ら、真剣な顔をして私の坐っている診察用のベットの横に坐つた。そして、ゆつくりと煙草に火をつけて『僕、別れようと思うの……。なにからなに迄がいやな事ばかりで』私はハツとした。驚いたのではない。このような仕末は、春田が和歌子と一緒になるときかされた時から、私の胸底深く想像されていた事であつた。いや、想像と云うより確信していたのである。それが、いま現実となつてきたのだ。一瞬、私は勝利者の気分酔つた。そして彼の次の言葉を黙つてきいた。

「……君。別れて一緒になつてくれない？それとも、別れられない？いや、本当に僕は後悔している。どうして、あんな奴と一緒になつたのかと思つて……。実際、君を愛していたながら、外にそれ僕が悪かつたけれど、でも君は、やはり僕を愛してくれていると思う。今迄余り近くにおり過ぎて、君の良い所がわからなかつたのだよ。ね、お願い、きいてくれる？」私は黙つていた。（私の考えていたような結果になつた……。私は彼の言葉をきき、乍ら、一年前彼から和歌子との話をきかされた時の事を思つていた。（先生は、一時の夢にまよつてゐる。きつと私のそばに帰つて下さる……。考えた事を……。いま彼は私のそばに降りたがつてゐる。（男なんて、なんてエゴイストなんだろう……。私は、心憎いように彼を見た。然しそう思う反面、やつぱり……。と、私はうれしさに体内の血が躍流するような氣持だつた。湯仰していた私の想いが、いま眼の前にぶらさがつてゐる。いや、向うから手をさしのべてゐる。私は、全身もろ共に、その腕の中に飛び込んで行きたい衝動にくらくと頭が、

ぼろとかすんでゆくような氣持にもなつた。然し私の勝氣なプライドは、私の望みがかなえられそうになり乍らも

「だつて先生。そんな事いけませんわ。先生は和歌子さんが好きだつたのではありませんか」と打ちさわぐ胸をおさえて、最後の皮肉を云つたのである。「いや、心の浮氣だつたのだ。一時のまよいだつたのだ。本質的には君を愛していたのだ。僕は、その事を最近になつて、深く後悔している。お願い！」と彼は云つたかと思つと、ぐつと私を抱きしめ、私の唇を求めたのであつた。私の胸は（とら／＼和歌子に勝つた。先生は、やはり私のものだつた……。とかつて彼女に嫉妬を感じていた事を思い、しらず／＼涙ぐんでいた。

「向うに行こう」と彼は私を茶の間に招じた。彼はお茶を入れて私にすすめた。「和歌子さん。何処へいらつしたのです？」と私は云つた。「北浜へ麻薬を買いにやりましたよ」「じゃ、すぐ帰つてこられるわね」「いや、ゆつくりしてくる筈だ」彼は茶をすゝり乍ら云つた。「でも早く帰つてこられるわ。先生を残していかれたんですもの」私は軽く笑い乍ら、皮肉じみた事を云つた。然し私の胸は幸福感で一杯であつた。満足感に酔つていた。奇麗に整頓されているこの茶の間、然し、私が近い日こゝに来たら、あれをこゝに置いてこれを向うに置こう……。私はそんな事を考え乍らうつとりとした氣分で、部屋の中を眺めまわしていた。「なに考へてるの？」彼はそう云つて再び私を抱きよせた。彼のたくましい腕が、ぐつと力一杯、私の細い身体を抱きしめる。呼吸も出来ない。然し私は眼をそつとあけてはゝえんだ。彼の唇を無言で求める。あたゝかい彼の頬が、私の頬にふれてきた。（なつかしい人……。心憎い顔自我の強い、そして浮氣な人……。でも、これからは、もう決して離れまい

……私の脳裏には自分が人妻である事も、良人の事もなにもかもなかつた。ただ、目前の情熱の官能に浸つて行つた。

息苦しい、しびれるような官能の嵐が過ぎ去ると、私は忽然と現実によりみがえつた。「先生。私達が一緒になれば、世間の人はどう云うでしょうか」私には、この問題が一番先きに浮かんできた。私が独身なら、さしてむづかしい問題ではなからう。だが、私は人妻である。彼が妻を離別し、そして私も良人と離婚して一緒になる。私達が幸福になるようにするには、犠牲が必要となる。このような状態を、世間の人々はお互いの、即ち、当事者の感情を押し計る事となく、責めさいなむであらう。「そりや色々噂も飛ぶだらう。然しそんな事は覚悟の上だ。それに、人の噂も七十五日と云う。その位の苦勞位しれたものさ。まして、一部の人は、僕達が一緒にならなかつたのを、不思議に思っているよ。それらの人々は、きつと理解もし、同情もしてくれと思う」彼はじつと私の顔を見つめ乍ら云つた。「ね。お願い！ 別れて一緒になつて……。今すぐといつても無理だから、来年の一月迄、と云つてもあと二ヶ月程だがそれ迄田舎に帰つてくれないか。それ迄に、こちらの方を片づけで迎えに行くから」

「ええ。じゃ帰つて話してみるわ。でも、今日は駄目よ。私だつてどう云い出したらいいか考えねばなりませんもの」「じやたのむよい返事を待っているから」私は和歌子さんが帰らないうちにと、早々に春田の家を出た。バスに乗り、家に近づくにしたがつて私の心は動揺しだした。(どう云うふうに良人に切り出すか……) 私は今迄に、良人に対して、ある部分を除いて、即ち、肉体的のアンバランスを除いては、別に一つ不満はなかつた。慾を云えば、も

つと経済的な裏付けがほしいけれど、これは世間一般の現状から云えば致し方のない事で、生活のある程度の苦しさは、がまんしなくてはならないと私はあきらめていた。私は日夜春田恋しの情に苦しんでいたが、その反面、何か実に寂しそうな顔をしている良人それは、やむを得ず俗世間の事に追われている心寂しさともいふたいような寂しそうな顔をしている良人に、私は限らない理解者になりたかつたし、又、私の過去のある程度を知り「過去は過去。過去は未来につながるものではない……」と私の過去に一言もふれなかつた限りない寛大な良人に、此の上もない柔い愛情で良人をつゝんてみたいほのゝとした感情を抱いた事もあつたのである。そして先夜などは、過去の事は勿論、結婚後の私の行動に付て、良人が何も知らない事が物足りないような気持ちになり、その全部を打ち明けてみたいような衝動を何回も感じた。然し私は、そうして告白をしてしまふと、何かがこぼれそうな気がして、今迄そつと息ずき乍ら過ごしてきたのである。

こんな私の気持ちも、今日の春田との密会で、あつさり意識から振り落してしまつた。私はバスの動揺に身をもませ乍ら、春田との生活を書いてたのしんでいた。私なら、彼の助手としても自信はある。和歌子さんに負けない筈だ。それに四年間も一緒にやつてきたのだから、彼の性質も知りつくしている。彼が云つたように、たしかに彼に必要なのは和歌子さんでなく、生活面に於てもビジネスに於ても私が必要なのである。

私は色々、これからの春田との生活に付て、甘く楽しい思いをめぐらしていた。然しそれは、これから起るであろう面倒な、そして複雑な過程を乗り越えた結果を書いていたのである。その結果に

至る迄、現実、目の前に横たわる煩しさに、ふと気づき、私は思わず身がちじまるような思いになった。バスの速力が増して行くにつれて、その焦燥が激しくなつていった。

(世間の人や知人から、なんと云われるだろうか。そして母や親戚の者は……) 私の心はひた／＼と暗い憂鬱な影がお／＼いかぶさつてきた。そうかと思うと、医師の妻としての虚栄心が湧いてきたりした。そして先程の春田の体臭や腕力や唇の味、そしてあの恍惚感などが、生温くふつと蘇つてきて血の流れを湧き立たせた。(そうだが……) どんな事があつても、私は春田と一緒にゐなくては……。それが私にとつて一番の幸福なのだ。私達は今迄、お互いにまわり道をしていたのだ。そして、やつぱり元の所に帰つてきたのだ。私達はこんな過程を踏むような宿命だったのだ。しばらく、離れ／＼になつた事は、運命の神が、私達の愛情に、少し刺戟を与えるために試めされた小さな出来事にはかならない。このような事は世間の人

道義に反した事だとか、不貞とかいふかも知れぬ。

しかしそれは片方だけの見解、解釈で、他の一方から見れば、これ以上尊い、力強い愛情はない筈だ、此の世の中で愛情に勝る何物もある筈がない。従つてこれにともなう色々な、あらゆる障害物を乗り越えての愛情は、真の愛情と云うべきであらう……)

私は、じつと唇をかみ、そのような事を考え乍ら、車窓に点綴する景色を見るともなしに眺めていた。前方に周辺の山が、ぐん／＼と近づいてくる。あと数分で我が家に着くであらう。私は前方を見ながら、何かに祈りたい気持ちになつた。言葉に出さないで祈つた。と身内が引き締まるようになって、勇気がわいてきた。私は再び過程を飛び越えた結末の姿に酔つていた。現実によつかる、そして目撃にせまる良人との離婚問題、それにともなう複雑な困難な事件等は春田と一緒にゐた時の、色々な楽しい生活設計がふくいくと浮びれてきて、それらを吹き消してしまつていた。(終り)

パチンコ犯罪論

小 辻 紫 朗

「パチンコ屋どこもかしこも音と人」

全くの話が、ようもこう流行したものである。街を歩けが娘が招くじやない。パチンコが招くのである。戦争に敗けた腹いせに球遊びをどこかの御仁が発明したのであ

ろうが、日本はどこまでもパチンコにご縁があると思える。まさしく世は三P時代である。横綱のPが名古屋のパチンコ、大関は大阪の玩具のパチンコ、これは大人のギャン

グのパチンコに通ずる。次の関脇は即ちパチンコである。

パチンコ／＼と云うけれど、やつぱり名古屋は本場だ。その貫録は十二分に備つて

いる。ホラではないが、その犯罪面に於ても断然他都市をヘイゲイしている優秀さだ。一寸も有難くない話なんだけれど……思えば徳川御三家の一ツ、名城シャチホコの町も随分と落ぶれたものである。もつとも現在

はお城もシヤチホコも、逆立ちしてながめ
たつて見当らないが、全くきれいに焼けま
した。火炎ビンならぬ焼夷弾でね。……で
今あるのは石垣とベン／＼草だけ。

そも／＼本場のナゴヤの町に於ては……
各署留置所はパチンコ亡者で満員の盛況で
ある。曰く自転車を一で二十台掻払った
奴。負けた腹いせにケースの硝子をノック
アウトして粉碎したつもの、機械を引き
ずり降して足蹴にした奴。パチンコ嬢と結
託して十一ミリのスチールボールを五百ば
かり喰った奴。

深夜押し込みに入つて煙草とタマを失敬
した豪の者。主人の店の金庫から五千円掻
払つて全部取られた奴。保有米二俵かつぎ
出してパチンコに入れ揚げた田舎青年等々
際限がない。

全くの話しが、小人玉を抱いて罪あり、
玉を失うても罪を犯かす。どつちにころん
だところ、ころげ込む所は穴一つ、誠に罪
な穴である。

最近大分お客の腕が向上して来て店主は
ネジ八巻である。閉店後深夜おそくまで親
父は釘の調整に大汗をかいている。やつぱ

りどの道も蛇で。釘加減一つらしい。お客
はバネ加減に苦勞しているけれど。近頃頭
のいゝ御仁は磁石の力を借りて球を自由に
しているすごいのがあつた。エリキの
力で煙草をせしめようなんて、天勝以上の
神技だ。

こうなるとパチンコは娯楽の域を脱して
窃盗行為もはなはだしい。又パチンコ狂
になるとポケットに常時五六十個特別に磨
いた特ダマの予備隊を忍ばせている奴もあ
る。尙パチンコ屋に向いて混雑にまぎれ
込み闇玉を押し売りして生活している者に
至つては開いた口がふさがらない。兎に角
パチンコを正業としてあちこち荒らしてい
る者は相当あるのは事実だ。まさか税務署
の所得申告にパチンコ玉取り業なんて、書
かないだらうけど……

偕、パチンコが尠くも大流行した原因は
どこにあるでしようか。一寸これを検討し
て見よう。やつぱり他ではない。人間の本
能たる射倖心を安直に満たして呉れる、こ
の一言につきると思う。

全くだ。これ程簡単に出来る娯楽は他に
ない。碁、将棋、麻雀は相手がなければ絶

対に出来ない。いやかりに一人で並べたと
しても面白くもないのは明かだ。そこへ行
くとパチンコは唯一人悠然とふんぞり返つ
て、これはと思う機械に嚙り付き、ころこ
ろ身悶えしながら小刻みに落下して行く自
分だけの玉を、見つめておれば宜しい。全
く、自分一人の腕前を、パチンとそのバネ
をはじくだけで事足りるのである。兎に角
十一ミリのスチールボールをはじけば万事
OKだ。そのはじいた瞬間、玉の飛躍を享
樂するのである。

パチンコは本当に自分だけの競技場で、
自分の腕を信じ自分だけの玉の動きに、自
分だけの心を働かせていれば良い。一人き
りのプレーヤーである。

これが大衆化した重なる原因であらう。
げに恐るべきバネの偉力ではないか。

(終り)

×	×	×	×	×
×	×	×	×	×
×	×	×	×	×
×	×	×	×	×
×	×	×	×	×

悦虐の記録

喜多 玲子



其の頃の私は、いつも、四六時中木田のとばかり考えていました。

それはまだ十八才だった私の、好奇心だったかも知れませんでした。それとも好奇心を越した何か別のものであつたかも知れないのです。しかしそれがどんな種類の牽引力なのか其の頃のわたしには全然考えも及ばないのでございました。

木田景三は数年前に、京都絵画専門学校を卒業してお金にもならない絵を描いている画家なのです。勿論画家と云つても駆け出しの彼が、経済的に楽な訳もなくただ食べてゆく

為には、皿の絵も描き、泥人形の彩色をし時には臨時に看板屋にやとわれたり、たのむ人があれば、いかがわしい絵さえも描く事もあつたようで、あの有名な当本延道先生に師事し、睦月会に籍を置いていたこともあつたのですが、ただ勉強三昧に日を暮して行けるほどの生活力があるわけでもなく、その頃は傍で見ていると、ただ無闇やたらに二十四才と云う若さに耽溺していた様子でございました。しかしそんな彼にわたくしは不思議な魅力を感じて居りました、それはただ、女が男に対して抱く恋心、なぞと云つたものではなくして云えば、二人だけで彼と話している時の一種独特な雰囲気。私が私の双つの乳房のあたりを何かこうムズムズさせる様な感じに引き込むからなのです。

わたくしの家は京都の西本願寺前で、亡くなつた祖父の代から仏教関係の書籍を商っていました。祖父も父も書画骨董に少なからぬ趣味がありましたので、当本先生を始め其の道の人々がいつもおいでになつていました。が当本画塾の塾生だった木田も、そんな関係で私の家へ出入していたのです。

「一度玲子さんを描かしてほしいです」

ある時、ふとわたくしに彼がそんなことを云つたのでした。当本塾の一番末端に名を連ねているだけの彼が一体どんな画を描くのか、私にはそれが知りたい気持もありました。勿論、春秋の画展には小さな人物を出品しているのを見たこともありましたが、彼はいつも、

「あれは、ウソです、あれは、ウソの画なんです」と言訳がましく言うのです。そんな時の彼の眼は、何か物なやましく、瞳が茶つぱく、キラリと光りました。

何が嘘なのか、その時は理解することも出来なかつたわたくしでしたけれど、ただ何となく彼の眼が美しいナアと心の底で感じていました。

「あなたをモデルにして画を描きたい」

こう云われることは、ある程度女を嬉しがらせることがらでした。人並に美しくありたいと願う娘ごろを、そつと柔らかい羽毛でなぜ上げる様なものでございましょう。絵に描かれるほどの女は、美しくなければならないうという、不文律のようなものがあるとすれば、此の言葉は逆に考えれば「あなたは美しい」と云つているとしか考えられないのでした。

私自身、小学校の頃から画が好きでしたし堀川高女を此の春卒業してからには店の者にお嬢様芸なぞと蔭口されながら自分では懸命になつて画の勉強をしていました。そんな時に私を描きたいと云う木田の願いを、つい何ころなく聞きとどけてしまつたのも、ごく自然のあり方だつたかも知れません。

木田の下宿は、岩上五条の名聞院と云うお寺の一室でした。男一人の無精な生活は其の六疊一室を見ただけで、わたくしを呆れさせるのに充分でしたがそれよりも、もつと不思議に思ふのは、彼があれほど私を描きたいと云つていながら、何度訪ねて行つても私を描こうとしないのです。

だが、向きあつて話している時、どうかすると、チラリと彼の瞳がいつかの様に光るところがありました。

「玲子さん、貴女はきれいですがね、えゝ、きれいですとも、しかしボクはもつと美しい貴女を描きたい」

彼は言葉の端々に、こんなことをくりかえして言いました。それが何を意味するのか判りませんでした。其の頃の私には全然考えも及ばない魅力を感じはじめていたのでございます。

そんな、何かいら／＼した気持で日を過していた或る日、家には口実をもうけて私は木田の下宿を訪れました。私を描かない彼に娘ごろのそこはかたない自尊心を傷けられた思ひは何かいつそ突きつめた気持で、彼の言うところのもつと美しい私とは、どんな意味なのかどうしても聞き出してしまわないと心が安まらなかつたのでした。

膝をにじらせて、問いつめるわたくしの顔を彼はじらすように振り返つて見つめました。いつもの事で泥人形のお七の顔を器用に描きながら私と話しをしていた彼が、其の時ポイと人形を傍に置くと立ち上つて庭に面した障子戸を締めました。

「今よりもつと美しい貴女をどうしたら作れるか教えてあげようか、玲子さん」

私のうしろに突つ立つたまま、そう云つた彼の声は心なしか、少しかすれていました。「裸になれなんて、云うんじやないでしょうね、まさか」

私は彼の方へからだをねじむけて笑いましたが、それは無理に笑つていふのだと自分でよく判るほど、何かしら不思議な空氣が部屋の中を流れているのを感じ固くなつていふ自分をどうすることも出来ませんでした。

「こうするのです、ね、こうするのですよ」
彼は何かにつかれたように、いきなり後からわたくしを抱えこむと、両手を後にねじ上げました。いつの間に用意されていたのか彼の片手から細引がたぐり出されて、それが蛇のようにきり／＼と喰い込み胸に二すじ、みまじ、巻きつくのです。

それは、本当にあつと云う瞬間の出来事なのでした。何があつたのか、あたりいぢめんに立つていたお七人形が音を立て、転がりました。

「何を、何をするの木田さん、……。あたし、あたし……」

縛られてしまつたわたくしは彼がその次にいけないことをするのではないかと不安な気持ちにかられて木田の顔色をうかゞいました。若し変なそぶりが見えるようなら声を立てるつもりだつたのですが……

「……………」

言葉もなく元の座にもどつた彼は眼を真直ぐに向けて私を見ているのですが、あゝ、あの眼だ、あの眼なのです。それは私が考えていた不安なぞは、おくびにも感じさせない美しい眼付きなものでした。蒼白い額際に油気のない長髪がたれ下つていました。

「玲子さん、これを見て下さい」
木田はそう云つて押入の行李の中から新聞紙に幾重にも包んだ大きな画帳を取り出して私の膝の前に置くのです。

彼が一枚一枚その画帳の頁をめくつてゆくにつれてそれを後手に縛られたままで見ていく私は説明の出来ない感動に落ち込んで行きました。今はじめて私は木田の本当の絵を見たのです。これが本当に彼の描く絵だつたのです。彼は無言でした。しかしわたくしには一枚一枚くりひろげられる其の絵を見たとき言葉で表現されるよりも、もつ／＼深い木田の心を感じ取つていました。

そんなことがあつてからのち私は木田の下宿へしげ／＼と通つたのでございます。あの日彼が私に見せた絵は縛られた女の絵ばかりでした。たいていのそんな種類のものには何か知ら汚らしい、不純なものを感じさせる意図があるのですが、彼の絵は引き込まれるほどの美しさがありました。何と云うのです、ようか、こうぞ一つとして、それも怖いとかいやらしいとか、そんなものではなく、私はあれを見せられているあいだ太腿のあたりの力が痺れるように抜けて行くのをどうすることも出来なかつたのでございました。

他の人は知らず、私は知らないうちに、彼の絵に共鳴し、そして力を、心を奪われて行きました。いえ、木田そのものに心を奪われていたのかも知れません。

「玲子さん貴女のそんな姿はとても」
美しいと彼の云う言葉の魔術の中で、私は白蛇のように縛られて身をくねらせていました。今から考えれば私自身にも異常な血が身体の中に脉打つていたのです。だが其の頃何も知らぬ十八娘に何が判りましょう。好奇と耽溺の渦の中に身を置いて、玲子は気が違つていたのかも知れません。

だが、そんな時にも、木田は私の肉体を求めるとはしませんでした。縛り上げた私を一心に写生している間、私の眼は、瞳は茶つぽい光をはなつて澄んでいました。

わたくしは、うす汚れた疊のけば立ちに頬を刺されながら、縛られた後手の手首がじんと痺れてくるのを感じ、着物の裾の乱れから、ふくらはぎに、つめたい空気が直にふれるのを感じていました。

「玲ちゃん、君はお芝居をしているね」
木田は私が彼の眼をいつも覗いているように私の心を覗いているのでございます。苦痛と云うよりも、縛られた快感の中に身をおい

ているわたくしをお芝居だと云うのでした。「ほら、これが本当のボクの描きたい姿だ」彼の手は、情容しやもなく私の足を着物の上からつねるのです。急所と云うものを彼はよく知っていました。太腿の裏側、ふくらはぎ、腕なら二の腕の外側、そんなところを紫色にあとがのこるほどつねるのです。

「ああッ……」

やめて、とも云えないほどの痛さの中に身をのたうつて、そのくせ心の底で、もつと、もつと、と苦痛を求めている私でした。

愛撫、そうです、これが彼の私に対する愛情の表現なのでした。

多聞院の庭のいちよりの病葉がすっかり落ちて洛北の山々に雪が見える頃、たつた数ヶ月の間に木田と私とは常の恋人同志なぞとは違つた情愛で結ばれていました。玲子さんが玲ちゃんになり、あなたが君に変わり私は彼の事を親しみをこめて、木田さんと呼ぶのです。そして木田の絵はだん／＼ふえて行きました。だが二人のそんな間柄が私の父母に知れてしまつたのでございました。

唇さえも合わせた事もなかつた二人の仲はその清純さにもかゝりなく、一応誰でもが考える男女の間柄の様に噂され、わたくし

は木田に逢うことを禁じられてしまつたのでございます。あゝそれは何と云う味気ない日でありましたことか。

一步外出するのにも、誰か家のものがつきまといつて離れないのです。私は木田に手紙を出すことも出来ず、悶々として日を過しました。そんなとき彼の事を想いつゝ一人部屋にこもつて画を描くのです。彼と私だけに通じる画を描くのです。それは心の逃避でした。でもそうすることによつてたとえ少しでも募る思いが救われるのでございました。

あのいまわしい太平洋戦争が始まり、そして年が明けると世間の空気は變つてきました。青年達が続々と征きそして海軍へ入つていた兄も南方へ行きました。

しかし世の中がどんなに変わろうとも一度木田によつて呼び覚まされた悦虐の血潮、私をますます／＼アブノーマルなものにしてゆくのです。それは昇華も出来るものではございません、木田に逢えねば逢えぬだけ燃えあがり逢えれば逢えたでまた狂うでしやう。

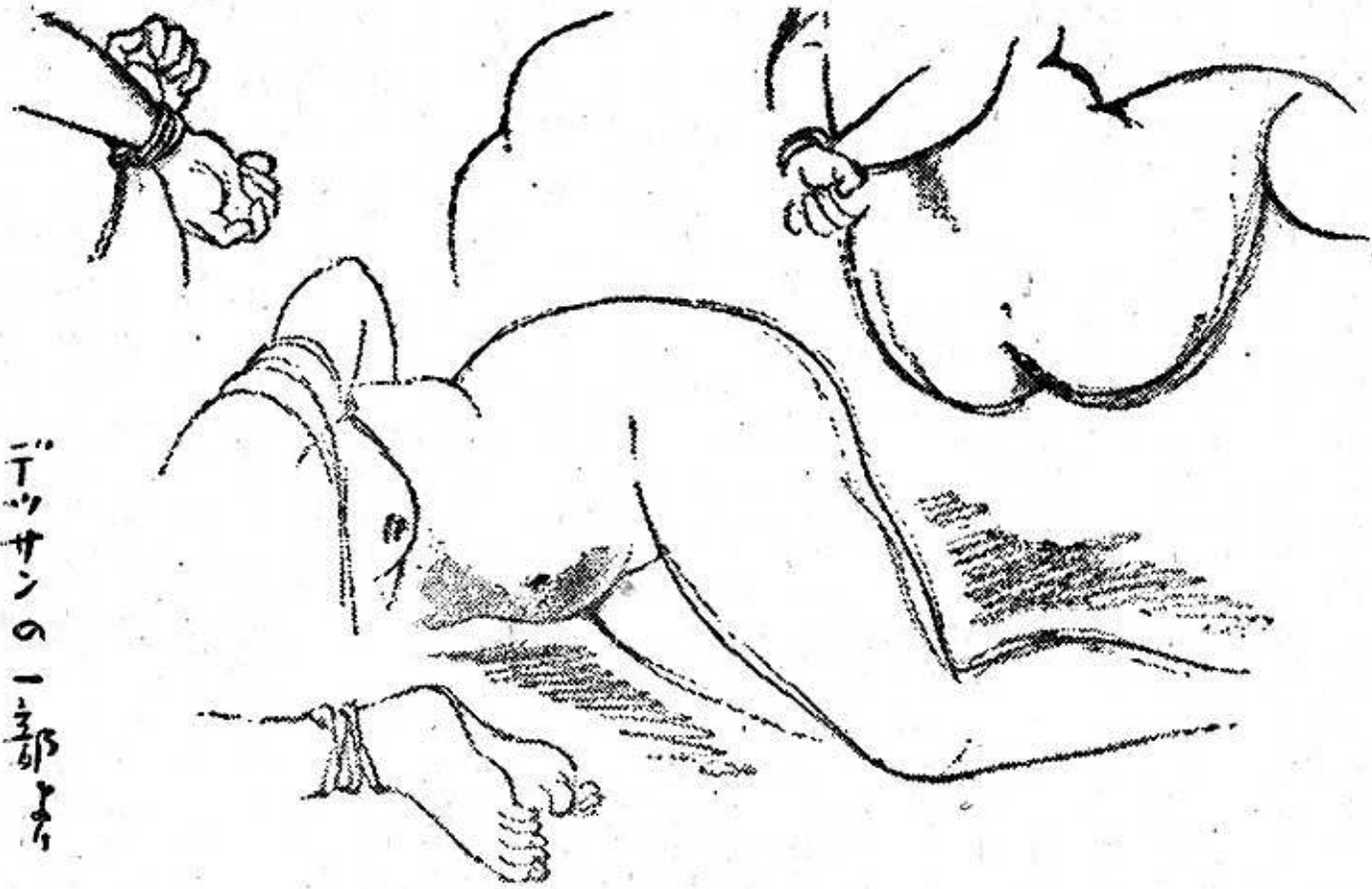
私はそんなものだえのうちに、秘密の慰めを探し出したのでございました、それは土藏の中で、ひとり恥しい行為にふけることなのです、土藏の二階には、黴の匂いに包まれ、そ

のくせ丁寧に保存された古い絵草紙や錦絵やそんなものが祖父の時代の、いやもつと古い時代の夢を秘めて積まれてあるのです。

私は木田の絵と相通じるものを、ほこりにまみれながら探すのでございます、特に月のものゝおとづれる前後は、我と吾が身が、どうすることも出来ぬほど血が狂うのです。家の者達にそれを気付かれぬ苦勞をすることが土藏の中で一人になつた時にかえつて反動的に爆発するのでした。

長持の環に細引の片方を縛りつけ、他の片方を手首に巻きつけたわたくしは、細引をピンと張つて、それから身体をグル／＼廻すのです、長持に近くなるに従つて私のからだには蛇の様に縄が巻きつき、ヒシ／＼と締められてゆく快感に恍惚と身をまかせながら長い時間、ホコリまみれの板敷に身を悶えていろ／＼の空想をするのでございます。

後日、木田に身体を許すまでは私は処女でございました。彼が始めての男なのでした。然し私の人生は、その土藏の中の一頁で己の秘密の部分をもてあそぶことに強く心をひかれたのです、勿論十九になつていた私がいか母となるべき運命にある女の生理を知らなかつた訳ではございません、オナニイの経験



デッサンの一歩より

も女学校時代からありましたけれど、この時ほど、いえ、それは、私のような者のたどたどしい文章では現しえないほどの一瞬なのでした。道德とか罪悪とか、そんなものを超越した別の世界でした。

もと／＼病身だった父が、冬を越した頃から寝付いてしまると、私に対する監視もゆるんで矢も盾もたまらぬ私が、多聞院を訪れたのは、五ヶ月ぶりの翌年四月のことでしたが、木田はあの頃より目立つて痩せ、顔色も蒼白さを増している様でございました。

私は言葉もなく、たゞ泣きました。

「玲ちゃん、ボクは待つていたよ」

ぽつんとそう言つて彼は、刷毛を置いて私を抱くのでした、もう人形の仕事はなく、今は出征のぼりの型をおく内職をしているのです。

お七人形の見ている前で、始めて彼に縛られた私は、出征のぼりが一杯に開けられた部屋で木田に処女を捧げました。五ヶ月ぶりに訪れた日は時間もなく、心せかれるまゝ帰つたのですが、数日後の約束の日は二人の為には忘れることは出来ない日になつたのでございます。

おそらく訪れる人でもない多聞院の一室それでも木田は、今までにしていたように、障子戸の穴に釘を刺して外からは開かない要心をするのを忘れませんでした。

「帯を解くんだ。」

そんなことは今までになかつたことでした。いづれは予期しない事も無かつた私でしたが流石に身を固くしたのです。

「着物を脱ぐのは恥しいだろうけど、上半身だけならいゝだろう。」

「いや、かんにんして。」

悦虐の遊戯は始まつていました。

やがて私は双肌を脱がされ、半裸の姿で後手に縛られてしまつたのです。乳房に喰い込む細引の痛さ……それよりも彼のじつと見つめるあの眼の色に、消え入りたい様な羞恥を感じました。

「玲ちゃん、いつそ、いつそ全部裸になつて

くれないか。」

かんにんして……。声にも出せず、私は彼の視線の中に身を俯せましたが、それがどれほどの抵抗力がございましょう。女の衣類に巻かれた紐の多さに驚きながらも木田の手が私の身体から数々の布を引き剥してゆくのを私は痺れる様な甘美と、身を切る様な恥しさの中に悶えながら、どうすることも出来ませんでした。

最後の布が足をずり下つて身体から離れていった時、私は必死になつて両の腿を締め、縛られたまゝの上半身を膝の上に折り曲げて木田のあの眼から少しでも恥しい箇所をかくそうとあせるのでした。

「……………」

あゝその時ほど私は「縛られた裸女」の苦悩を深く味わつたことはございません。彼と結婚した後はそれはそれは、筆にも出来ぬ「遊戯」も致しましたが、甘美な苦痛の中にも流れのまゝに身をまかせる様な、云わばお互に知り切つた世界だつたのでございます。

けれどその時は異性に始めて見せる全裸なのです。一糸まとわぬ素つ裸体の悩乱は、四月の肌寒さをも身に感じられないのです、いえ、本当は一糸まとわぬ全裸の方がまだ救わ

れるのかも知れませんが、私のその場合は一糸どころか一本の細引が恥部を覆うべき両手をも奪い取つてゐるのです。

羞恥に身をくねらせながら、それでもわたくしは、全身の血潮が悲壯な歓喜に沸々とわき立つてゐるのを心の奥に感じていました。今でもその時の私を描いた彼の写生帖を見る毎に、生々しい追憶を呼びもどすことが出来るのでございますが、それは、何と云いますか受ける刺激が強ければ強いほど、その痺れる様な歓喜も、倍加するものなのでございましょうか。空間も時間もそれから行われた、悩乱の記憶の中にはございせん。たゞあるものは、虹と、光と、苦痛と、羞恥と、そして、私をこんなにまで狂わせた彼のあのキラ／＼と茶色ぼく光る、にくらしい、いとしい眼あの眼。

ああ
そして、その日私は女になつたのでございました。

戦争は木田の生活を奪つてゆきました。たゞさへも、微力な彼の生活力と耽溺の日は、大きな渦の中に巻き込まれてしまえばもう浮び上ることも出来なくなるかも知れな

いのでございます。胸を患つていた彼は軍隊にとられることもなく矢張り画をゑがきつゝけておりまたしが、傍で見てゐる私にはたゞハラ／＼するほどの哀れな目の暮し様でございました。

彼には私が必要なのです、私にも彼が必要でした。あの日、結婚しようとうわごとの様に何度もくりかえしながら、縛り上げた私の肉体を開いた彼には、それほどの深い気持も無かつたのかも知れませんが、私の心はその時に、いえ、もつと前から決つていたのでしたが、その時に決定的なものになつていました。それは打算も理想も、そんなありふれた事を忘れ果てた、云わば止むに止まれぬつきつめた気持だつたのです。

二人の結ばれるまでには、それはもう数々の、おそらくあらゆる人々の、あらゆる力が引き離そうと致しました。わたくしにはそれほどまでに、周囲の人々から投げ捨てられてゐる木田が、ますます哀れに思えてならなかつたのと、世間知らずに暮して来た向う見ずの無鉄砲さが、父の死去を契機として、周囲の反対を押し切り、舞鶴へ逃避してまで木田を守り続けたのでございます。

私は彼に絵を続けさせる為に、海軍病院の

洗濯婦になりました。

「玲子、すまんア」。

時々、思い出した様にこんな事を云う彼も俄然夜になると、もう暴君の如く、例の愛撫をくり返すのでしたが、雪深い舞鶴の寒さとそして雪でなければ雨が降っている裏日本特有の陰うつさに、だん／＼元気を失つていったのでございます。

二人だけの夜の部屋で、秘密の遊戯はくりかえされ、そんな時だけ彼はいつもの眼の色にかえりましたが、おとろえてゆく生氣はどう仕様もございせんでした。反対に私は、

我ながら不思議なほど脂肪が乗ってくるのでした縛り上げられた私が、縄目の痛さにうめく時、肥えた裸の皮膚はヌメヌメと光つていくのです、彼はジメ／＼した台所の流しの下から、人さし指ほどあるなめくじをつまんで来て、それを私のからだに這わせることもありました。総身が鳥肌立つて冷汗が流れるほどのいやらしい気味悪さの裏に、また一つ増えた新しい遊戯と画材は、雨の日ばかりの舞鶴での生活を、たとえばんの数日の間でも慰める助けになつたのでした。しかしその頃には、ケント紙なぞ手に入れるとは思ひもよらず、絵を描くのにザラ半紙を買つて来る

のがやつとの思いだつたことを昨日の事のように憶えています。

私は彼の絵を、異常なら異常なりに完成させてやりたかつたのですが、それは二国一補の兵隊にもなれなかつた彼の健康が許しませんでした。終戦後、京都に帰つたものゝ、むしろしまれた彼の肉体は病気に抗する力もなく血を吐きながら私をモデルにして描き続けた無数の画を残して鳴滝の宇多野療養所で昭二十三年夏はかなく、本当に哀れに散つてしまつたのでございます。

私以外の誰ひとりとして見守る者の無い、それは寂しい人生の終りでした。

大沢の池のほとりに立つて、わたくしは慟哭しました、それはせめてもの彼に対する玲子の惜別だつたのです。しかし押し返す悲しみの涙の中にあの眼を見ますとその時私はハツとしてある感じに打たれました彼の残した画を描き続けてゆくのは私の当然の仕事ではなかつたでしょうか。

それから四年、現在まで私はその仕事を満足は出来ないまでも続けて参りました。

女の生理の悲しさは幾度か夜の寂しさに寝られぬこともありましたが、そんな時には幾度

男のひとの誘惑に負けそうになつたか知れないのです。しかしその度にわたくしは齒を喰いしばつてたえて参りました、たゞ私には強い刺激が必要なのですが、それはおそらく幼時の頃から潜在していたのではないだろうか。と昨今になつて気がついていたのでございませう、そしてそんな私にアブノマルな性格を植え付け、そだて上げ、死んで行つた木田は死んで後も私を離さないのです。彼に対する愛情は時がたつにつれて薄れていくでしょうけれど、玲子に残された悦虐の性格は、たつた今でも歴然と呼吸しているのです、そうです、たつた今でも。

現在の私は、京都嵯峨芒馬場町の画室で自身が体験した悩乱の姿をモデルにさせてかつての彼がした様な眼の色をしてスケッチしているのです、しか、描かれるモデルは變つても私の画は、私の姿を再現しようとしている悲しい努力のあらわれなのです。

終

x x x x

諷刺
掌篇

僕達は今永遠の中にいる

笹田

豊

「御結婚おめでとう！」

「ありがとう」

「どう、幸福？……」

「ええ、とても……」

「羨しいわ。新婚旅行は何処？」

「熱海だつたの……」

「素敵だつた？」

「ええ、とても。美しい思い出……」

「情熱的だつた？旦那様は？」

「……」

「おや、赤くなつたのね……相変らずの

お嬢ちゃん！ さあ白状なさい。旦那様

はどうだつた？」

「……」

「さあ、恥かしがらないで！そんな事じ

や奥様は勤らないことよ」

「じゃ……話すわ……」

「焦らさないで早く！」

「あの人つたら……あのね……あの人つたら……」

「どうしたの、あの人が？……」

「あの人つたら……私の……恥かしいわ

とても云えない。何故、そんな事を聞き

たいの？」

「先刻あなたは、とても幸福だつて云つ

たわね？ その幸福の具体的内容が知り

たいのよ。私は不幸だから……さあ、話

して頂戴」

「困つたわ……」

「じゃ——私が話して上げようか？」

「……」

「先づ旦那様は、あなたののどを接吻し

たわね？」

「まあ……」

「それからおつぱいだわ。それからお腹

それから内腿。それから——今度はおか

しいのよ——鼻に逆戻りして、それを一寸噛みはしなかつた？」

「まあ……どうしてそれを？……」

「お終りまで黙つてお聞きなさい。そして今度はいよく……ね、そうでしょう？

ての時、こんな事を云つたわね？——

僕は君だ、君は僕だ、あゝ僕は一つだ

そして僕は今永遠の中にいる」

「止めて！ 止めて頂戴！」

「何を昂奮しているの？ お馬鹿さんね

さあ、私の云う事を聞くのよ——旦那様

はそれからあなたの……」

「止めて！ 一体あなたは何しに來たの

？ 私に何を云いたいの？ 私があなた

に何をしたつて云うの？——嘘よ。嘘だ

わ。あなたの云つた事は根も葉もない作

り事よ。そうだわ。それに違いないわ。

冗談よ。想像よ。お伽話よ。馬鹿げた一



致だわ。偶然の一致だわ。そうよ。それに決つて。あの人……あの人に限つて……そんな筈はない。潔白だわ。あの人、あの晩、そう誓つてくれた……嘘でしょう？ 冗談だわね？……お願い笑ひ話だと云つて頂戴！」

「……」

「私は今迄世界一幸福な女だつたのよ。勿論あなたはそれを破壊なぞしないわね？ あなたは親友だもの。私の幸福を願つても不幸を願つたりする筈はないわね？」

「誓つて頂戴！ ね、お願い、嘘だと云つて頂戴！」

「……」

「私達は親友よ。女学校時代の事を思い出して頂戴！ ね……」

「私達は親友じゃない。あなたは敵よ。今云つた事は皆本当だわ。嘘？ 冗談？ 想像？ 偶然の一致？ お伽話？——私の顔を見て頂戴！ こんな顔で嘘が云える？ 冗談が云える？ 真面目よ。私は真剣よ。そう、私の一生で一番真面目な顔よ。……」

「……」

「私はあなたを不幸にする為に来たのよ」

幸福の絶頂から不幸のどん底に叩き込む為にやつて来たのだわ」

「何故？ 何故？ 何故？ 私があなたに何をしたつて云うの？ 私はあなたに何もしないわ。私には訳が分らない……」

「あなたは私の恋人を奪つたのよ」

「奪つた？ 知らない。私は何も知らなかつた。あなたがあの人の恋人だとは知らなかつた。今始めて聞く事だわ。あの人は何も云つてくれなかつた。あなたも何も教えてくれなかつたわ。私に罪はない。私は無罪だわ」

「罪があるわ。大罪だわ。あなたが私達の事を知ろうが知るまいが、そんな事は問題じゃない。あなたが存在している事——それだけではあなたは充分罪を犯しているんだわ。あなたが居なければ、あなたが生きていなければ、彼は私を捨てる筈はなかつた。私は充分愛されていた筈よ。彼はあなたを見た瞬間私を忘れて了つた。彼も悪いけどあなたの方が尙悪いわ。私は苦んだ。夜も眠らなかつた。涙も涸れて了つた。私はあなたをうらんだ。勿論、彼は私の云う事なぞ聞く筈はなかつた。私は決心したわ。あなたに復

讐しよう。そしてあなたが幸福の絶頂にいる今日、私はやつてきた。私の計画は図に當つたらしい。あなたは不幸のどん底に落込んだ……」

「……」

「要するに、あなたの得た愛は二番煎じだつて云う事よ。彼の言葉も行為も、凡て、一度は私に注がれたもの許りだわ。それ許りじゃない。私の教え込んだ習慣だつて、彼は無意識の内に守っているのよ。例えばあなたは御存知の筈よ。彼は乳首に齒形を入れる事が大好きだわね。それから内腿を長い事接吻している事も。そうした事が私のお仕込みした事、あなたは知らなければいけないわ。それから、お知らせしなければいけない事は未だ……あつてよ」

「……」

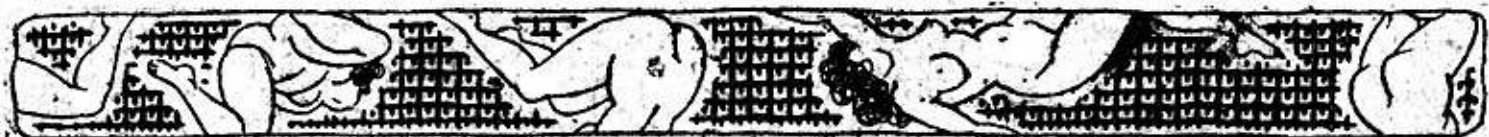
「例えば、こんなのはどうかしら？……」

「……」

「非常に素晴らしい事よ。あなたきつと驚くわ。ね、よくお聞きならいよ。私ね……」

「……」

「私ね——妊娠しているの」



「まあ……」

「どう、驚いたでしょう？勿論彼の——つまり、あなたの旦那様の子供よ。彼は知らない筈よ、私は黙っておいたから。私はこれからちゃんと健康に注意して、丸々した赤ちやんを生むわ。無論、あなた方に貰つて頂くために。——素晴らしい計画でしょう？あなたは何時も其の泣き声に悩まされる筈よ。例えば、こんな場合を想像して御らんない。素敵な甘い春の宵よ。あなたの柔い体は旦那様の強い抱擁の下に、歡喜に激しく震えてい。あなたの小さい唇は、旦那様の熱い唇を夢中に吸っている。あなたの波打つ乳房は、旦那様のたくましい胸の下に美しくおのゝいて……その時よ。あなたの耳に赤ん坊の激しい泣き声が聞えるのは。あなたは天国から地獄へ突落される訳ね。それも自分の恋敵の子供に。どう？素晴らしいじゃないの？」

「あゝ、もう駄目だわ……幸福は去つてしまつた……真暗な未来ばかりが私を待っている……私にはもう生きる力がな……」

「そうよ。あなたには暗黒の未来だけしかないわ。死になさいよ。それだけが救いだわ……」

「悪魔！ 人非人！ 鬼！ 黙！ お望み通り死んでやるわ。しかし私が死ぬ前に、お前を殺してやらなければ死に切れない！」

× × × × ×

「あなた、私幸福だわ……私、ずっと前からあなたを愛していたのよ。けど奥さんをお貰いになつたから、もう駄目だとあきらめていたの。それが運よく——と云うのは一寸変かしら？——奥さんがあの女を殺して自殺して了つたから、あなたと結婚出来たのね。でも一体あの事件の原因は何だつたのかしら？」

「さあ？ 案外詰らぬ事からも知れん。何しろ女つて奴は下らん事に昂奮するからね……」

「私だつて女よ」

「こついつは失敬。しかしそんな事はどらだつていゝ。僕達は新婚旅行の夜を有意義に過そうじゃないか——さあ可愛い

赤ちやんこつちへおいで」

「あなたつて……乱暴ねえ……あゝ……」

「……」

「……」

「僕は……君だ……君は……僕だ……あゝ僕達は……一つだ……そして……僕達は今……永遠の……中に……いる……」

(終)



青^{あお}い濁^{だく}流^{りゅう}

竹内節夫

銀^{ぎん}色^{いろ}夜^や叉^{また}

その朝も、楊徳福こと福田甚吾は銀塊の夢をかきわけて、毛布きりの温床に眼をさますと、窓外の騒音をかき消すような欠伸をして枕元のMCCを拇指のない右手で摘みあげた。

金のために、法網と道德の境いに架かる危い橋を渡つて来た、これという定職のない高等浪人には爽やかな初夏の陽ざしよりも銀貨の鈍光が、はるかに魅力であるらしい。

ながい大陸生活で、いつとはなしにマスターした流暢な華語と、嘲りかけた露語、それに息切れしない心臓を武器として各地をうろついて頭官紳商をたぶらかし、あくどい虚業に浮身をやつしていた甚吾が、こゝ天津の三不管に落ちついたのは、日華事変の翌春だった。

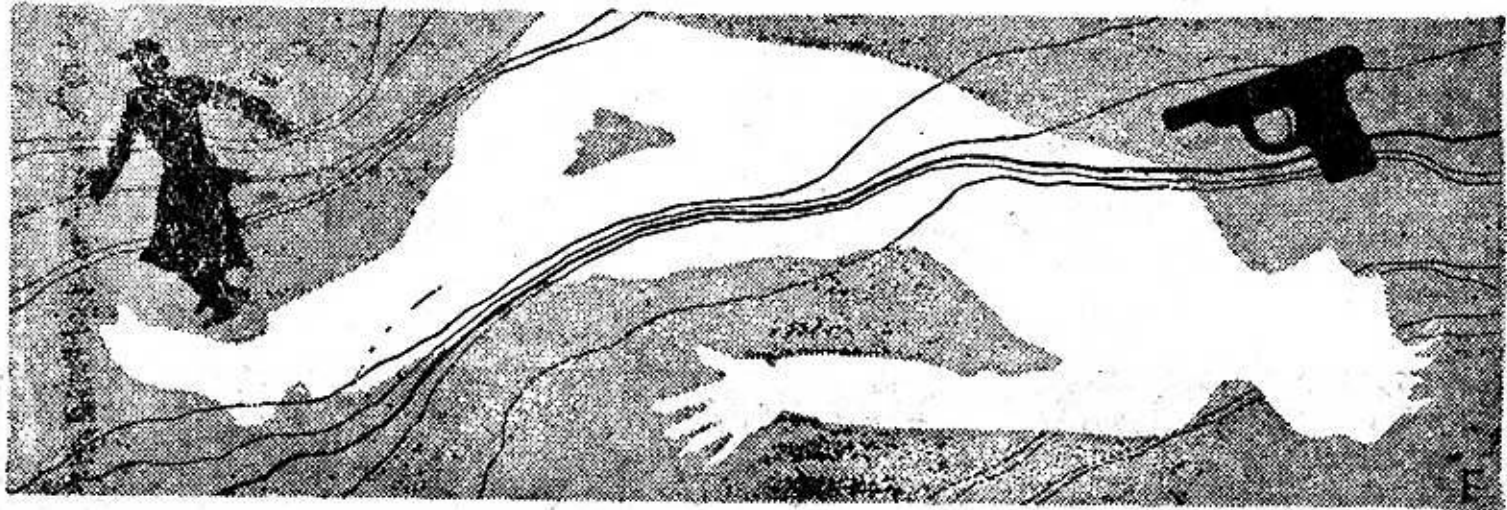
日本租界の西に賑わう三不管——そこは、阿片、賭博、女の三拍子に役人、巡查、憲兵の怖い眼がとどかぬ特殊な盛り場で、脛に傷もつ身には屈強の安全地帯だったのである。

掃き溜めのようにゴミくした、胡同の奥にある中国家屋の一室

を借りうけた彼は、護身用のブローニングと、商売用のスーパー・シックスだけは残したが、黒貂や銀狐、ラッコの毛皮をはじめ贅沢品を手離して現金をつくり妓楼（書院）の女たちを専門に毛色の変つた高利貸をはじめた。

一ヶ月契約で百元を融資しておいて、毎日五元づゝ回収し、三十日で五十元を儲けるといつたネズミ算法で、日銭さえ払いしふる女からは指輪、衣類、古靴など、何でも強引にカタとして取り、容赦なく古物市へ売りとばすのだ。

「あんた、妾と寝るい——」
それで日銭を帳消しにしよう



と、貞操を投げたして哀願する女もいたが、甚吾、その腹には乗らない。

「勲章はお前に貰わんでも、戦争に行けば本物を貰えるよ」

彼は自嘲的に嘯くが、じつは赤紙を受けとる場所さえ、まだ連絡してなかった。

爛れた書院の女にさして興味をかんじないのは、隣りの都ペイビンに、前門で落難した水の滴るような英蘭を囲い、地元の特三区（旧ロシヤ租界）に、ハルビンの私娼窟で拾った白系娘マルタをつないでいたせいもあつたが、むやみに妓女を欲情の囿にすると商売の城が崩れるだけでなく、その神妙な底しれぬ肉体の。ポケットに男の生涯をのまれる危険性のあることを知っていたからで、妓女たちと同棲しないのも、風を食つて逃げるとき手足まといになつたりそのヒモから足がつくのを慮つてのことだつた。

甚吾は、その因業な商売を根気よく二年近くもつづけ、巨万の富を築きあげた。

床下の、温突煉瓦にかこまれた大甕には、銀元がザク／＼唸つてゐる。

銀本位の中国でツブシの利く現ナマ主義を奉じ、紙幣や補助貨の毛票、銀角をみんな銭荘で両替するのは、いくどかの経済パニックで彼が混乱の巷から拾った金融哲学だつたが、事実、新旧銀行の盛衰、ロボット政権の幣制改革で金銀の相場が狂いはじめると、没落銀行の発兌になる紙幣など、一ケの銅子（イン）に如かないことがある。

巨利を博しても銀行取引のない甚吾には、その年——昭和十四年の六月、イギリス租界が閉ぢ、麦加利（マカティ）の金融が凍つたとて痛くも搔くもなかったが、英国紳士の姿とともにエムバイアシアターやゲラ

ンドスターの映画館、アスター・ハウスやコート・ホテルの燈が消え、競馬場には敗兵の髯を思わす夏草が茂り放題で、木賃宿に毛の生えた日本旅館でサーベルと国防色が威張りちらしている風景は、道にやりきれなかった。

有効に金を吸いとる雰囲気（カネ）の薄らいだことに、彼は金の値打が下落していく錯覚と焦燥をかんじ、また、麻薬ブローカーでも始めようか、と考えていた。

——ひと儲けの前祝いに、きょうは久しぶり英蘭の肉体を楽しみに行く。翡翠（ヒスイ）か珊瑚（サンゴ）の頸飾りでも買ひ与え、北海（バイハイ）か万寿山（マンシュ）でもぶらつき、メシは北京飯店か、寝台は扶桑館のダブルと酒（サ）落れよう。近頃の日本宿に発散する軍人臭は降参だが、まア麝香（セウキョウ）でもぶちまいて皮革の匂いを追ッ払うさ。それよりや、黒白のルートが先決問題だが、さて。

「楊先生（ヤンセンシヨウ）、めずらしく在宅ですね」

打てば響くように、ノックの音がして、李景善が入ってきた。

「やア、丁度いいところへ来てくれたよ。……白（モヒ）を少々欲しいんだが、手に入らんかなア」

甚吾は、李を信用し仕事のことも打明けていた。

李は英蘭の兄だとも称していたが、たおやかな妖花が好をきそう前門へ初めて甚吾を案内したのも彼で、頼まれれば嫌と云わぬ男だつた。

「黒（アヘン）なら、大量に入る」

「ぢや、それで結構。さばきにくいが、その方が儲かるんだ」

彼は、李が阿片密造の本場「熱河」まで、わざわざハスことを知っていた。

山海関の税関は鬼門だつたが、荷物と云つても寝具だけを肩に飄々と大陸をいく渡り島「苦力」に変装し、デタラメ公司発行の偽移動証で、マンマとそこを突破するのである。

検査の税吏は、触れば蚤が飛ぶか虱のもぞつく薄汚い寝具を敬遠するが、そこも李たち密輸者の、付け目だつた。

「ぢや、前金を渡しておこう。……きようは北京へ行つてみる」

一朝にしてフランを軌道に乗せた甚吾は、つい甘く口を滑らせた「えーッ？ 英蘭のそこへ寄るんですね。……よろしく伝えて下さい」

妙に丁寧になつた李の眼は、嫉妬と猜疑にするどく光つたが、二つの機会を前に有頂天の甚吾、その炎がみえなかつた。

くされ縁

或る夜、イタリ租界のスペイン競技「ハイアライ」でさんざんいかれた甚吾は、霧雨けぶる憂愁の巷へ出た。

振りかえると、近く閉鎖されるといふ噂の、豪荘な賭博の殿堂が夜目にもくつきりと浮いていた。

敗けても忌々しくはなかつた。むしろ滅入るのは、いろ／＼な娯楽が禁止され、賑やかな街の燈が、雨の墓地にみる燐光のように、一つ一つ消えていくことだ。

彼は万国橋を渡り、右岸沿いに特一区へ歩いて行つた。起士林でマルタの好きなチョコレートと洋酒でも仕込み、せめて彼女の豊かな肉体で暗い神経をほぐすつもりだつた。

「よオ、福田先生……」

「やア、康大人ぢやないか」

店先で肩を叩かれた甚吾は、そこに精悍な三十男をみとめて、驚駭の肩をあげた。

康東山は、彼を奥の特 別 室へ誘つて、コピーを注文し、卓上に上半身を傾けた。

「やはり先生は天津だらうと思つた。僕はあれから青島へ飛んだんだが……」

「何か、旨い仕事あつたかね」

「へ、へへへ。十六ミリで例の芸術映画も作つたですが、あの街の紳士はお上品で会員にならんですよ」

康にかゝつては、風紀も秩序もあつたものではない。

「それにしても、よく天津で落ち合えたものだ」

「蛇の道ですよ。上海に居るとき、先生は北支へ行きたいと洩してたでしよ。まア、僕たちが仕事の出事る街は決つてゐるし、何でも一流あさが先生の趣味なんだから……」

「なるほど、北京は遊び人の街だし、天津でなら、いつかは巡り合ふお互いだね」

甚吾は、嫌な奴に会つたと思つた。きようは悪日だ。ハイアライで芽の出なかつたのも当然だ。――

ふたりが馴れ合つたのは、上海の、とあるキャバレーだつた。何のことアない、他愛もなく甚吾が得意の華語で

（不景気ですなア。お互いに戦争道具の造りあい止めて、手をつなげばいゝんですが。……まア、一杯いかゞ？）

と、グラスをすゝめたのが端緒で、とんだ駒が出たのである。

（先生の北京官話は素晴らしい、聞いてゝも惚れられする。僕は南方の生れで四声も広東浦、お恥しい）

甚吾を日本人と知つての、お世辞までは無難だった。……

（金儲けの近道は、贋金を造ることだよ。そりや、歩きにくい道だがね）

意気投合して飲みあるいた末、隠れ家らしい地下室に、好き朋友を案内した康は、冗談とも真剣ともつかぬ口調だった。

転んでも只では起きぬ彼は、二すじ縄を用意して、甚吾の善根悪意を打診するつもりらしかったが、その理論は単純明快であり、しかも驚くべきことに、贋金造りに必要なデーターが、チャンと整っていた。

ふたりは、極秘裡にチャチな私設造幣局をつくつた。偽造紙幣は木の葉のように街へ散つていたが、とたんに犯人探索の手も旋風のように、地下の密室を襲つた。

（地元は危い！）

活路をひらいたふたりは、再会を約するいとまもなく、高飛びしたのだつた。

「今度は、もつと色気のある仕事をしましょうや」

「いや、そう甘くはないよ、世間は」

切れたと思つた腐れ縁の復活に、甚吾はうんざりしたが、ダニのように吸いつく康を振りきるには、わが身にもまだ毒血が残りがっていた。

「ほれ、凄いいカメラご持参だつたでしよ。あれを資本に……」

「あ、例のプロマイドかね」

微にいり細をうがつ要はなかつた。似心伝心、怪しげな猥写真を製作しようというのである。

甚吾は、やむなく三中管のアドレスを彼に教え、翌日を約して別

れた。

梅河の左岸へ出て、濁流を右に、マルタの待つ特三区へ急いだが両足がその流れに溺れていくようだった。

——いつまでも泥沼稼業から足を洗えないのか。紳商泣かせの闇取引……大官こましの舌三寸……濡手で粟の贋金造り……妓女いじめの高利貸……青春むしばむ麻薬売り……風紀も馬耳の密画さばき……一体。それで人間らしい良心があるというのか。そんな不純な心構えでは、すべた女の心さえ蕩かすことが出来まいテ。

——摂理、配剤、審判？ 冗談ぢやない。震災で親兄妹を奪われて天涯の孤児になり、町工場の旋盤で拇指を失つたあぐく餓死された人間が、島国を食いつめて出稼ぎにきた大陸での自由奔放な生きかたを誰が裁く権利があるというのだ。見ろ、ゲンに英蘭もマルタも満ちたりた生活のなかで、四十男の巧まぬ肉体を堪能し、惜しみない金権に屈伏しているヨ！

彼の胸底に、苦悶と歓喜と、清濁ふたつの流れが渦巻く……。

その翌日の午すぎ、フランス租界の中華料理「鴻宴楼」のテーブルに、李景善を交えた甚吾と康の三人が、ひと曲のある顔をそろえていた。

「モデルはどうする？」

と、李が卑しい笑いを含んだ。

「どうせ、ガン首はすげ代えるんだ。白痴でも、何でも、身体いい奴」

甚吾は、そつと昨夜のマルタを思いだす。

「細工は僕が引きうける。よし、儲けは三等分、日華合弁会社と行こう」

康が前菜を噛みながら、断を下すように言い、それを潮に酒宴はたけなわになつたが、ひどく酔つたのは甚吾ひとり、李も康も街へ出るとまるで素面に近かつた。

三人はすぐ仕事部屋を三不管の一隅に見つけ、プランを実行に移した。客引は李、カメラは甚吾、販路は康と、それ／＼分担だ。

風をあざむく白光の部屋に、ダブル・ベッドが一つ。シーツの黒は撮影効果を狙つたものか。獸のよりも浅間しく男女がくりかえす痴戯の、きわどい一瞬を、屋根裏にすえつけたテッサ二・八のレンズが捉える。

醜惡なその情景は、もはや美しい色慾の果てではなく、怪奇の極みだつた。

甚吾は、興味を失いはじめていた。神聖なる性愛への冒瀆——暗い現象室で焼付に没頭していると、彼は屈辱をさえ感じ、疲れ、いらつき、フィルムの幾枚かをひき破つた。

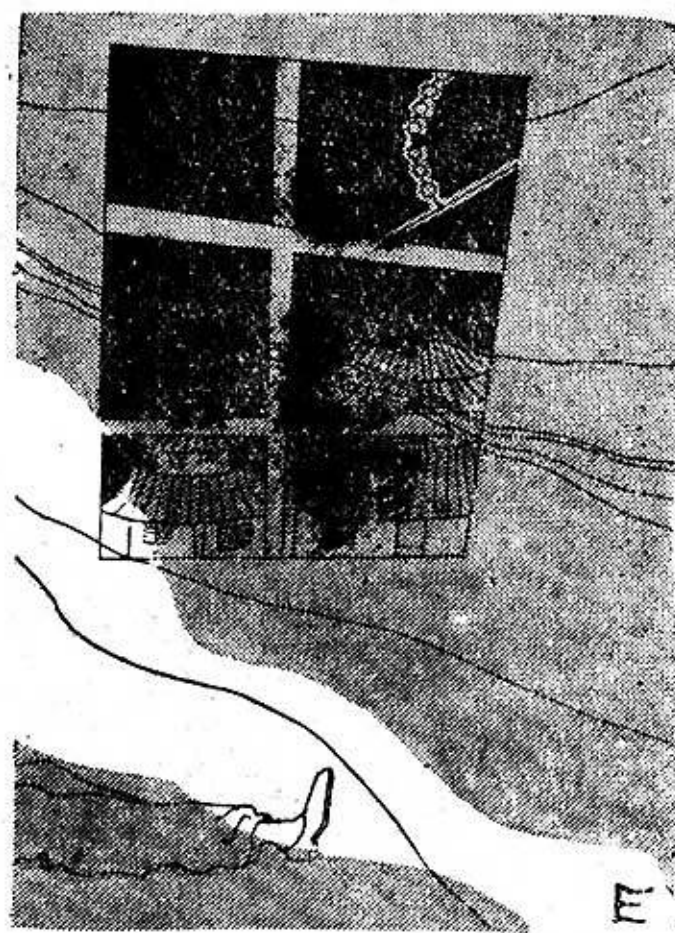
「康の奴、売りかたでピンをはねてらしい」

そう囁く李は、しかも一方で康にも旨くつついていた。

「三等分だつたね。把頭みたいな真似はしまいと思うが……」

甚吾は、さりげなく康の肚をさぐつた。

「そりや余得だよ。嫌なら、この辺で公同は解散してもいい。僕は公安局の大人に朋友がいるから、旧悪は怖くないよ」



康は言外に密告をほのめかし、逆に彼を脅迫してきた。
(こんな野郎と抱合心中して堪るもんか)
甚吾は、撫然として呟いた。

保護殺人

天津、太沽間の白河は「梅河」と呼ばれていたが、その梅河へ、薄氷とともに二体の水死人が流れてきた。

一つは、特二区(旧オーストリア租界)と城内をつなぐ金湯橋の柱に、一つは大胡同から市政府に通ずる金湯橋のたもとに引ツかづつていたが、ともに早朝の行人が発見したのである。

市政府の公安、港務両局と警察は緊密な連絡をとり、犯人捜査に乗り出したが、その努力を嘲笑うように、二日目は万国橋のほとりにまた二体が臘人形のように浮いてきた。

半裸の四死体に共通なものは、たくましい肌に弾痕をみとめたことだ。

死後の経過……浮化の状態……流れの速さ……水死者の体重、弾痕と兇器の行方……犯人探索のメドがないわけでなかつたが、専管租界が密集し外国人の往き来もあわただしいこの街では、与えられた鍵も五里霧中の扉をひらく道具として役立たなかつた。

旧正月を迎えた街は、水死事件の噂にわきたち、奇怪な風聞も飛んでいた。久しぶりに、ぶらりと甚吾を訪ねてき

た康も、その噂に触れて、

「何でも日本軍がネ、白河の上流地帯に飛行場を建設してつて話だよ。労役に使った苦力の口から秘密が洩れるといけねえンで、バツサリぢやねえかナ」

「スパイの口笛に踊りなさんな。重慶から潜入してる抗日分子が、さかんにデマ飛ばしてる」

「こりや僕の推理ぢやない、市政府の朋友も云つてたよ」

「怪しからん役人だね、そりや」

「ところがネ、公安局は躍氣になつてる

のに警察はテンと動かんそうだ。臭いよ」

「しかし、秘密をたもつ心算なら、日本人の土方を使つてもいゝし殺したにしても火葬でいゝ、河へぶちこむ手はないサ」

民族の血は争えなかつた。お互いに、ちよつぱりと祖国愛を本能的にひらめかし、眼と眼でチラリと火花を散らしたが、ふたりの間には秘画事件このかた、感情に溝が掘られていたのだつた。

「まア、そんなことア、どつちへ転んでもいゝ。……じつは、少々錢を借りに来たのさ。こんど大仕掛の仕事にかゝるんで、資金が要る」

と、康は脚を組みかえ、煙草を啜えた。

「錢なんて、まるきり無い」

甚吾にニべもなく断つて、彼の顔色をうかづつた。

たゞの鼠ではない、嫌な相手だ。



「彼女に貢ぐ勢いはあつても、仲間に貸す錢はないとお仰言る。李の果報者、北京の妹に貰つたとかいうラッコ襟の外套をひけらかしてましたよ。……ね、先生土の中で温めてるよりや、僕に廻して下さい。利子もつく」

「どれ位、入用なのかね」

英蘭に奮発してやつた毛皮のゆくえは問題でなかつたが、甚吾いさゝか狼狽した。土中に現ナマを埋めるのは田舎の常套手段だが、それを指したのはカマだけではなさそうだ。

「いや、恩借は見合わせましよう。……まア狙われんよう、氣をおつけなさいよ」

捨て台詞を残して不気嫌に立上る康に

「大人、怒ることなかなろう。だから額を聞いてるんだ」

ちくりと形のない古傷に触られた甚吾は、敗北感で優しく縋つたが、破格の要求にも動ずる色なく、金を手渡す日時と場所を約して彼を部屋のそとに見送つた。

「ぢや、間違ひなく……」

念を押す康のうしろ姿に勝者の優越が溢れているようだった。

（畜生ッ、生かしてはおけぬ——）

彼奴は、俺の尻毛まで抜くかも知れぬ。いや、このまゝ捨て置いてはこつちとらが地獄行だ。

ムラ／＼と康に殺意を催した彼の脳裡に、梅河の水死事件が、電

光のように閃めく。うむ、彼を堤防へおびきだして、一発お見舞申しあげ、河床へ叩きこんでやろう。恰もよし犯跡は、最初の男に転嫁することが出来る。天の啓示、地の配剤とは、このことか！

銃声のカムフラージュは？ 自問する甚吾の前に、一つの解答が興えられた。

旧正月の夜々を彩つて、地に炸裂する爆竹の耳を聳する轰しい音これだ！

素晴らしい二つの殺人保護色——悪党を成敗するための奇跡が、中国の、年に一度の慣習のなかに現れたのであろうか。

約束の夜、甚吾が西車站に近い河北大街の中華飯店に出向くと、康は彼を待ちかまえていた。

「ほい、約束の。——こりや、本物だよ」

「さすがに、楊先生いや福田大人は信用のおける方だ」

康はほつとしたらしく、磊落に笑つて札束を収めると、グイグイ白酒をあほりだしたが、甚吾はチビリクビリ老酒をなめながら心の動揺をおさえた。

——最後の饗宴だ、うんと飲め！ その札束だつて、一刻あとには俺の手許にそつくり戻るんだ、哀れな奴、おツと安手の憫みは禁物か。

飯店を出たふたりは、遠近にベン／＼ひびく爆竹の音を聞きながら、三条大街をぬけ、梅河の右岸へ歩いて行つた。

青い濁流

福田甚吾は、一見稚拙な構想とも思われる保護殺人のプランをたてたとき、実際問題としての効果に一抹の不安を抱いたが、濁流は

その杞憂を呑み、月日とともに流れさつた。

「近頃康さんの顔をみないですね」

「何か仕事をとちつて、ズラかつたらしい」

犯行当時の甚吾は、何気ない李のことばにもギクリとして、康の亡霊におびえたが、麻薬と女と酒に痺れた神経とその歴史の記憶のように呆けこんで行つた。

太平洋戦争に突入する頃、それらの水死事件は全くの迷宮入りを思わせ、人々の口端にももたらなくなつていたのである。

甚吾は、しみ／＼と孤独感に襲われ、女の肉体を恋しがつた。絶えず自分を追いかけている「眼」に悩まされ、救いを求めるようにキリスト教会の門も潜つてみたが、彼がそこで刻んだ印象は、讚美歌をかなでる娘の美しい横顔だけだつた。

英蘭にもマルタにも精神的なものゝ欠けていることに彼は柄になく寂寥を感じる。はちきれるかと思われた英蘭の艶めく体に衰えをおぼえ、マルタの娼婦的な技巧に食傷したのかも知れなかつたが、しかも二人が申し合わせたように、激しい物質欲をしめしはじめたことは、彼にとつて不愉快な負担となつた。

白河のたゞすまいに変わりはなかつたが、街には軍靴のひびきが交錯し、人々の生活はワクのなかに喘ぎはじめた。

祖国が空襲下にあるニュースに、甚吾は切迫した空気をかんじながらも、三不管の女たちを相手に狭くなつた黒白の軌道を走りつづけていた。

康を屠つた記憶に、寝ざめの肌が汗で濡れることもあつた。彼は頽廢の生活に疲れてゐたが、戦局の悲報に見舞われていた日本人の顔も、艶をけして暗かつた。

そして、終戦！

それは青天の霹靂ではなく、むしろ暗雲を破る光だった、邦人は混乱のなかに蒼ざめ去就にまよつた。

その日の正午すぎ、甚吾は中国服をまとい黒眼鏡に陽光をさけて北京へ急いだ。

——身辺にふりかゝつた危機を脱し、ひとまず安全地帯に潜むために、英蘭と偽装の結婚をしよう。これも臨機応交の保護色さ。

彼は、骨も砕ける抱擁と熱い親嘴^{キッス}の、虫のいゝ夢を追いつつながら、西総布胡同に英蘭を訪ねた。

「どうして、妾のどこなんかへ来たの？」

「君と……同棲したいんだ」

彼はそこに、交尾期をすぎた牡豹のように無感動な瞳をみて、ゴクリと生唾をのみこんだ。

「何を云つてゐるの、帰化もしていないあんたが此処にいと、妾が困る、……翡翠も琥珀もみんな、返してもいゝわ」

「兄さんも今夜は、こゝへ来るよ。三人で相談したいことがある」

「兄さん？ ああ、李景善のこと？ あの人は兄ぢやないわ」

英蘭は不敵な苦笑を洩すと、彼にそつぽを向いて窓辺に寄つた。

——そうか、情夫だったのか、俺はおメデタイ男だ。

「邪魔をしたね。いずれ挨拶に来るかも知れん。元気で暮してくれ……」

そこに、愛情の距離をはつきり感じとつた甚吾は、北京をあとに天津に舞いもどり、特三区にマルタの部屋をノックした。

巷には、死のような静寂が流れていたが、彼の心は鉛のように重い。

「よく来てくれたわ」

彼女は瞳を輝やかして、甚吾の頸にぶらさがつた。窓からは微風が流れこんで、花瓶の一輪が揺れる。

「きょうから、俺も難民だ。一緒に暮してくれないか？」

彼は、先刻の冷やかな英蘭を思いだし、哀願するように云つた。

「暮してもいゝけど、今は駄目。妾、ハルビンへ帰る。あんたがフランス人ならお伴するけれど……」

——悲しみの民族か！

彼は、祖国のことばを、自分に云い聞かせるように、なつかしげに呟く。

「ね、旅費つくつてよ。ロボット銀行のお札ぢやダメだけど、洋銀ならトランク一杯で結構だわ。あんた、孤児だつて云うから、妾も同じ境遇だつて同情したけど、ほんとはハリピンに父親ひとり居るの、昔は陸軍大佐だったのよ、きつと妾の行方を探してるわ、早く帰つてやらなきや可哀そうよ」

「そうか、旅費は明晩きつと渡すよ。こゝへ来てくれ」

こゝにも長居は無用だと考えた甚吾は、自宅の住所を彼女に残し饒舌を聞きながして外へ出た。

——三発は残つていたな。一発で、人生は清算できる。

ふと、肌身離さぬ拳銃をかえりみたが、その弾で無理心中を企てるほど、女に情熱も未練もなかつた。

彼は梅河沿いに街をさかのぼり、大胆にその流れをみつめた。

——どたん場になると、こゝも命にこだわるものか。その貴重な命を、康はムザ／＼とお前に奪われたではないか。

悔恨の自責の鞭が、彼の心身にベシ／＼と音をたてた。

三不管に辿りついたのは黄昏だつた。

部屋の前に、李の四角な顔が待つていた。心なしか、白々しい。

「この銀貨は、君と英蘭と、明晩こゝへ来るマルタという女の三人で分けて下さい一袋だけ、僕が頂戴していく——」

其吾は、いきなり床下に潜ると、大甕の中から幾つもの包みを投げだした。

「何処へ行くつもりですか。危いですよ。僕の家へかくまつてあげろ。……先生のこと、康にも聞いたし、何でも知つてるけど、訴えたりしないです」

「有難う。……俺は康君に詫びに行きたい」

「居るところ判つてゐるんですか」

「ああ、知つてゐる、俺だけ！」

謎のひと言をのこして、夢遊病者のように夜の街へさまよい出た甚吾は、やがて行人も杜絶えた金網橋の上に佇んでいた。

——いさぎよく自身を裁こう。銀塊で浮いていた俺が、銀塊で沈むのも皮肉な人生だ。

ふと、彼の感覚に、いくどか眺めた勃海の起伏がのたうつように閃いた。泥のそぐところ、そこに濁流を呑む青い海がある。

濁つた身の、回想と懺悔だつた。

ばアッ！ 銃声がしじまを破つた。茫然として濁流をみつめていた楊徳福こと福田甚吾が、ブローニングの冷い感触を世にも快く意識した瞬間、きらめく星が河床に流れたのである。

流れはゆるやかに、罪の子を孕んだ気色もなく、静かに海へそゝいでいた。

心中者の晒し

元祿時代から男女の相対死、
即ち情死者が陸続と出て、宝永

正徳の時代には最も流行した。

そこで徳川幕府は享保七年に至つて、心中を題材とした戯曲詭物を厳禁し、また情死を仕損じた者は三日間晒し者にして次いで非人に下し又死亡した者は野外へ裸体として放棄し、同じく晒しものにした。

然し此の様な苛酷な法度も年を経るに従つて弛緩し、非人になされた情死の仕損じ者を、親族から非人頭へ金を出して良民にする風が生じ、これを足洗いと称えた。

また心中者の遺骸を晒し者にする法度も廢された。それは「南水漫遊拾遺」に大阪の阪町に起つた心中者の死骸の晒しもの

に陰毛が多くて評判となり見物人が殺到した為それ以後、晒し者が止んだというのであるが、江戸に於てもこれと同様の事があつて、心中者の遺骸を晒すのを止めるようになった。

江戸時代に於ける心中の起りは大阪で、新町の遊女屋大和屋抱えの公娼市之丞がその情夫と自殺したことが心中の初まりである。そして相手の名が長右衛門といふ、共に心中した時は天和三年五月十七日の夜であつた。

それから元祿より享保にかけて情死者を最も多く出したのは大阪は北の曾根崎新地の遊廊であつた。大阪で流行した心中は大阪で流行止みになつてからは次第に江戸に移り、幕府が情死の流行を杜絶させんが為に、心中者に対して厳酷な刑罰を科するに至らしめたのであつた。

姦淫私刑考

丹波太郎

(一)

神前でいとも厳かに奏せられる祝詞、その雰囲気とはおよそ似ても似つかぬ、エロとグロとエトモアに満ちたものが祝詞である。その一節に、

「おのが母犯せる罪、おのが子犯せる罪、母と子を犯せる罪、子と母を犯せる罪」

というのがある。之を国津罪の一つにしてあるが、どの民族でも性的犯罪として最初に規定されたのが近親姦であつた。してはならないこと、タブー（ポリネシア語。禁忌）として原始未開の時代から、近親姦は禁じられていたのである。それは優生学的意味でか宗教的な意味でか不明であるがおそらく長い生活経験から、奇形児の出産を目の前に見た原始人は、神の祟として恐れる様になつたからであらう。

バイブルの利未記邪淫戒第十八章にも、
「汝等はすべてその骨肉の親に近ずきて、之を淫するなかれ。汝の母と淫するなかれ。之汝の父を辱しむればなり。汝の父の妻と淫するなかれ。之汝の父を辱しむればなり。汝の姉妹即ち汝の父の女子

と、汝の母の女子は、家に生れると家外に生れたるによらず、すべて之を淫するなかれ。汝の男子の女、又は汝の女子の女と淫することなかれ。之自己を辱しむればなり。汝の父の姉妹と淫するなかれ。之は汝の父の骨肉の親なればなり。又汝の母の姉妹と淫するなかれ。それは汝の母の骨肉の親なり。汝の父の兄弟の妻に近ずきて之を淫するなかれ。之は汝の叔伯母なり。汝の嫁と淫するなかれ。之は汝の息子の妻なればなり。汝の兄弟の妻と淫するなかれ。之は汝の兄弟を辱しむればなり」

とある。聖書は性書であるなどと言われるのはこんなところで由因するのだから、バイブルの方が祝詞より、罪の範囲が広く嚴格になつてゐる。我が国では平安朝時代頃までは、異母兄妹、伯伯と姪、叔伯母と甥の間の婚姻は差支えなかつた。例えば古事記によると、

仁徳天皇は二人の庶妹を娶り、安康天皇は叔父を殺しその妻を皇后とし、雄略天皇は叔母を、欽明天皇は姪姉妹を、敏達天皇は異母妹を、応神天皇の子は叔母を娶つてゐる。允恭天皇の長子木梨之輕王は、同母妹輕之大郎女（衣通姫）にたわけて人心に叛かれ、天皇の位を逃がした上に、伊予の国に追われて共に死んでゐる。悲恋の

王子といふところであらうが、同母妹と婚することは許されなかつたことを物語っている。

法制史上固有法（オリジナル）・ロー即ち専ら自国の風俗慣習に基いて成立せる法律をいうのであるが、姦淫罪はこの固有法時代が長く続いて、我が国に於ては徳川幕府の御定書百箇条によつて、どうやら法律らしい体裁を整えるに至つた。西洋

に於ては、ロー建国後七五六年に発布された、レックス・ユリア法、ドイツのカール五世の刑事法典が姦淫罪の規定で有名である。いずれにしても現今の殊に姦通罪が廢止になつた時代に住む我々にとつては、姦淫罪の規定は驚くべき慘酷を極めたもので、公刑とはいへ私刑との區別が不明確で、固有法的である。近親相姦などは殆どが死刑であつた。原始時代の制裁と何ら変わるところがなかつたのである。

村落共同体（原始共產時代）時代から私有経済の時代に、母權制時代から父權制時代に、乱婚群婚時代から一夫多妻、一夫一婦時代に変遷してくると共に、姦淫罪は近親姦の他に私通、姦通、強姦、重婚、淫行勧誘、婦女誘拐、鶏姦、獸姦、屍姦、情死（徳川幕府時代の日本だけ）等々が姦淫罪として加り、カル法典なども鶏姦、獸姦、強姦、婦女誘拐、重婚が加つたのである。バイブルの利未記の



時代も既に私有経済の時代で

「汝の隣りの妻と交合して、彼によりて己が身を汚すなかれ」
「汝女と寝る如くに、男と寝るなかれ。これは憎むべきことなり」
「汝獸畜と交合して、之れによりて己が身を汚すことなかれ。又女たる者は、獸畜の前に立て之れと交ることなかれ。これ憎むべきことなり」

「汝妻の生きている間に、彼の姉妹を取りて彼と同じく妻となし、之れと淫するなかれ」とあり、近親姦以外の姦通、鶏姦、獸姦に対する規定がある。

更にユダヤの統治者モーゼに依つて立法化された「申命記」に

「人もし妻を娶り、これと共に寝て後これを嫌ひ、我この婦人を娶りしが、これと寝たるときはその処女なるを見ざりしと言いて、誹謗の辭柄を設け、之に惡しき名を負わせなばその女の父と母とその女の処女なる証拠を取り、門に居る村の長老達にこれを差出し、而してその女の父長老等に言うべし。

我れこの人に我が女子を与えて妻となさしめしに、この人之れを嫌ひ、誹謗の辭を設けて言う、我れ汝の女子の処女なるを見ざりしと、然るに我が女子の処女なる証拠は、これにありと、かく言いてその父母かの布を村長老等の前に展ぶべし」

この場合夫は長老等に鞭打たれ、銀百シルケを妻の父に償い、一生妻を去ることが出来ないが、真に処女でなかつた場合は、女は村の人々に石をもつて打殺されるのである。即ち私通の場合の掟が出ているのである。

又村中で有夫の婦を犯した場合、二人共石殺、野にて犯した場合、女が叫んでも救う者がなかつた為男のみ殺される。前者は村の中で女は叫ぶことが出来るのに叫ばなかつたといふので姦通となり、後者は強姦となる。女が処女の場合の強姦は、銀五十シルケを女の父に贈り、一生その女を妻とすべし、という軽い刑である。以上に述べた例は、文章になつて残つてゐる公刑であるが、姦淫罪が公刑によつて処罰された例は極めて少い。その殆どが私刑といつてよい。然も記録に残つてゐるものは、王侯による妻妾などに対する惨刑が多く、絶対の権力者が勝手に行う刑なのであるから、私刑であつて公刑なのである。一般庶民の間では古来幾多の性的犯罪が犯され、それに戒する私刑が繰り返されて来たが、次の様な理由で余り表面化しなかつた。

一、自己及び一家の恥となる故、不問に附する場合が多かつた。
二、公にしても確証がつかみ得ない場合が多かつた。親子、兄妹関係など特に多い。

三、姦通は金銭で内済する場合が少くなかつた。

四、強姦は被害者が口を緘して発表しない場合の方が多かつた。がエホバの神威を以てしても、祝詞を奏しても、仏法の色慾否定も所詮人間の煩悩をどうすることも出来なかつた。知れると、知れざるとに拘らず、洋の東西古今を問わず、死の恐怖をも払い除けて、多くの男女は情慾のルツボに身を溶かしたのであつた。不幸にして姦

淫の罪に問われた人々は、如何ような刑を加えられたか？

(二)

刑は身体刑と生殖刑に分類されよう。そのいずれも一種の生々しい復讐であつて、嫉妬とサド性による、惨酷極まるものであつた。突発的な激情の結果、姦淫現場で加えられる制裁は勿論、公衆の面前で公開される公刑でさえ、その惨忍な殺し方は、之を見ようとする群衆のサド性を遺憾なく満足させるに充分であつた。

鼻そぎ。耳切り。髪抜き。鬚抜き。

身体刑の中でも最も軽い刑である。

鼻のさき、そがれにけるな、徒らに

わが間男と、長寝せしきに

という狂歌があつたが、天明の頃、京阪地方に、姦婦姦夫の鼻を殺ぐことが行われた(夷曲集絵抄)。

アイヌ語に「イトラスケ」即ちイトは鼻、ラスケは切るの意で、鼻を殺ぐ姦通に対する刑であつた。耳を切ることもあつたらしい。又アイヌ人は鬚を尊重し、社会の階級を示す位であつたが、姦夫はその神聖な鬚を抜きとられ、姦婦は頭髪を抜き、丸坊主にもされた。(蝦夷国誌) 姦淫者を殺しても差支えない掟はアイヌにはなかつた。

高砂族の間では、鼻を殺ぐ刑は、姦通の他に強姦にも適用された(台湾風俗誌)

朝鮮琉球にも鼻殺ぎの刑があり、中国では姦通罪は大逆と親殺しと同じに重刑とし、劓(鼻を殺ぐ刑)として公刑の一つに入つてゐた。

以上は一例であつて、世界どの民族にもこの刑はあつたらしく、私刑というよりも公刑に近く、家又は社会から追放される刑が附随していた。

糞尿の刑

台湾高砂の特刑で、コアサイ（尿を濯ぐ）と言つて、糞尿を食わせるか、糞尿壺の中に逆さにして突込むのである。時には死に到ることがあつた。

刳眼の刑

各国で行われている。

生理の刑

因幡誌によると、天正の頃宮部喜祥坊の領地鳥取柳倉に、山伏の妻と姦通した男が、姦夫と共謀して山伏を毒殺した。間もなく悪事が露見して、姦婦姦夫は捕えられた。殺された山伏は鹿奴の三光院の弟子であつたので、三光院より願ひ出て、下手人二名を申し受け山伏の作法に依つて石子詰の刑を行つた。国中から集つた山伏は、穴に姦婦姦夫を入れ、肩から上だけを出して、その下は石で埋めるのだが、多数の山伏が手に石を穴に投げ入れる。姦婦姦夫は肩も顔も形がなくなるまで打碎かれ、悲鳴叫喚の末息が絶えたと誌されている。

越後風俗誌にも石子詰の記事があり、この方は、往来の繁しい道側に埋め、朝夕の食事を番人が給して、三風多で免ぜられたらしいが、古来各国で行われた生理の刑は、死に到らしめる生命刑であつた。

台湾ではオアタイ（活埋）と称した。台南安平街道の途中に、半露亭という休息所があつた。暴漢此処に待伏せて一婦人を強姦した

庄人がこれを知つて馳せ集り、暴漢を捕えて生埋にした。死後首部を甕で蔽い腐臭に任せたが、その屍前で香をたき祈ると、必ず賭博に勝つと言われ、当時香烟が絶えなかつた。（台湾風俗誌）妙な神様が出現したものだ。

毆殺の刑

前記山伏石子詰の刑の場合は、生埋であるが石を投げ打殺するのであるから、毆殺とも言える。申命記第二十二章で結婚前に処女を破りながら、他の男と結婚した女は石もて打殺されることになつていし、スサンナ物語によると、姦通した女は矢張り石で毆殺されることになつていた。棍棒などで撲殺される例は各国共通で、中国では秦の始皇帝が始めたという説がある。始皇帝の太后朱氏が毒という侍臣と通じて、生んだ二人の幼弟を甕の中に入れ、撲殺した。

萬蠱盆の刑

生埋の変形であらうか。これなどはサド性を最も露骨に示した刑で、悪帝のサンプル殿の紂王によつて始められたという。即ち字の如く、蛇蝎の類を満たした大きな穴に裸体の女を投げ入れ、恐怖と虫毒によつてのたうちまかつた末死ぬのである。紂王は妖婦姫妃を寵愛して、皇后を殺し、皇后附の宮女数十人を萬蠱盆の刑に処したという。之などは姦婦猛々しい例であるが、数十人の若い裸女が、蛇蝎に攻められ咬まれて、のたうちまかつた様は実に壯観であつたらう。ガラス張りならなおよかつたらう。日本にも行われたという、蛇責は同種の刑で、西の暴君ネロは、姦夫姦婦を生きたまゝライオンに与えたというが（群衆見物）萬蠱盆と同型の刑で酷烈惨忍極まりない。

斬刺殺の刑



最も多く、又普通の型である。然も現場型である。嫉妬に狂つた夫が、いきなり斬りつけるのである。現今では情状酌量はあつても一応殺傷罪になる。が各国共そうだが、日本なども徳川幕府時代までは、殺人罪にならなかつた。「御定書百箇条」中の「密通御仕置の事」の条に

密通の男女共に夫が殺し候わば、紛う無きに於ては構わず。

密夫を殺し、妻存命に候わば、其妻、死罪。とある。私刑は幕府の公許であつた。

一応現場主義であつたが、姦夫を殺しそこねた場合など、姦通の確証さえあれば、現状以外の場所、時間的経過があつても、夫の成敗は黙許してあつた。「鎗の権三重帷子」で名高い大阪高麗橋上の

姦夫姦婦殺しは「女敵討」と言つてその例である。

私通（未婚婦の和姦）の場合、女に許婚のあつた時は、娘の親が娘と姦夫を殺してもよかつた。「御定百箇条」に

縁談極置候娘と不義いたし候男並娘共に切殺候親、見届候段無紛に於ては、無構。

とあり、天文五年、下総国百姓八右衛門の事件がこれである。

娘の不行儀に対して武士階級では、打首にするのが表面の掟であつた。

天保十二年女房を強姦中の男を出刃庖刀で斬殺した、甲州八代郡百姓市左衛門事件、之は強姦に対する斬殺私刑の例で、「御定書」に、

女同心無之に密通申掛け、或は家に忍入候男を夫殺候時、不義を申掛候証拠分明に於ては、男女共、無構とある。

姦淫罪殊に姦通に対する私刑的斬殺は、同じ斬つても滅多斬りという奴で、陰部、乳房、尻などを切つてゐる。

中国で死刑の中に解体、七処斬というのがこれは滅多斬類似の斬刑である。最近の一大社会ニュースとなつた小学校女教員の夫巡查の解体の如き、女の残忍な性格の一面を物語るものであるが、漢の呂后は戚夫人の手足を斬つて、胴体を甕中に置き、名づけて人乗と称し、袁紹の夫人劉氏が、紹の愛妾六人を殺し、四肢、胴体を斬りさいなんだのなども、嫉妬の結果である。後宮三千人といわれる支那では、姦通、嫉妬、サド性など、皇帝は皇后妃嬪を、寵幸を争う女達は女達で、血腥い性の宿命に惨忍この上ない復讐を加えたのであつた。

我が国にも「生つり胴」という斬り方があつて、罪人を宙に吊し

その胸を斬り落す。すると頭部の重量で胴体が顛倒するところを返す刀で首を斬る、つまり三段斬の惨刑である。金沢藩刑法者抜書によると、御馬捕市郎右エ門妻みつ、寛文五年夫の江戸詰中に、草履取彦助と密通墮落、捕えられて浅野河原に生つり胴に処せられた事件が載っている。

斬刑の後獄門といつてさらに首になる刑がある。獄門になると完全な公刑であるが、有夫の婦を輪姦した場合の首謀は獄門になった。印度では姦婦を寸断、犬に食わせた。

火刑。煮殺の刑。

利未記第二十章に、「人妻を娶るときに、その母を共に娶らば、彼も、彼等と共に火に焼かるべし」とある。之は火刑である。我が国では雄略の二年七月、百濟が獻じた美女池津媛が、天皇がまぐわいをする前に石河楯と通じたので火刑になった。固有法時代の私通、野交に対する一例である。

煮殺の例として、豊臣秀吉の侍女が私通墮落したのを捕え、二人を鋸挽の刑に処し、その子と乳母を共に煮殺した(時慶郷記)実に峻厳を極めた刑である。私通は姦通と違つて、庶民の間では死刑にまで致らなかつたが、身分のある者は斯の如く厳しかつたのである。

古代ローマでは婚姻以外の一切の淫行は、全て罪惡視し、女は神と結合する(現今でも修道尼は神とのみ結婚するのである)という神秘的理想から、破貞をこの上なき罪惡とした。利未記第二十一章にも、祭司の女たる者、淫行をなしてその身を汚さば、これその父を汚すなり。火を以て之れを焼くべし。とある。我が国でも育女は清らかな処女でなければならなかつたし、神の妻であつたのである。(然しギリシャ、ローマ、日本も巫女は一種の淫売婦と化していた

が)

キリスト教の信者コンスタンチン帝は、その教旨に基き、破貞を憎むこと甚だしく、之に対する刑罰を設け、妻の姦通現場を発見次第、直ちに殺して構わぬことにした。彼の決めた火刑の方法は、姦婦姦夫を全裸体にして、二人を背中合せに柱に縛し、群衆環視の中に、焼き殺したのである。

古代のサクソンも姦婦は主に焼殺され、その消えた火の上で姦夫を絞殺することが、中世時代まで行われた。

古代のサモエートに炮烙、煮の刑があり、炮烙は種々の方法があるが、四肢を大の字に張り、地上に仰臥せしめて、その腹に火を燃やすのである。

中国の死刑の中に矢張火、煮の刑がある。ペルシャでは灼熱した鉄床の上に姦婦を全裸で臥せしめ、或は熱鉄で陰門を刺して殺した後、犬に食わせた。

アメリカは建国が新しく、他国の様な蠻風が少いが、黒人が白婦人を強姦した場合は極刑で焼殺もその一つ、群衆が私刑を公然と行つた。

ウガンダでは、とろ火の上に姦夫姦婦を炙り、永い間苦しめて殺した。

琉球の八重山地方では姦夫姦婦を籠に入れ、灼熱した炎天に晒すそうだが、之れも火刑の一種であらう。

答刑 絞刑。

普通の余り酷くない刑と言えよう。答刑の私刑は常にあることで読者の中で経験者も少くなからう。被害者、加害者にマゾヒズム、サジズムの傾向があると、一層エロ、グロ味を帯びるのである。

苔刑が形式行事化した珍風景が農村の多くに見られる。「私刑類纂」や柳田国男氏の著書によると、尻打祭が多淫な女に対する神事として、越中国婦負郡鵜坂神社で行われ、その年焼引した男の数だけ尻を打たれたという。

筆者の村でも、五月五日の節句の前夜、菰をコブラ蛇の様な形にあり、先の丸く脹れた部分に石などを入れ、子供が女の尻を叩いて廻った行事が、明治年間まで行われた。これなども多淫女に対する苔刑の行事化だろう。

常陸国久慈郡大子地方では、部落の男子が他部落の女子と情を通ずる場合には、女子の部落に属する若者等が、盂蘭盆又は他の祭日などに、水中に当の男を入れ、半死に到らしめることがあつた（人類学誌）之は苔刑とは違ふが、一種の嫉妬的復讐の例である。

姦通に対して死刑がなくなつた頃の朝鮮で管刑が之に変わった。即ち姦夫姦婦を道辻などで全裸になし、四肢を縛して臀部を打つた。

イギリスでは古昔姦婦は先づ髪を剃り、裸にし、町中を引廻し、夫と親戚が左右から靴で打つ。最後に死ぬまで打つのである。姦夫は樹上に吊り上げ、数時間晒した後絞殺した引廻し及び追放。

引廻しは多くの場合裸にされ、公衆の面前を引廻され、管打たれ石を投げられ、最後に殺されるだが、インデアンのオハマ族は、姦



婦を裸体で木に縛し、猛獣の餌食とし、古代北ドイツの山岳地方では、原野の樹に姦婦を縛し、通行人に自由に凌辱せしめたという。ニューカレドニアでは現今では同様の私刑があるというが、好色家よ、そんな処に行つてみたいなどと考えるなけれ。閑話休題。

安南の一部に面白い追放があつた。土人の女が姦通した時、夫は姦婦姦夫を裸体になし、向い合せて筏舟の上に縛りつけ、川へ押し流すのである。若し筏舟が岸にでも漂着すると、虎の餌食になるし何時までも流れていると熱さと飢餓のため命を失う。人々はこの舟上追放の姦婦姦夫を見ても、決して救つてはならない習慣であつた。

車裂き。牛裂き。皮剥。

いづれも惨刑の雄である。古代のサモエート人が姦通者に科した極刑で、支那では股、秦の時代から始つたと言われている。一秦の始皇帝が創めたとも言われ、車裂は車で轢き殺し、牛裂は四肢を開いて二頭の牛に縛り、これを左右に牽いて炸裂するのである。皮剥は全身の皮膚を剥ぎ取るのである。

公権は剝奪、売淫婦となすの刑

ネロの時代に始つたと言われ、我が江戸幕府時代に密かに売淫を

なした女は吉原に下され三年間苦海に身を埋めねばならなかつた。これは果して刑になつたか。淫婦には返つて幸したのではなからうか。

物品で償なわしむの刑

實際はこの方法が一番多かつた。アイヌ、台湾、朝鮮、中国、蒙古、チベット、西洋、南洋諸民族すべてこの方法で内密にすまされた。罰金の額は貧富の差、年代、民族等によつてまちまちである。中には姦夫の妻を姦婦の夫がエイツスしてもよいという償い方もあつた。

首代七両二分といつて、江戸時代の姦夫が支払う示談金のことである。この首代の起源は確実な考証はないが、鎌倉時代の法に、所領ある者有夫姦を犯す時は所領の半分を没収して出仕を止め、所領なき者は遠流に処し、女も又同罪とす。名主百姓にありては過料錢を出さしむとの規定があり、建長四年十月十四日の布令では、名主過料三十貫文、百姓過料五貫文となつてゐる（吾妻鏡第四十二巻）七両二分といふのは江戸の習慣で、大阪は五両二分であつた。

（文化の項）ところがこの首代をねらう美人局が流行し出し、江戸の首代は五両に下落した。明和安永頃の川柳に

据えられて、七両二分の膳を喰い

入れるか入れないで七両二分取られ

売女の内が高いは五両なり

五両取る、べらぼうに出すたわけ

などというのである。美人局＝筒持たせ＝ベニス持たせの機微を穿つて面白い。

生殖刑

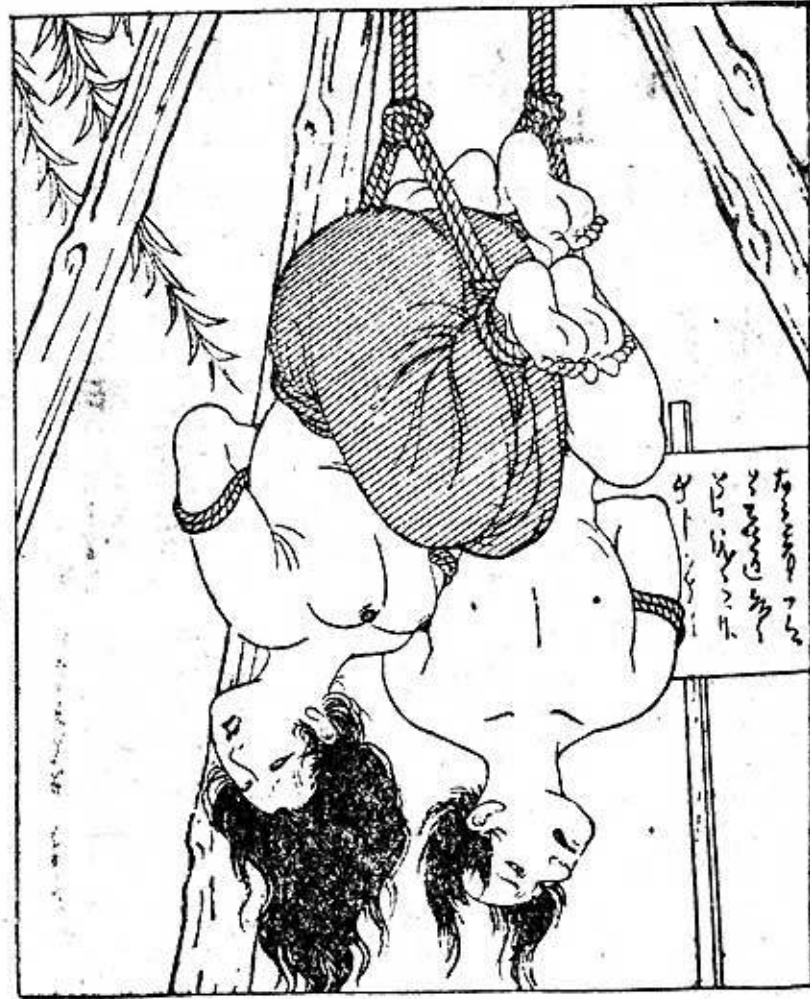
姦淫罪に対する罪の中で最も猟奇的なのは生殖刑であろう。斬刑裸体引廻しの中にも生殖刑を加味したもの、つまり乳房、陰部を切り刺す等あるが、生殖刑は生殖器のみに加える刑である。生殖刑で有名なのは何としても中国で、公刑五刑の中に宮刑と言つて生殖器を除去する刑が決めてある。支那の後宮に使用された官官はこの宮刑に処せられた罪人で、支那独得の官刑である。宮刑は厳然たる公刑であるが、私刑も多かつた。生殖の被害者は男に多く、ヴァギナを閉塞することは、現今の発達せる医学をもつてすれば容易であるが古昔では困難であつたに違いなく、中国での女子に対する宮刑は具体的にどういふ風に行われたか確説がない。

古事類苑の皇帝記抄によれば、承元の頃、源空上人が専修念仏宗を宣伝せし際、その帰依の徒弟らが念仏に事よせて、貴賤の人妻に密通する乱行があつた為、源空は土佐に流し、徒弟は羅（ベニス）を切り、身を禁錮に処せりとある。これによると、羅切の刑は余程古くから行われたと思われる。徳川時代には、羅切の刑、竅抉の刑もなくなつたが、私復讐には行われた。かの有名なお定事件などもこの範疇に入る。生殖刑が変態性慾的ラストモード（兇悪性淫虐症）の人々によつてなされたのは各国共通で、ローマでは妻を寝取られは夫は、姦夫のベニスを切断する権利が許されていたし、メラネシヤの土人は姦婦を象に蹂みにじらせ、又はヴァギナを抉つた。竅抉の刑は死に致らせるので、閉塞の刑の一種として、欧州の中世時代に行われた貞操帯の強制利用なども考えてよからう。

以上で姦淫に対する私刑の概略であるが、特記すべきは野蕃人程その刑が慘酷であり、殷の紂王、秦の始皇帝、ローマのネロを代表とする権力者程残酷で、一般庶民は比較的隱便に示談首代などで済

ませたことと、例えば徳川時代の平民と穢多、アメリカに於ける白人と黒人、ギリシャ、ローマ、エジプト、日本の王朝時代等の貴族市民と奴隸の如く、後者が前者の女を犯した場合の成敗は特に厳しかったことである。男女間の平等、人種間の無差別、階級の撤廃等が進むに従つて姦淫に対する刑も、公私共になくなりつつある。姦通罪が撤廃される迄の我が国の刑法では夫の姦通は全然処罰されることはなく、独り妻のみが罰せられることになっていた。

従来我が国の刑法は姦通に関しては、男女の間に、最も極端な不平等を認容した立法であつたが、此の罪の撤廃によつて男女間の不平等がなくなつたのは当然のことと云えよう。



近世女人奇話

全身に刺青した女

江戸麹町十三丁目の蕎麦屋に

吉五郎という出前持がいた。年

頃は二十七八の美男子、色白の

肉づきのよい身体へ、背には金

太郎の刺青を、藍青に朱をまじ

えてほりつけ、その外腕や股か

ら手足の甲まで、一ぱいに眼ざ

めるような美しい刺青を施して

いたのであつた。——その威勢

のよい姿で元気に立ち働く若衆

を見て、誰も男と思わない者は

なく、近所の若い女達の恋心を

そゝつていたが、その実吉五郎

は女であつたのである。——そ

のためか、何時も腹掛を固く締

めて乳のあたりを隠していた。

その中、誰言うもなく吉五郎

が女であるという噂が立つたが

或る博奕うちと通じて妊娠して

男の子を生んだ、そのため一層噂が高くなつたので、蕎麦屋の主人は吉五郎に暇をやり、生んだ男の子を引取つて養育してやることにした。

その後吉五郎女は木挽町辺に住んでいたが、天保三年の九月突然町奉行所の手で召捕られて牢へ入れられた。——変つた評判の女だつただけに、彼女が吟味のため牢屋敷から奉行所へ召出される際は、見物人が小伝馬町辺へ群集して大騒ぎであつたという。——

罪は彼女が他郷で夫を殺害して江戸へ逃げて来たので男姿に変えたのもその為だと噂されたが、事は巷間に判明しなかつたらしい。

——兎園小説余録——

×

×

×

×

◎ 責め女の写真実費分譲

光澤面 印刷 五枚一組一集分 二百円

◎ 第一集(第一集より第九集迄) 分譲中止

◎ 第二集(第十集より第十九集迄) 目下分譲中

◎ 第三集(第二十集より第三十集迄) 目下分譲中

(各集共、一集は各々五枚一組です)

本誌独特の妙令花の蕾のモデルの豊艶絢爛たる大胆奔放な縛られた女の各種姿態を極鮮明なる写真集として取揃えました。六、七月号にて発表しました第一集は幸いにして大好評を拍しましたので、本号では更に新鋭モデルの参加により第二集、第三集を分譲することになりました。総て愛読者中好事家の御期待

にそむかない品ばかりでございますが、特に愛読者サービスとして実費分譲致すものでございませう故、他の方々の御申込はお断り致します。

尙直接御訪ね下さる方々に対しまして係員の準備がございませうので、勝手乍ら遠近に拘らず小為替、現金書留、又は振替にて御送金下さる様お願い致します。送料は当方負担にて折返し御送り申し上げます故、直接の御訪問は固く御断り致します。

尙新作品を漸次追加して旧作品の分譲を中止する方針ですから早い目に御申込下さい。第四集は只今企画中、乞照会

(代理部)

原稿募集

古今東西を問わず珍奇な小説読物

変態資料、体験告白、暴露記事
探訪報告、奇習紹介、實話小説

一、すべて未発表の興味本位の作品たるべきこと。
一、四百字詰原稿紙三十枚迄の作品たるべきこと。
一、住所、本名の外略歴を記載して下さい。
一、発表作品は発行後一ヶ月以内に相当の謝礼を呈上致します
一、原稿は原則として御返戻致しません。
一、締切は毎月二十日、翌月号に発表します。
一、挿絵、写真、コント、漫画、笑話、小話等も募っています
一、奮って御応募下さい。

探偵小説、怪奇小説、時代小説
軟派文獻、犯罪實話、珍談記録

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇
曙書房内 奇譚クラブ編集部

☆旧号は送料共一冊九十円にて御送付申し上げます。昨年十月号以降より毎号若干保有致しております。

◎ 直接購読者募集 ◎

半年分六冊(送料共)五百四十円
一年分十二冊(送料共)壹千八十円

【定価値上げの際もそのまま据置きます】
半年分御支払の愛読者の方には特別景品として極鮮明なる責め女の写真一組、一年分御支払の方には、ヌード・アル・バム一冊贈呈申し上げます。振替、小為替又は現金書留にて御送金下さい。切手代用は小額のもの一割増に願います。

奇譚クラブ

第六巻 第八号 毎月一回一日発行

八月号 定価九十円

昭和二十七年七月二十日印刷
昭和二十七年八月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷人 上田 庄之助
発行人 吉田 稔

発行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎ 本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。